

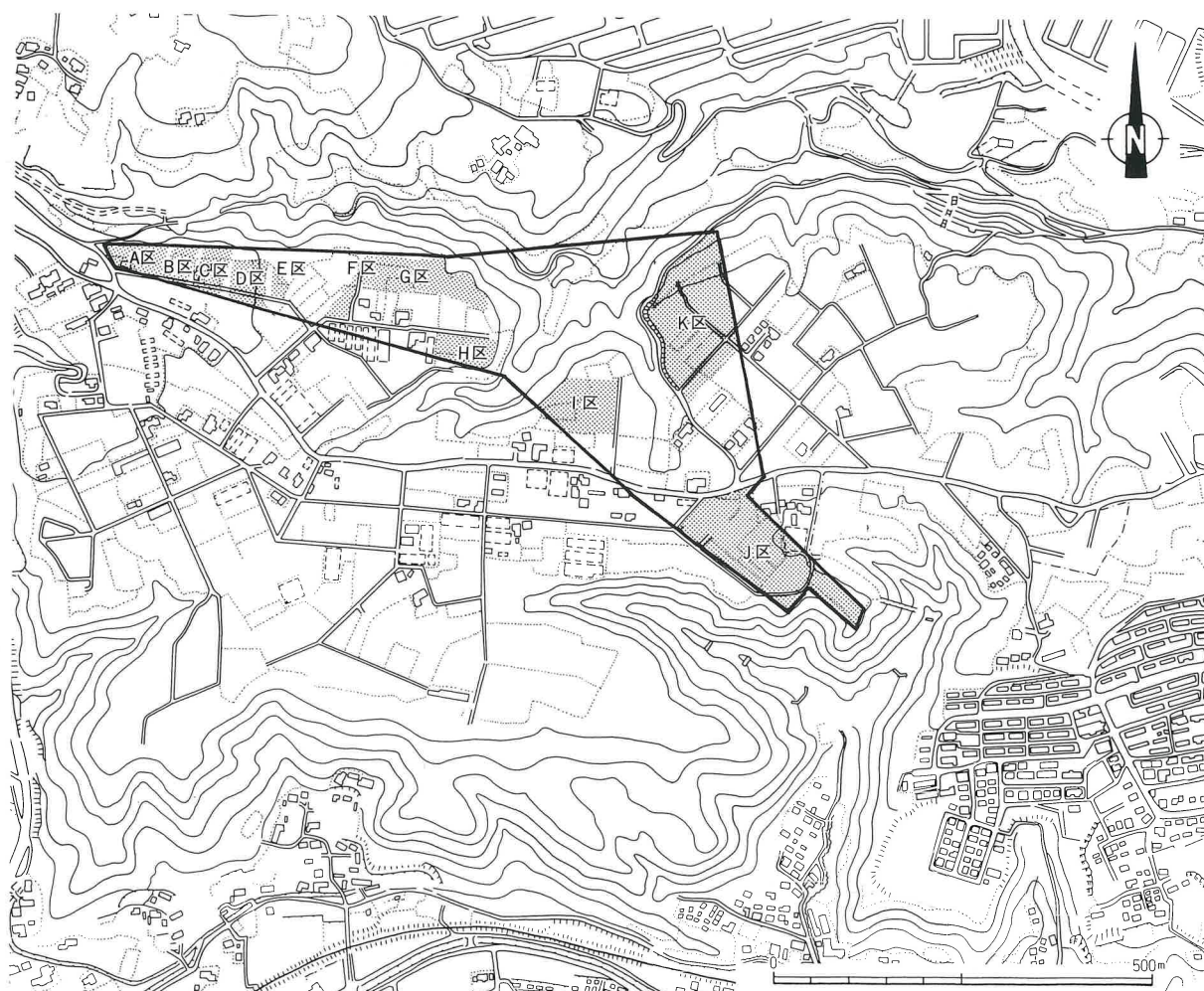
V 庄ノ原遺跡群

V 庄ノ原遺跡群

1 調査の概要

今回調査を行った庄ノ原遺跡は、主に大分インターチェンジ建設予定地に当たり、その面積は約14万㎡の広さを有する。この広大な面積に旧石器時代から古墳時代にかけて連綿と遺跡が展開しているためA～K区に地区を分けて調査を実施した。調査は3年間に及び、以下に述べる成果を得た。

試掘調査でA～D区は縄文時代早期押型文土器を中心とした遺物包含層が展開している事が確認され、平成元年から本調査を行い稲荷山式土器、早水台式土器を中心とした縄文早期前半の遺物群が出土した。A～D区に隣接するE区では、縄文時代晩期上菅生B式の土器包含層が一部で確認された。F・G区については果樹園造成による大規模な削平で遺構・遺物ともほとんど確認されなかった。H区およびI区は試掘調査で古墳時代の遺構が確認された地点で、本調査の結果、6世紀後半から7世紀にかけての竪穴式住居跡が5基、壺型埴輪と考えられる土器が出土した土坑1基、掘立柱建物の倉庫が1基、溝が2条調査された。J区では旧石器時代の比較的良好的な包含層が調査され、ナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器などが出土した。出土遺物や土壌分析等からAT降下後の遺物群と考えられる。K区では、旧石器時代の包含層とともに弥生時代中期中葉～後半代の土坑が1基確認された。



第1図 庄ノ原遺跡と周辺地形図

2 A～D区の調査

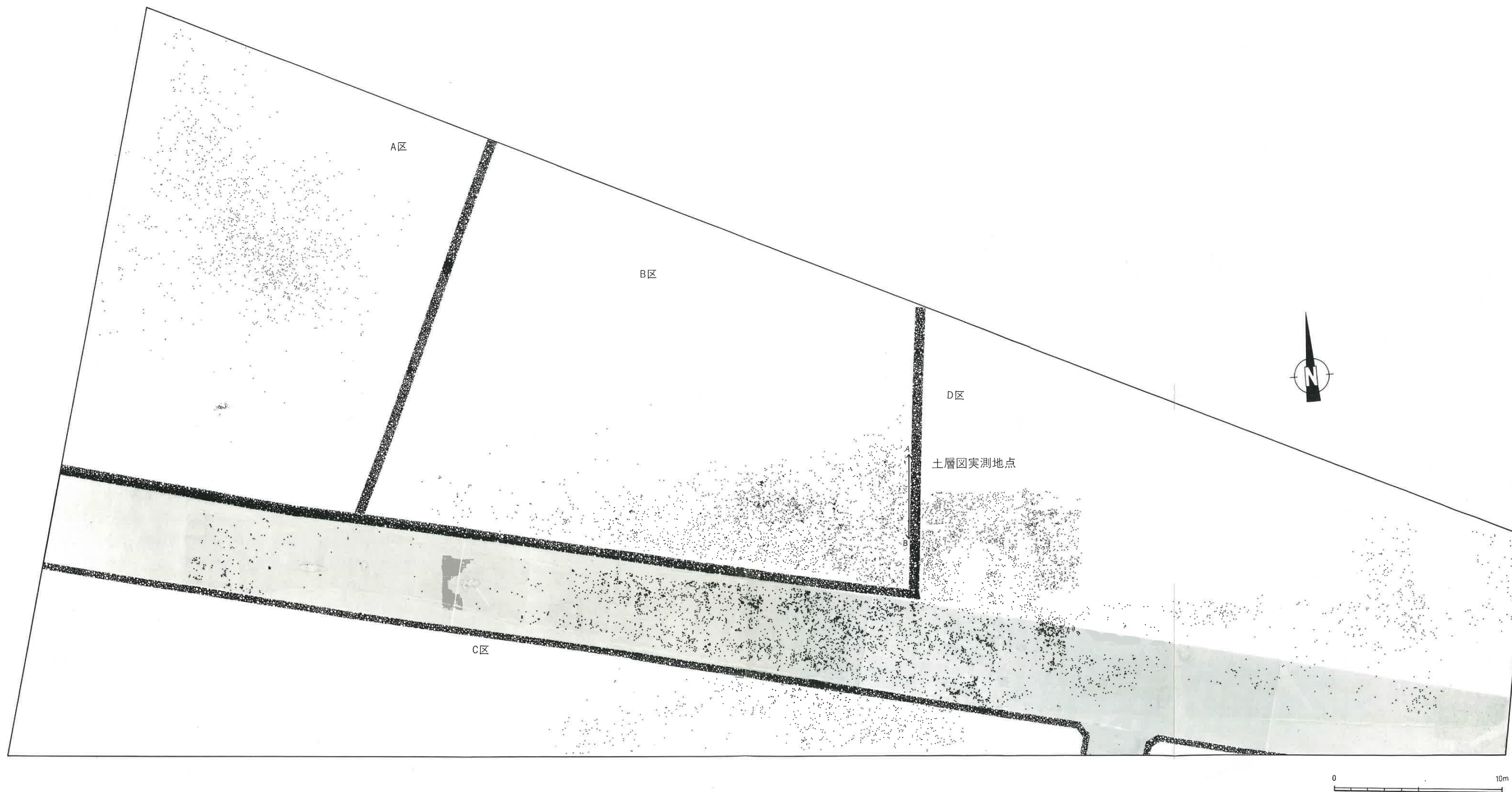
1) 調査の概要

庄ノ原遺跡の調査は、平成元年度から用地買収の終了した場所を中心に試掘調査を実施してきた。試掘調査の結果、調査区西側では縄文時代早期の遺物包含層を確認したため、用地買収の終了した地点から順に本調査を行った。調査区西側は、地形・用地買収の関係などから、A～Dの4地区に分けた。

A～D区とも耕作土・造成土除去後、遺構検出を行い、縄文時代早期前半の押型文土器を中心とする包含層、さらに下層の旧石器時代遺物の掘り下げを行った。



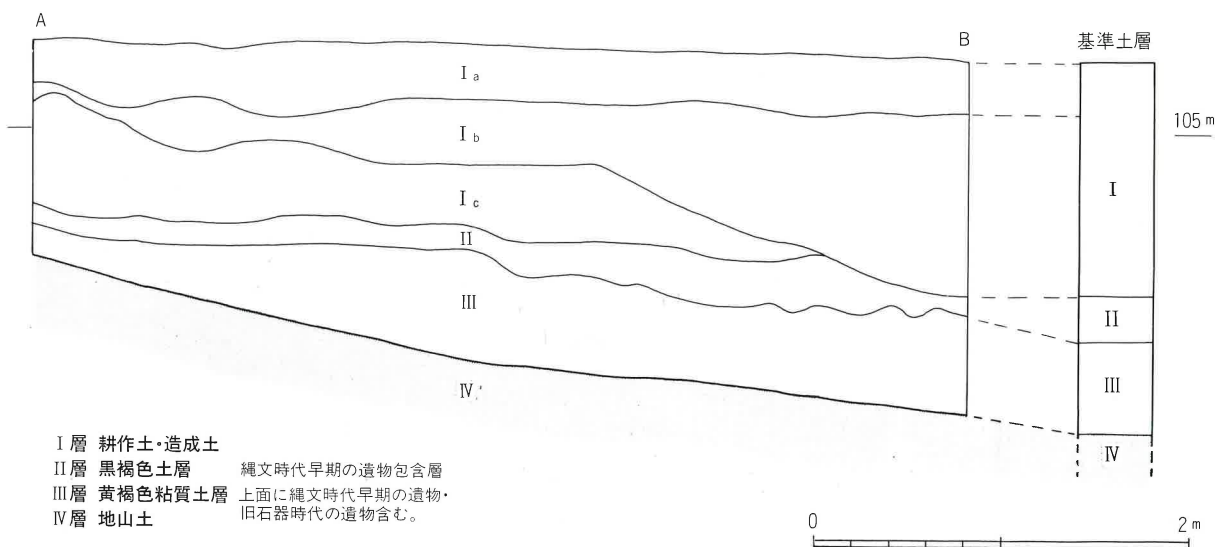
第2図 A～D区調査区および周辺地形図



第3図 A～D区遺物分布図

2) 層序

第4図の層序はB区東壁の土層で、標高差を除けばA～D区すべての地区において共通するものである。基本的には4層に分れる。I (a～c) 層は近年の造成土や耕作土で、層中からはII層のものと考えられる若干の縄文早期の遺物が出土する。I c 層とII層の間にはアカホヤが部分的に認められる箇所が存在する。II層は黒褐色土層で、縄文早期の遺物包含層である。層の厚さは20cm前後である。III層は黄褐色粘質土層で、上面に旧石器時代遺物を含んでいる。非常にハードである。IV層は地山土で、小礫を多量に含んでいる。この4枚の土層で、風倒木等の攪乱層を除くA～D区の層序は構成されている。



第4図 A～D区基本層序

3) 石器

A～D区の一連の調査で1280点の遺物が出土した。大きく縄文時代早期の遺物群と旧石器時代の遺物群に分れる。旧石器時代の遺物は剥片尖頭器やナイフ形石器が中心である。縄文時代の遺物は、石鏃およびスクレイパーの類いである。また、礫石器（石皿・磨石・凹石）は縄文時代の所産と思われる。遺物は主にII層（クロボク）、III層（ローム）で出土した。縄文期の遺物はII層が最も多く一部III層の上部でも出土している。旧石器時代の遺物は一部縄文早期の遺物と混在しながら、III層から出土する。

・石材

A～D区の調査では主に姫島系のガラス質安山岩、黒曜石といった縄文期に多く用いられた石材が多く確認された。無斑晶流紋岩やサヌカイトといった石材も若干出土したが全体のなかで占める割合は低い。

石 材	サヌカイト	無斑晶 流紋岩	チャート	石英	安山岩	ガラス質 安山岩	黒曜石	姫島産 黒曜石	珪化木	結晶片岩	計
数 量	61	20	244	32	27	260	565	35	2	3	1249
%	4.9	1.6	19.5	2.6	2.2	20.8	45.2	2.8	0.2	0.2	100

・ナイフ形石器(1～9)

1～3、5～8は縦長剥片を素材として、2側辺にブランディングを施したものである。4・9は横長剥片を素材としている。このうち1・2は細身で基部調整が施工され若干時期が下る様相を呈する。

・剥片尖頭器(10)

流紋岩の縦長剥片を素材としたもので1面に丁寧な加工を施す。先端部は欠損している。

・チョッピングツール(11)

両面とも中央部に自然面を残し、縁片部については両面とも細かい加工を施す。縦断面は紡錘形を呈する。

・使用痕のある剥片(12～13)

ともに縦長剥片の側辺に使用痕が観察される。

・剥片(14～22)

大部分は調整剥片である。このうち21、22は背面に自然面を残すファーストフレイクである。

・石核(23・44)

ともに縦長剥片や不定形な剥片の剥離によって、円錐形の断面をもつ。

・磨石(25～29)

安山岩の円礫の周縁部を敲石として用いて両面を磨面としたものが25、26～29は磨石のみに用いられている。

・凹石(30・31)

安山岩の円礫の片面に使用痕が残る。磨石との併用は見られない。

・石皿(32)

大部分を欠損している。扁平な安山岩を用い、一面を使用している。

・石鏃(33～37)

33・34は鋏形鏃である。35・36は二等辺三角形の形状を呈する。

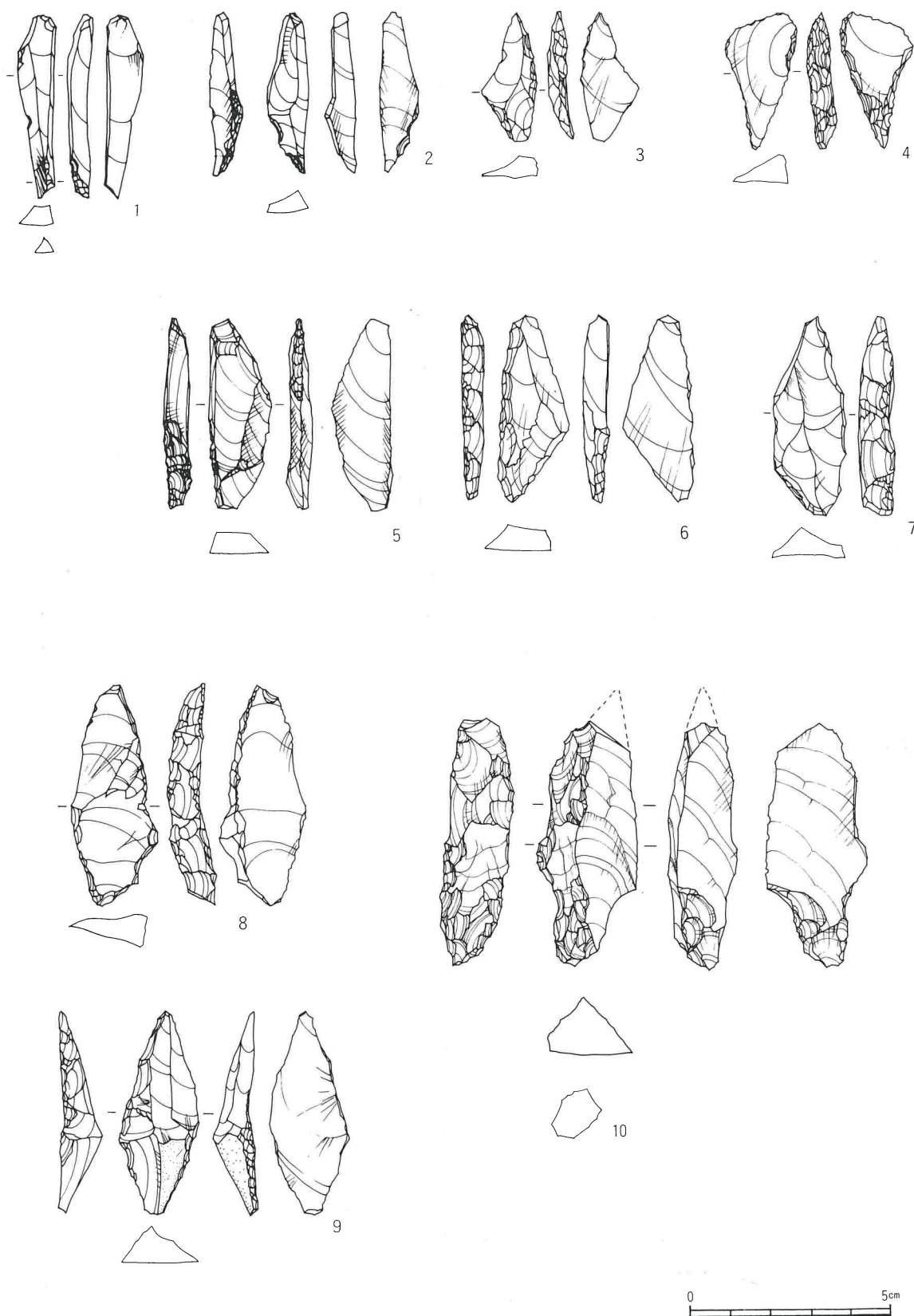
・スクレイパー(37)

縦長剥片の側辺に背面部からの加工で刃部をつけている。

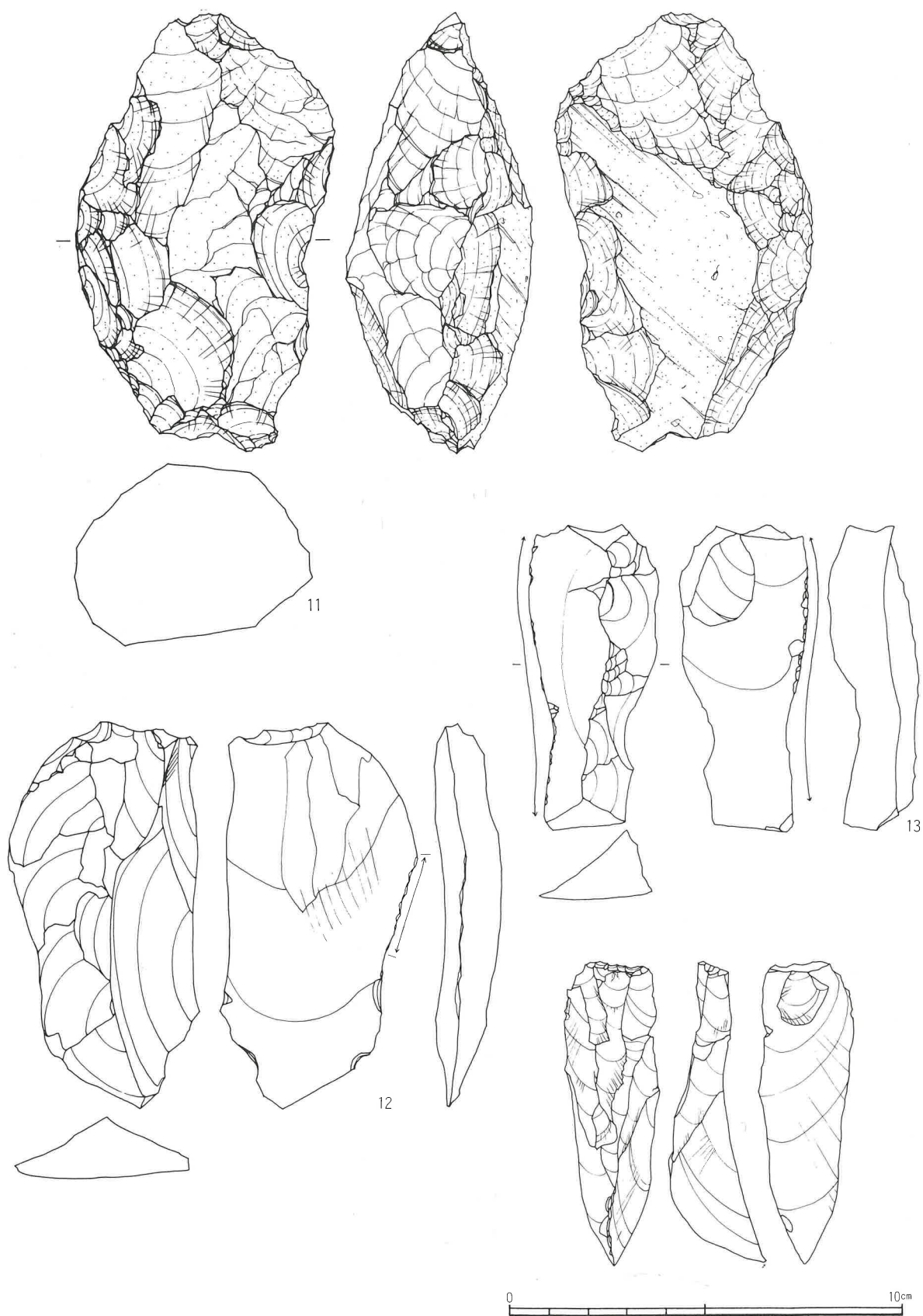
挿図番号	遺物番号	類別	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石材
1	D-C6-103	k n i	4.5	0.9	0.5	2.3	流紋岩
2	C-557	k n i	4.0	1.0	0.5	1.9	流紋岩
3	D-B6-51	k n i	3.2	1.4	0.4	3.5	流紋岩
4	D-B6-48	k n i	3.4	1.7	0.4	3.5	流紋岩
5	D-B6-284	k n i	4.7	1.6	0.5	4.3	流紋岩
6	D表採	k n i	4.5	1.7	0.6	4.9	流紋岩
7	A-556	k n i	4.9	1.7	0.7	4.0	流紋岩
8	D-B5-975	k n i	3.7	1.4	0.5	9.3	流紋岩
9	D-B6-48	k n i	3.3	1.2	0.7	6.2	流紋岩
10	D-B5-587	剥片 p	4.1	1.7	1.0	17.9	流紋岩
11	B-1970	c h - t	7.1	4.0	3.2	345	流紋岩
12	A-1221	u f	6.5	3.3	1.0	65.8	流紋岩
13	A-1005	u f	5.2	2.4	1.2	39.1	流紋岩
14	D-A4-6	f	5.1	1.6	1.2	38.5	流紋岩
15	A-21	f	5.6	3.3	1.1	54.9	流紋岩
16	D-C5-638	f	5.1	1.9	1.4	33.0	流紋岩
17	D区一括	f	5.0	1.6	0.6	11.9	流紋岩
18	C-C-12	f	3.1	4.2	2.0	54.6	流紋岩
19	D-B6-452	f	3.7	1.7	0.6	12.2	流紋岩
20	C-559	f	5.9	3.2	0.9	54.9	流紋岩
21	D-B4-35	f	3.8	3.7	0.9	41.2	流紋岩
22	C-188	f	3.1	2.4	0.9	22.4	流紋岩
23	D-B2-133	c	1.5	3.5	2.2	30.3	流紋岩
24	D-C9-49	c	3.1	3.0	2.7	76.2	流紋岩
25	B-1308	磨石	10.9	4.9	4.8	348	安山岩
26	B-697	磨石	10.5	5.7	3.6	200	安山岩
27	B-1130	磨石	9.2	6.4	1.6	195	安山岩
28	B-993	磨石	8.2	5.5	4.2	200	安山岩
29	C-352	磨石	11.7	8.8	2.2	203	安山岩
30	D-A5-99	凹石	12.2	10.4	5.0	500	安山岩
31	B-2454	凹石	15.7	12.6	4.9	414.5	安山岩
32	B-1950	石皿	12.2	10.9	4.8	400	安山岩
33	A-1179	石鏃	1.5	1.4	0.3	1.0	黒曜石
34	A-768	石鏃	2.0	1.9	0.5	1.2	姫島黒曜石
35	A-1086	石鏃	1.7	1.2	0.4	0.7	黒曜石
36	D-B2-一括	石鏃	2.1	1.7	0.5	1.3	姫島黒曜石
37	D-C3-3	s c	2.5	1.9	0.6	1.0	姫島黒曜石

k n i ナイフ形石器
剥片 p 剥片尖頭器
c h - t チョッピングツール
u f 使用痕のある剥片
f 剥片
c 石核
s c スクレイパー

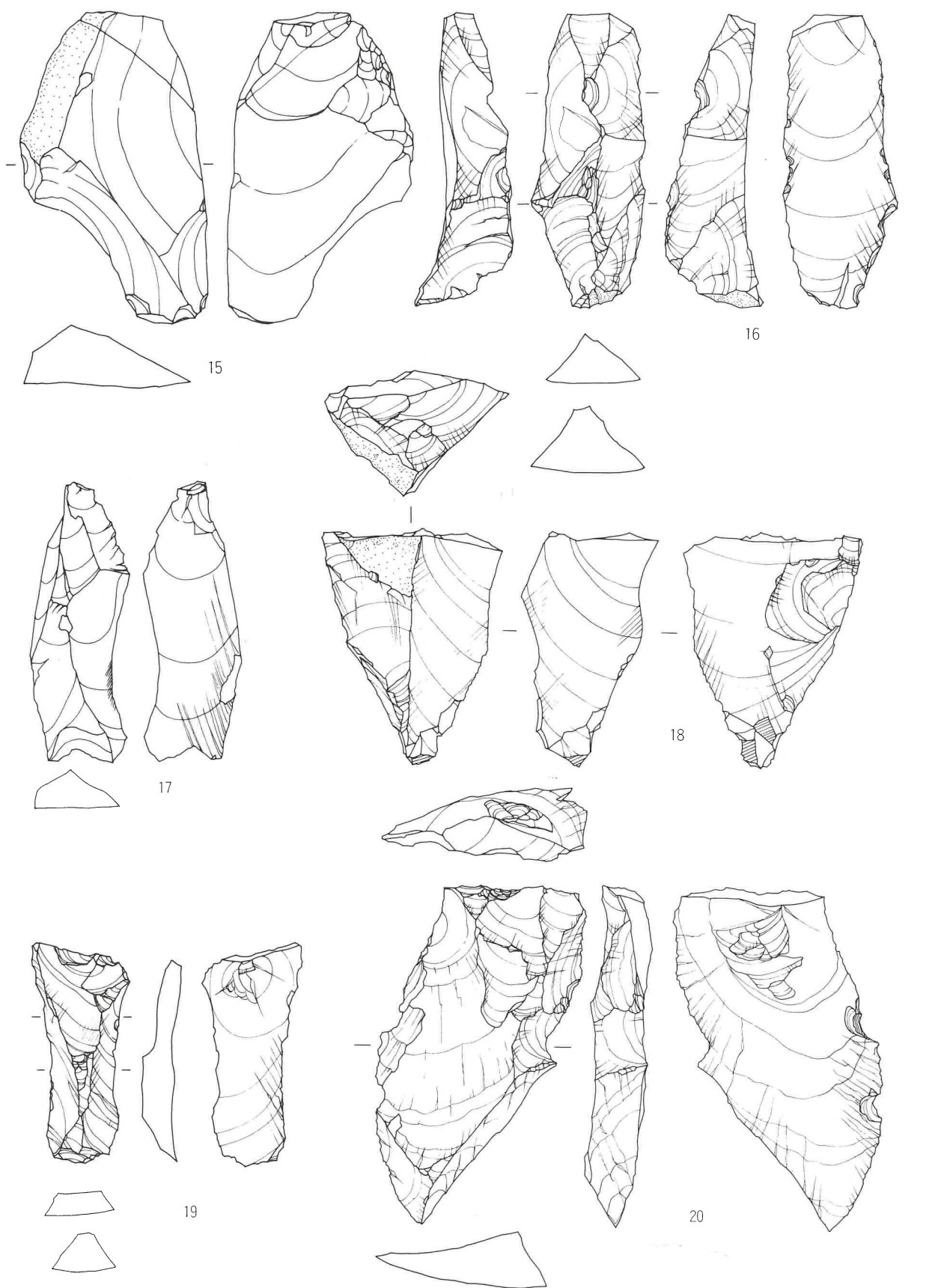
第1表 主要石器計測表



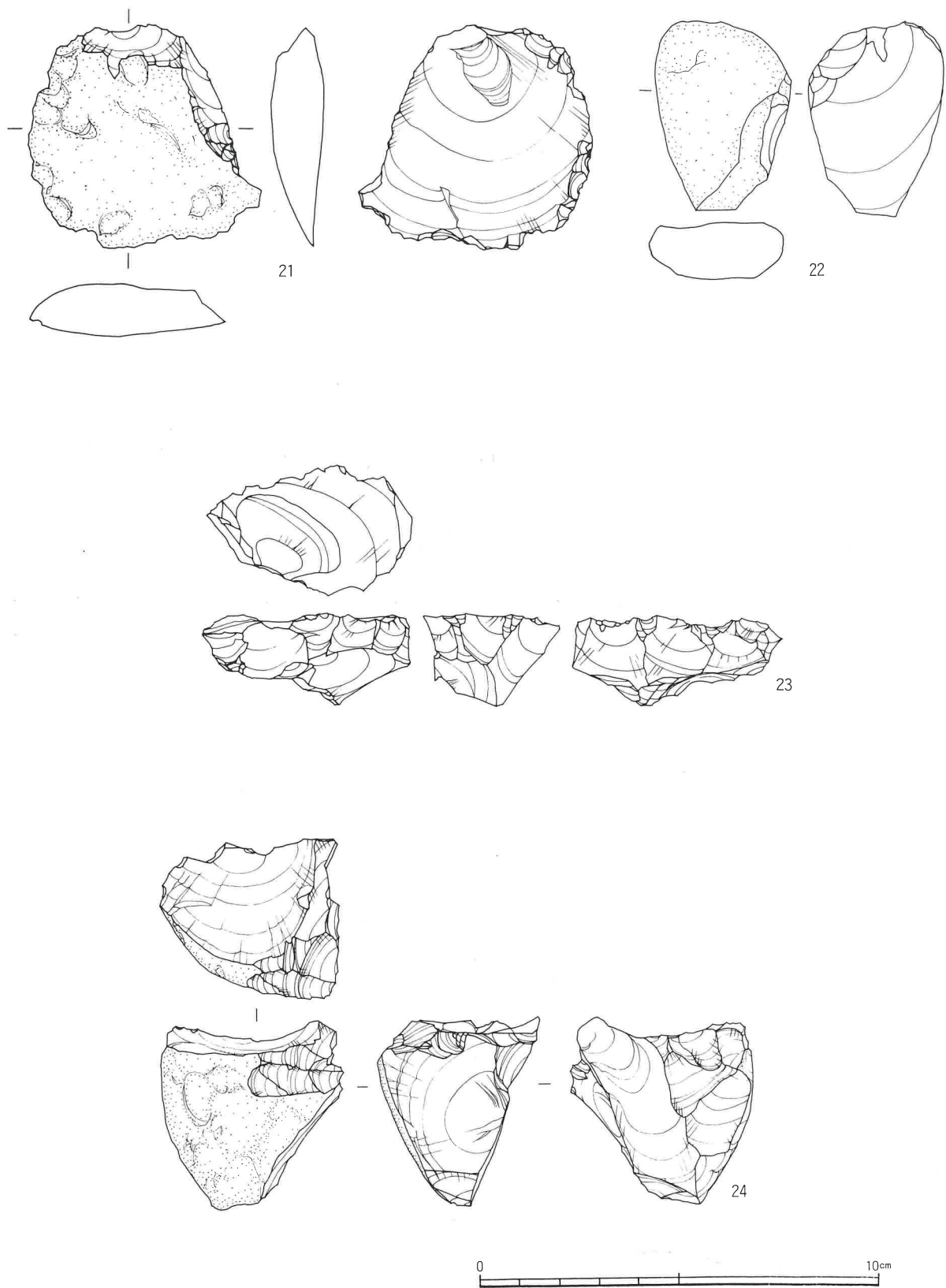
第 5 図 石器実測図(1)



第 6 図 石器実測図(2)



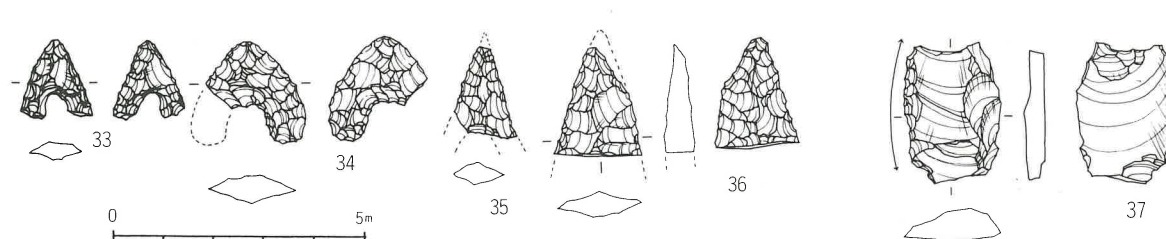
第7図 石器実測図(3)



第 8 図 石器実測図(4)



第9図 石器実測図(5)



第10図 石器実測図(6)

4) 土器 A～D区からは多数の土器片が出土しているが、その殆どは縄文早期の土器片で他には縄文晩期および弥生土器片が少量存在する。

早期縄文土器(第11図～22図)

早期縄文土器は押型文土器と無文土器に大別される。完形に復元されるものは皆無であった。押型文、無文土器とも残り具合が良くなく、本来の文様や堅さは失われていた。色調は黄褐色、赤褐色、茶褐色で胎土には角閃石が含まれていた。

1～95は押型文土器の口縁部片で器形や口縁部内外面の文様によって以下のように分類される。

1類 a(第11図; 1～4)

外面を横走の楕円・連珠文、口縁部内面には幅狭い横走の楕円・連珠文を施すもの。直立の口縁部で口縁端部はまるくおさめられている。1、2は同一個体の可能性がある。外面は中程度の大きさの楕円文を横走施文する。3の楕円文は細かく、器壁も薄い。

1類 b(5～44)

1類 aと同様、内外面に横走する押型文を施すが、押型文に山形文を用いたもの。山形文には波形の異なるものがある。細片が多く、口縁部の正確な傾きは分からないが、おおむね直口あるいはやや外傾するものと思われる。口縁部端部は丸くおさめられたものが殆どである。37や36は細く尖り気味の口縁部。

2類(45～56)

外面に横走の山形押型文を施し、内面無文のもの。45、46の口縁部内面には浅い沈線が施されている。

3類(57～85)

外面に横走山形文の押型文を施す。口縁部内面上部には短い連続する沈線(学史上これを原体条痕と呼んでいる)とこれに接するように一帯の横走する山形文を施文したもの。このために、口縁部断面は細く尖り気味になる。口縁部は直線的でわずかに外傾する。

4類 a(86～92)

外面に斜め、もしくは縦方向に転がした楕円押型文を、内面には連続短沈線と横走楕円文帯からなる文様が施されたもの。連続短沈線は3類のものに比しておおむね長く、幅広いようである。

4類 b(93～95)

施文構成は4類 aと同じだが、文様が山形文のもの。93は内面の連続短沈線が短い。口縁部がかなり大きく外湾している。

96～267は押型文土器の胴部破片。96は、細かい穀粒様の押型文でベルト状に施文されているようである。確認したのは1点のみである。97～108は比較的細かい連珠文が施されている。109～261は連珠文や山形文、楕円文の胴部片であるが、圧倒的に山形文が多く、楕円文はごく僅かである(180、216)。

262～263は縦走の山形文で、264～267は縦走と横走の山形文を組み合わせた文様構成である。ヤトコロ式の胴部片の可能性がある。これを5類とする。

268～272は押型文土器の底部。これらはすべて尖底で外面に山形文が施されている。

273～329は無文土器の口縁部。破片が小さいものは正確な傾きが決定できない。口縁端部はおおむね丸くおさめられており、直口のものと同く外反気味のものに分かれる。器壁は5cm前後の薄手のものと10cm前後の厚手のものに細分される。内外面は粗雑な撫で調整がなされている。焼成はあまり良くない。

330～334は晩期縄文土器。尖り気味の口縁端部下に一条の低く小さな突帯をめぐらし（330～333）、逆「く」の字状の胴部を持つ。内外面には貝殻条痕文が横方向に施されている。色調は黒褐色を呈し、胎土には角閃石が含まれる。

347、348は弥生土器の胴部片。赤褐色を呈し、外面に細かい刷毛目がみられる。

縄文早期土器	{	押型文土器	1 類 a (稲荷山式 ; 外面横走楕円・連珠文、内面横走押型文)
			1 類 b (稲荷山式 ; 外面横走山形文、内面横走山形文)
			2 類 ; 外面横走山形文、内面無文
			3 類 (早水台式 ; 外面横走押型文、内面連続短沈線文・横走押型文)
			4 類 a (下菅生 B 式 ; 外面縦走押型文・内面連続短沈線文・横走押型文)
			4 類 b (下菅生 B 式)
		無文土器	5 類 (ヤトコロ式)

小結

庄ノ原遺跡の早期縄文土器のうち、図示し得た口縁部の総数は 131 点を数える。うちおよそ 7 割が押型文土器、3 割が無文土器であるが厳密な個体識別の結果ではない。押型文土器 95 点のうち、1 類 a から 4 類 b までの内訳は右表のとおりである。1 類と 3 類でおよそ 7 割を占めている。

ところで大分県下の早期縄文土器編年は賀川光夫によってその大綱が示されて以来、橘昌信、高橋徹、後藤一重によって細分された型式が付け加えられてきた。それらは古いほうから順に川原田式→稲荷山式→早水台式→下菅生 B 式→田村式（寺の前式）→ヤトコロ式→手向山式と編年される。最近、坂本嘉弘は宇佐市中原遺跡出土の带状施文の山形押型文を川原田式以前に位置づけて、これを最古の押型文と考^(注1)えている。これは押型文土器自体の型式学的な検討を行ったものではなく、伴出する他形式の土器による新古を想定しての位置づけである。すなわち属性において川原田式押型文との差異を示し得ておらず、型式学的な観点にたてば、中原出土の押型文土器は現状では川原田式に括される資料と言える。すなわち川原田式の最古例と位置づけておく。

以上の既存の型式名に庄ノ原遺跡押型文土器分類を当てはめると、1 類 a・b はともに稲荷山式となり、全体の中で 46% を占める。3 類は早水台式で 32%、4 類 a・b は下菅生 B 式で 9% となる。14 図 96 のようにベルト状施文押型文と思われる破片があるが、川原田式ではなく稲荷山式に残存するものとみなす。このように庄ノ原遺跡出土の押型文土器はその殆どが稲荷山式および早水台式ということになる。これまでの知見によれば稲荷山式および早水台式の段階では出土土器の 6 割から 7 割が無文土器であり、押型文土器は 3 割前後にすぎない。有文土器と無文土器の比が逆転するのは下菅生 B 式の段階になってからである。本遺跡では下菅生 B 式は 9% にしかすぎず、無文土器の比率が従来の所見と合致していない。資料整理上のカウント誤差か遺跡の性格によるものか今後の課題として残る。

押型文土器口縁部	95	約 62.5%
無文土器口縁部	57	約 37.5%

押型文土器と無文土器の割合

1 類 a	4 %
1 類 b	42 %
2 類	13 %
3 類	32 %
4 類 a	6 %
4 類 b	3 %

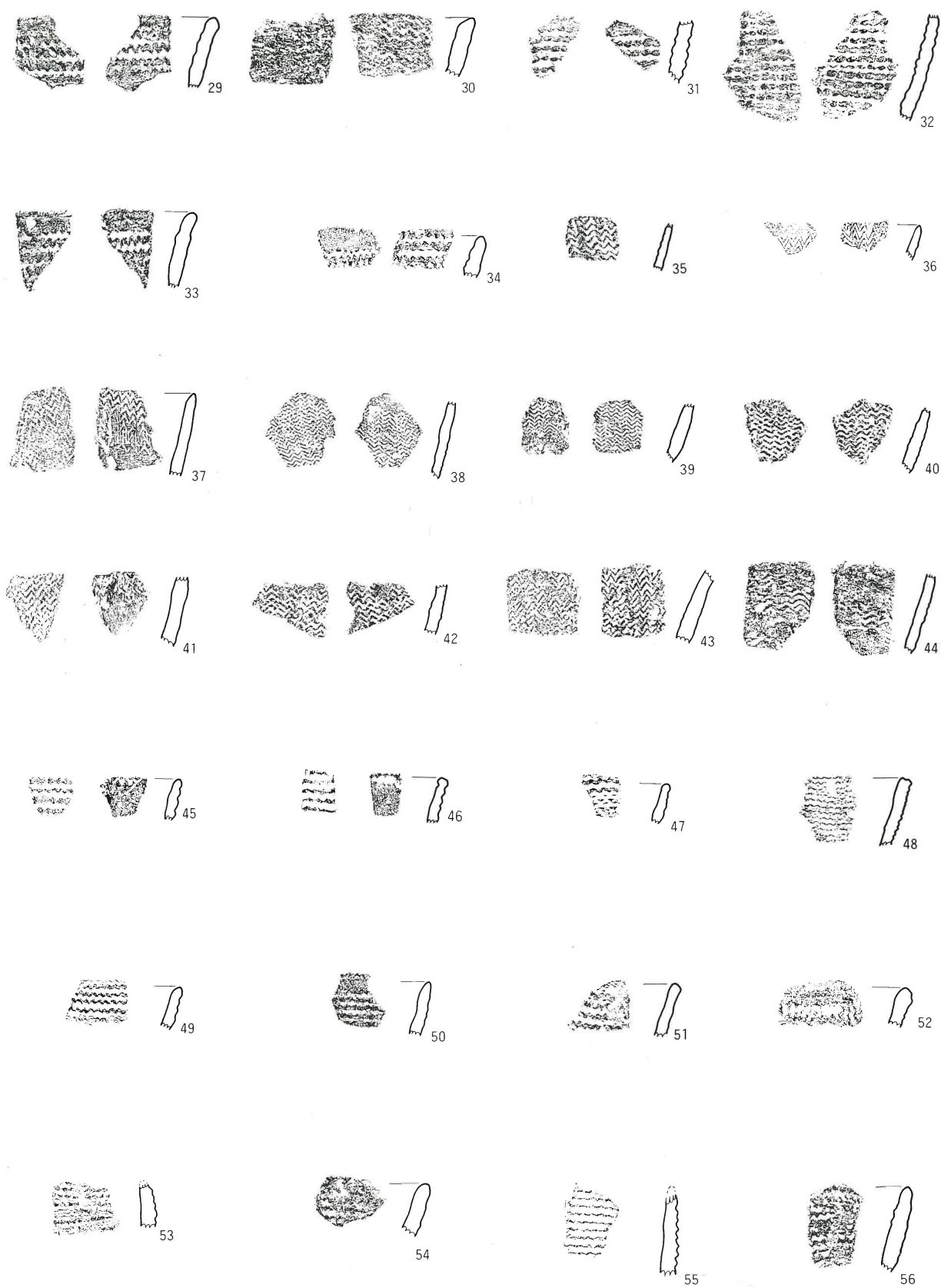
押型文土器口縁部に占める各類の割合

(注 1) 賀川光夫「九州東南部」『日本の考古学』II 1965
橘昌信 『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』九重町教育委員会 1977
後藤一重「下菅生 B 遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡 VI』竹田市教育委員会 1981
高橋徹 「寺の前遺跡」『荻台地の遺跡』VI 荻町教育委員会 1981
(注 2) 坂本嘉弘「西日本の押型文土器の展開—九州からの視点—」『古文化談叢』35 集 1995



0 10cm

第11図 縄文時代土器実測図(1)



第12図 縄文時代土器実測図(2)





第13図 縄文時代土器実測図(3)



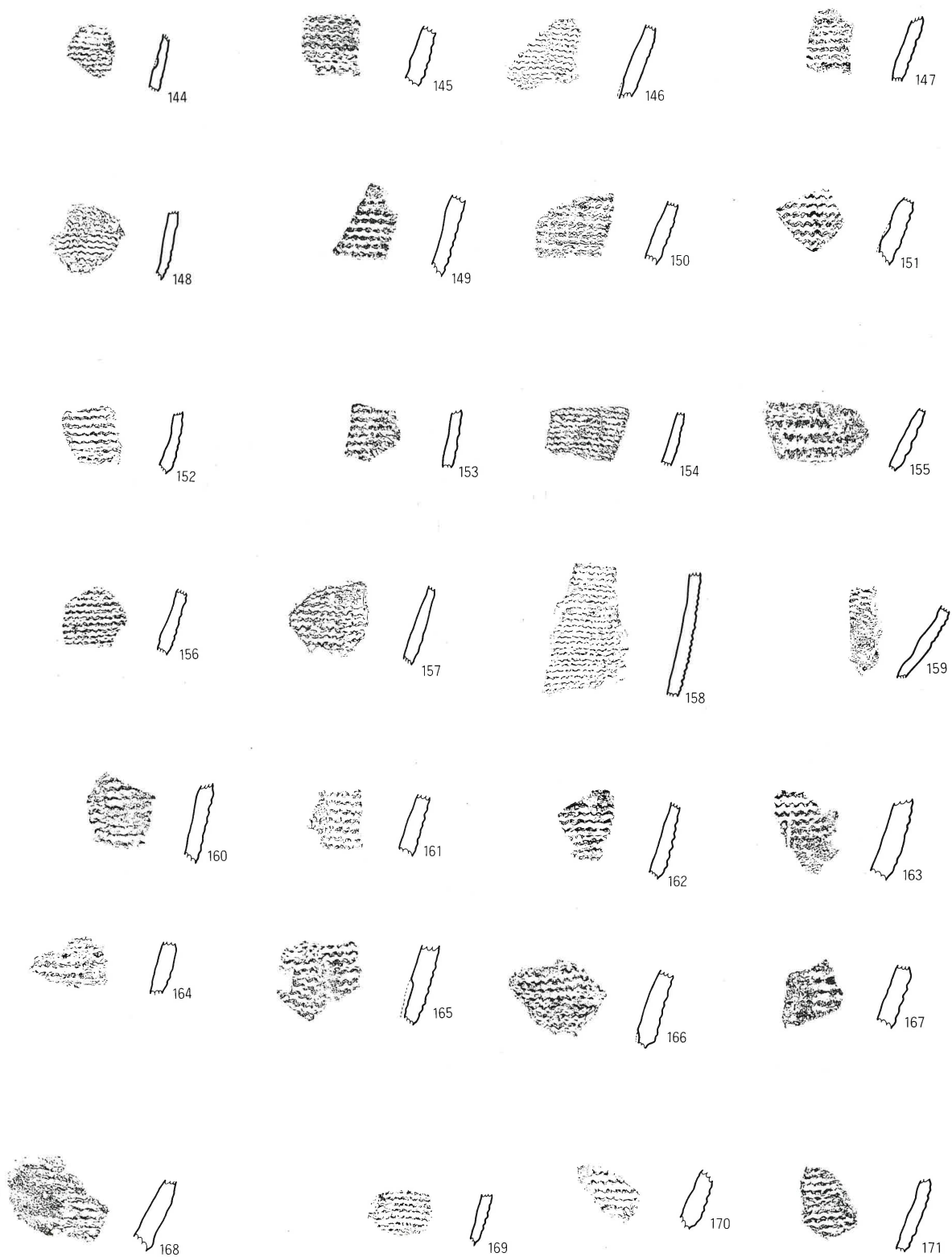
第14図 縄文時代土器実測図(4)



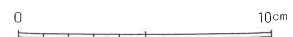


第15図 縄文時代土器実測図(5)

0 10cm



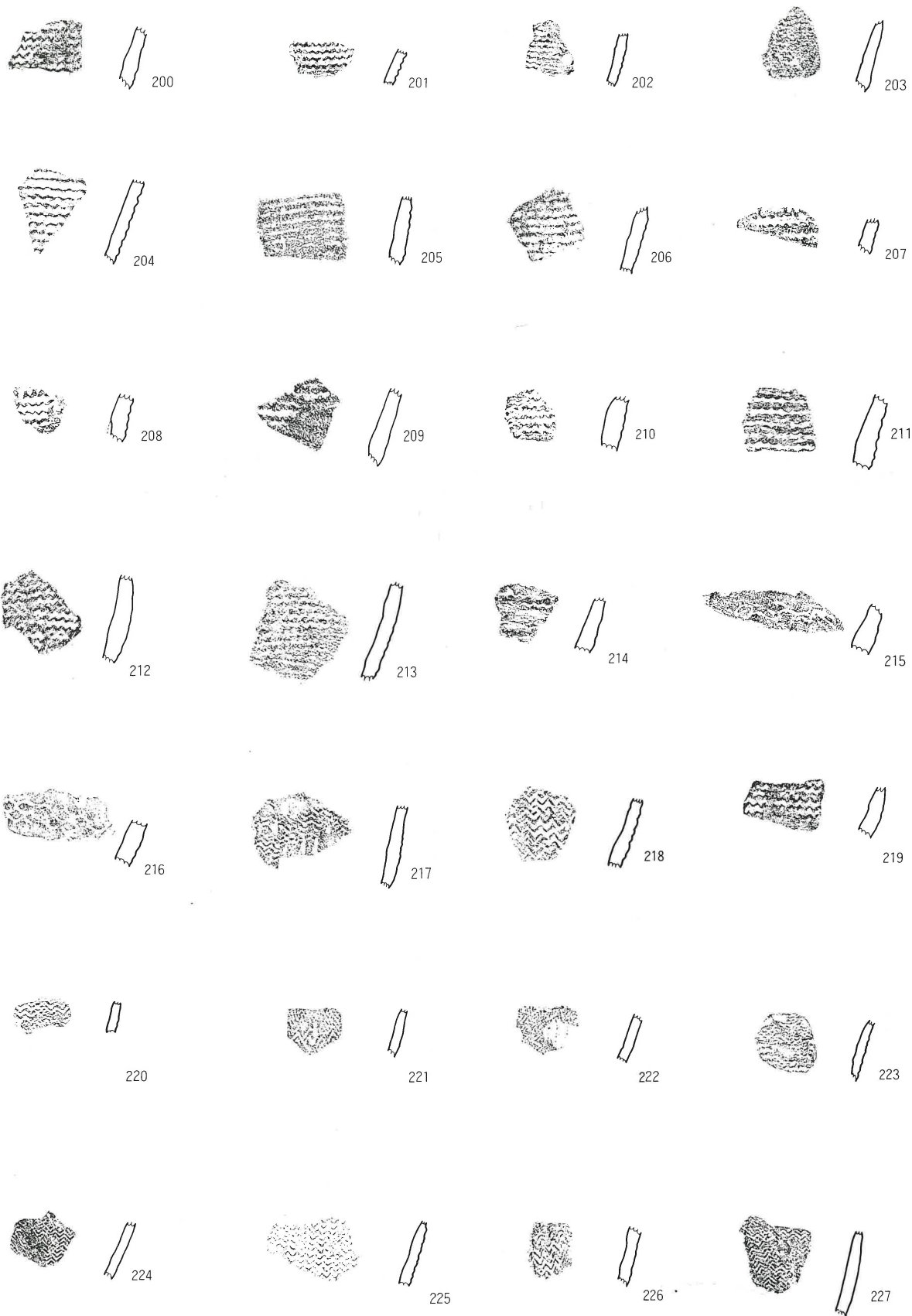
第16図 縄文時代土器実測図(6)



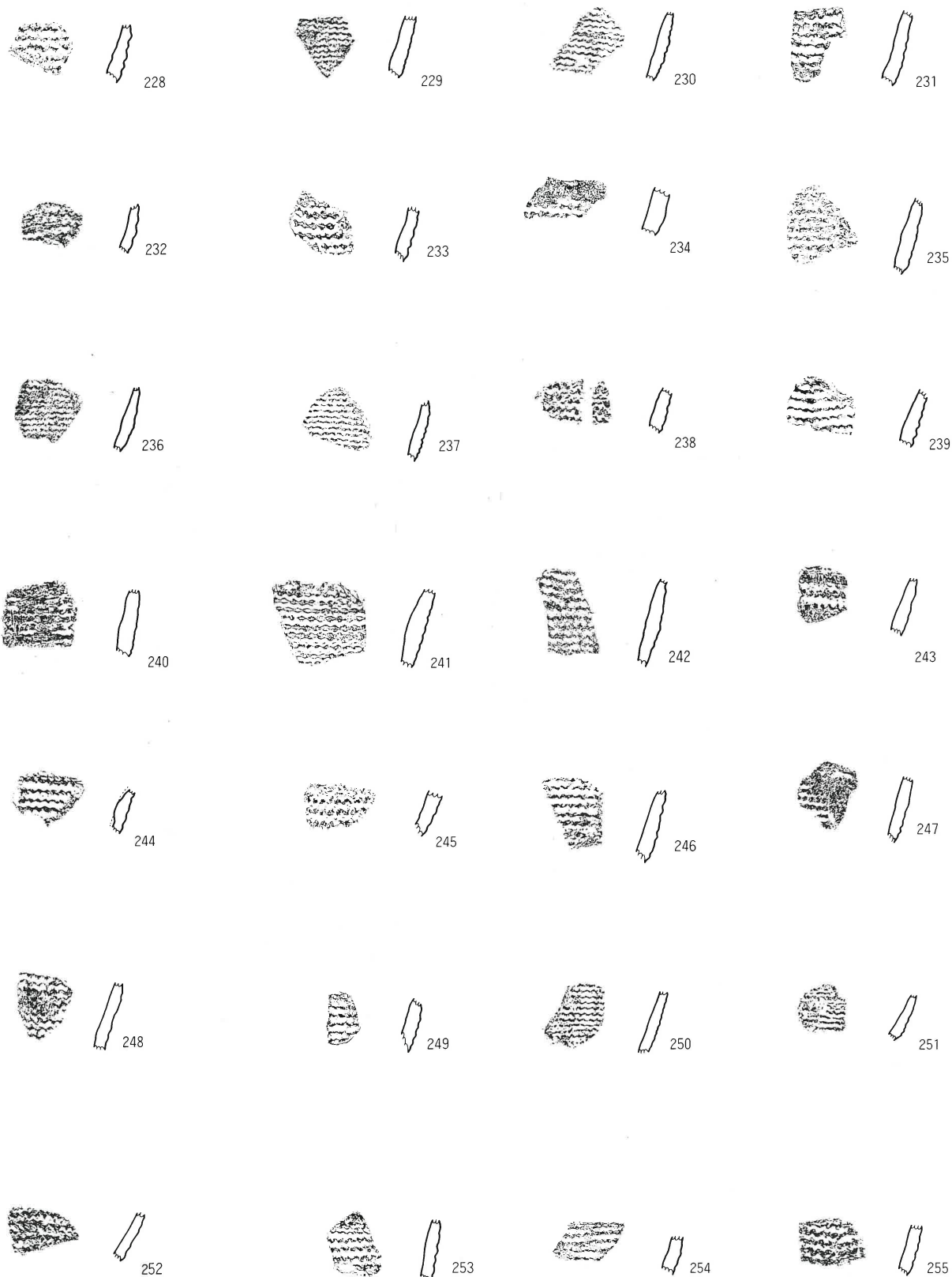


0 10cm

第17図 縄文時代土器実測図(7)

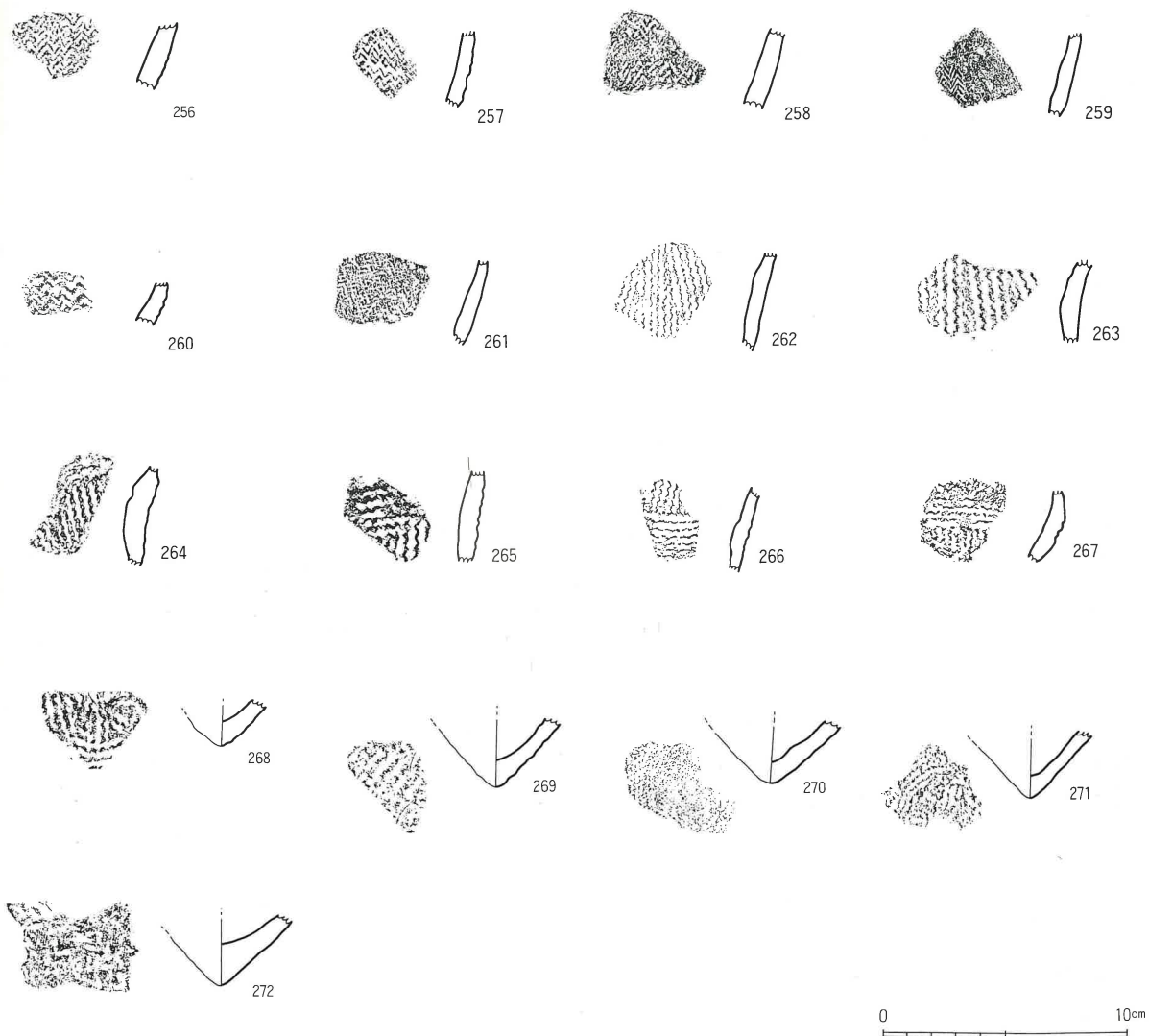


第18図 縄文時代土器実測図(8)

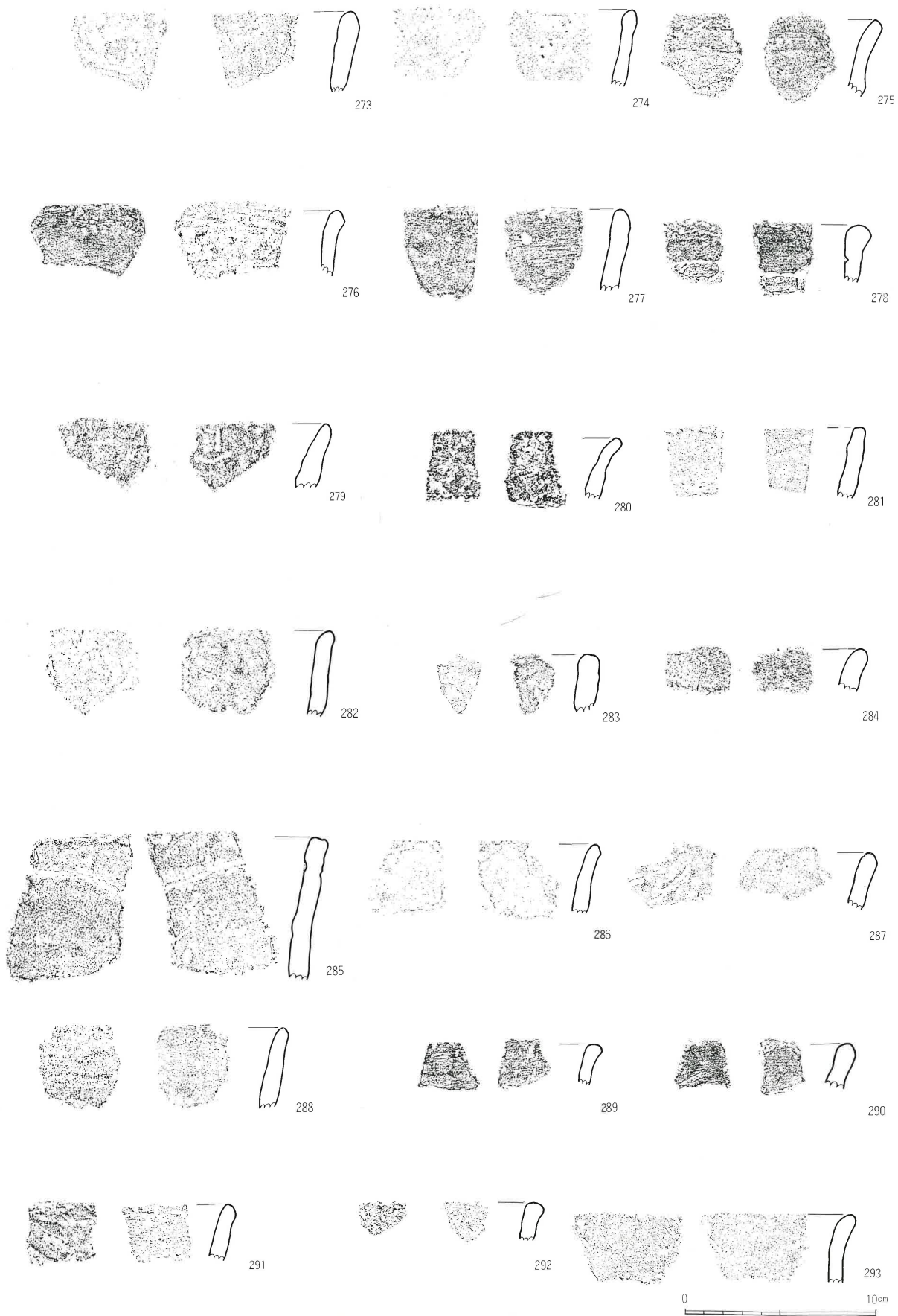


0 10cm

第19図 縄文時代土器実測図(9)



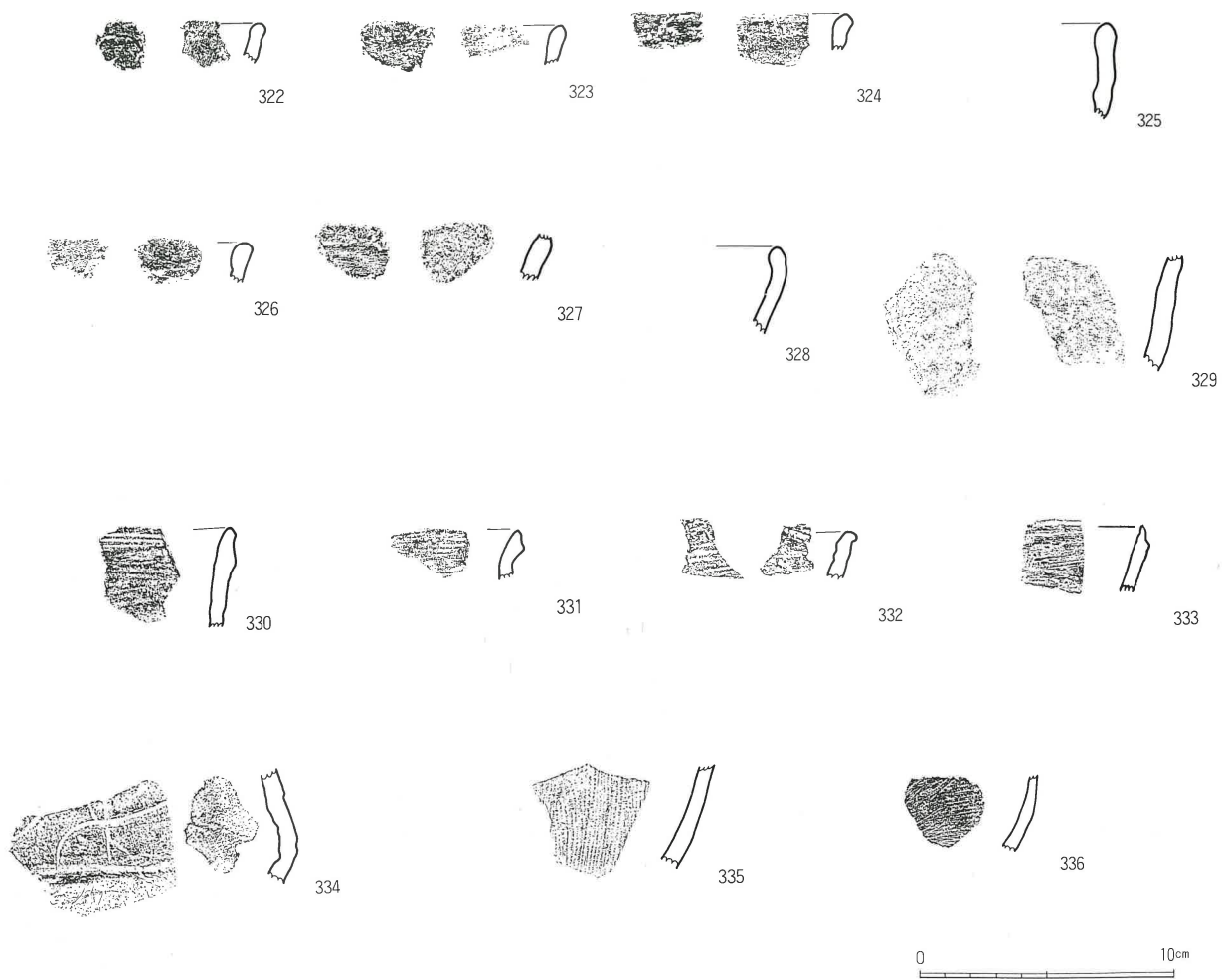
第20図 縄文時代土器実測図(10)



第21図 縄文時代土器実測図(11)



第22図 縄文時代土器実測図(12)



第23図 縄文時代土器実測図(13)

遺物 番号	図版 番号	出土地区	分 類	調整・施文	
				外面	内面
1	第11図	C 区	口縁部 (1 類 a)	横走櫛円文	横走櫛円文
2	"	"	"	"	"
3	"	B 区	"	横走山形文	"
4	"	C 区	"	連珠文	連珠文
5	"	"	口縁部 (1 類 b)	横走山形文	横走山形文
6	"	D 区 B - 4	"	"	"
7	"	"	"	"	"
8	"	B 区	"	"	"
9	"	D 区 C - 5	"	"	"
10	"	D 区 C - 6	"	"	"
11	"	D 区 B - 5	"	"	"
12	"	D 区 B - 4	"	"	"
13	"	"	"	"	"
14	"	B 区	"	"	"
15	"	D 区 B - 4	"	"	"
16	"	"	"	"	"
17	"	"	"	"	"
18	"	D 区 B - 5	"	"	"
19	"	D 区 B - 6	"	"	"
20	"	D 区 B - 5	"	"	"
21	"	"	"	"	"
22	"	D 区 C - 7	"	"	"
23	"	C 区	"	"	"
24	"	B 区	"	"	"
25	"	A 区	"	"	"
26	"	D 区 C - 6	"	"	"
27	"	A 区	"	"	"
28	"	B 区	"	"	"
29	第12図	D 区 C - 6	"	横走山形文	横走山形文
30	"	A 区	"	"	"
31	"	B 区	"	連珠文	連珠文
32	"	D 区 B - 5	"	"	"
33	"	B 区	"	横走山形文	横走山形文
34	"	"	"	"	"
35	"	D 区 C - 7	"	"	"
36	"	B 区	"	"	"
37	"	"	"	"	"
38	"	C 区	"	"	"
39	"	A 区	"	"	"
40	"	D 区 B - 4	"	"	"
41	"	B 区	"	横走山形文	横走山形文
42	"	D 区 B - 5	"	"	"
43	"	B 区	"	"	"
44	"	D 区 B - 2	"	"	"
45	"	B 区	口縁部 (2 類)	"	無 文
46	"	C 区	"	"	"
47	"	D 区 B - 4	"	"	"
48	"	B 区	"	"	"
49	"	A 区	"	"	"
50	"	D 区 B - 6	"	"	"
51	"	B 区	"	"	"
52	"	D 区 B - 4	"	"	"
53	"	D 区 B - 2	"	"	"
54	"	B 区	"	"	"
55	"	C 土壇	"	"	"
56	"	B 区	"	"	"
57	第13図	D 区 B - 4	口縁部 (3 類)	"	横走山形文・連続短沈線
58	"	C 区	"	"	"

第2表 縄文時代土器観察表(1)

遺物 番号	図版 番号	出土地区	分 類	調整・施文	
				外面	内面
59	"	B 区	口縁部 (3 類)	"	"
60	"	D 区 C - 6	"	"	"
61	"	C 区	"	"	"
62	"	B 区	"	"	"
63	"	D 区 B - 4	"	"	"
64	"	D 区 B - 5	"	"	"
65	"	D 区 B - 4	"	"	"
66	"	B 区	"	"	"
67	"	"	"	"	"
68	"	D 区 B - 4	"	"	"
69	"	B 区	"	"	"
70	"	D 区 B - 5	"	"	"
71	"	"	"	"	"
72	"	D 区 B - 5	"	"	"
73	"	D 区 B - 4	"	"	"
74	"	D 区 B - 5	"	"	"
75	"	D 区 B - 7	"	"	"
76	"	D 区 C - 6	"	"	"
77	"	B 区	"	横走山形文	"
78	"	D 区 C - 5	"	"	"
79	"	B 区	"	"	"
80	"	D 区 B - 2	"	"	"
81	"	D 区 B - 5	"	"	"
82	"	B 区	"	"	"
83	"	"	"	"	"
84	"	"	"	"	"
85	"	D 区 C - 6	"	"	"
86	"	D 区 B - 5	口縁部 (4 類 a)	縦走楕円文	連続短沈線
87	"	"	"	"	"
88	"	A 区	"	"	"
89	第14図	A 区	"	"	"
90	"	D 区 B - 4	"	"	"
91	"	D 区 B - 5	"	"	"
92	"	B 区	"	"	"
93	"	D 区 B - 6	口縁部 (4 類 b)	縦走山形文	横走山形文・連続短沈線
94	"	A 区	"	"	"
95	"	D 区 B - 5	"	"	"
96	"	"	"	横走楕円文	
97	"	D 区 C - 10	胴部	連珠文	
98	"	D 区 B - 5	"	"	
99	"	"	"	"	
100	"	"	"	"	
101	"	"	"		
102	"	D 区 B - 7	"	"	
103	"	D 区 B - 6	"	"	
104	"	B 区	"	"	
105	"	D 区 B - 5	"	"	
106	"	"	"	"	
107	"	D 区 B - 4	"	"	
108	"	A 区	"	"	
109	"	D 区 B - 2	"	横走山形文	
110	"	B 区	"	"	
111	"	D 区 B - 4	"	"	
112	"	"	"	"	
113	"	B 区	"	"	
114	"	"	"	"	
115	"	"	"	"	
116	第15図	D 区土壇	"	"	

第3表 縄文時代土器観察表(2)

遺物 番号	図版 番号	出土地区	分 類	調整・施文	
				外面	内面
117	"	C 区	"	"	
118	"	"	"	"	
119	"	"	"		
120	"	B 区	"	"	
121	"	"	"	"	
122	"	D 区 B - 5	"	"	
123	"	C 区	"	"	
124	"	B 区	"	"	
125	"	D 区 B - 4	"	"	
126	"	B 区	"	"	
127	"	"	"	"	
128		D 区 B - 5	"	"	
129	"	D 区 B - 4	"	"	
130	"	B 区	"	"	
131	"	D 区 B - 5	"	"	
132	"	D 区 C - 5	"	"	
133	"	B 区	"	"	
134	"	C 区	"	"	
135	"	D 区 B - 4	"	"	
136	"	C 区	"	"	
137	"	D 区 C - 9	"	"	
138	"	D 区 B - 5	"	"	
139	"	C 区	"	連珠文	
140	"	D 区 B - 5	"	"	
141	"	D 区 C - 9	"		
142	"	B 区	"	横走山形文	
143	"	D 区 B - 3	"	"	
144	第16図	"	"	"	
145	"	B 区	"	横走山形文	
146	"	"	"	"	
147	"	"	"	"	
148	"	"	"	"	
149	"	"	"	連珠文	
150	"	"	"	横走山形文	
151	"	"	"	"	
152	"	"	"	"	
153	"	D 区 B - 4	"	"	
154	"	B 区	"	"	
155	"	"	"	"	
156	"	"	"	"	
157	"	"	"	"	
158	"	"	"	"	
159	"	A 区	"	"	
160	"	B 区	"	"	
161	"	"	"	"	
162	"	A 区	"	"	
163	"	"	"	"	
164	"	"	"	連珠文	
165	"	"	"	横走山形文	
166	"	"	"	"	
167	"	"	"	連珠文	
168	"	"	"	横走山形文	
169	"	"	"	"	
170	"	"	"	"	
171	"	"	"	"	
172	第17図	D 区 C - 3	"	"	
173	"	D 区 B - 5	"	"	
174	"	D 区 C - 6	"	"	

第4表 縄文時代土器観察表(3)

遺物 番号	図版 番号	出土地区	分 類	調整・施文	
				外面	内面
175	"	D区B-4	"	"	
176	"	D区B-5	"	"	
177	"	"	"	連珠文	
178	"	"	"	横走山形文	
179	"	D区C-6	"	"	
180	"	"	"	連珠文	
181	"	D区C-6	"	横走山形文	
182	"	D区B-5	"	連珠文	
183	"	"	"	横走山形文	
184	"	D区C-5	"	"	
185	"	D区B-5	"	"	
186	"	B区	"	"	
187	"	D区C-4	"	"	
188	"	D区C-7	"	"	
189	"	D区C-10	"	"	
190	"	D区C-5	"	"	
191	"	D区C-4	"	"	
192	"	"	"	"	
193	"	D区C-5	"	"	
194	"	"	"	"	
195	"	D区B-5	"	連珠文	
196	"	D区C-5	"	横走山形文	
197	"	D区B-5	"	連珠文	
198	"	D区C-5	"	横走山形文	
199	"	D区C-2	"	"	
200	第18図	D区C-6	"	"	
201	"	A区	"	"	
202	"	D区B-4	"	"	
203	"	"	"	"	
204	"	B区	"	"	
205	"	"	"	"	
206	"	C区	"	"	
207	"	D区B-6	"	"	
208	"	D区B-4	"	"	
209	"	D区C-6	"	"	
210	"	D区C-6	"	"	
211	"	B区	"	連珠文	
212	"	D区C-6	"	横走山形文	
213	"	B区	"	連珠文	
214	"	D区B-4	"	"	
215	"	B区	"	横走橋円文	
216	"	"	"	"	
217	"	D区B-3	"	横走山形文	
218	"	B区	"	"	
219	"	D区C-6	"	"	
220	"	A区	"	"	
221	"	D区B-6	"	"	
222	"	B区	"	"	
223	"	"	"	"	
224	"	D区B-5	"	"	
225	"	D区B-9	"	"	
226	"	B区	"	"	
227	"	D区B-4	"	"	
228	第19図	D区C-5	"	"	
229	"	D区C-6	"	"	
230	"	D区B-4	"	"	
231	"	D区C-6	"	"	
232	"	D区B-6	"	"	

第5表 縄文時代土器観察表(4)

遺物 番号	図版 番号	出土地区	部位・分類	調整・施文	
				外面	内面
233	"	"	"	連珠文	無文
234	"	D区C-6	"	"	
235	"	D区B-6	"	横走山形文	
236	"	D区C-8	"	"	
237	"	D区B-4	"	"	
238	"	D区B-6	"	"	
239	"	D区B-4	"	"	
240	"	D区B-5	"	連珠文	
241	"	D区C-7	"	"	
242	"	D区B-2	"	横走山形文	
243	"	D区C-6	"	"	
244	"	D区B-5	"	"	
245	"	"	"	"	
246	"	"	"	"	
247	"	"	"	連珠文	
248	"	C区	"	横走山形文	
249	"	D区B-5	"	"	
250	"	"	"	"	
251	"	"	"	"	
252	"	"	"	"	
253	"	D区C-6	"	横走山形文	
254	"	"	"	"	
255	"	D区B-5	"	"	
256	第20図	B区	"	"	
257	"	D区C-10	"	"	
258	"	B区	"	"	
259	"	D区B-5	"	"	
260	"	A区	"	"	
261	"	D区C-5	"	"	
262	"	B区	"	縦走山形文	
263	"	"	"	"	
264	"	D区B-4	"	"	
265	"	D区B-5	"	"	
266	"	D区C-4	"	"	
267	"	D区C-6	"	"	
268	"	C区	底部	山形文	山形文
269	"	D区C-6	"	"	"
270	"	D区B-7	"	"	"
271	"	"	"	"	"
272	"	D区C-7	"	"	"
273	第21図	A区	口縁部	無文	無文
274	"	"	"	"	"
275	"	B区	"	"	"
276	"	"	"	"	
277	"	B区	"	"	"
278	"	"	"	"	"
279	"	"	"	"	"
280	"	"	"	"	"
281	"	"	"	"	"
282	"	"	"	"	"
283	"	"	"	"	"
284	"	"	"	"	"
285	"	"	"	"	"
286	"	A区	"	"	"
287	"	"	"	"	"
288	"	B区	"	"	"
289	"	"	"	"	"
290	"	"	"	"	"

第6表 縄文時代土器観察表(5)

遺物 番号	図版 番号	出土地区	分 類	調整・施文	
				外面	内面
291	"	"	口縁部	無文	無文
292	"	"	"	"	"
293	"	"	"	"	"
294	第22図	B 区	"	"	"
295	"	"	"	"	"
296	"	D 区 B - 9	"	"	"
297	"	D 区 B - 5	"	"	"
298	"	B 区	"	"	"
299	"	"	"	"	"
300	"	D 区 B - 7	"	"	"
301	"	D 区 B - 5	"	"	"
302	"	"	"	"	"
303	"	"	"	"	"
304	"	B 区	"	"	"
305	"	D 区 B - 7	"	"	"
306	"	"	"	"	"
307	"	D 区 B - 5	"	"	"
308	"	D 区 B - 7	"	"	"
309	"	D 区 B - 5	"	"	"
310	"	"	"	"	"
311	"	B 区	"	"	"
312	"	D 区 B - 5	"	"	"
313	"	B 区	"	"	"
314	"	D 区 B - 5	"	"	"
315	"	"	"	"	"
316	"	B 区	"	"	"
317	"	"	"	"	"
318	"	D 区 B - 5	"	"	"
319	"	B 区	"	"	"
320	"	"	"	"	"
321	"	"	"	"	"
322	第23図	B 区	"	"	"
323	"	"	"	"	"
324	"	"	"	"	"
325	"	D 区 B - 5	"	"	"
326	"	B 区	"	"	"
327	"	"	"	"	"
328	"	D 区 B - 5	"	"	"
329	"	B 区	"	"	"
330	"	D 区 C - 5	"	条痕	"
331	"	"	"	"	"
332	"	B 区	"	"	"
333	"	D 区 B - 2	"	"	"
334	"	D 区 B - 5	胴部	"	"
335	"	B 区	"	ハケ	"
336	"	D 区 B - 4	"	ハケ	"

第7表 縄文時代土器観察表(6)

3 E区の調査

1) 調査の概要

E区は、毘沙門川によって開析された深い谷につながる小規模な谷部の落ち際にあり、現況は隣接するD区から階段状に作られた畑の一角にあたる。面積的には500㎡に満たない地点のため、中央部に10×20mのグリットを設定して試掘調査を実施した。その結果大半は耕作で削平を受けていたものの若干縄文時代の遺物が確認された。遺物は流れ込みの様相を呈していて、これ以上の調査は行わなかった。

しかし、この調査で出土した遺物は、縄文時代晩期の突帯文が施される時期の土器でその形態に特徴があるため、代表的な遺物を図示している。

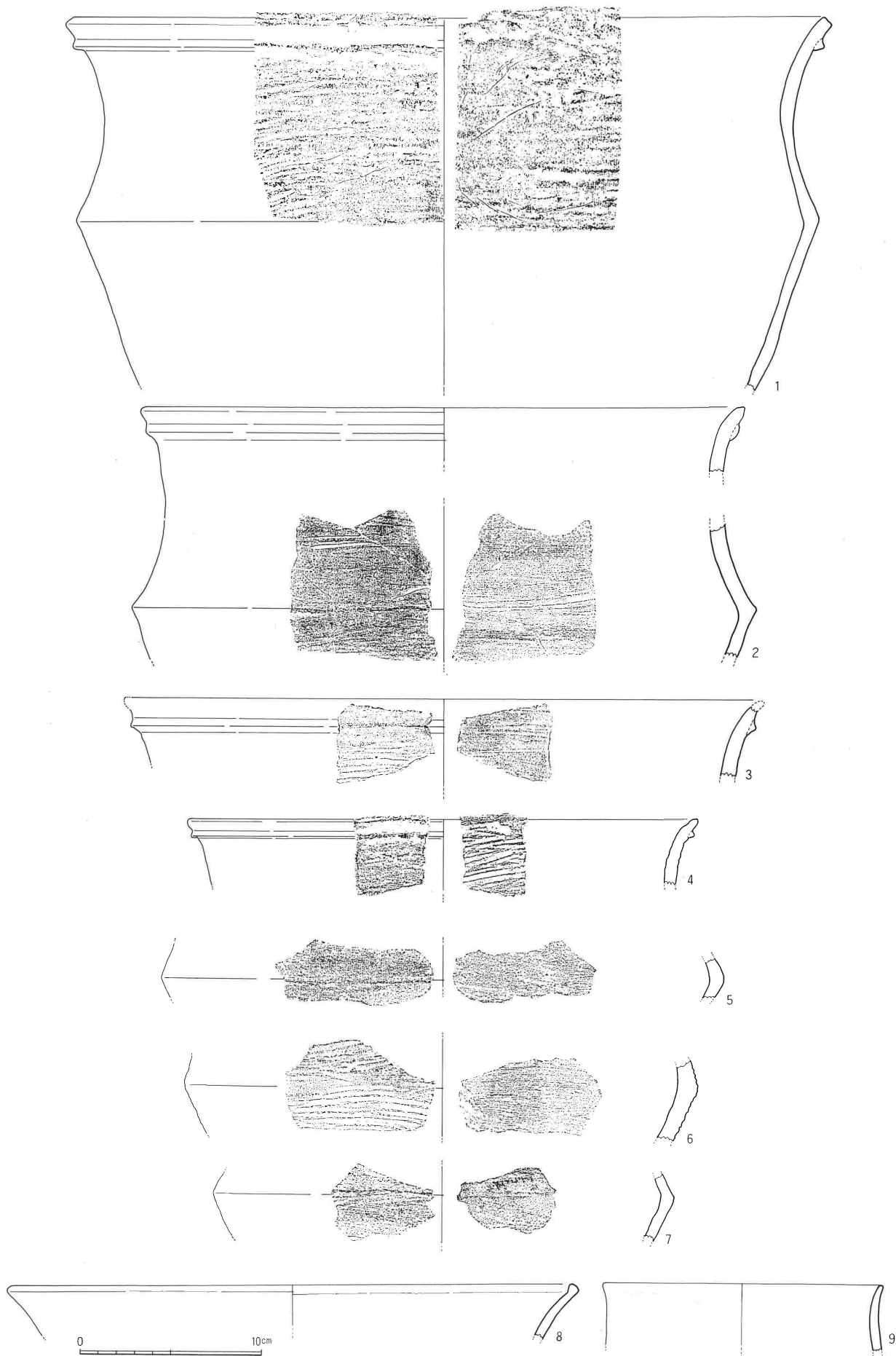
2) 土器 (第25図1～9)

図示した縄文晩期の土器は粗製甕(深鉢)の口縁部(1～4)と胴部片(5～7)、精製浅鉢(8～9)である。粗製甕の器形は胴部上半で逆「く」の字に屈曲し、いったん内傾しながら口縁部に向かって反転するものである。口縁端部下に一条の突帯を巡らす。突帯は小さく不整形の断面三角形状を呈し、刻み目は施されていない。器面の内外面には荒い横方向の貝殻条痕文がみられる。色調は黒褐色で胎土には角閃石が含まれる。

8は黒色磨研の鉢。外反する口縁部の端部が断面三角形状に整形されている。9は直立する口縁部の浅鉢で、端部は細く尖り気味である。色調は黒色で内外面には磨きが施されている。



第24図 庄ノ原遺跡E区および周辺地形図



第25図 E区出土縄文土器実測図

小結

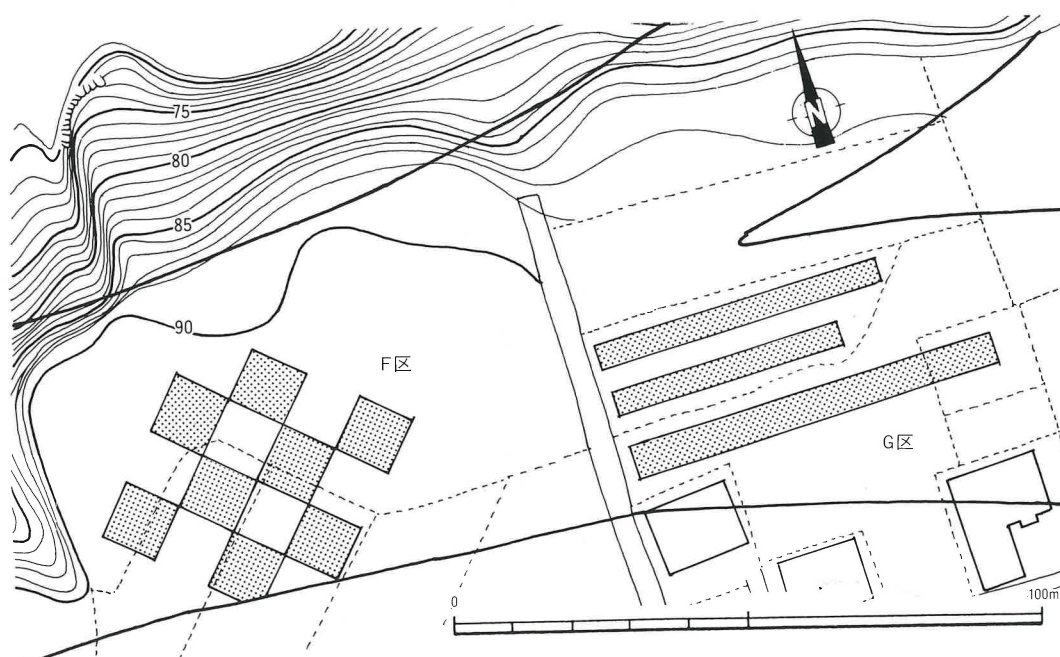
以上の土器は縄文時代晩期後半に位置づけられる上菅生B式に比定される。これは大野川上流に位置する竹田市上菅生B遺跡の資料を基準に設定されたもので、数種類の粗製深鉢・浅鉢から構成される様式名である。粗製の無刻目深鉢自体は賀川光夫氏によって早く注目され、田村上層式と呼称されていたが、これはあくまで深鉢のみにつけられた狭義の型式名であり、浅鉢を含めた数器種の土器形式からなる様式として高橋は上菅生B式を設定したのである。いわゆる刻目突帯文土器出現以前の土器様式と位置づけてきた。上菅生B遺跡では多量の扁平打製石斧や石皿、石ノミ、打製石鏃、紡錘状管玉などが伴い、未だ縄文晩期前半からの遺物の組み合わせが見られる段階である。設定当初、この様式は大野川の上流域を中心に分布しており、その分布が地域的に限定されていた。この所見は大勢としては現時点でも変更する必要はないが、その後の調査によってかなり広い範囲から出土するようになってきている。本遺跡例もその一つである。周辺の例では他に大分市下郡遺跡、同市坂ノ市遺跡、別府市四郎丸遺跡などで確認されている。現在上菅生B式は新旧の2時期に細分されるが、この新式段階で刻目突帯文土器と丹塗壺形土器からなる弥生早期土器が出現するようである。庄ノ原遺跡の近くにある大分市下黒野遺跡、同市植田市遺跡、同植田平石遺跡など当該期の遺跡例が増えつつある。しかしながらこれらに続く前期弥生時代の遺跡は未だ発見されておらず、今後の調査が期待されるところである。

参考文献

- 高橋徹「大分県考古学の諸問題 一刻目突帯文土器の出現とその展開について」『大分県地方史』98 1980
高橋徹「東九州の突帯文土器の展開について」『古文化談叢』58 1983

4 F・G区の調査

F区は試掘調査の結果、若干の旧石器時代の剥片類が出土したが、大半を後世の耕作によって削平されていたため、本調査には至らなかった。またG区については谷に落ちる部分で、全く遺物が確認されなかった。



第26図 庄ノ原遺跡F・G区および周辺地形図

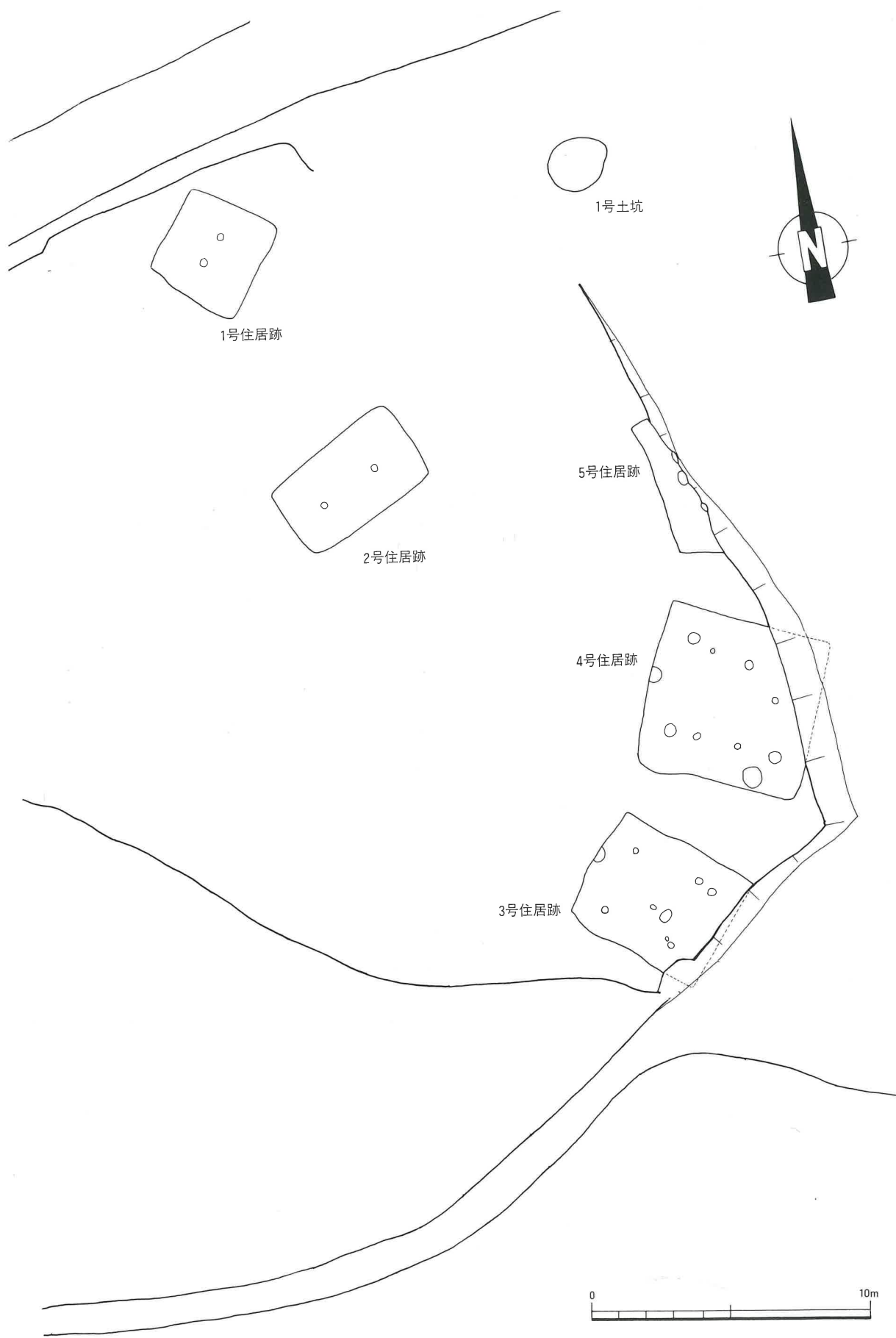
5 H区の調査

1) 調査の概要

調査区はG区の南側に隣接する舌状台地先端部に位置する。台地上は耕作に用いられており、削平、攪乱を受けていた。区内の土砂堆積状況は、表土層（厚さ30cmの耕作土層）—褐色粘質土層（遺構検出面、拳大の礫を含む）の順である。確認された遺構は、竪穴住居跡5基（3、4号竪穴住居跡に竈跡を確認）、土坑1基である。竈はともに住居北東壁に付設されているが、削平が著しく下部構造を残すのみである。土坑は不定形で、他に付属する遺構、遺物は確認されなかった。遺物は住居跡より壺、甕、埴、甑、坏の破片を、土坑内からは壺形埴輪と考えられる破片を出土した。



第27図 H区及び周辺地形図

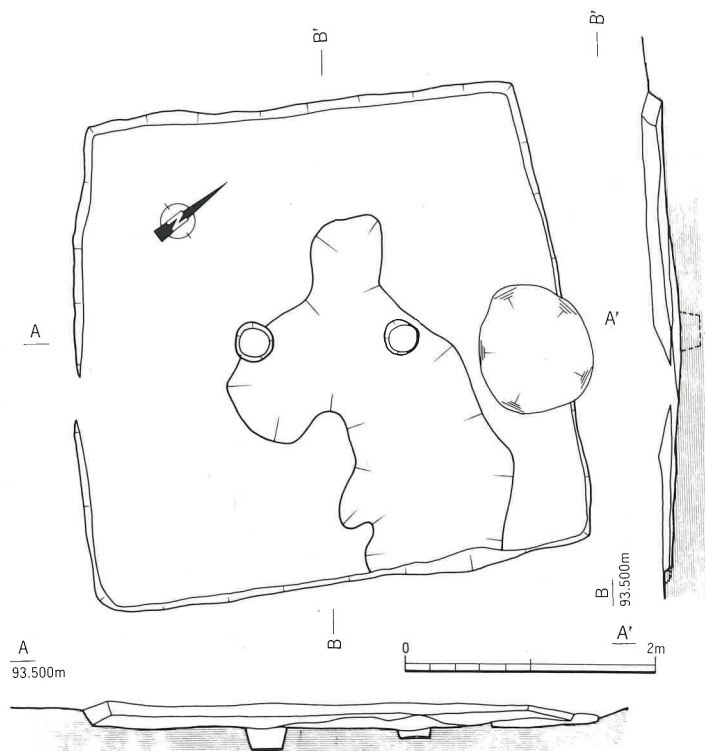


第28図 H区遺構配置図

2) 遺構と遺物

1号竪穴住居跡

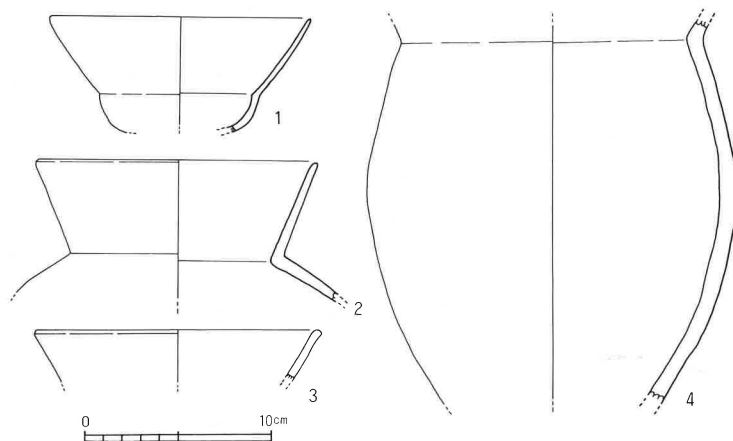
遺構は調査区の北西隅に位置するが、耕作により北東と南西の壁面を一部消失していた。住居跡の平面プランは方形で、規模は4.15m×3.82m、最大深20cmである。主柱穴は2本である。南東壁から主柱穴にかけては、床面より10cm程掘り込まれた浅い掘り方を確認した。埋土堆積状況は茶褐色土一層である。



第29図 1号竪穴住居跡実測図

出土遺物

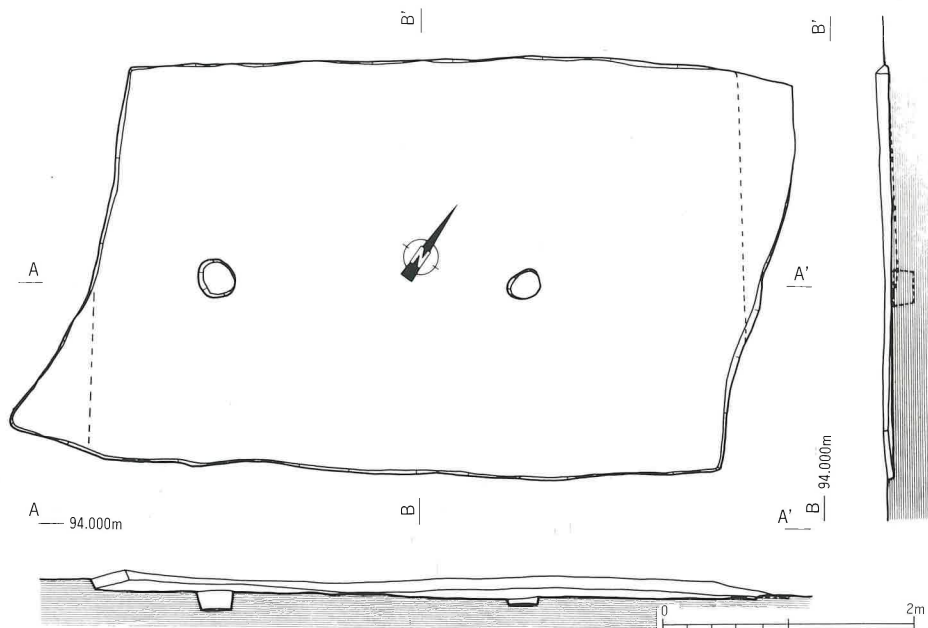
1は小型丸底埴である。内外面とも調整は不明である。色調は内外面ともに黄褐色で、胎土は僅かに角閃石、と長石を含む。口径は12.0cmである。2は直口の丸底壺である。内外面とも調整は不明である。色調は内外面ともに黄褐色で、胎土は僅かに角閃石を含む。口径は15.5cmである。3は壺の口縁部である。内外面ともに調整は不明である。色調は内外面ともに褐色で、胎土は僅かに角閃石と長石を含む。口径は15.3cmである。4は甕である。内外面ともに調整は不明である。色調は内外面ともに茶褐色で、胎土は僅かに角閃石と長石、石英を含む。胴部最大径は19.8cmである。



第30図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図

2号竪穴住居跡

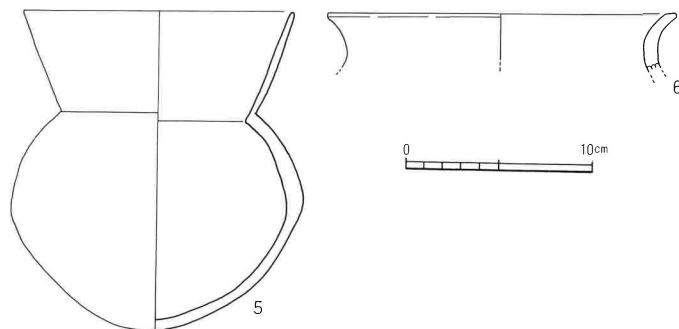
遺構は調査区のはば中央部に位置する。後世の耕作により住居上部を消失していた。住居跡の平面プランは長方形で、規模は5.02m×3.26m、最大深10cmである。主柱穴は2本である。埋土堆積状況は茶褐色土一層である。



第31図 2号竪穴住居跡実測図

出土遺物

5は直口の小型丸底壺である。内外面ともに調整は不明である。色調は内外面ともに黄褐色で、胎土は僅かに角閃石を含む。口径14.4cm、器高16.9cm、胴部最大径15.6cmである。6は甕で、口縁部は短く外湾する。内外面ともに調整は不明である。色調は内外面ともに褐色で、胎土は僅かに砂粒と角閃石を含む。口径は18.6cmである。



第32図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図(S・1/4)

3号竪穴住居跡

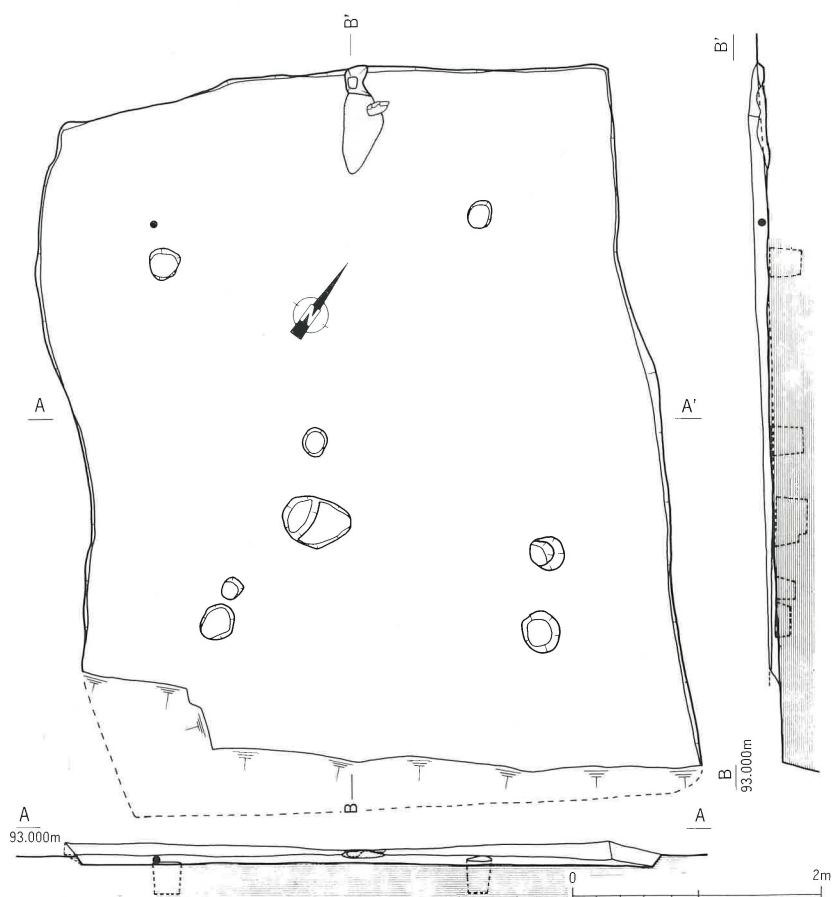
遺構は調査区南東端に存在する。みかん畑造成に伴う整地と階段状の削平を受け、住居跡上部と南東壁を失っていた。住居跡の平面プランは長方形で、規模は5.15m×5.59m、最大深15cmである。主柱穴は4本で、他に3本の柱穴が確認された。北西壁中央付近には、焼土ブロックと若干の炭化物を伴う作り付けの竈跡を確認したが、竈上部構造を失っていた。埋土堆積状況は茶褐色土一層である。

竈跡

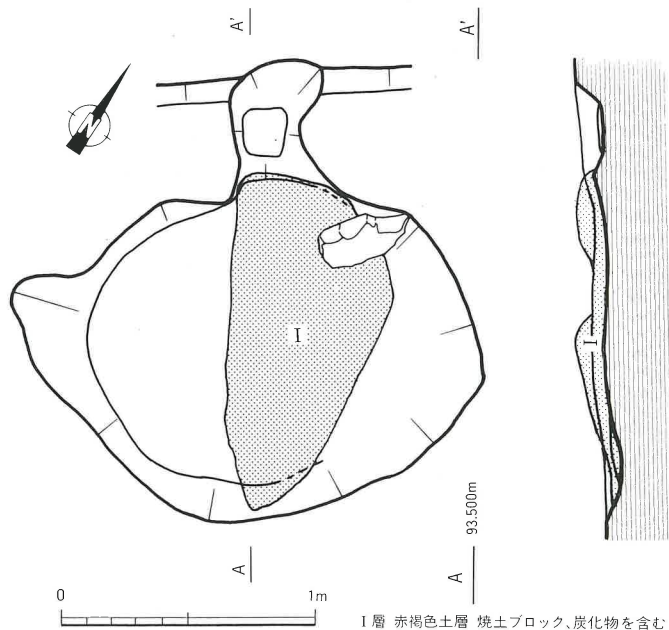
遺構は袖石もしくは支脚と推定される焼石と、焼土ブロック、炭化物を僅かに残す。燃焼部付近の掘り方は不定形で、規模は1.20m×1.90m、最大深4cmである。掘り方から壁面に向かい、長さ40cm、幅30cm、最大深10cmの煙道掘り方を確認した。

3号竪穴住居跡出土遺物

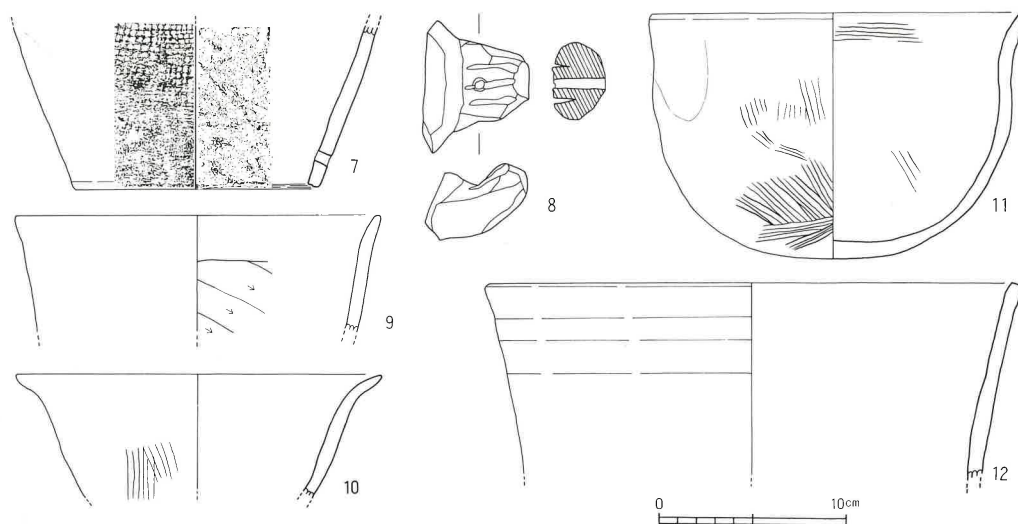
7は甑の底部である。底部近くには焼成前に外から内に孔を施している。外面は格子叩目を施し、その後、撫で調整する。内面上半分は斜め方向に、下半分は横方向に撫で調整する。色調は内外面ともに橙褐色で、胎土は微細な白色砂粒と僅かに角閃石を含む。底径は13.0cmである。7は韓式土器に属する土器である。8は甑の把手である、篋削り後、三条の溝が彫り込まれ、さらに、上から下に孔を施す。色調は黄橙褐色で、胎土は角閃石を微量に含む。8は韓式土器に属すが7と同一個体かは確認できない。9は甑の口縁部である。外面の調整は不明、内面に篋ナデを施す。色調は内外面ともに暗褐色で、胎土は僅かに角閃石を含む。口径は19.6cmである。7、8と同一個体かは確認できない。10は鉢である。口縁部は緩やかに外反する。内面の調整は不明、外面に刷毛目を残す。色調は内外面ともに黄褐色で、僅かに砂粒と角閃石を含む。口径は19.4cmである。11は鉢である。口縁部は僅かに外反する。内外面ともに刷毛目を施す。色調は内外面ともに褐色で、胎土は砂粒と角閃石、長石を含む。口径20.0cm、器高12.8cmである。12は甑の口縁部である。内面は調整不明。外面は横方向に撫で調整を施す。色調は内外面ともに暗褐色で、胎土は僅かに砂粒と角閃石を含む。口径は28.4cmである。7、8、9と同一個体かは確認できない。



第33図 3号竪穴住居跡実測図



第34図 3号竪穴住居跡竈跡実測図



第35図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図

4号竪穴住居跡

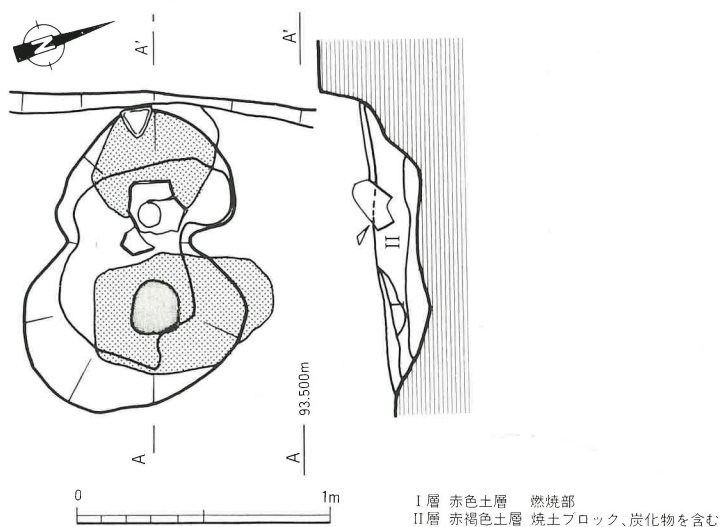
遺構は調査区の東端に位置する。耕地造成に伴う階段状の削平を受け、住居跡北壁と西壁の一部を消失していた。住居跡の平面プランは長方形で、規模は6.22m×6.64m、最大深30cmである。主柱穴は3本しか検出できなかったが、他に4本の柱穴跡を確認した。西壁中央部には作り付けの竈跡を確認したが、竈上部構造を全て失っていた。埋土堆積状況は茶褐色土一層である。

竈跡

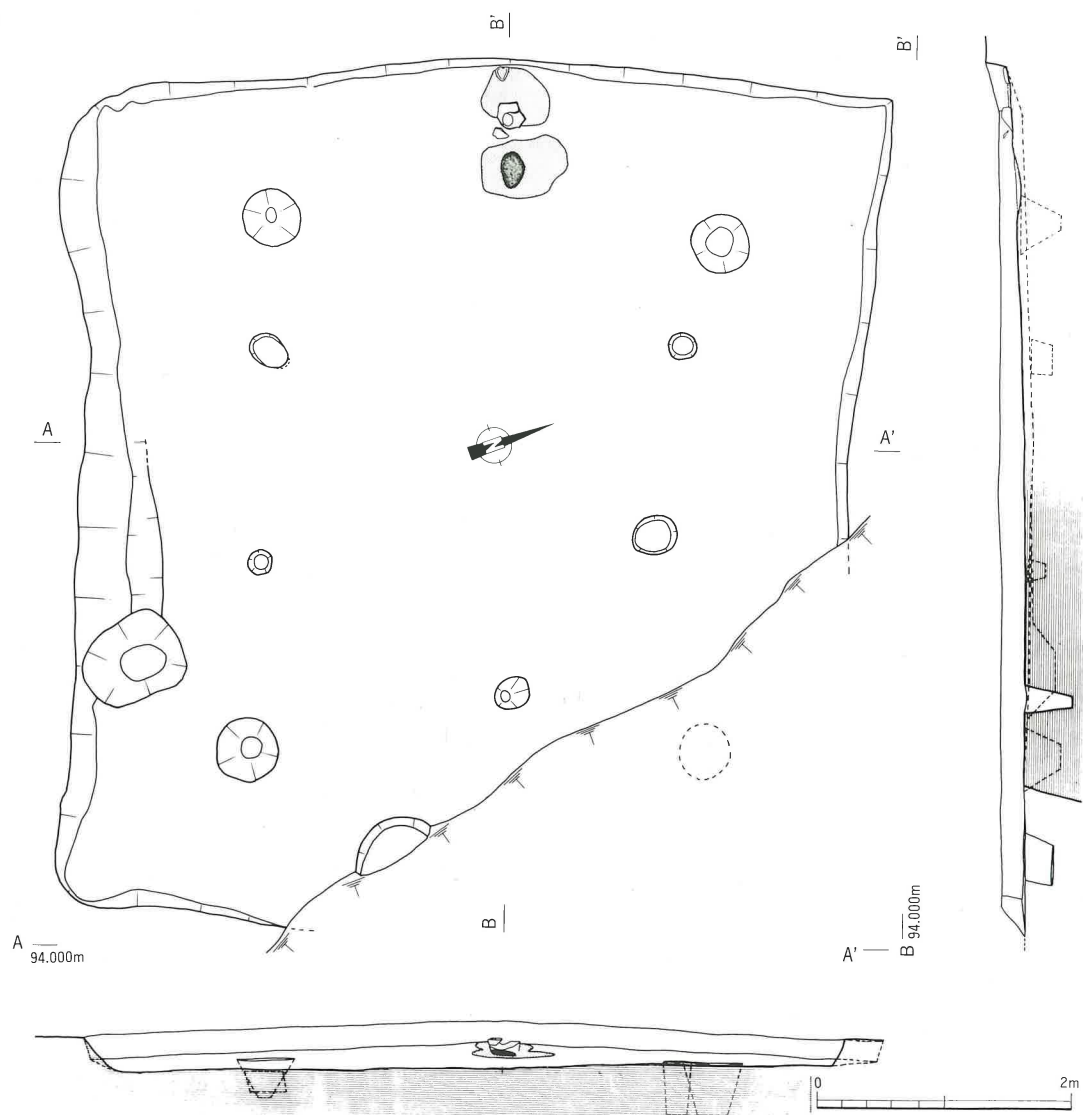
遺構は被熱赤色硬化した燃烧部と焼土ブロックを残す。燃烧部の規模は直径20cm、厚さ3.5cmである。竈の掘り方は不定形で、規模は1.22m×88cm、最大深16cmである。遺物は燃烧部後方より甎底部を出土している。

出土遺物

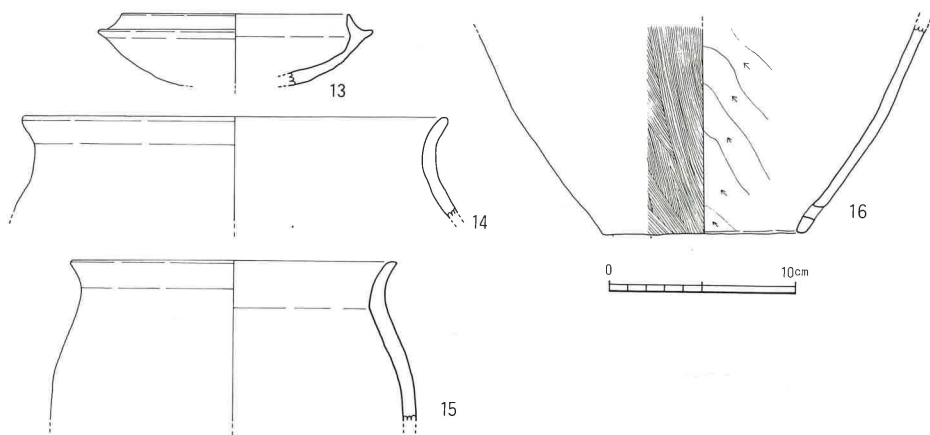
13は坏身である。内外面ともに回転撫でを施す。色調内外面ともに青灰色で、胎土は砂粒を含む。口径は12.1cmである。14は甕で、口縁部は外反する。内外面ともに調整は不明である。色調は内外面ともに黄褐色で、胎土は僅かに砂粒と角閃石を含む。口径は22.8cmである。15は甕で、口縁部は外湾する。内外面ともに調整は不明である。色調は内外面ともに褐色で、胎土は僅かに砂粒と長石を含む。口径は17.5cmである。16は甎底部である。竈燃烧部後方から出土した。底部近くには焼成前に外から内に孔を施している。外面は斜め方向に刷毛目、内面は篋撫でを施す。色調は灰褐色で、胎土は僅かに角閃石と長石を含む。底径11.1cmである。



第36図 4号竪穴住居跡竈跡実測図



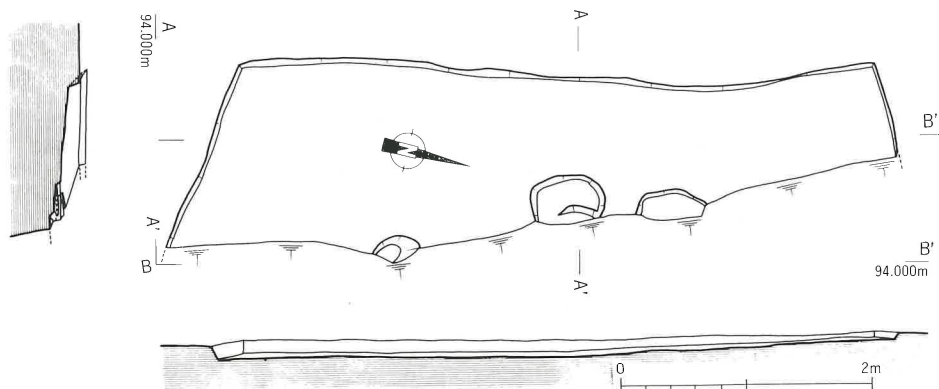
第37图 4号竖穴住居迹实测图



第38图 4号竖穴住居迹出土遗物实测图

5 号竖穴住居跡

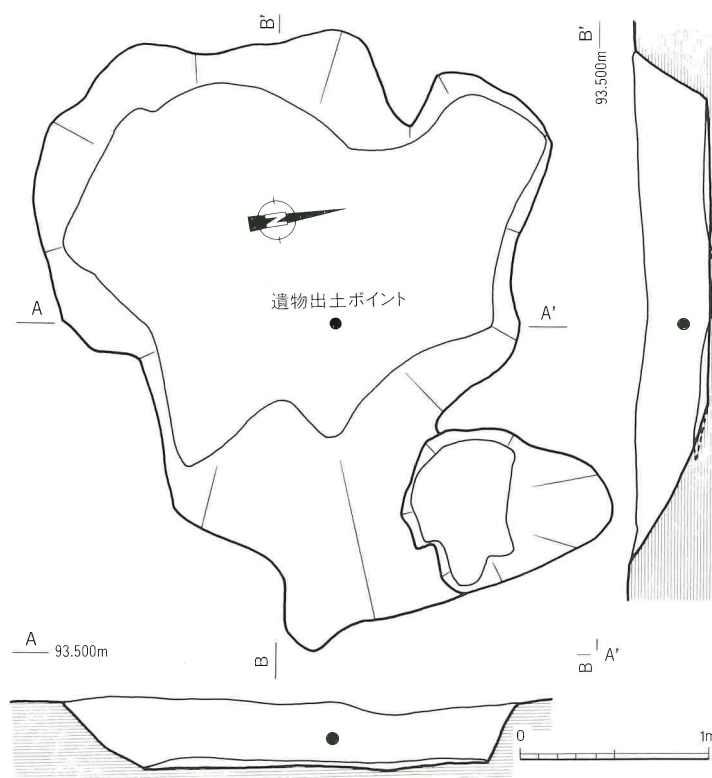
遺構は調査区の北東域に位置する。耕地造成に伴う整地と階段状の削平を受け、住居跡西壁以外をすべて失っていた。確認できる規模は5.61m×1.52m、最大深10cmである。床面には柱穴もしくは土坑を確認したが、住居に伴うものかは不明である。埋土堆積状況は茶褐色土層一層である。時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第39図 5号竪穴住居跡実測図

1 号土坑

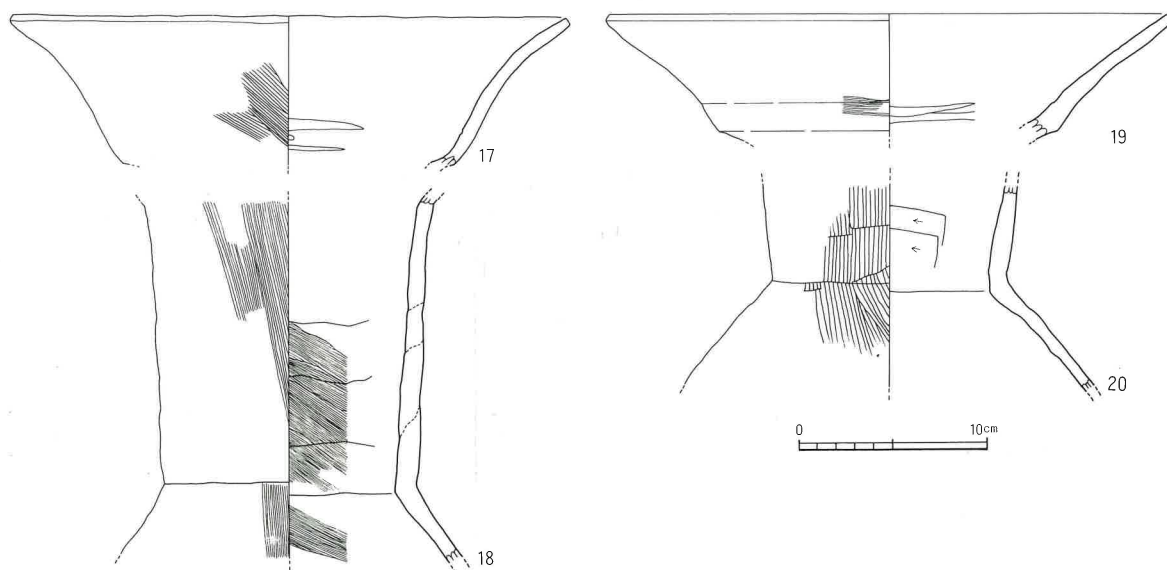
遺構は調査区の北東端に位置する。不定形の土坑で南北2.65m、東西2.75m、最大深35cmである。土坑の北東側には長軸95cm、短軸80cmの土坑が隣接するが、前後関係は不明である。埋土堆積状況は遺構底部褐色土（厚さ2～3cm）→茶褐色土の順である。



第40図 1号土坑実測図

出土遺物

17は口径29.9cmの口縁部で、残存部からみて二重口縁である。口縁部の二段目は緩やかに外反する。外面は斜め方向に細かい刷毛目を施し、篋工具状のもので水平に撫でている。色調は内外面ともに橙褐色で、胎土は角閃石を僅かに含む。18は頸部及び胴部上半部で、内外面ともに斜行に細かい刷毛目を施す。内面には幅3cmの粘土紐を輪積みした痕跡がある。色調は内外面ともに橙褐色で、胎土は僅かに砂粒と角閃石を含む。19も壺形の口縁部で、17に比べ開き具合は広く、僅かに外反する。外面は横方向に細かい刷毛目を施し、内面は篋工具状のもので横方向に撫でている。色調は内外面ともに橙褐色で、胎土は僅かに角閃石を含む。口径は30.2cmである。20は壺形の頸部及び胴部上半部である。内面は横方向に篋撫で、外面は上下方向に刷毛目を施す。色調は内外面ともに橙褐色で、胎土は僅かに角閃石と砂粒を含む。



第41図 1号土坑出土遺物実測図

小 結

H地区の調査結果をまとめると、次の3点に集約される。

- 1 1、2号竪穴住居跡の出土遺物と1号土坑出土遺物は、ともに4世紀中頃から後半を中心とするものである。
1号土坑から出土した口縁部、頸部は胎土や焼成からみて、壺形埴輪と思われるが、18にみられるように、長大な頸部を有しており、特異なものである。この点を除けば、近年出土例の増加している豊後の壺形埴輪と比較でき、その年代は4世紀末から5世紀前半に比定できよう。これらの壺形埴輪と1・2号住居跡は、調査区の南西250mに位置する蓬萊山古墳の築造期に時間的な重なりがあることは注目される。
- 2 3号竪穴住居跡から出土した甑底部片は安心院町所在の宗禅寺遺跡で出土した壺片に続き、県内では二例目の韓式土器に属する遺物と考えられる。さらに、他の出土遺物から住居の時期は5世紀中頃に比定できることから、付設された竈は県内で最古クラスの遺構となる。
- 3 4号竪穴住居跡は6世紀後半に営まれたものであり、上記と庄ノ原遺跡I地区の調査報告を考えあわせると、庄ノ原台地には4世紀から6世紀（古墳時代全般）にかけ、集落が断続的に形成されていたことが判明した。

6 I 区の調査

1) 調査の概要

I 区は毘沙門川で開析された谷に南から張り出した約20000㎡の舌状台地で、東側、南側とも深い谷が入りこんでいる。

現況は、宅地建設、ビニールハウス等の耕作によって地形が大きくあたられていたため、約半分の10000㎡に対して試掘調査を実施した。その結果、台地の西側半分はわずかに遺構や遺物が確認されたため、約5000㎡に本調査を行った。本調査の結果、調査区中央部を北から南へ走る非常に浅い落ち込みがあり、その周辺に遺構が検出された。遺構は、溝2条、掘立建物1軒、ピットが数個である。

2本の溝は一部切り合いながら約30m伸びる。掘立建物は、3間×4間で倉庫と思われる。ピットは数も少なく、その他の建物を想定することは出来なかった。



第42図 I 区及び周辺地形図

2) 遺構と遺物

溝

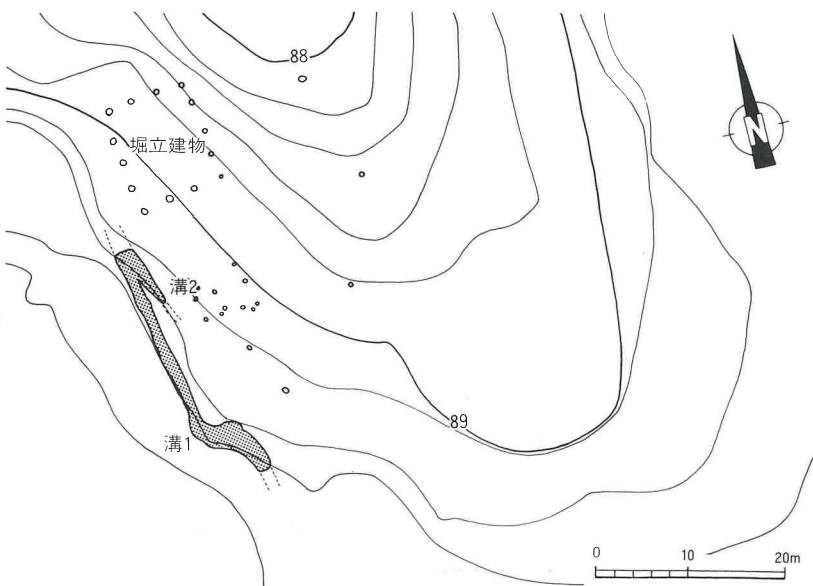
調査区中央部にある浅い落ち込みに沿って、ほぼ南北に約30m検出された。

北側で2本の溝が切り合う。そこで東を溝1、西を溝2とした。

溝1は現存する長さ約3m、幅1.8m、深さ0.3mである。溝の内部から須恵器や土師器、土錘の破片などが出土した。

溝2は溝1と切り合った後約20mほど南へと伸び、そこから等高線に沿って若干東寄りに向きを変えて約7m伸びて消失している。幅は、0.7~1.1m、深さは0.3~0.5mである。溝1と溝2との切り合い部分の土層観察から、溝1→溝2という流れがつかめる。

しかし溝内より出土した遺物を見ると大きな時間差は無いようである。

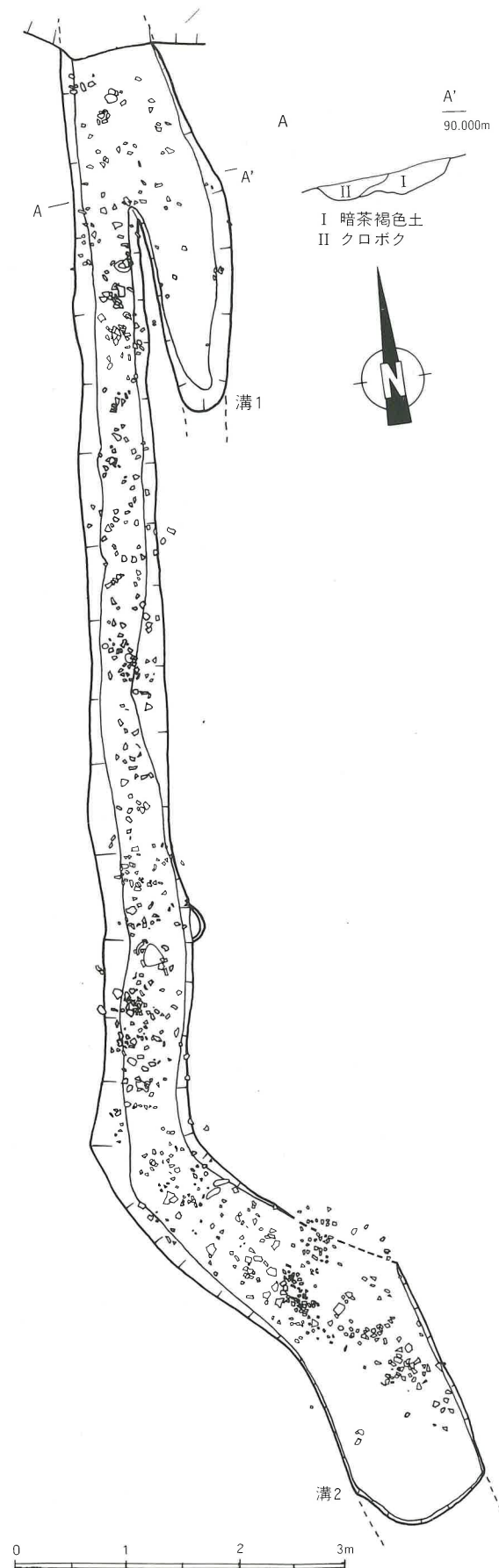


第43図 I 区遺構分布図

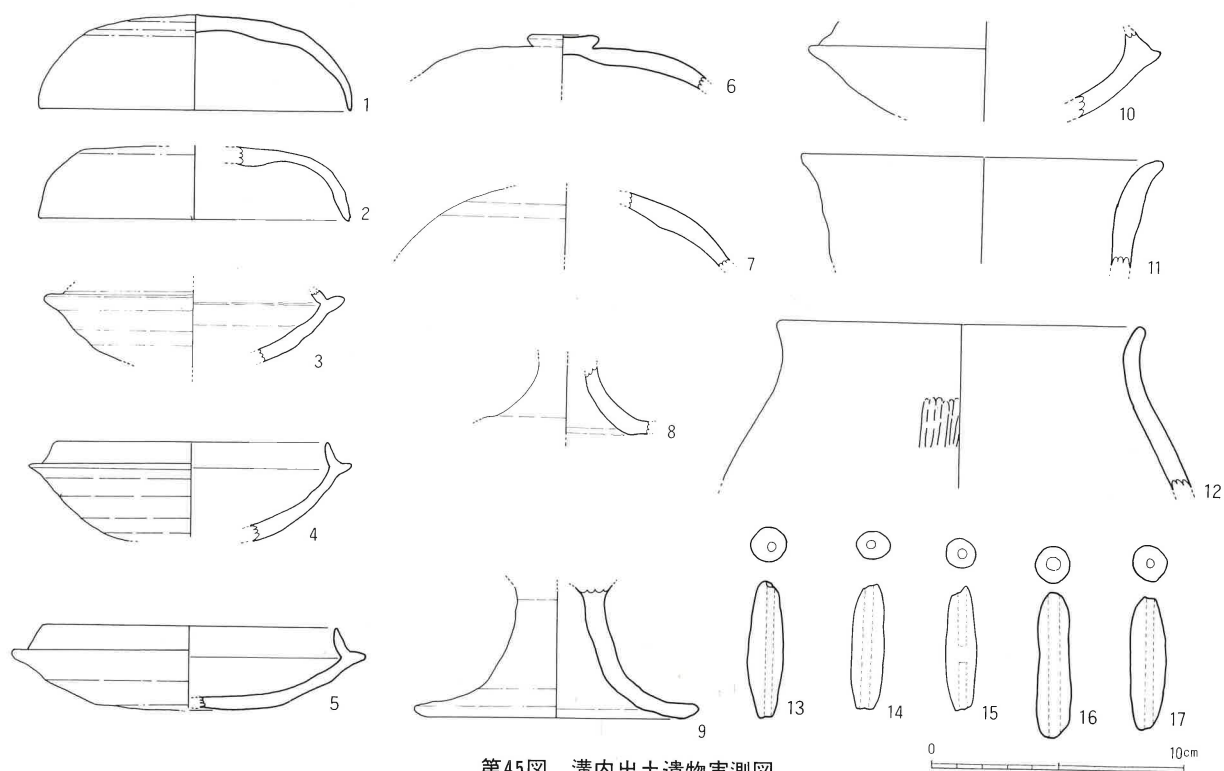
第45図に示した遺物はいずれもこの溝から出土したものである。1～2は蓋坏で、1は口径12.5cm、器高4cmを測る。天井部は回転ヘラケズリで、口縁端部は丸く仕上げられ、口縁部はわずかに内傾する。2は、口径12.5cm、器高約3cmを測る。天井部は回転ヘラケズリで、口縁部は若干外反気味である。3～5は坏身で、3は口径12cmを測る口縁部は器壁が薄くやや強く内傾しながら立ち上がる。受部は胴部とほぼ同じ器壁で7mmほど張り出す。端部の仕上げはシャープさに欠ける。外面はヘラケズリの後ヨコナデを施す。4は口径12.5cm、器高約4cmを測る。口縁部は薄く、内傾しながら立ち上がる。受部は短く張り出す。底部は回転ヘラケズリを施す。5は口径14cm、器高3cmを測る。口縁部は器高の割に長くやや内傾しながら立ち上がる。受部は短くつまみ出す。底部は回転ヘラケズリを施す。6～7は有蓋高坏の蓋である。6はつまみ部が偏平なボタン状で、天井部から緩やかに口縁部へと続くものと考えられる。器高もあまり高くはならないものと思われる。7はつまみ部が欠落している。1より器高は高くなるものと思われる。8～9は高坏の脚である。10～12は土師器である。10は須恵器の坏身と同じ作りで、クロロを用いている。口縁部、受部とも作りは粗雑で、簡単につまみ出したのみである。11は甕の口縁部で、口径14.5cmを測る。口縁部は「ハ」の字状に外反する。内外面ともナデ仕上げである。12は壺で、口径15cmを測り外面にはタタキが残る。13～17は土錘である。いずれも焼成はあまり良くない。この土錘は図示したもの以外にも20数点出土している。

建物

調査区北西部に主軸を溝とほぼ平行に保ちながら、3間×4間の掘立建物が検出された。柱穴の間隔はほぼ平均で桁方向が70cm、梁方向が60cm。桁行長が2.6m、梁行長が2mを測る。内部には柱穴は掘られず、倉庫として用いられたものと思われる。



第44図 溝1・2 平面図



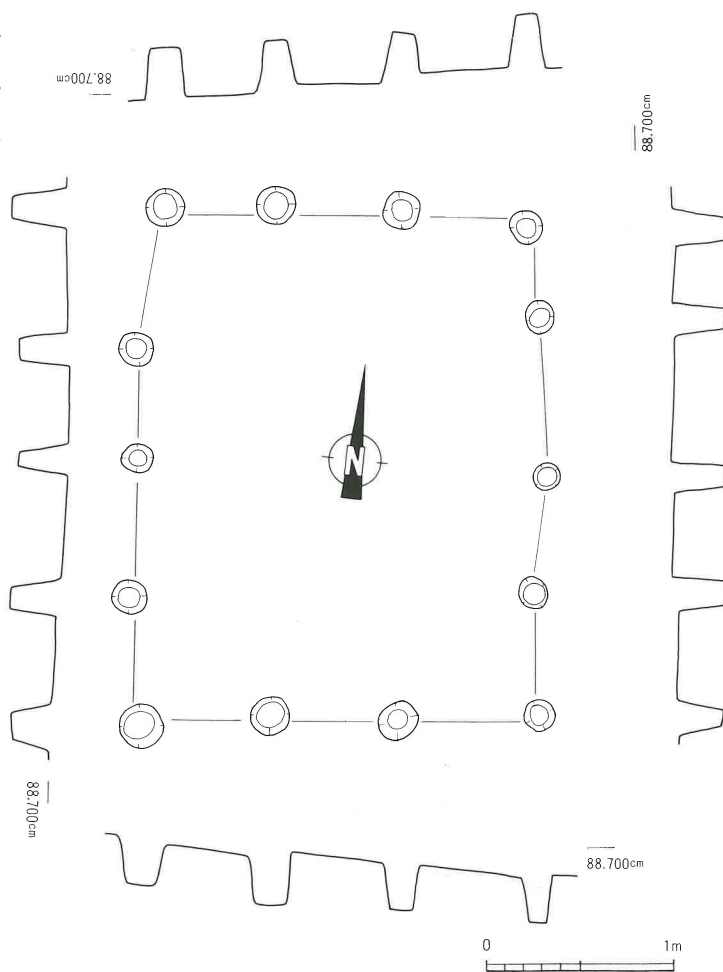
第45図 溝内出土遺物実測図

小 結

I区は、後世の削平で大部分の遺構は消失したが、溝と倉庫が確認された。2つの遺構の配置には意図的なものがうかがわれ、おそらく住居跡も数軒存在していたであろう。

溝内部から出土した須恵器からこの遺構の時期は概ね6世紀の後半と思われるが西側の谷を挟んで対峙するH区の住居跡群にも1軒同時期のものがあり、その立地等から庄ノ原遺跡一帯では、深い谷に張り出す舌状台地の先端付近に小規模な集落が点々と存在していたことが推定される。

また、溝の中から大量に出土した土錘は漁労用の道具でありおそらく比高差約40mの谷部に流れる毘沙門川等での漁労に用いたものと思われる。



第46図 掘立建物実測図

7 J区の調査

1) 調査の概要

J区は、庄ノ原遺跡台地の南東部に張り出す舌状台地にあり北約150mにK区が、北西約100mにI区がある。調査区の南西側、南東側には谷が走り、南東約500mには尼ヶ城遺跡がある。

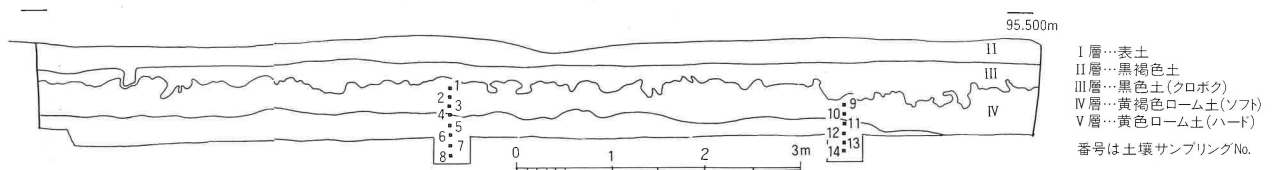
庄ノ原遺跡台地では、かねてから旧石器時代の遺物が表採されていたことが報告されている。このJ区は調査区としてはA～K区の中でも面積の広い地区で、試掘調査でも良好なローム層が広がっていることが確認されている。

調査は主に旧石器時代と縄文時代の包含層の調査を中心に行った。10×10mのグリッドを設定しあらかじめ試掘調査で遺物が確認された場所を中心に遺物の広がりを確認していった。その結果、縄文時代の遺物はほとんど確認されず、旧石器時代の包含層の調査が中心となった。台地の落ち際を中心に東西約110m、南北約50mの範囲に集石遺構が19基検出され、ツール類、コア、フレイク、チップなどが多数出土した。

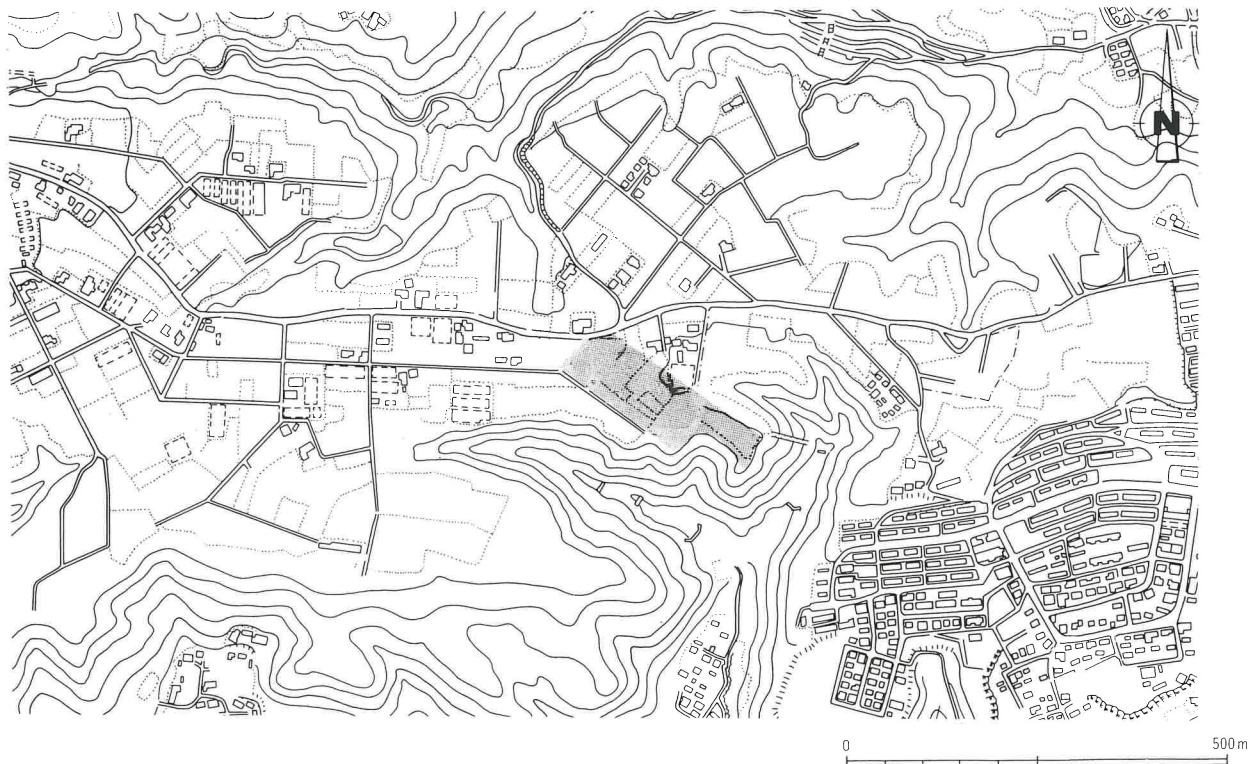
また、遺物は大小19ヵ所の集中が見られ旧石器時代の遺跡としては予想以上の大遺跡となった。

2) 層序

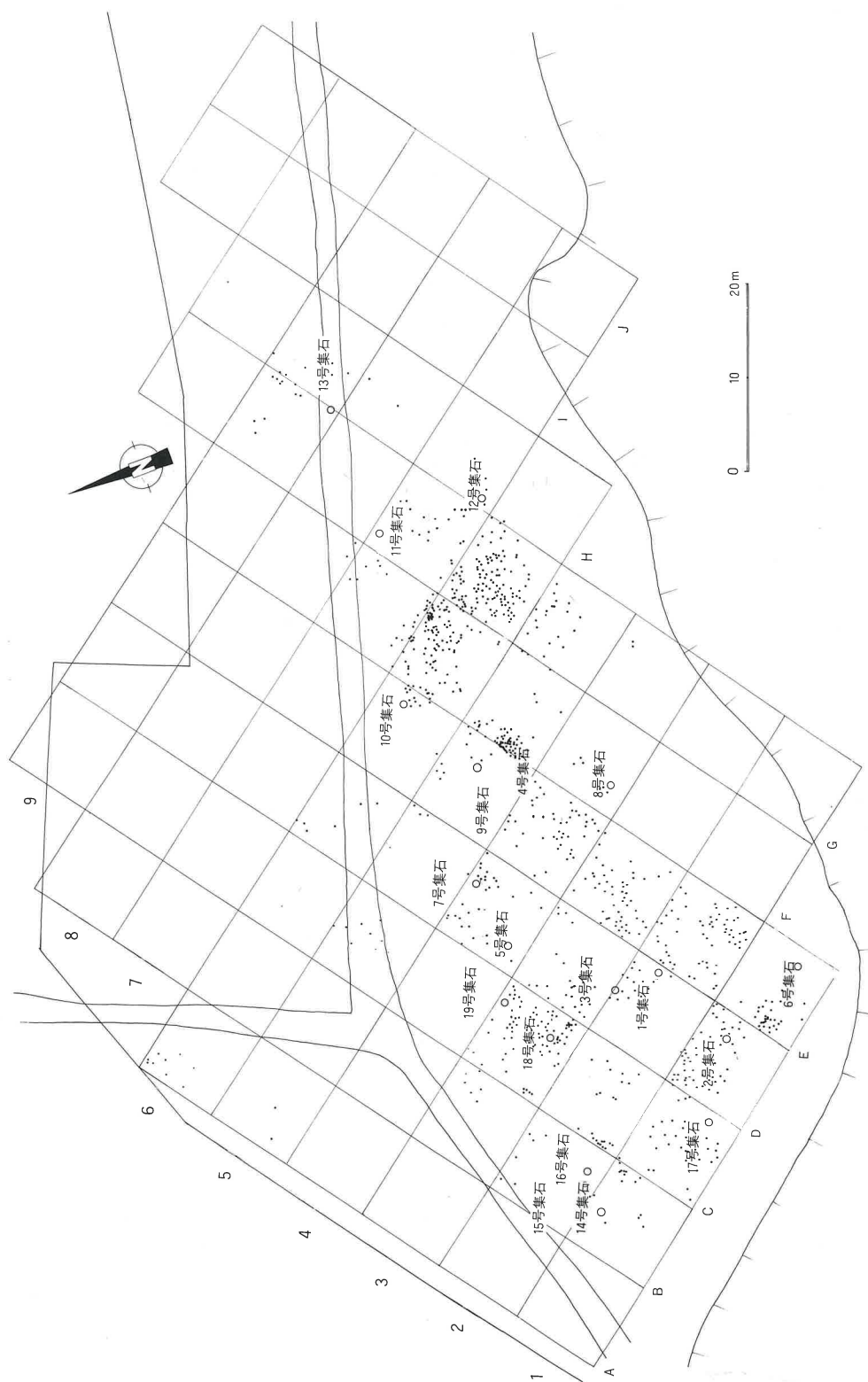
I層は、茶褐色弱粘質土で現表土である。II層は、黒褐色粘質土で、旧表土である。近世の陶磁器がわずかに含まれる。III層は、黒色粘質土（クロボク）でA～E区では縄文早期から晩期の包含層としてとらえられている層である。J区では、III層からは縄文時代の遺物はほとんど出土していない。IV層は、黄褐色のでソフトロームで、今回の調査の旧石器時代の包含層である。V層は、黄色のハードロームでATを含む。遺物は出土しなかった。基本的には後述するK区も同様の層序である。



第47図 J区基本層序 (D-2グリッド西壁)



第48図 J区及び周辺地形図



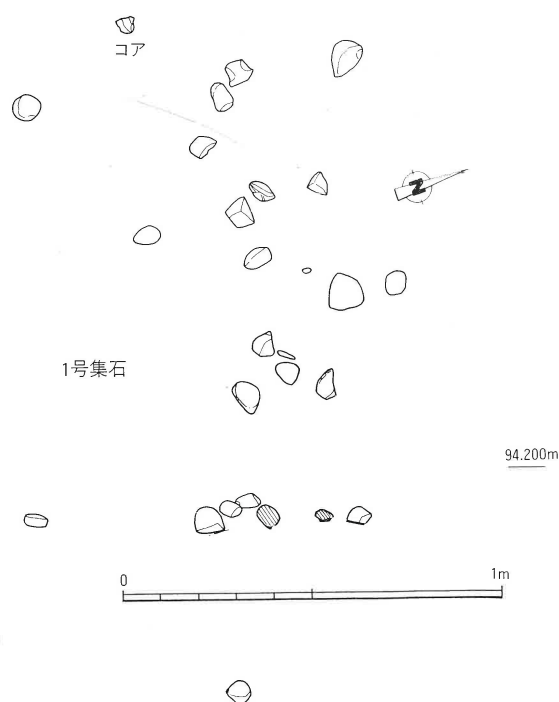
第49図 J区グリッド配置図及び遺構・遺物分布図

3) 集石遺構

J 区の調査では、Ⅳ層中から19基の集石遺構が確認された。集石遺構の分布と遺物のブロックはほぼ合致する。

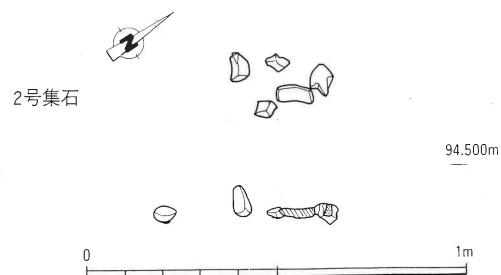
1号集石遺構

D-2 グリッドで検出された。石器ブロック8のほぼ中央部に位置する。遺構の規模は $0.5 \times 1.0\text{m}$ を測る。安山岩の円礫が疎らに広がる。構成する礫は火熱を受け、赤変している。集石遺構の下部には掘込みは確認されなかった。集石内に1点石核が共伴している。



2号集石遺構

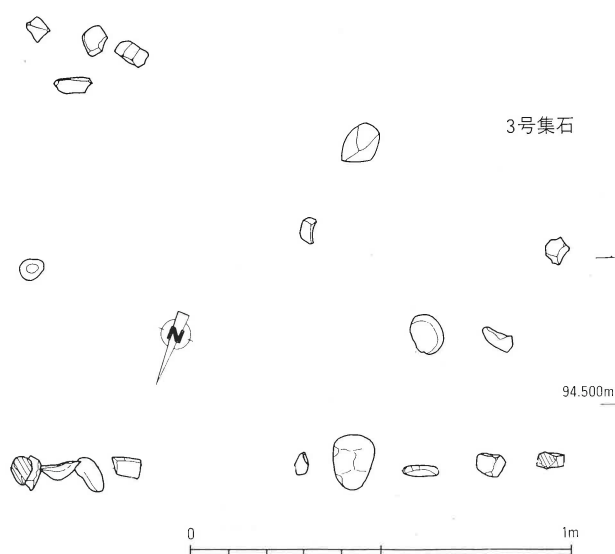
D-1 グリッドで検出された石器ブロック3に属する。ブロック内ではほぼ中央に位置する集石遺構の規模は、ごく小規模で $0.3 \times 0.3\text{m}$ の範囲に5個の安山岩の円礫が集中していて、ほとんどの礫が火熱を受け赤変している。集石遺構の下部には、掘込みは確認されなかった



3号集石遺構

D-2・D-3 グリッドで検出された。石器ブロック8に属する。ブロックの北端部分に位置する。 $0.5 \times 1.5\text{m}$ の範囲に安山岩の円礫が疎らに広がる。礫は火熱を受け赤変している。

集石遺構の下部には掘込みは確認されなかった。

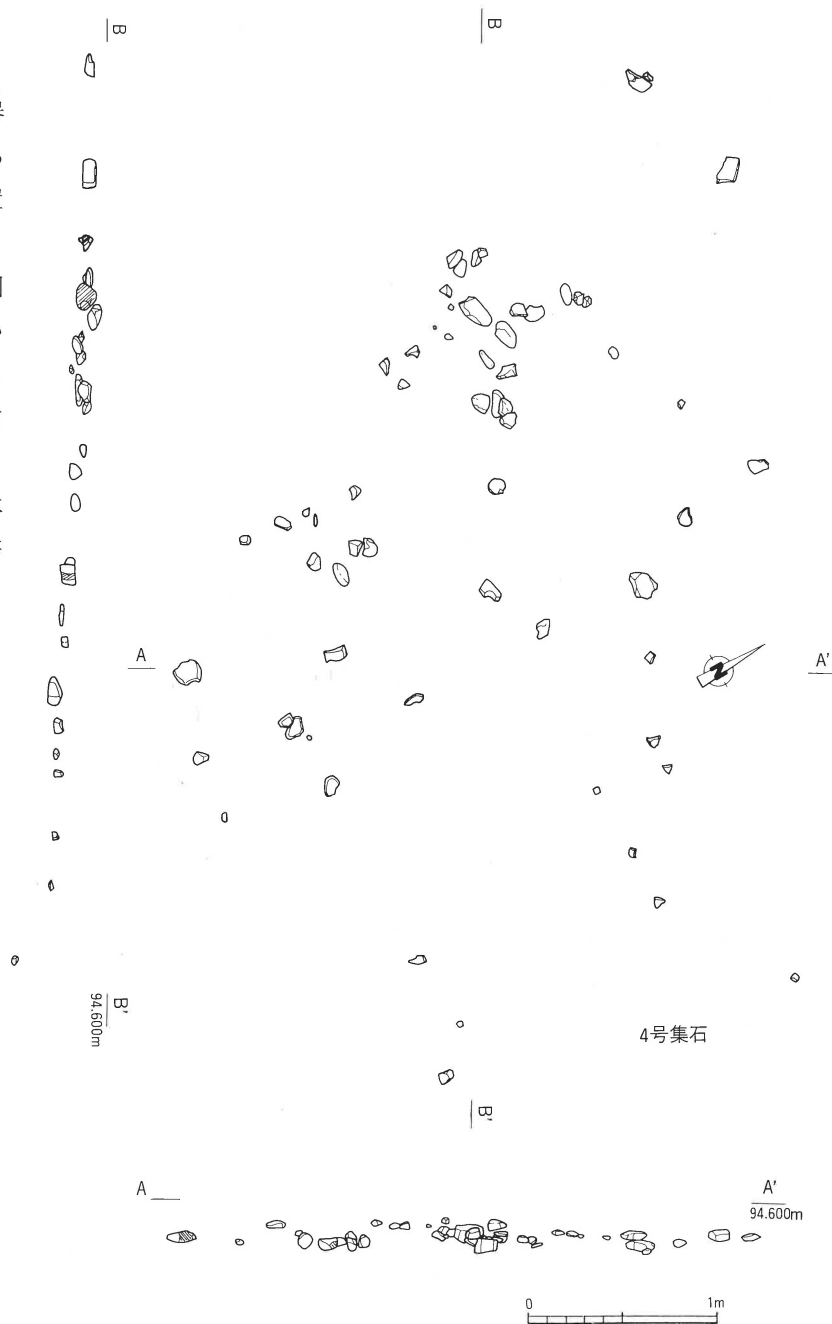


第50図 集石遺構実測図(1)

4号集石遺構

F-5グリッドで検出された。石器ブロック15に属する。この石器ブロックは剥片、碎片の集中部があり、その集中部に接するように位置する。

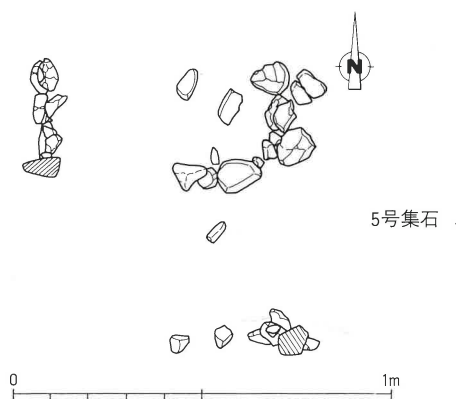
集石遺構の規模は 4×4 mの範囲に安山岩の角礫を中心に広がっていて、一部に集中する部分も見受けられるが、全体的には疎らな分布と言える。礫は火熱を受けておらず10～15cm程度の比較的小型の角礫が主体となる。集石遺構の下部に掘込み等の施設は設けられていない。



5号集石遺構

D-4グリッドで検出された。石器ブロック13に属しブロックの西側縁辺部に位置する集石遺構の規模は、 0.5×0.5 mの範囲に15～20cmの安山岩の角礫と円礫が混在しながら比較的まとまって検出された。保存状態の良好な例と言える。礫は火熱を受けてかなり赤変しているものも認められる。

集石遺構の下部には掘込み等の施設は確認されなかった。



第51図 集石遺構実測図(2)

6号集石遺構

E-1 グリッドで検出された。ここは石器ブロック4に属し、そのブロックの南端部に位置する。集石遺構は、耕作時の削平で大きく破壊されていてわずかに20cm程度の角礫が2個確認されたに過ぎない。しかしいずれの礫も火熱を受けていて、赤変が著しい。

7号集石遺構

D-4 グリッドで検出された。ここは石器ブロック13に属し、ブロックのほぼ中央部に位置する。規模は0.2×0.4mの小規模な範囲に、10～15cm程度の安山岩の円礫で構成される。礫は火熱を受けていない。

8号集石遺構

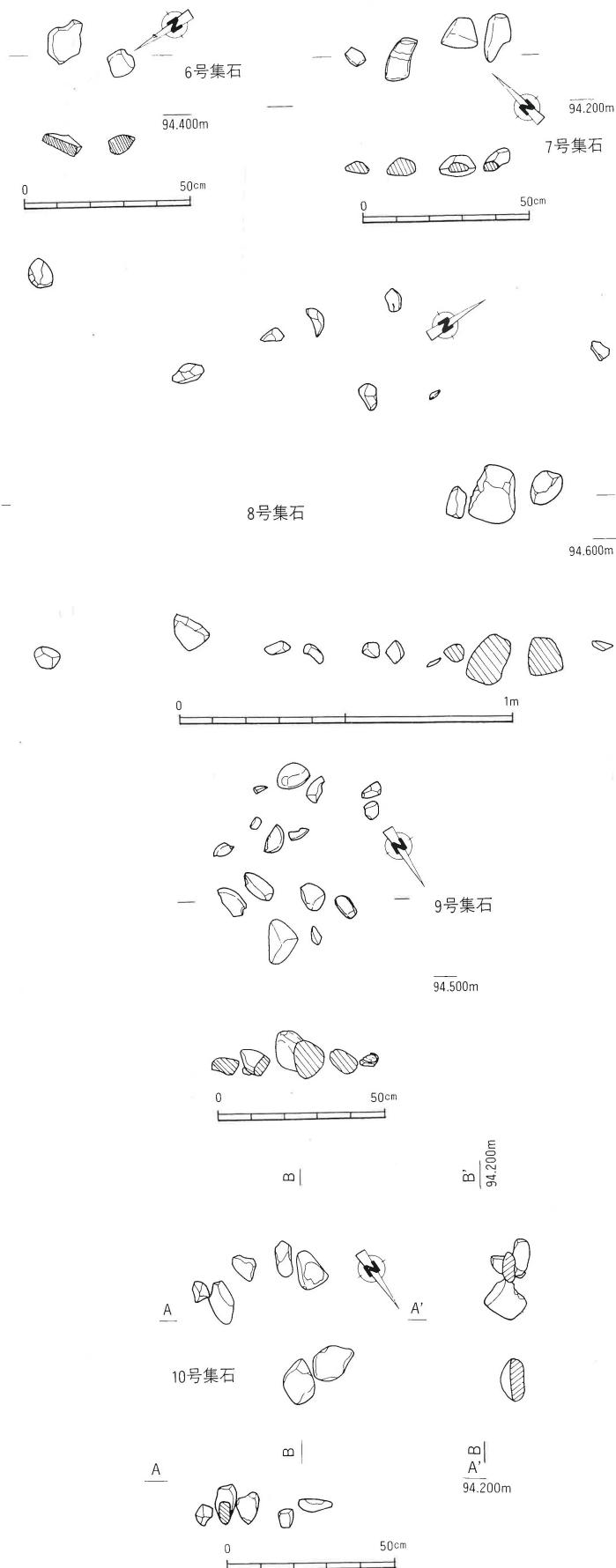
F-4 グリッドで検出された。ここは、石器ブロック12に属しそのブロックの南端部に位置する。集石遺構の規模は、0.6×1.7mの範囲に10cm未満のものから20cmを越える安山岩の円礫を中心に疎らに広がる。

9号集石遺構

E-6 グリッドで検出された。ここは、石器ブロック15に属しその北端部に位置する。集石遺構の規模は、0.6×0.7mの範囲に10～15cmの安山岩の円礫が比較的集中して分布している。保存状態の良好な例と言える。礫は火熱を受けて、赤変している。遺構下部には掘込みは確認されなかった。

10号集石遺構

E-6 グリッドで検出され、石器ブロック18の北端部に位置する。規模は、0.5×0.5mの範囲に円礫で弧を描くように配置される。礫は、いずれも火熱を受けて赤変している。下部には掘込みは確認されなかった。



第52図 集石遺構実測図(3)

14号集石遺構

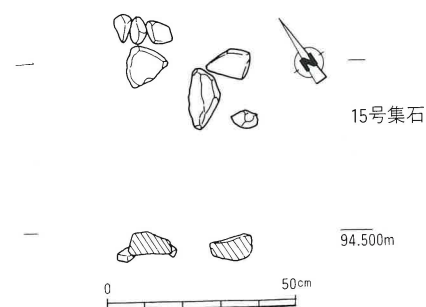
B-1 グリッドで検出された。石器ブロック1に属しブロックのほぼ中央部に位置する。集石の規模は、 0.7×0.6 mで安山岩の円礫が主に用いられている。火熱はほとんど受けていない。集石の下部には掘込みはない。



15号集石遺構

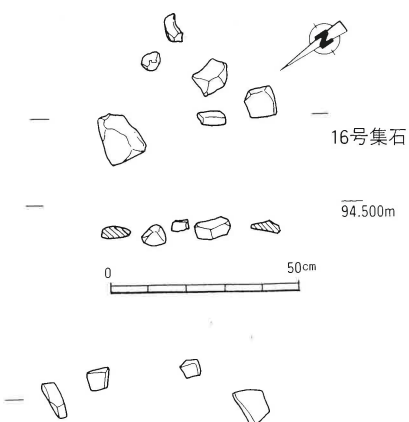
B-2 グリッドで検出された。石器ブロック1のほぼ中央部に位置する。

遺構の規模は、 0.4×0.4 mで、15~20cm程度の安山岩の円礫で構成されている。礫は火熱を受け赤変している。



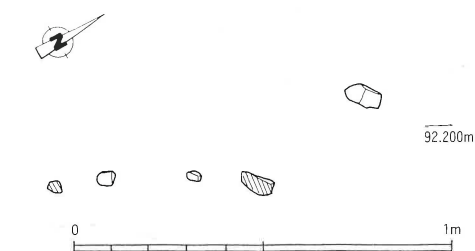
16号集石遺構

B-2 グリッドで検出された。石器ブロック1の中央部に位置する。遺構の規模は 0.5×0.4 mで、15~20cmの安山岩の角礫が用いられている。礫は火熱を受け赤変している。下部の掘込みは確認されなかった。



17号集石遺構

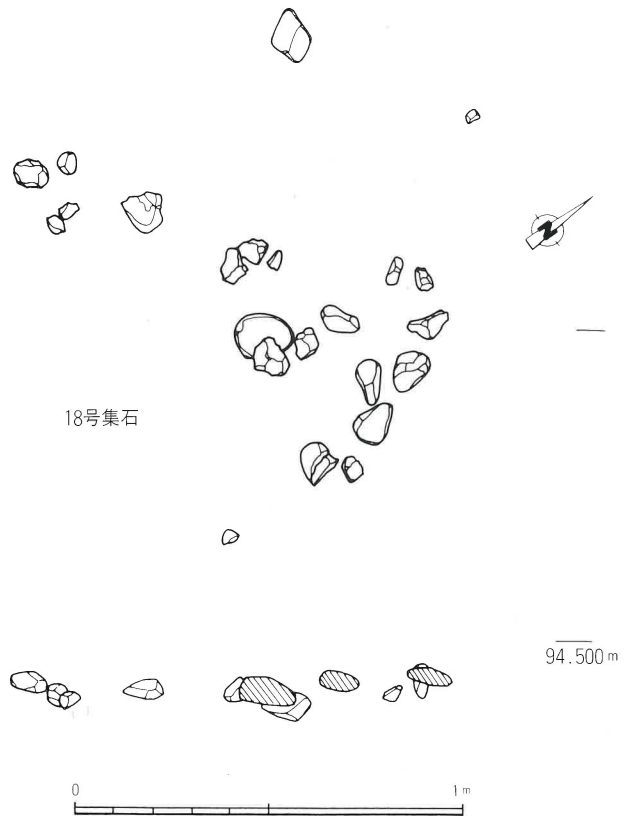
C-1 グリッドで検出された。石器ブロック2の中央部に位置する。遺構の規模は、 1×1 mで安山岩の角礫を用いている。ただし遺存状況は悪く、大半の礫は失われている。



第54図 集石遺構実測図(5)

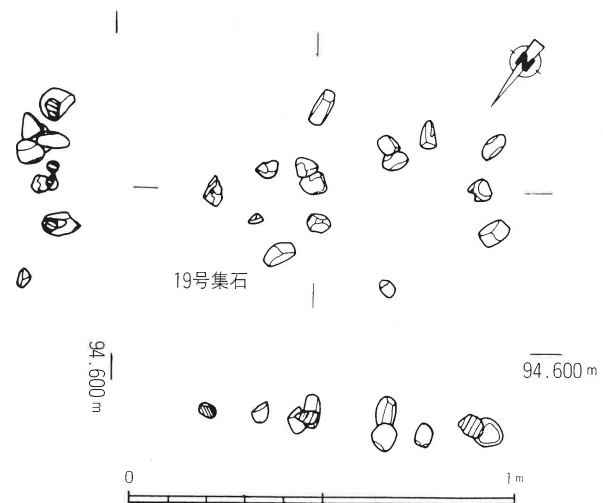
18号集石遺構

C-3・D-3 グリッドで検出された。石器ブロック7の遺物集中部に位置する。遺構は0.6×1.4mの範囲に10～20cmの安山岩の円礫と角礫が分布する。礫は火熱を受けて赤変が著しい。遺構の下部には明確な堀込みのラインは確認されなかったものの、礫の分布レベルから浅い皿状の堀込みがあったことが推定される。



19号集石遺構

C-3グリッドで検出された。ここは石器ブロック7の遺物集中部東寄りに位置する。遺構の規模は0.9×0.5mを測り、10cm内外の安山岩の円礫を中心に構成されている。分布状況は比較的密で遺構の遺存状況も良好である。



第55図 集石遺構実測図(6)

集石遺構番号 (集石遺構)	検出グリッド (グリッド)	ブロック 番号	層位 (層)	集石の規模		礫の 石材	円礫 or 角礫	被熱 の有無	堀込 の有無	集石遺構番号 (集石遺構)	検出グリッド (グリッド)	ブロック 番号	層位 (層)	集石の規模		礫の 石材	円礫 or 角礫	被熱 の有無	堀込 の有無
				南北(m)	東西(m)									南北(m)	東西(m)				
1号	D-2	8	IV	0.5	1.0	安山岩	円	有	無	11号	G-7	19	IV	1.5	1.0	安山岩	円角	有	無
2号	D-1	3	IV	0.3	0.3	安山岩	円	有	無	12号	H-7	20	IV	2.1	2.0	安山岩	角	有	無
3号	D-2・D-3	3	IV	0.3	1.5	安山岩	円	有	無	13号	G-9H-9	21	IV	0.7	1.4	安山岩	円角	有	無
4号	F-5	15	IV	4.0	4.0	安山岩	角	無	無	14号	B-1	1	IV	0.7	0.6	安山岩	円	無	無
5号	D-4	13	IV	0.5	0.5	安山岩	円	有	無	15号	B-2	1	IV	0.4	0.4	安山岩	円	有	無
6号	E-1	4	IV	0.2	0.2	安山岩	角	有	無	16号	B-2	1	IV	0.5	0.4	安山岩	角	有	無
7号	D-4	13	IV	0.2	0.4	安山岩	円	無	無	17号	C-1	2	IV	1.0	1.0	安山岩	角	有	無
8号	F-4	12	IV	0.6	1.7	安山岩	円	有	無	18号	C-3D-3	7	IV	0.6	1.4	安山岩	円角	有	有?
9号	E-6	15	IV	0.6	0.7	安山岩	円	有	無	19号	C-3	7	IV	0.9	0.5	安山岩	円	無	無
10号	E-6	18	IV	0.5	0.5	安山岩	円	有	無										

第8表 J区集石遺構観察表

4) 石器ブロックと遺物

1, 石器ブロック 1

ブロック 1 は、調査区西側、B-1・B-2 グリッドにある。このブロックでは、3 基の集石遺構がまとまって検出された。この集石遺構と若干離れた位置に遺物の集中部分がある。全体の数量は20点で、流紋岩が16点、安山岩が4 点で、流紋岩の占める割合は80%である。

石器の内訳は、使用痕のある剥片が1 点出土したのみで残りは、剥片および碎片であった。

使用痕のある剥片(1)

流紋岩の縦長剥片を素材としたもので、1 側辺に使用痕が認められる。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
1	B2-5	u f	3.2	1.4	1.1	2.7
2	B2-4	f	6.0	2.4	0.9	9.1
3	B2-2	f	6.1	4.0	1.8	25.3
4	B10-1	f	3.7	3.3	1.0	10.5
5	B2-3	f	3.6	3.9	1.2	14.8
6	B1-17	f	2.8	3.4	1.0	6.8
7	B1-3	f	3.1	3.1	1.6	14.2

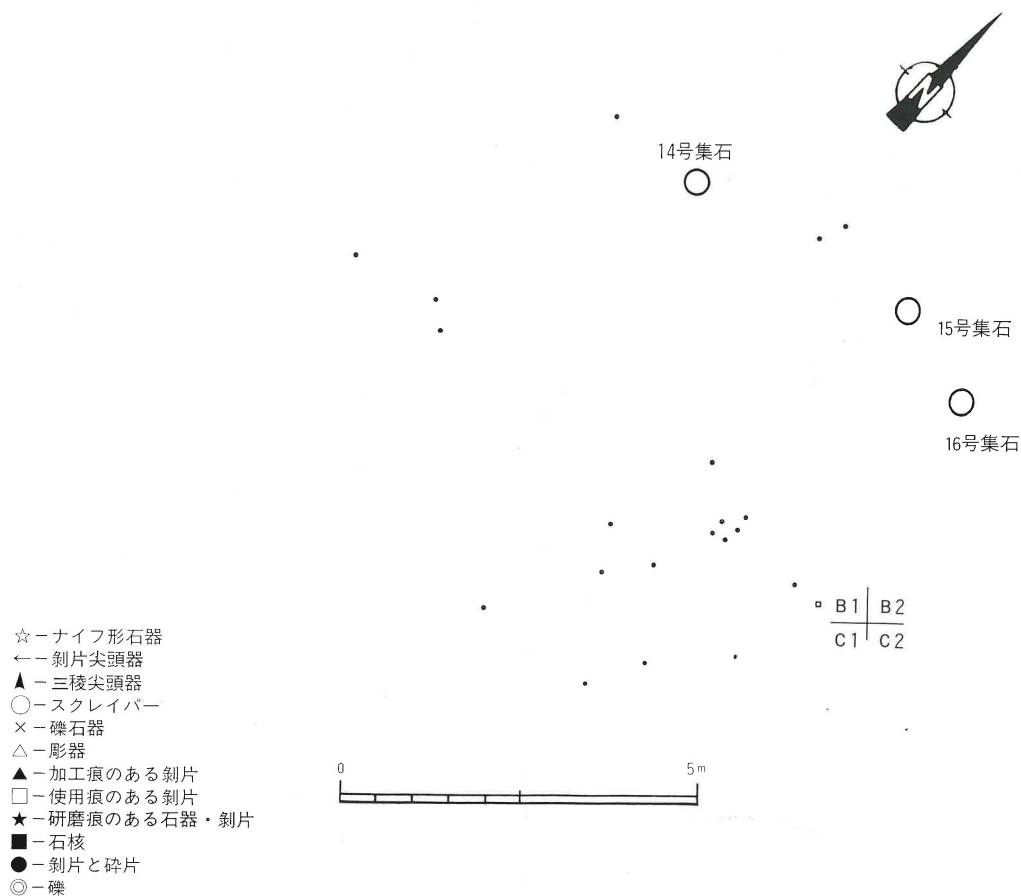
第9表 ブロック1の主要遺物計測表 ※ u f 使用痕のある剥片
f 剥片

石 材	個数
流紋岩	16
チャート	0
黒曜石	0
頁岩	0
安山岩	4
t o t a l	20

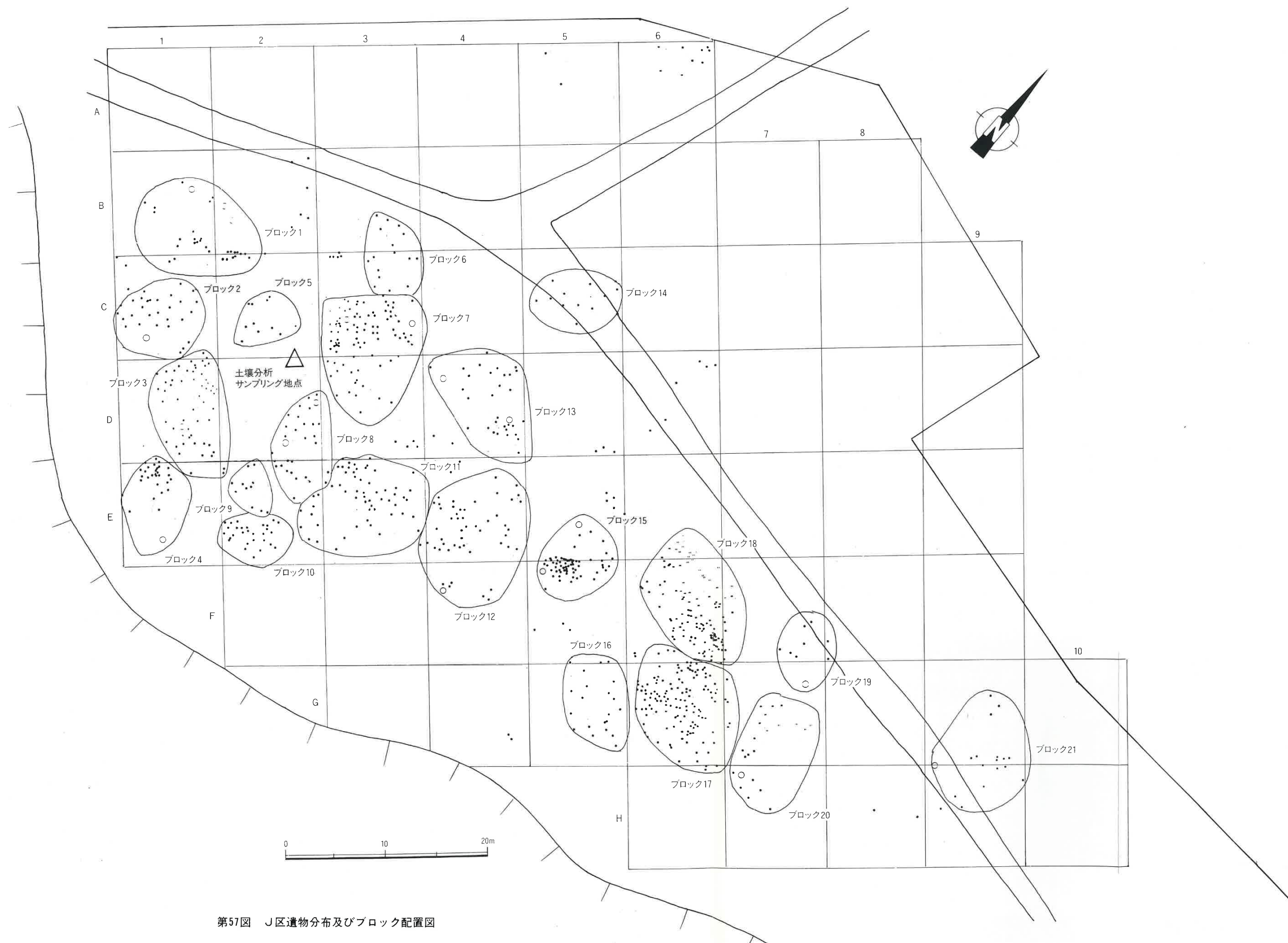
第10表 石材組成表

類 別	個数
f	11
u f	1
c h	8
s c	0
t o t a l	20

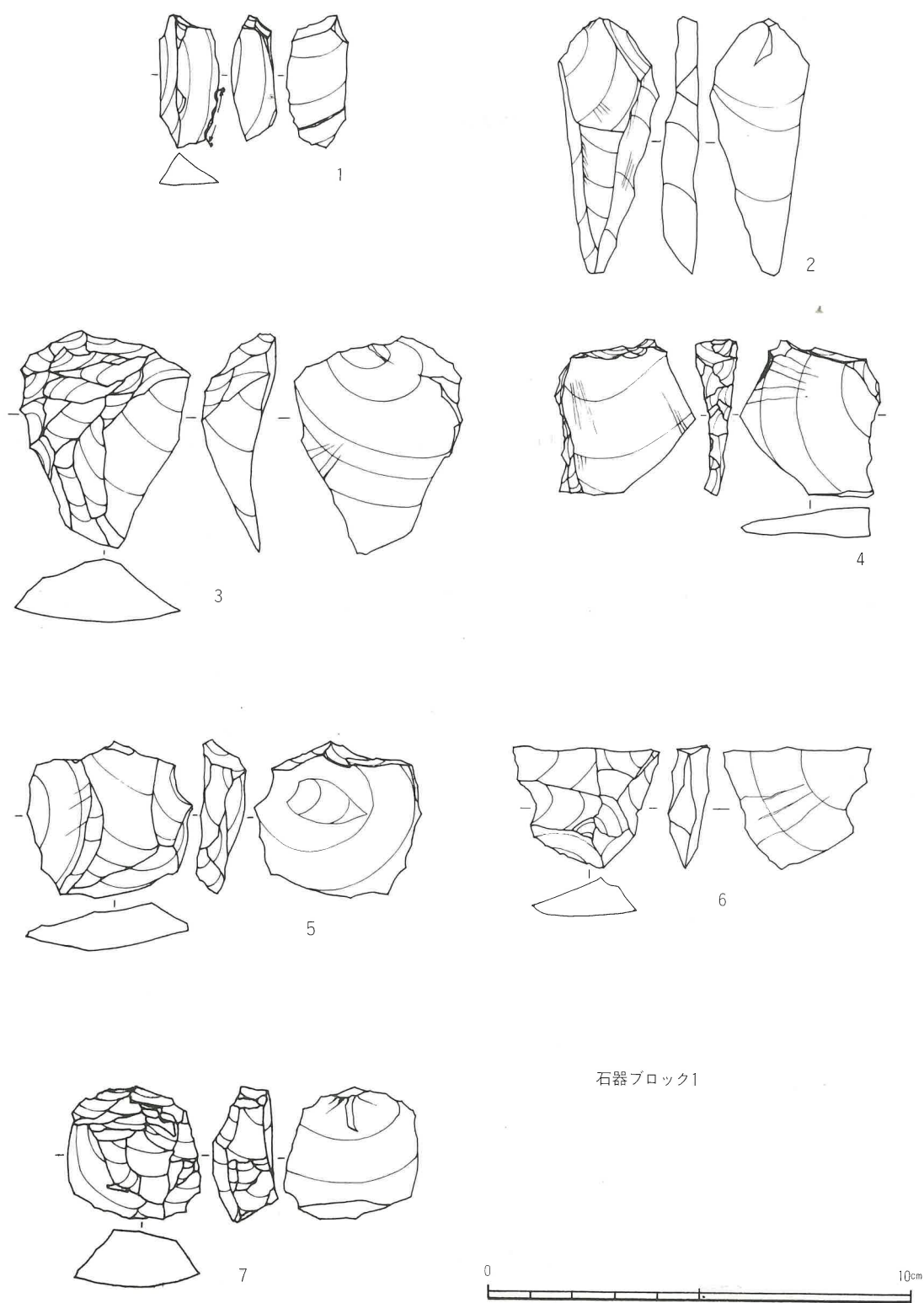
第11表 石器組成表



第56図 石器ブロック1の遺物分布



第57図 J区遺物分布及びブロック配置図



第58図 旧石器実測図(1)

2, 石器ブロック 2

C-1 グリッド、中央部に位置する。北側を石器ブロック 1 と接する。ブロック南に集石遺構が検出された。石器は全体にまんべんなく広がり、総点数30点を数える。石材の内訳は、流紋岩18点、サヌカイト 2 点、石英 4 点、安山岩 6 点である。流紋岩が全体の60%を占める。石器の内訳は、三稜尖頭器が 1 点、石核が 1 点で残りは剥片および碎片類であった。

三稜尖頭器(8)

三面加工を施し、主要剥離面はわずかに残る。断面は台形状を呈する。

石核(13)

打面を転換しながら不定形な剥片を剥離している。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
8	C1-4	三稜 p	8.2	2.2	1.6	27.2
9	C1-33	f	4.5	6.5	1.1	35.0
10	C1-40	f	4.9	3.5	1.8	27.9
11	C1-22	f	4.6	4.5	1.2	22.1
12	C1-22	f	4.4	3.8	1.4	18.2
13	C1-32	c	7.7	5.0	4.0	143

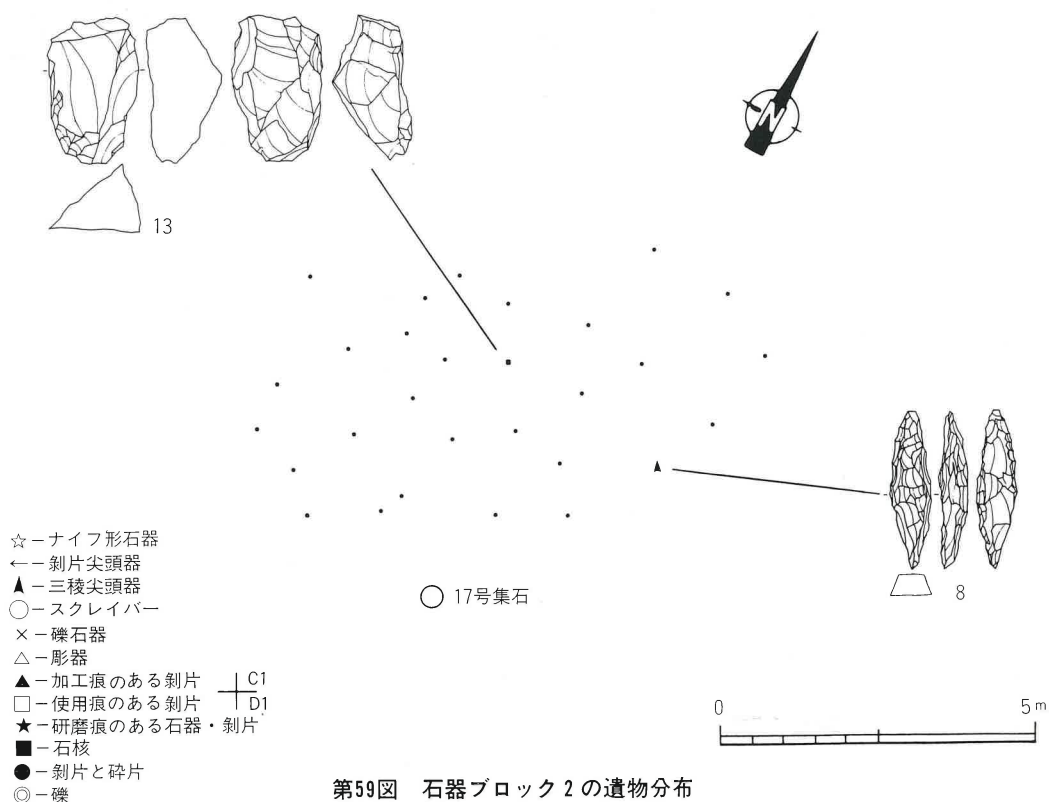
第12表 ブロック 2 の主要石器計測表

※三稜 p 三稜尖頭器
f 剥片
c 石核

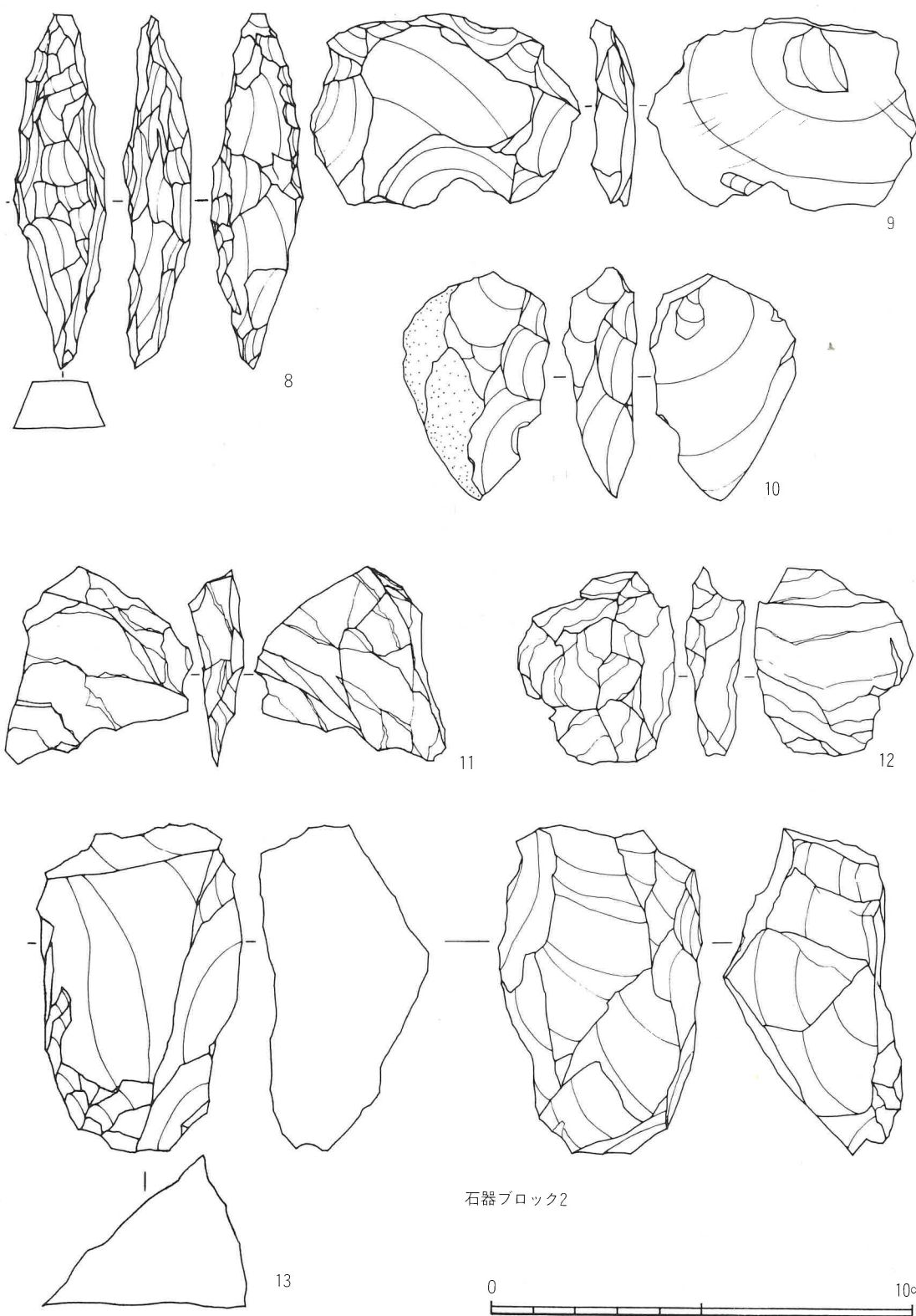
石 材	個数	類 別	個数
流紋岩	18	f	7 (4)
サヌカイト	2	u f	0
チャート	0	c h	17
石英	4	p	1
安山岩	6	c	1
t o t a l	30	t o t a l	26 (4)

第13表 石材組成表

第14表 石器組成表
() 内は接合資料



第59図 石器ブロック 2 の遺物分布



第60図 旧石器実測図(2)

3、石器ブロック3

石器ブロック3はD-1・E-1グリッドに広がる。ほぼ中央部に集石遺構が1基検出されている。石器は全体に分布し、その総点数は48点を数える。石材の内訳は流紋岩が43点、石英が3点、安山岩が2点である。石器はナイフ形石器が3点、使用痕のある剥片が1点、磨石1点、凹石1点、石核7点を数える。残りは剥片と碎片である。若干碎片の数が多い。

ナイフ形石器（14～16）

いずれも縦長剥片を素材とした2側縁加工のナイフ形石器である。15～16は小型のナイフ形石器で、切り出し型の形状をしている。

使用痕のある剥片（17）

縦長剥片を素材とし打面側の両側辺にわずかに使用痕が認められる。

二次加工剥片（23）

縦長剥片の主要剥離面側の打面部を中心に加工を施す。

石核（25～31）

全体的に不定形な剥片を剥離したものが多い。このうち28と30は石英製の石核でその石質は非常に悪い。

礫石器（32～33）

32は安山岩の扁平な円礫に凹部が形成されている。33は磨石で両面を使用している。

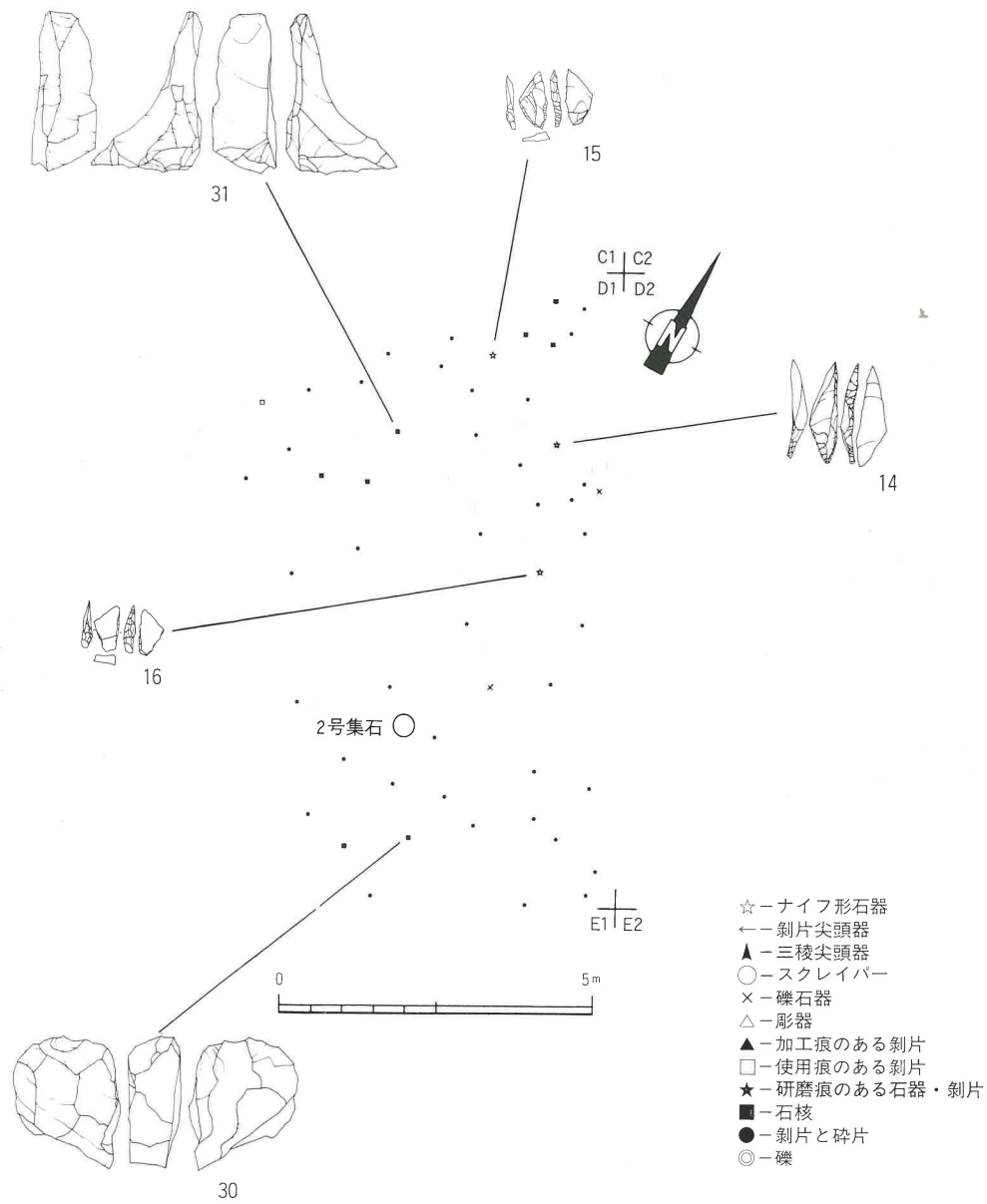
挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
14	D1-20	k n i	5.4	1.5	1.0	4.7
15	D1-21	k n i	3.1	1.4	0.5	1.9
16	D1-1	k n i	2.5	1.3	0.6	1.7
17	D1-32	u f	7.4	3.3	1.0	23.6
18	D1-41	f	5.3	2.2	1.7	23.4
19	D1-46	f	5.1	3.2	0.8	10.8
20	D1-39	f	6.6	3.3	1.0	10.2
21	D1-27	f	4.3	3.3	0.7	9.2
22	D1-4	f	2.9	3.3	1.3	11.5
23	D1-54	f	7.1	3.8	2.6	42.5
24	D1-34	f	4.2	5.9	2.3	31.9
25	D1-40	c	5.2	3.3	0.9	11.3
26	D1-25	c	5.8	6.3	5.3	209
27	D1-17	c	2.9	3.8	3.0	31.0
28	D1-28	c	3.0	4.7	1.8	26.8
29	D1-25	c	8.5	3.4	5.9	95.9
30	D1-45	c	7.0	5.7	2.8	141
31	D1-46	c	6.5	4.6	2.6	92.6
32	D1-53	凹石	10.6	6.4	3.5	785
33	D1-48	磨石	12.6	9.3	6.8	971

第15表 ブロック3の主要石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器 f 剥片
u f 使用痕のある剥片 c 石核

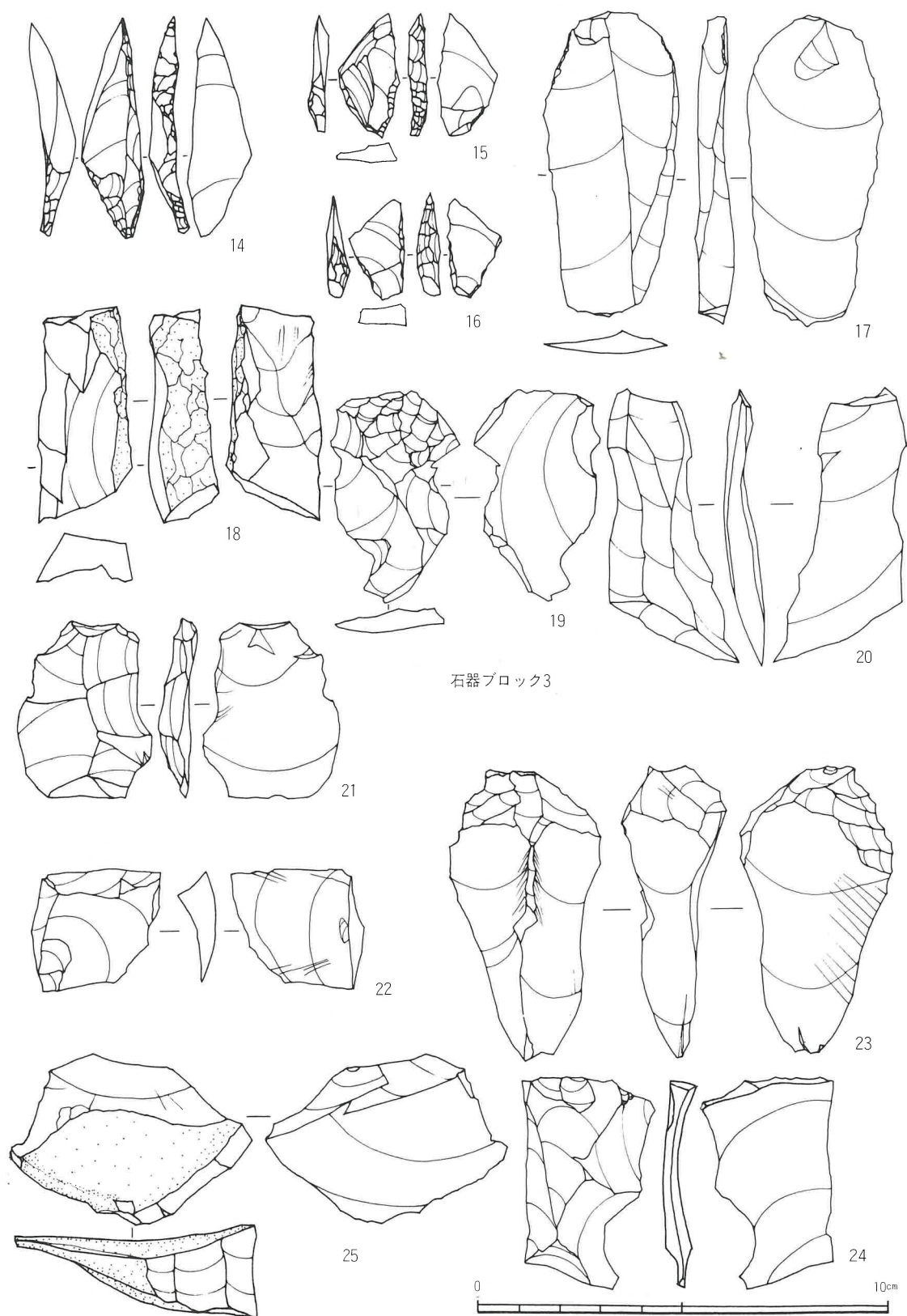
石 材	個数	類 別	個数
流紋岩	45	f	10 (3)
サヌカイト	0	u f	1 (1)
チャート	0	c h	22
黒曜石	0	s c	0
頁岩	0	k n i	3
石英	3	p	0
安山岩	2	c	7 (1)
		r f	1
		h s	2
t o t a l	50	t o t a l	45(5)

第16表 石材組成表

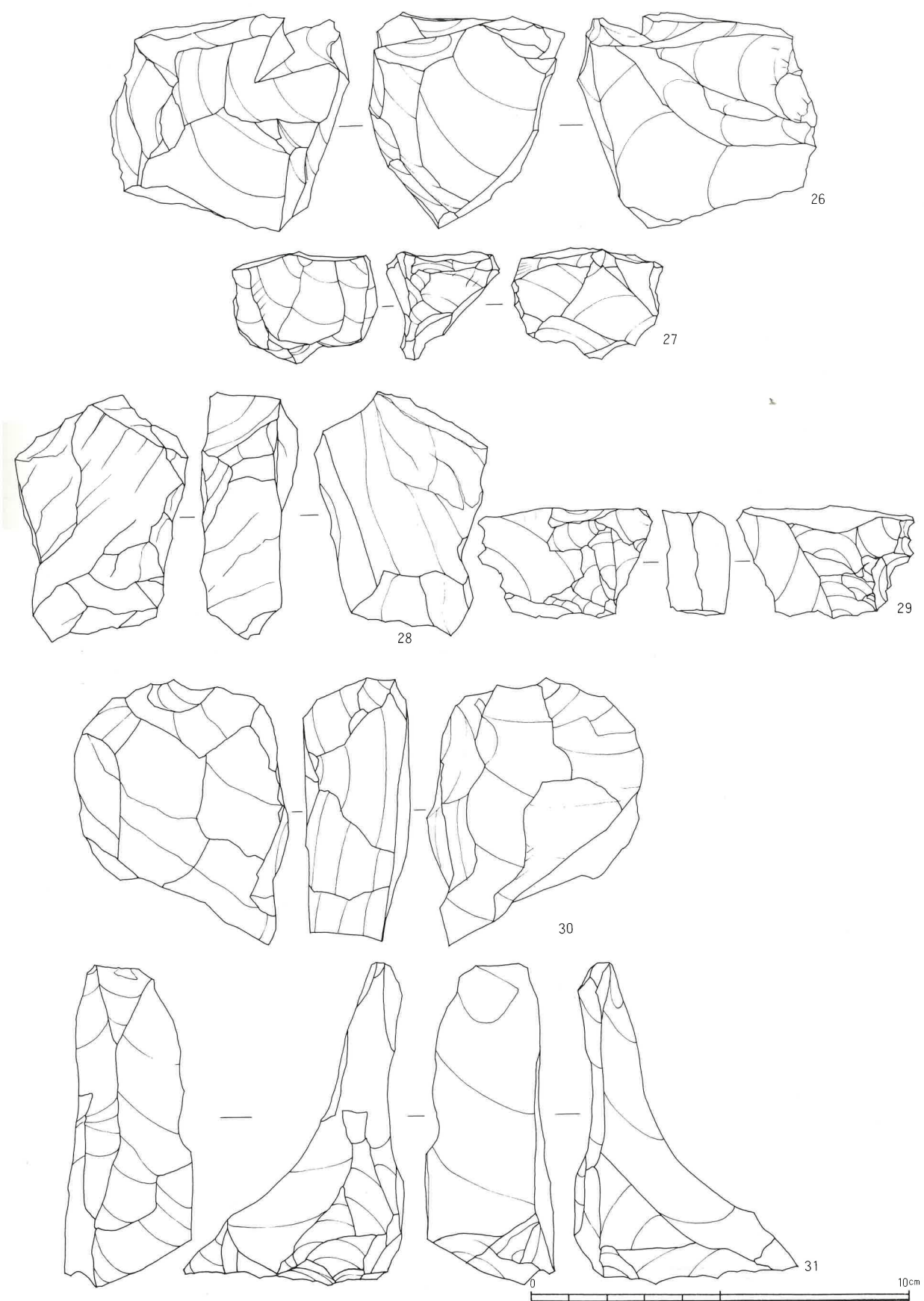
第17表 石器組成表
() 内は接合資料



第61図 石器ブロック3の遺物分布



第62図 旧石器実測図(3)



第63図 旧石器実測図(4)

4、石器ブロック4

石器ブロック4はE-1グリッドに位置しブロックの南東部に集石遺構が検出された。石器は総点数31点で、その内訳は、流紋岩が27点、サヌカイトが4点である。流紋岩は87%を占める。石器の内訳は、ナイフ形石器が3点であとは剥片および碎片であった。

ナイフ形石器（34～36）

いずれも縦長剥片を素材としている。3点とも2側縁加工である。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
34	E1-31	k n i	6.3	2.3	0.9	10.3
35	E1-32	k n i	5.3	1.9	0.8	5.8
36	E1-37	k n i	5.7	1.9	0.8	7.0
37	E1-26	f	5.1	2.6	2.1	13.6
38	E1-17	f	6.4	5.1	1.4	36.5
39	E1-24	f	7.1	6.6	1.8	52.9

第18表 ブロック4の主要石器計測表

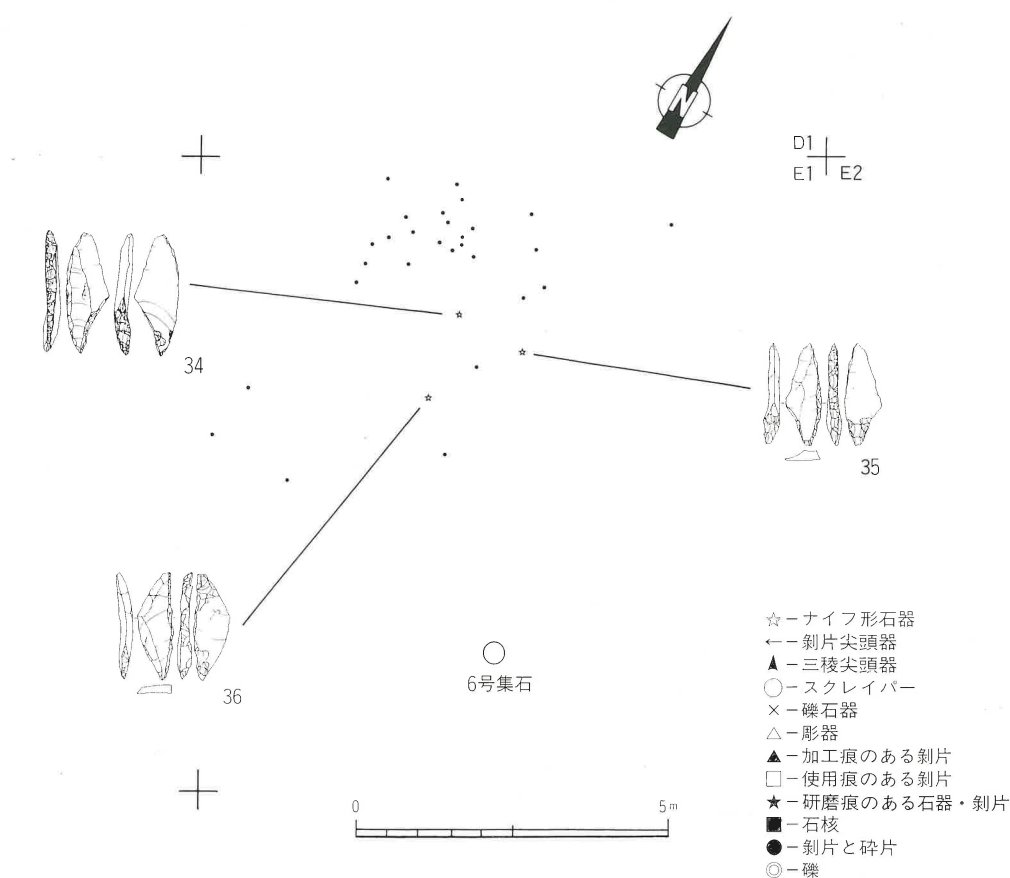
※ k n i ナイフ形石器
f 剥片

石 材	個数	類 別	個数
流紋岩	27	f	11
サヌカイト	4	u f	0
		c h	17
		s c	0
		k n i	3
t o t a l	31	t o t a l	31

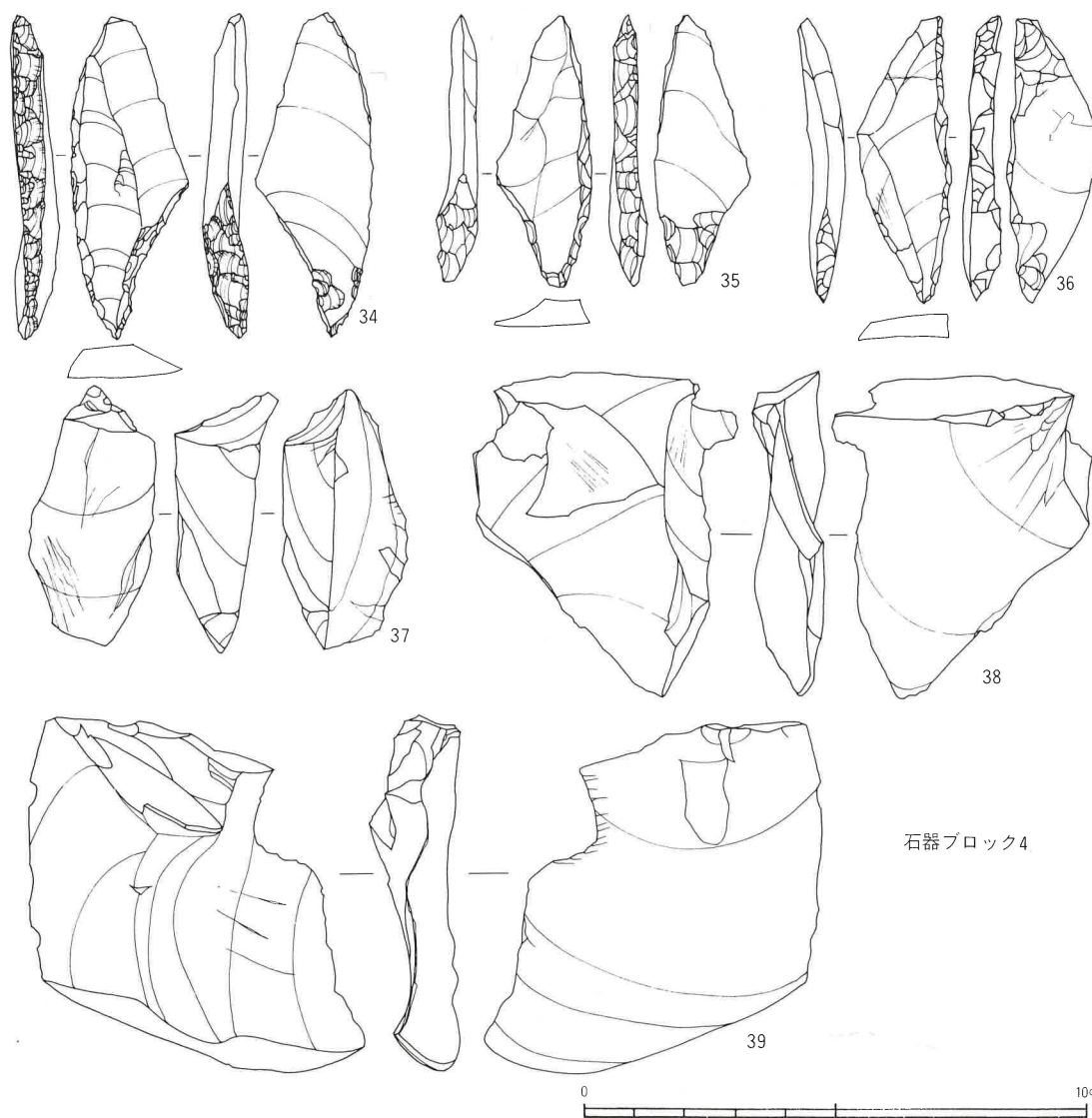
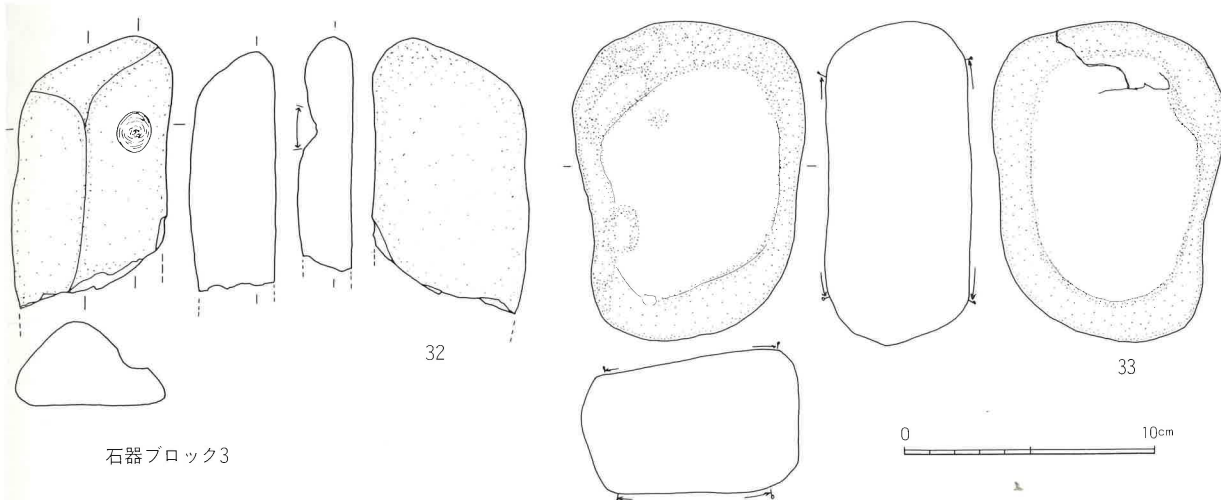
第19表 石材組成表

第20表 石器組成表

() 内は接合資料



第64図 石器ブロック4の遺物分布



第65図 旧石器実測図(5)

6, 石器ブロック 5

C-2 グリッドのほぼ中央部にある。ブロックの規模は小規模で総点数はわずかに10点を数えるのみである。石材の内訳は流紋岩が8点、安山岩が2点である。石器はナイフ形石器が1点、磨石が2点で残りは剥片および

ナイフ形石器 (40)

翼状剥片を素材とした、いわゆる国府型ナイフ形石器である。

礫石器 (41~42)

安山岩の偏平な礫を用い、両面に使用痕が観察される。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
40	C2-13	k n i	5.3	1.8	1.3	7.4
41	C2-11	磨石	15.0	8.2	1.7	265
42	C2-10	磨石	21.0	13.3	4.8	1567

第21表 ブロック 5 の主要石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器

石 材	個数
流紋岩	8
安山岩	2
t o t a l	10

第22表 石材組成表

類 別	個数
f u f c h h s k n i	3 0 4 2 1
t o t a l	10

第23表 石器組成表

6, 石器ブロック 6

石器ブロック 6 は、B-3・C-3 グリッド北東部にある。範囲はあまり広がらず、遺物の量も少ない。総点数17点で石材の内訳は、流紋岩が12点、安山岩が5点であった。このうち石器は、ナイフ形石器が1点、剥片尖頭器が1点、三稜尖頭器が1点で、残りは剥片および

剥片尖頭器 (43)

流紋岩の縦長剥片を素材としたもので、先端部が欠損している。基部も若干欠損している。

三稜尖頭器 (44)

流紋岩の縦長剥片を素材として、1面のみを細かい加工を施している。

ナイフ形石器 (45)

流紋岩の横長剥片を素材として、2側縁にブランディングを施す。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
43	B3-5	剥片 p	3.7	2.5	1.0	8.7
44	C3-78	三稜 p	7.3	1.5	1.5	9.0
45	B3-4	k n i	4.4	1.6	0.9	4.4

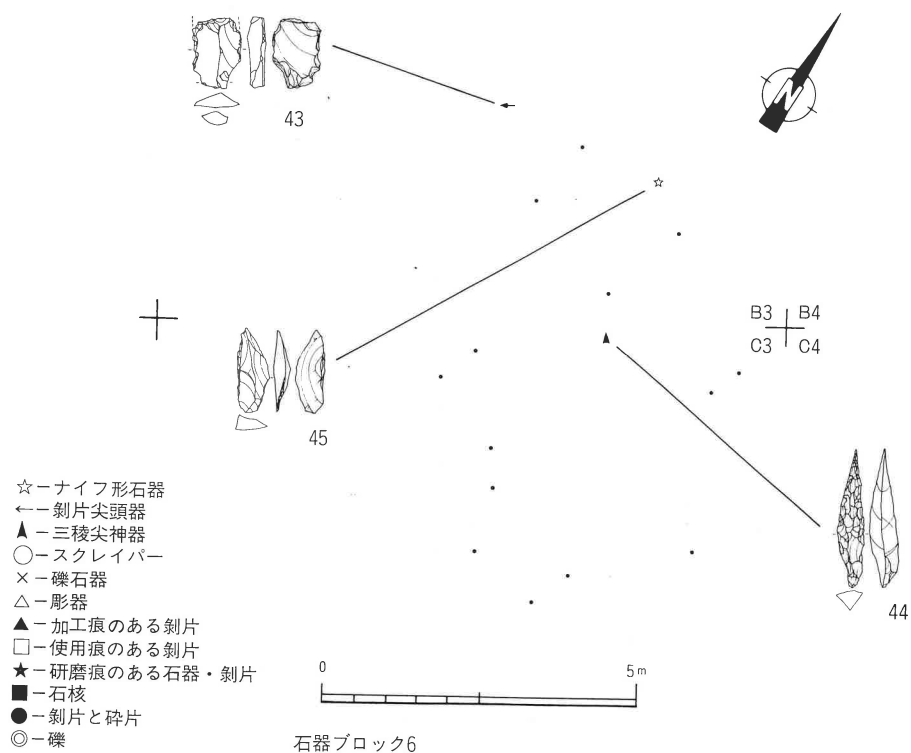
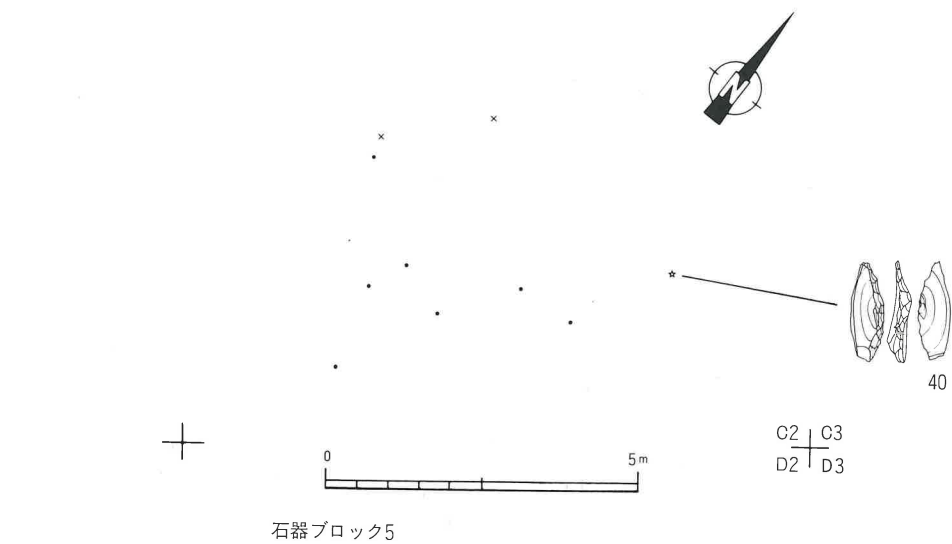
第24表 ブロック 6 の主要石器計測表 ※剥片 p 剥片尖頭器
三稜 p 三稜尖頭器
k n i ナイフ形石器

石 材	個数
流紋岩	12
安山岩	5
t o t a l	17

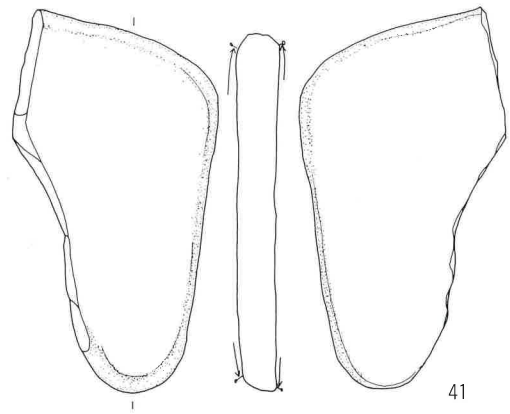
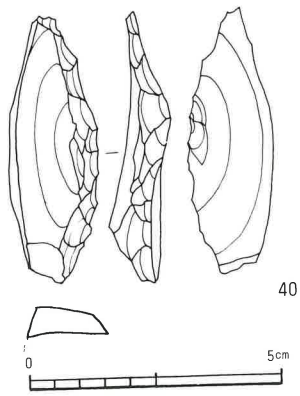
第25表 石材組成表

類 別	個数
f c h k n i p	6 8 1 2
t o t a l	17

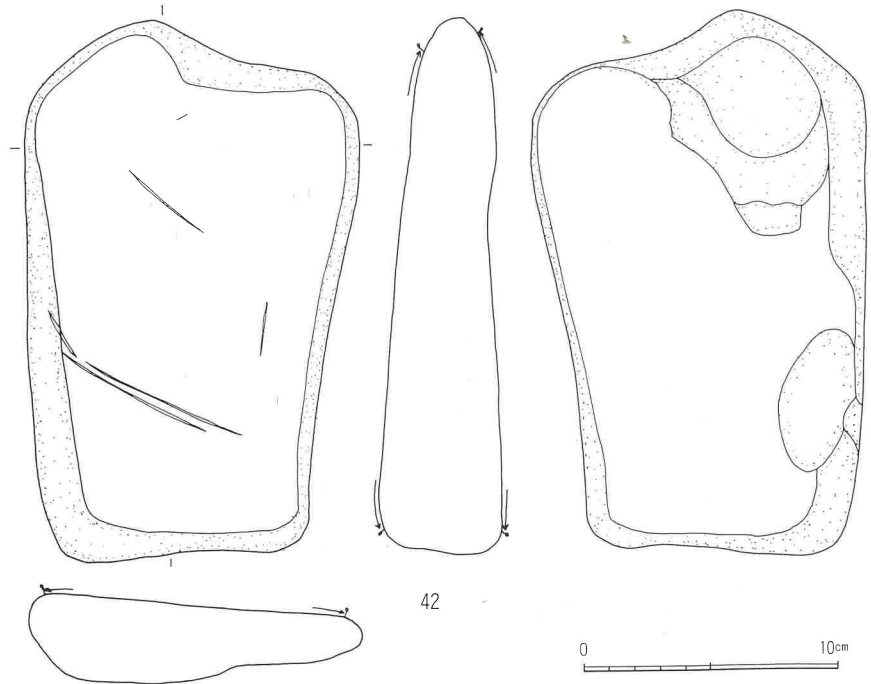
第26表 石器組成表



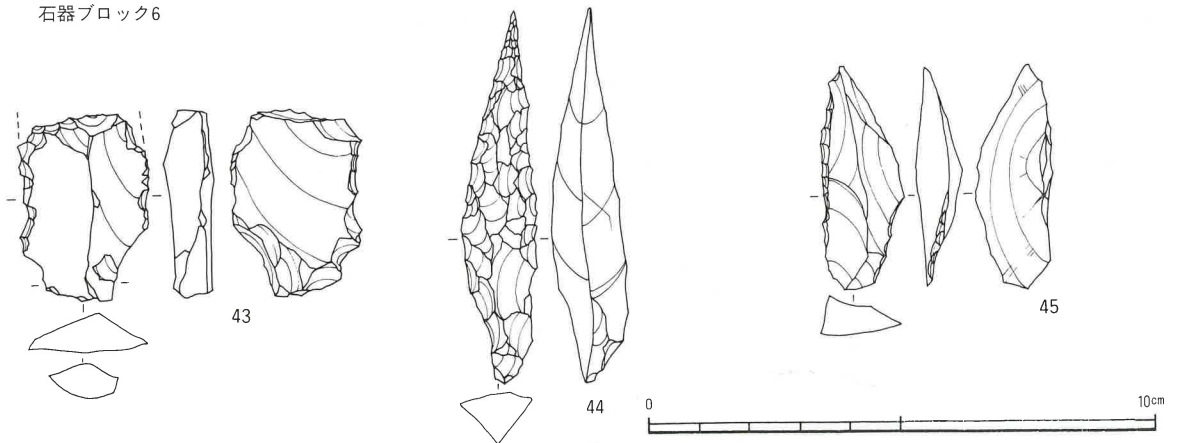
第66図 石器ブロック5・6の遺物分布



石器ブロック5



石器ブロック6



第67図 旧石器実測図(6)

7、石器ブロック7

石器ブロック7はC-3・D-3グリッドにまたがり、かなり広い範囲に遺物が分布する。特にブロック西部に遺物の集中が見られ、そこに集石遺構も検出された。総点数は88点で、流紋岩が77点、サヌカイトが5点、安山岩が6点であった。流紋岩が占める割合は87.5%を占める。石器の内訳は、ナイフ形石器が3点、二次加工剥片が1点、石核が2点、敲石が1点で残りは剥片および碎片類であった。

ナイフ形石器（46～48）

46は流紋岩の縦長で断面三角形の剥片を素材として、剥片の背面に加工を施している。47は横長剥片を素材として、打面側にブランディングを施している。48は、小型の切り出し状のナイフ形石器で、縦長剥片を素材としている。

二次加工のある剥片（49）

流紋岩の剥片を使用している。両面から加工を施し、尖頭状の器形をもつ。三稜尖頭器の未製品か？

石核（57～58）

57は一応石核としたが、やや疑問が残る。58は残核である。

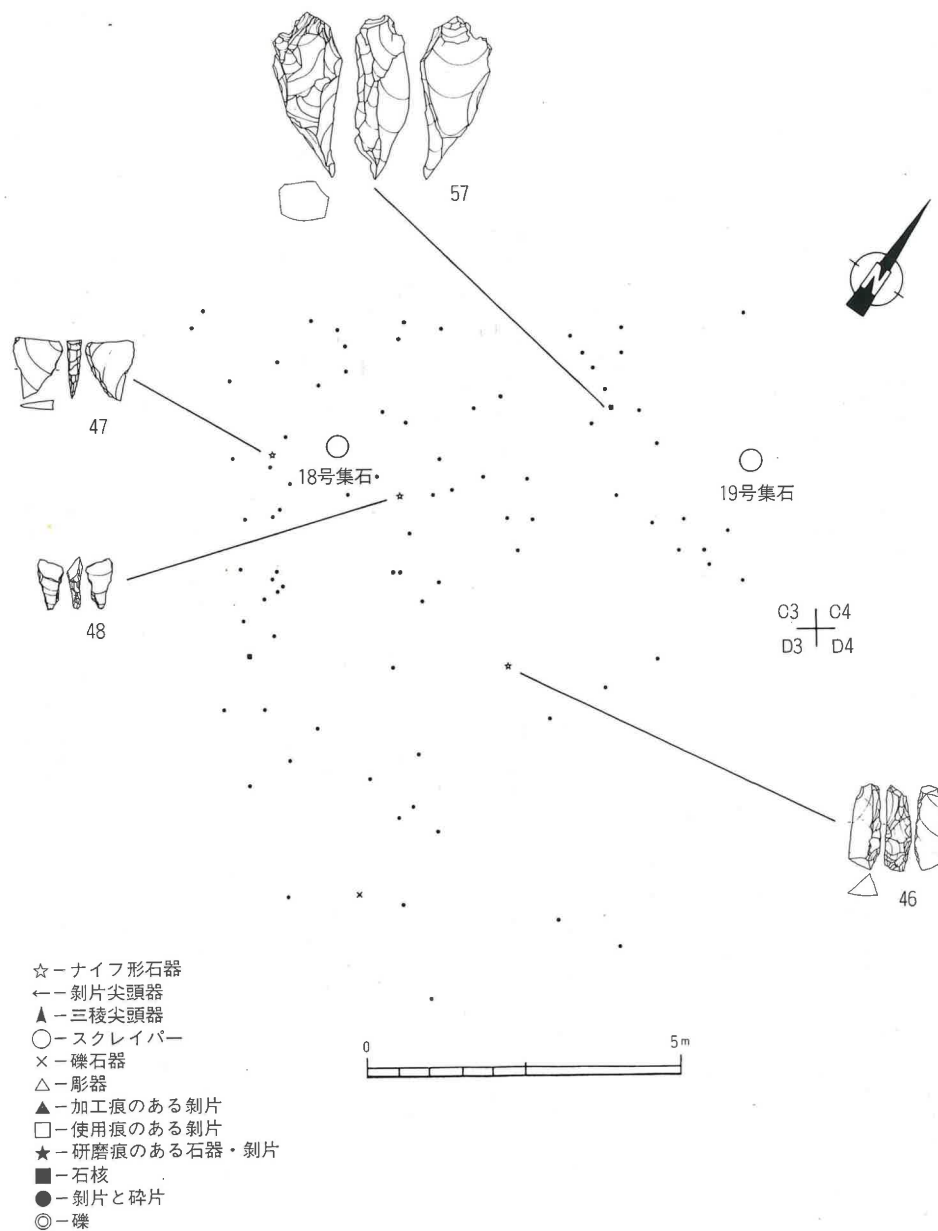
敲石（59）

安山岩の偏平な円礫の両端部を使用している。

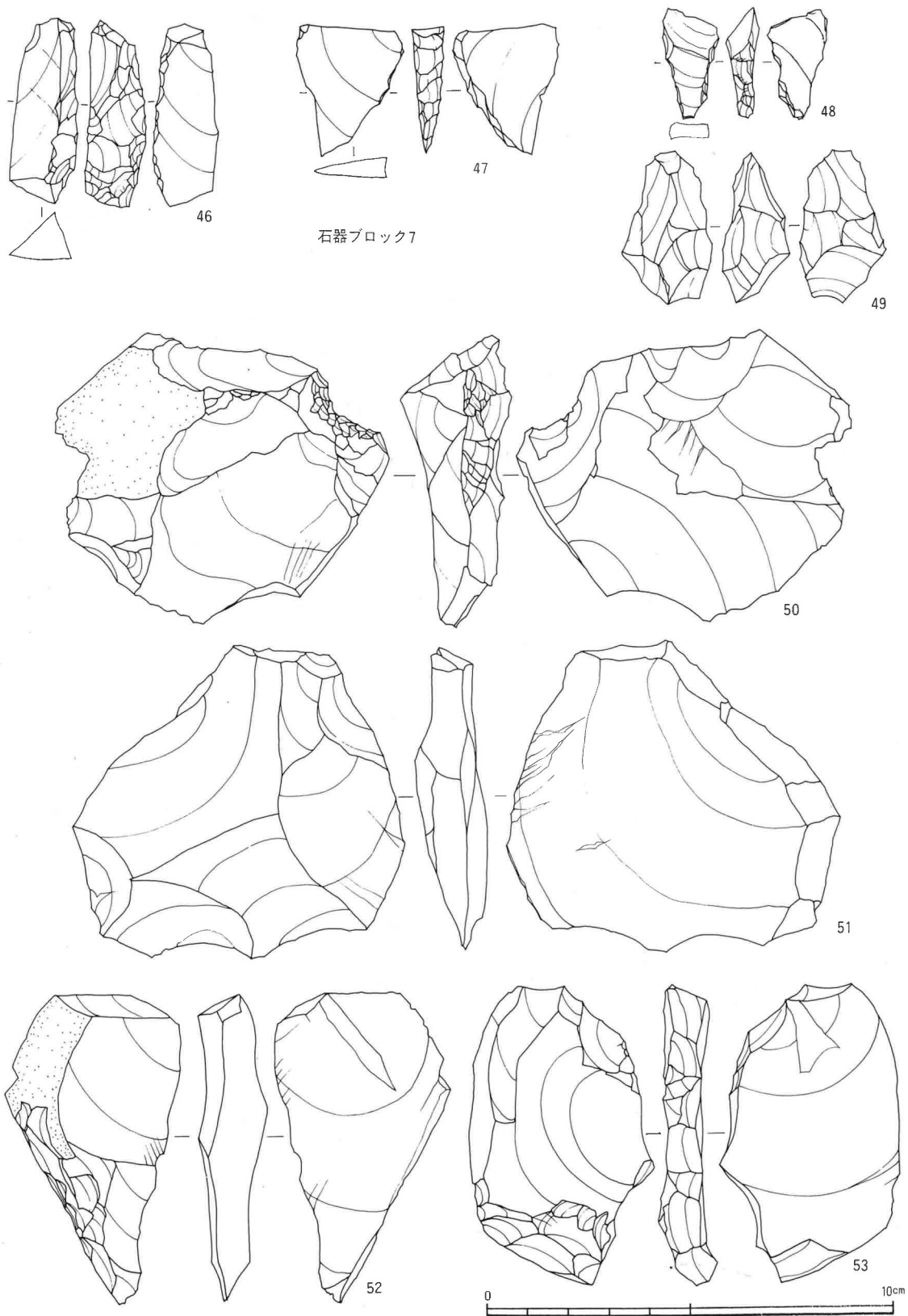
挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石 材	個数	類 別	個数
46	D3-13	k n i	4.5	1.6	1.5	10.5	流紋岩	77	f	28
47	C3-103	k n i	3.2	2.7	0.7	4.8	サヌカイト	5	u f	0
48	C3-111	k n i	2.7	1.4	0.9	2.6	チャート	0	c h	52
49	D3-10	r f	3.7	2.2	1.6	8.7	黒曜石	0	s c	0
50	C3-60	f	7.2	8.1	2.8	109	頁岩	0	k n i	3
51	C3-15	f	7.5	8.2	1.7	85.3	石英	0	p	0
52	D3-9	f	7.5	4.4	1.7	33.8	安山岩	6	c	1
53	D3-6	f	7.3	4.6	1.4	36.8			r f	1
54	D3-20	f	6.7	2.8	2.3	25.7			h s	1
55	C3-45	f	3.3	4.2	0.9	9.5	t o t a l	88	t o t a l	88
56	D3-21	f	4.2	2.4	1.0	7.1	第28表 石材組成表		第29表 石器組成表	
57	C3-40	f	8.7	3.7	2.7	26.4				
58	D3-28	c	4.8	3.0	2.7	82.7				
59	D3-12	敲石	9.0	4.2	2.4	452				

第27表 ブロック7の主要石器計測表

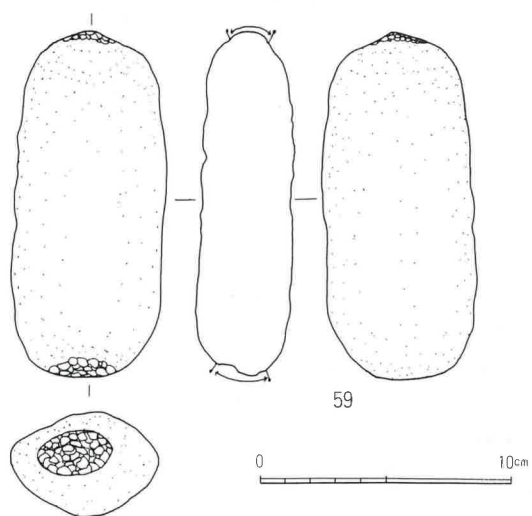
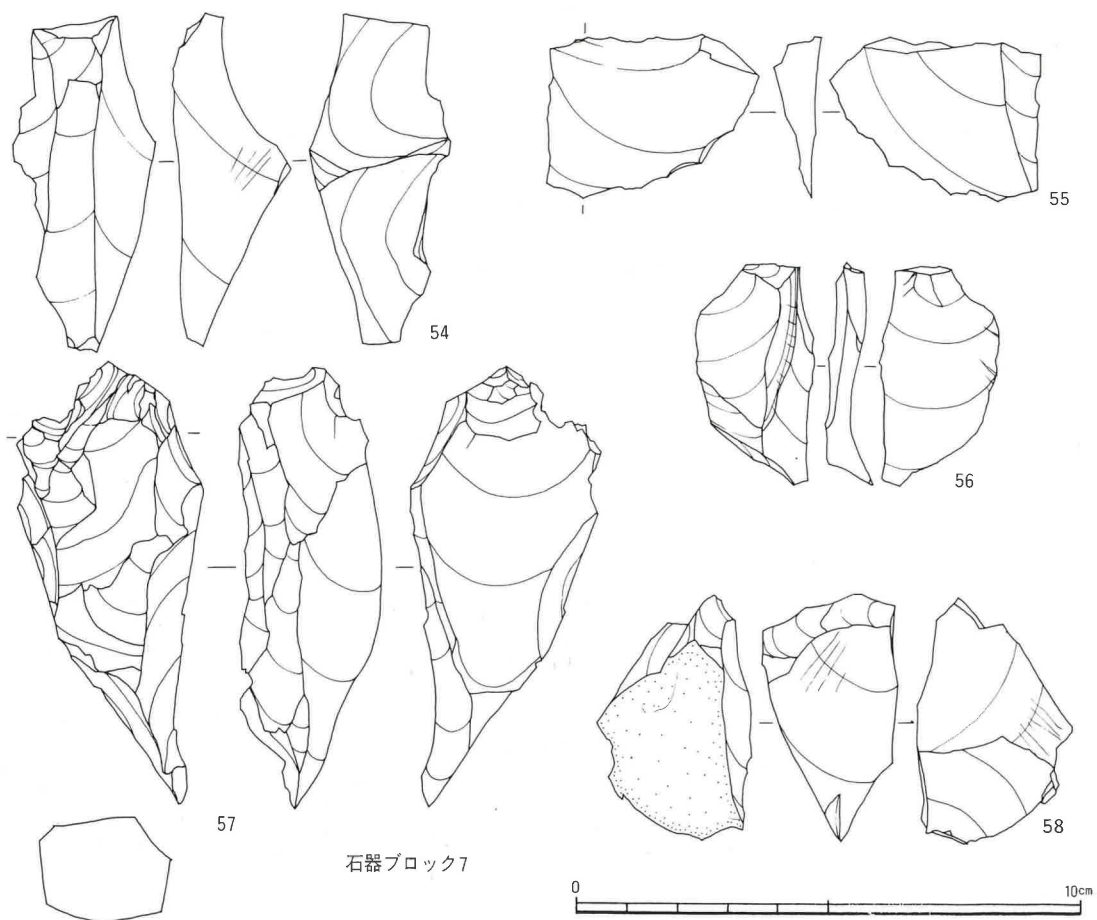
※ k n i ナイフ形石器 f 剥片
r f 二次加工剥片 c 石核



第68図 石器ブロック1の遺物分布



第69図 旧石器実測図(7)



第70図 旧石器実測図(8)

石器ブロック 8

ブロック 8 は、D-2・E-2 グリッドにまたがって広がる。遺物は北西部に集中し、集石遺構がここで検出されている。遺物は 29 点でそのうち石材の内訳は流紋岩が 24 点、安山岩が 3 点である。そのうち石器はナイフ形石器が 4 点で残りは剥片および碎片であった。

ナイフ形石器 (60~63)

60 は断面三角形の縦長剥片を素材として、打面側にブランディングを施す。61 は縦長剥片を素材として、打面側にブランディングを施す 1 側縁加工のナイフ形石器である。62 は小型の切り出し状のナイフ形石器、63 は 2 側縁加工のナイフ形石器とともに縦長剥片を素材としている。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
60	D2-8	k n i	5.5	2.1	1.8	14.7
61	E2-28	k n i	5.6	2.1	2.1	0.8
62	D2-25	k n i	2.8	1.3	1.3	0.5
63	D2-10	k n i	3.6	1.9	1.9	0.7
64	D2-17	f	4.9	3.0	3.0	1.3
65	E2-12	f	6.1	4.6	4.6	2.2

第30表 ブロック 8 の主要石器計測表

※ k n i ナイフ形石器
f 剥片

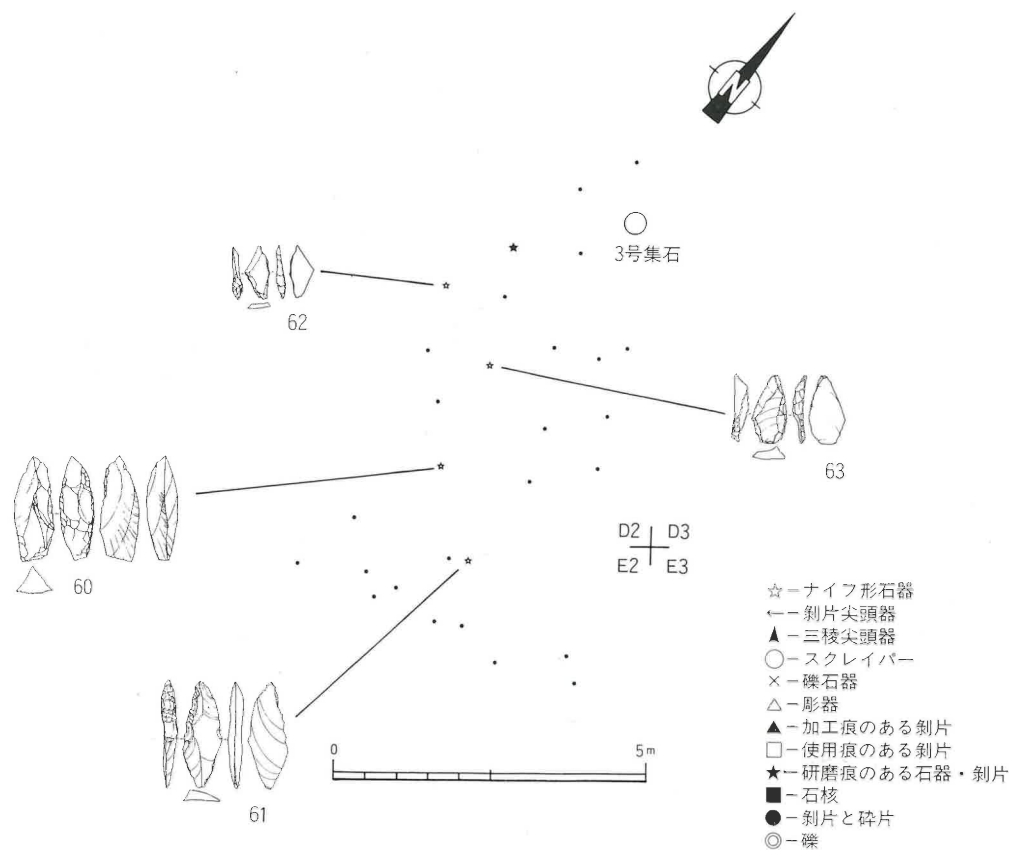
石 材	個数
流紋岩	24
安山岩	5
t o t a l	29

第31表 石材組成表

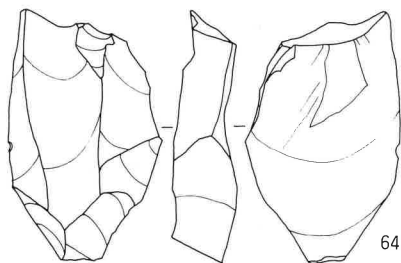
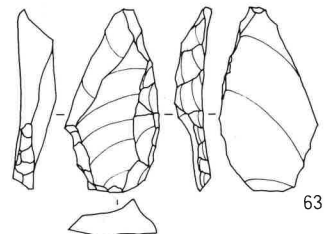
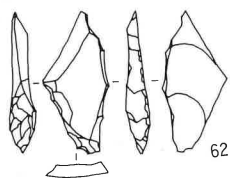
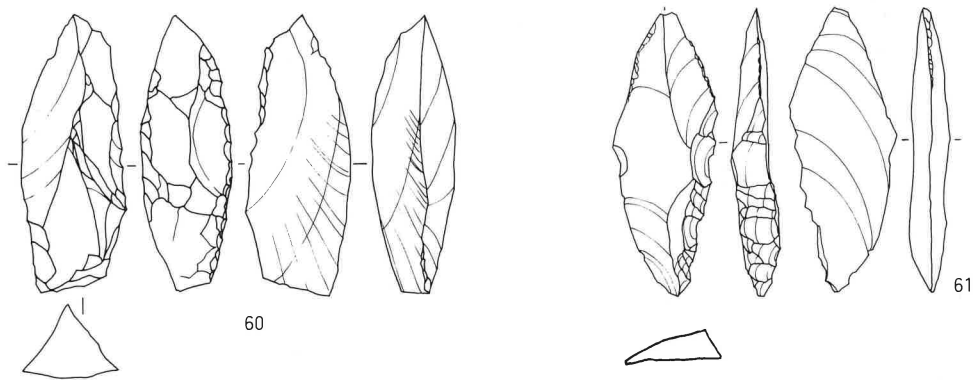
類 別	個数
f	8
c h	11
k n i	4
磨製石器	1
t o t a l	29

第32表 石器組成表

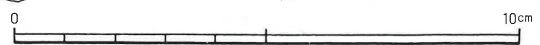
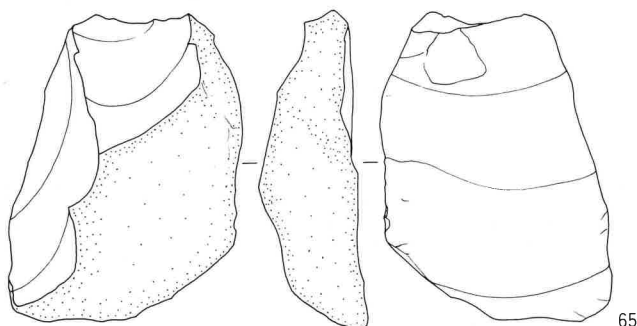
() 内は接合資料



第71図 石器ブロック 8 の遺物分布



石器ブロック
8



第72図 旧石器実測図(9)

9, 石器ブロック9

ブロック9はE-2グリッドにありブロック8とブロック10にはさまれたコンパクトなブロックである。遺物の出土も少なく、10点を数えるのみである。石材の内訳は、流紋岩が7点、安山岩が3点である。このうち石器はスクレイパーが1点、使用痕のある剥片が1点で残りは剥片である。

使用痕のある剥片 (66)

流紋岩の縦長剥片を素材とし、一部に使用痕が認められる。

スクレイパー (67)

流紋岩の縦長剥片を素材として、打面部を除いてほぼ全周に加工を施す。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
66	E2-36	u f	5.3	1.6	0.6	3.9
67	E2-34	s c	3.4	2.1	1.0	5.9

第33表 ブロック9の主要石器計測表

※ s c スクレイパー
u f 使用痕のある剥片

石 材	個数
流紋岩	7
安山岩	3
t o t a l	10

第34表 石材組成表

類 別	個数
f	3
u f	1
c h	5
s c	1
t o t a l	10

第35表 石器組成表

10, 石器ブロック10

ブロック10はE-2グリッド南西部にある。このブロックもあまり広い範囲には広がらない。石器の総点数は32点で石材の内訳は、流紋岩が28点、安山岩が4点である。石器はナイフ形石器が2点で残りは剥片と碎片である。

ナイフ形石器 (68~69)

68は流紋岩の縦長剥片を素材とし、2側縁を加工している。69は不定形な剥片の一部にブランディングを施す。

石核 (73)

器体中心に向かって縦長剥片と不定形剥片を剥離している。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
68	E2-54	k n i	4.0	1.8	0.8	4.2
69	E2-14	k n i	3.1	1.5	0.7	2.5
70	E2-44	f	6.2	2.9	1.0	17.6
71	E2-4	f	5.2	3.2	1.0	13.4
72	E2-15	f	6.9	5.0	1.9	54.2
73	E2-17	c	3.0	5.6	4.7	70.2

第36表 ブロック10の主要石器計測表

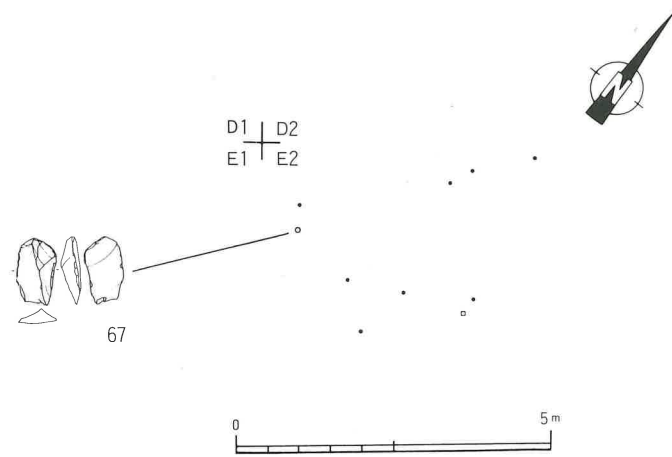
※ k n i ナイフ形石器
c 石核
f 剥片

石 材	個数
流紋岩	28
安山岩	4
t o t a l	32

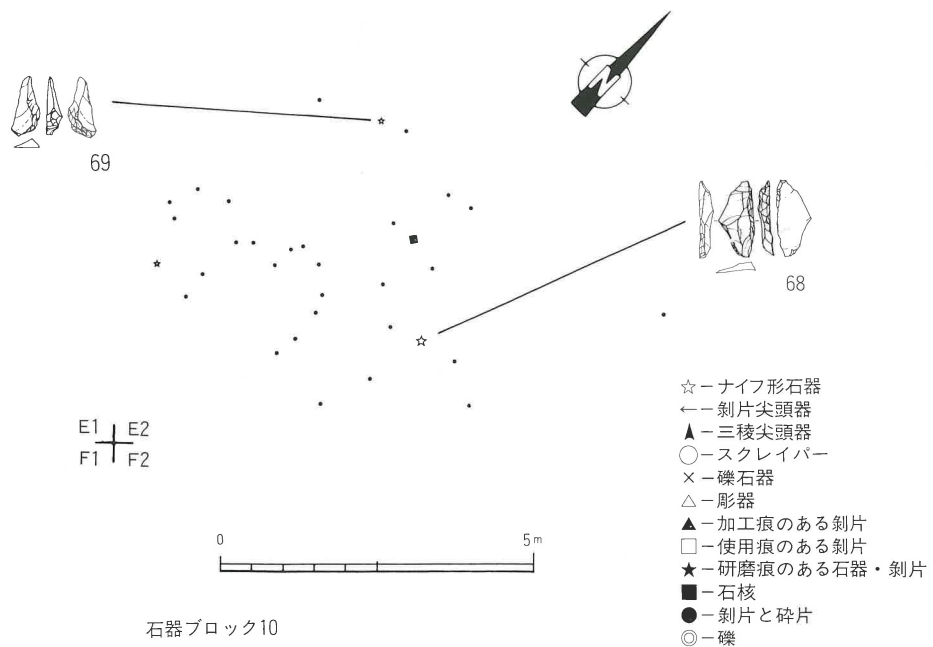
第37表 石材組成表

類 別	個数
f	5(4)
c h	20
k n i	2
c	1
t o t a l	28(4)

第38表 石器組成表
() 内は接合資料

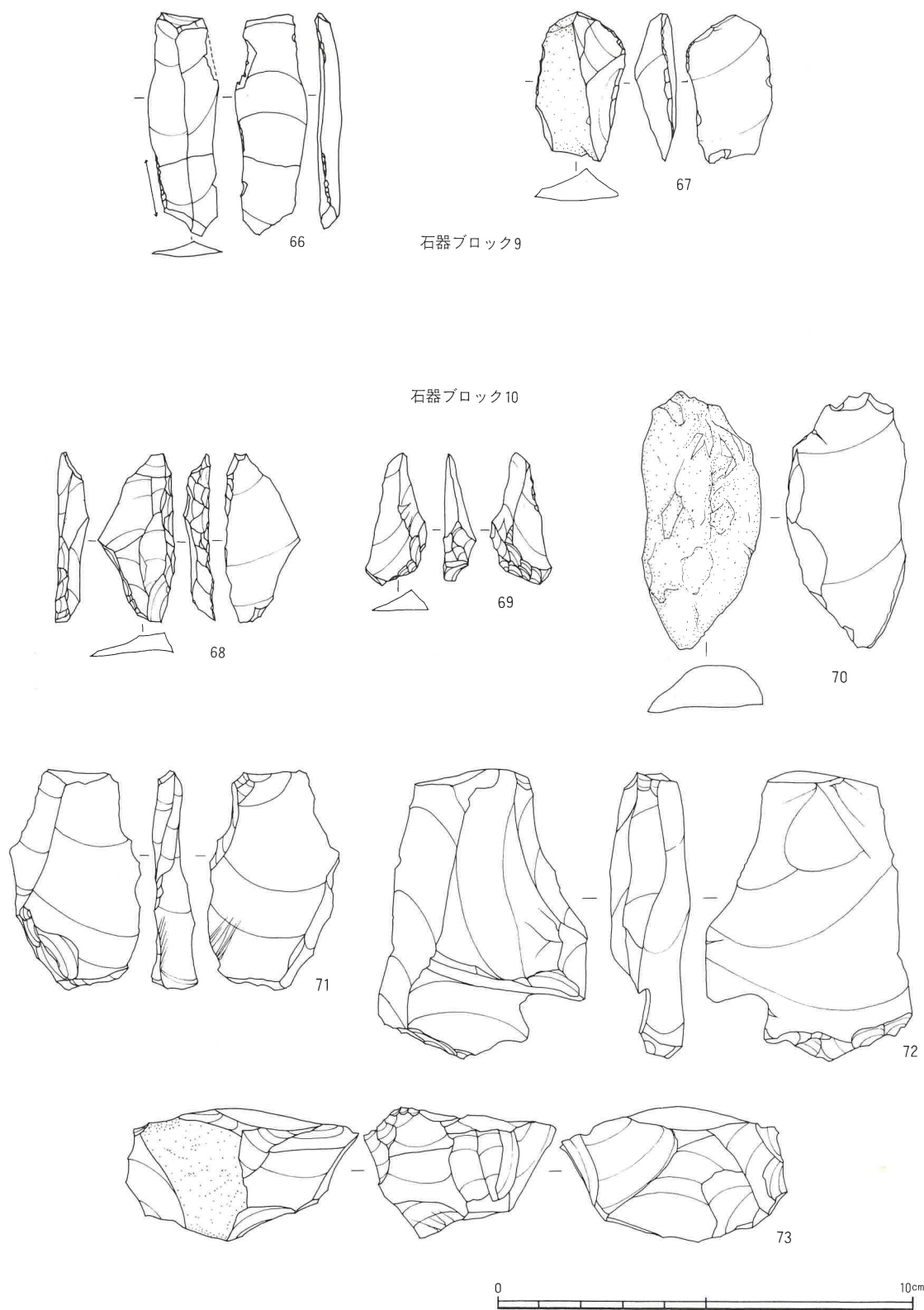


石器ブロック9



石器ブロック10

第73図 石器ブロック9・10の遺物分布



第74図 旧石器実測図(10)

11, 石器ブロック11

ブロック11は主にE-3グリッドに広がり、遺物の分布も広範囲に及ぶ。ブロックの中央部および西部に遺物の集中部が見られ、総点数は62点に及ぶ。石材は流紋岩が46点、サヌカイトが5点、安山岩が11点を数える。このうち石器はナイフ形石器が2点、三稜尖頭器が4点、石核が3点で残りは剥片および碎片類である。

三稜尖頭器 (74~77)

74は流紋岩の横長剥片を素材として、主要剥離面を除く2面に加工を施す。76~77は3面加工である。

ナイフ形石器 (78~79)

78は切り出し状のナイフ形石器。79は縦長剥片を素材として2側縁に加工を施す。

石核 (84~86)

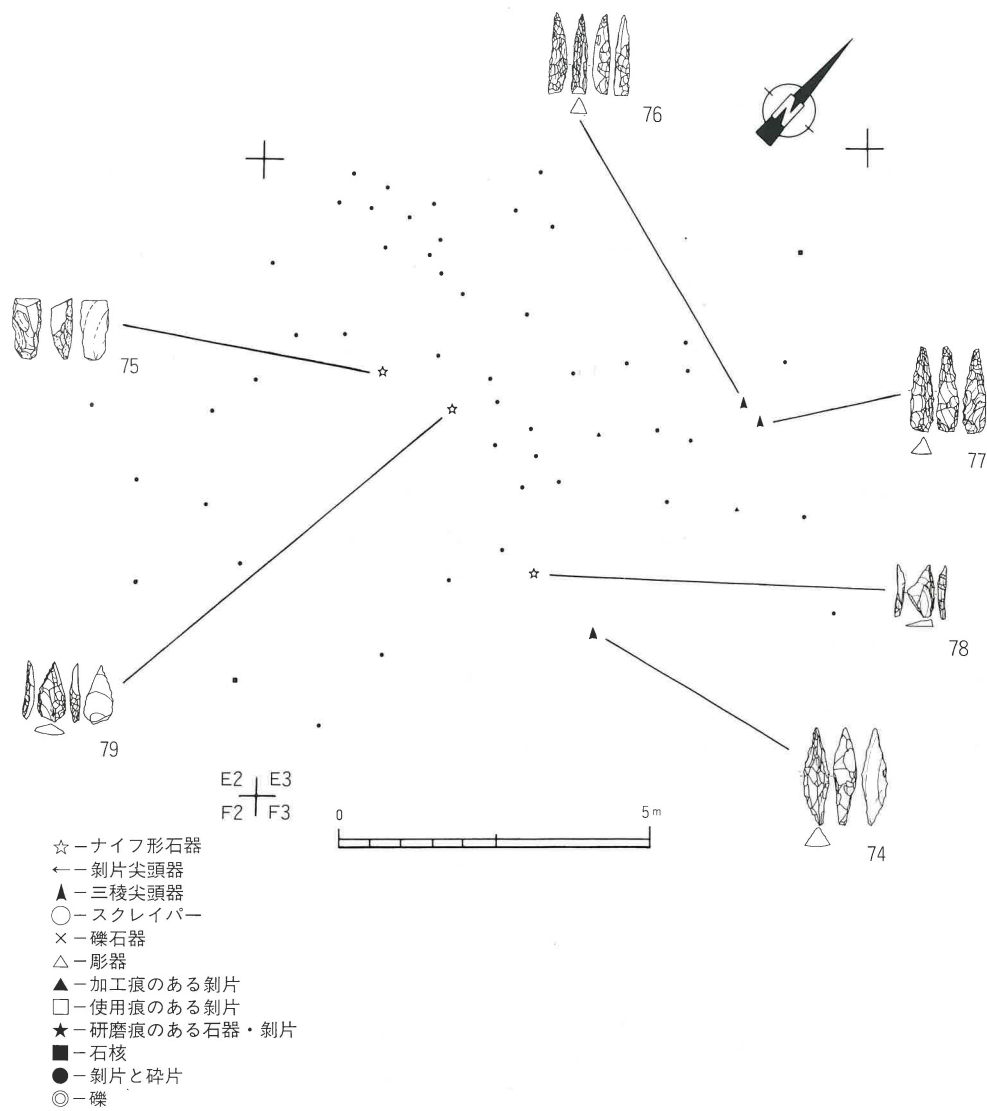
84は、小型の横長剥片を剥離したもの。85~86は不定形な剥片を剥離したものである。86は姫島産黒曜石を用いたもので、打面を90度回転させて剥片を剥離している。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石 材	個数	類 別	個数
74	E3-14	三稜 p	5.0	1.3	1.2	6.1	流紋岩	45	f	15(4)
75	E3-8	三稜 p	3.2	2.1	1.1	6.7	サヌカイト	5	u f	0
76	E3-25	三稜 p	4.2	1.0	0.9	5.3	チャート	0	c h	34
77	E3-26	三稜 p	4.4	1.0	1.2	3.3	黒曜石	1	s c	0
78	E3-57	k n i	2.7	1.4	0.5	1.2	頁岩	0	k n i	2
79	E3-52	k n i	3.1	1.5	0.6	2.3	石英	0	p	4
80	E2-8	f	7.3	4.2	1.7	47.6	安山岩	11	c	3
81	E3-11	f	4.8	3.0	1.1	12.5			r f	0
82	E3-15	f	5.2	4.7	1.5	23.7			h s	0
83	E3-31	f	5.5	3.2	1.5	37.2				
84	E3-22	c	6.7	2.6	2.8	38.8				
85	E2-1	c	6.5	4.2	3.1	86.3				
86	E3-4	c	4.8	6.3	3.9	107				
							t o t a l	62	t o t a l	58(4)

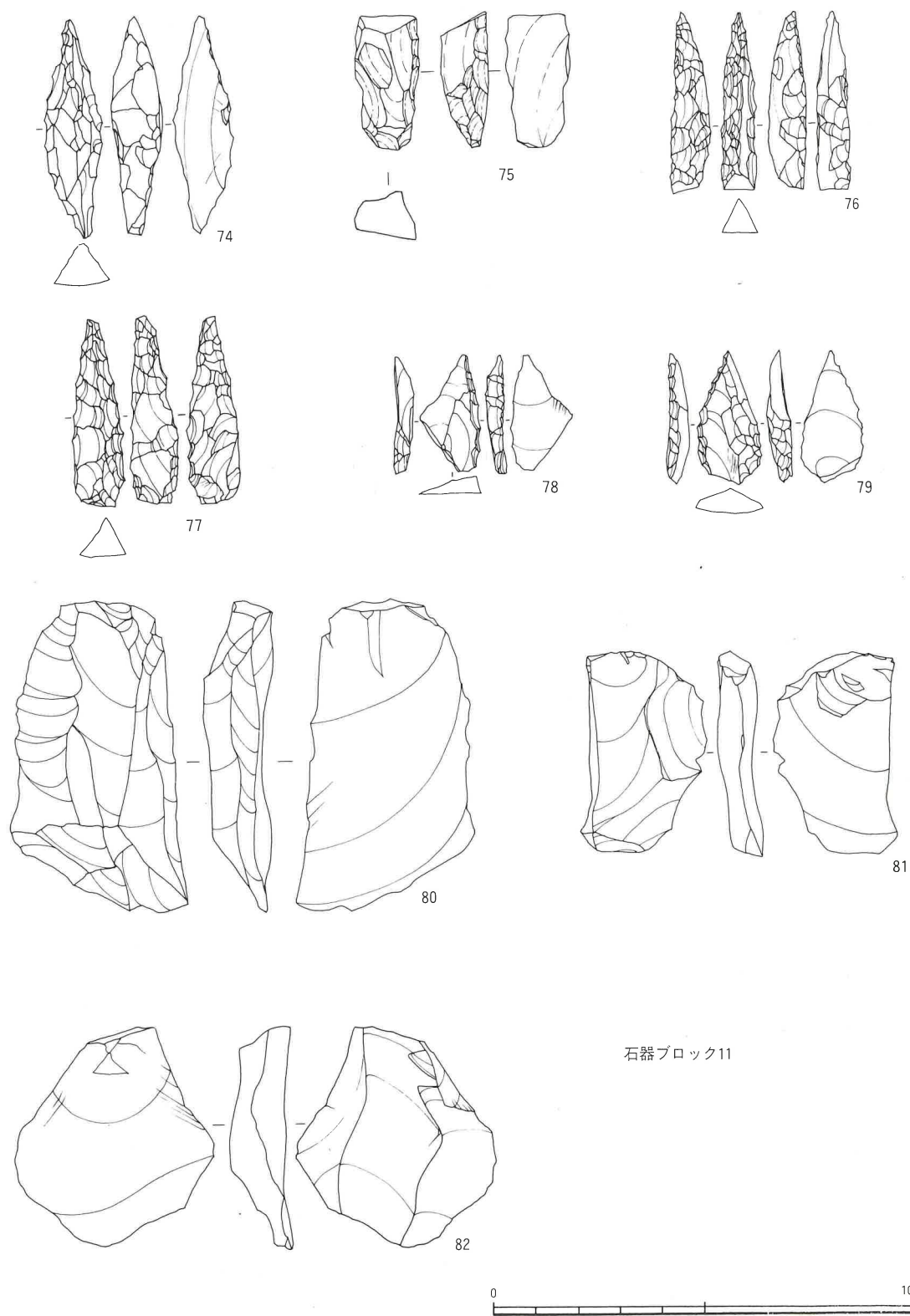
第39表 ブロック11の主要石器計測表 ※三稜 p 三稜尖頭器 f 剥片
k n i ナイフ形石器 c 石核

第40表 石材組成表

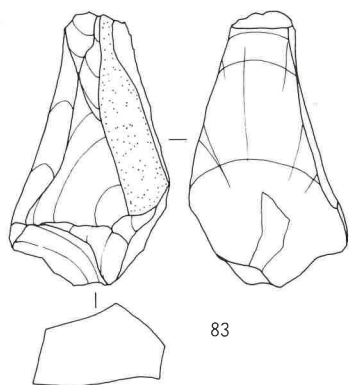
第41表 石器組成表
() 内は接合資料



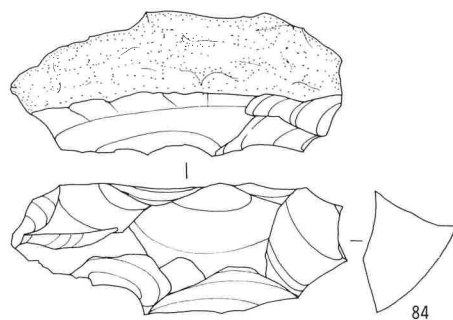
第75図 石器ブロック11の遺物分布



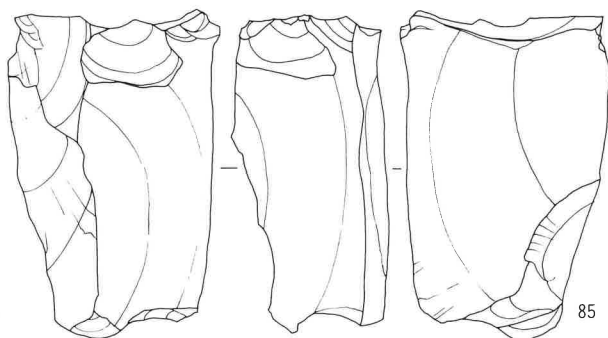
第76図 旧石器実測図(11)



83

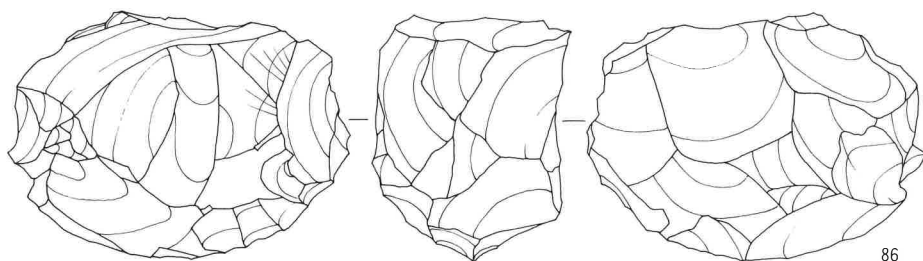


84



85

石器
ブロック
11



86



第77図 旧石器実測図(12)

12, 石器ブロック12

ブロック12はE-4グリッドを中心に一部F-4グリッドにも広がる。特に目立つ遺物の集中部分は見られず、まんべんなく広がる。集石遺構は南端部分で検出されている。遺物の総点数は46点で石材の内訳は流紋岩が39点、サヌカイト1点、安山岩6点であった。流紋岩は85%を占める。このうち石器はナイフ形石器が1点、磨製石器が1点、残りは剥片および碎片類であった。

ナイフ形石器 (87)

流紋岩の横長剥片を素材として、打面側にブランディングを施す。1側縁加工である。

使用痕のある剥片 (88)

不整形な剥片の1側縁を1面からのみ二次加工を施す。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
87	F4-26	k n i	3.9	2.3	1.1	8.4
88	E4-30	u f	6.0	5.0	1.9	49.9
89	F4-7	f	6.7	2.5	1.9	18.5
90	F4-6	f	5.4	2.4	2.6	27.3
91	E4-15	f	7.5	4.3	1.5	66.4

第42表 ブロック12の主要石器計測表

※ k n i ナイフ形石器
u f 使用痕のある剥片
f 剥片

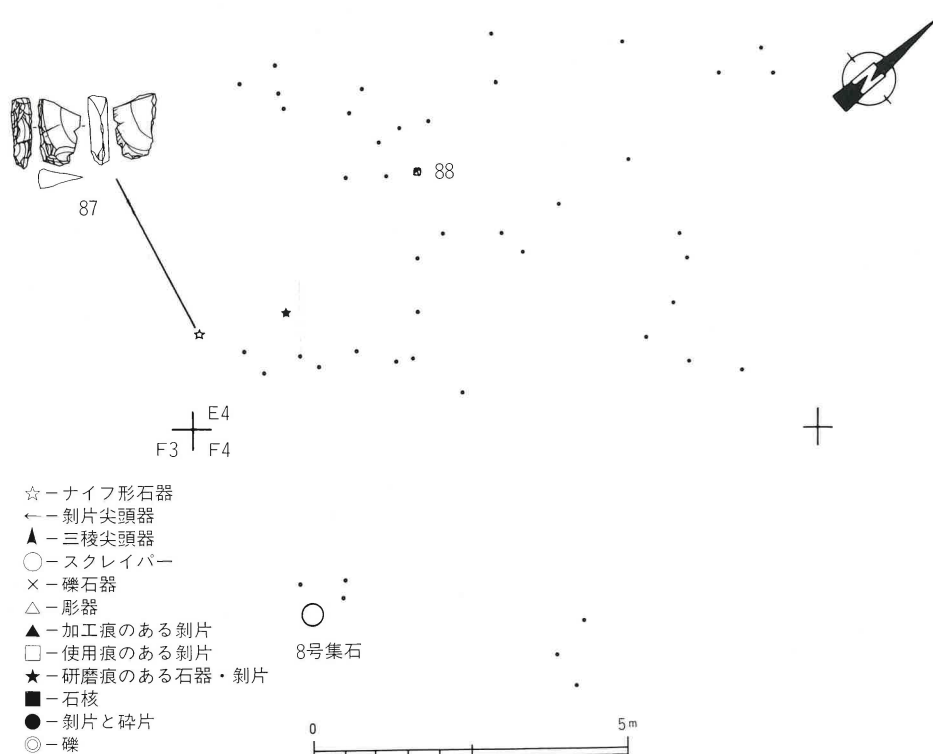
石 材	個数
流紋岩	40
サヌカイト	1
安山岩	6
t o t a l	46

第43表 石材組成表

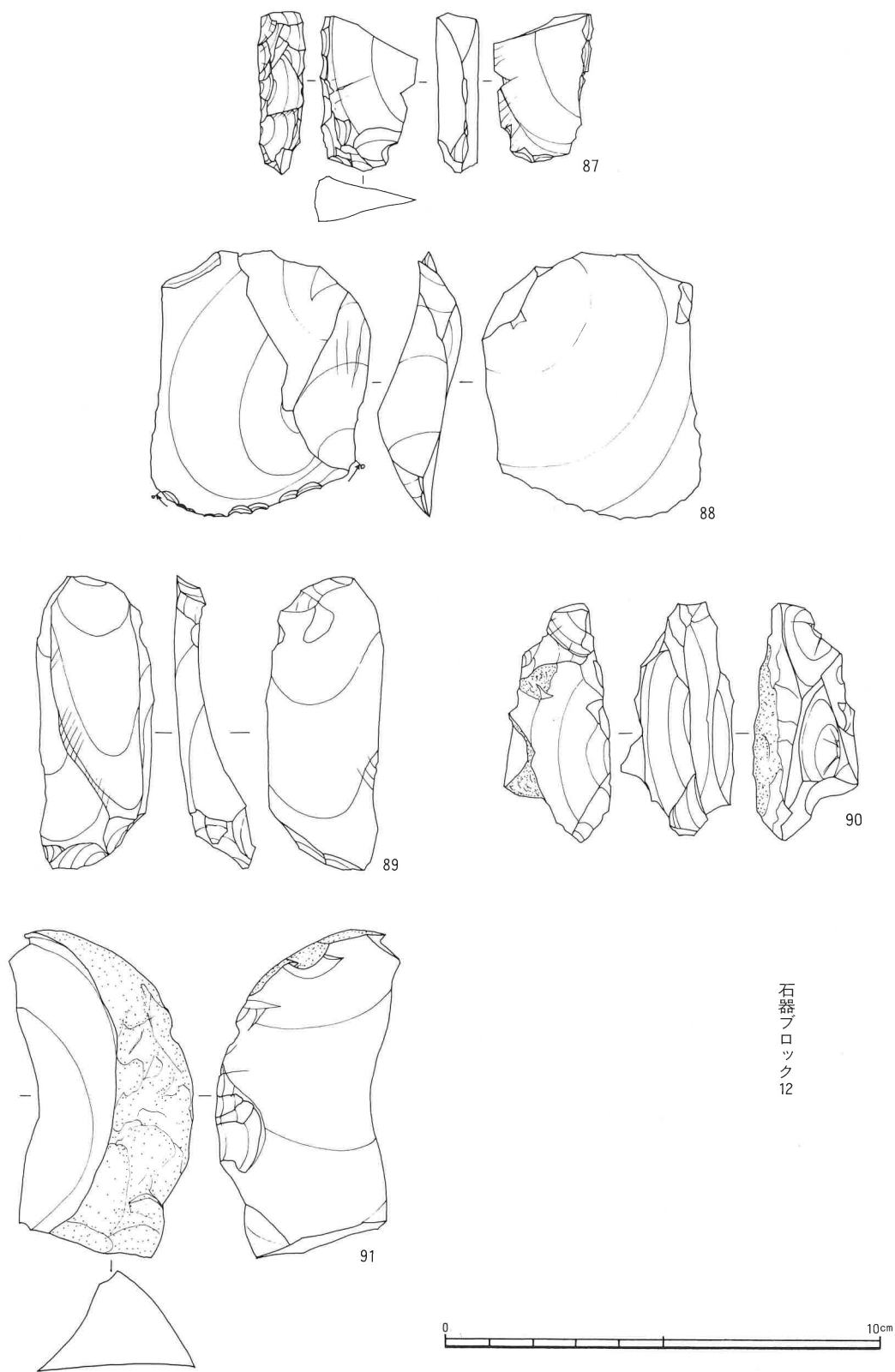
類 別	個数
f	12(2)
u f	1
c h	29
k n i	1
c	(1)
磨製石器	1
t o t a l	44(3)

第44表 石器組成表

() 内は接合資料



第78図 石器ブロック12の遺物分布



第79図 旧石器実測図(13)

13, 石器ブロック13

ブロック13はD-4 グリッドにある。遺物の分布は北西部と南東部にそれぞれ集中が見られる。集石遺構もそれぞれの集中部において検出された。石材は、流紋岩が21点、安山岩が8点である。このうち石器はナイフ形石器が3点で残りは剥片および碎片であった。

ナイフ形石器 (92~94)

92は、縦長剥片を素材として、ほぼ全周にわたって加工を施す。93は縦長剥片使用で2側縁加工、94は横長剥片使用の1側縁加工のナイフ形石器である。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石 材	個数	類 別	個数
92	D4-1	k n i	5.5	2.6	1.6	15.1	流紋岩 安山岩	21 8	f	9
93	D4-32	k n i	5.4	2.0	1.3	10.3			c h	9
94	D4-18	k n i	4.8	2.5	0.9	9.4			k n i	3
95	D4-13	f	6.3	4.5	2.4	49.9				
96	D4-22	f	5.3	4.0	1.8	14.6				
97	D4-14	f	6.8	5.9	1.8	52.5	t o t a l	29	t o t a l	21

第45表 ブロック13の主要石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器
f 剥片

第46表 石材組成表

第47表 石器組成表

14, 石器ブロック14

ブロック14はC-5 グリッドにあり、遺物の分布も希薄である。総点数11点で流紋岩が10点、サヌカイトが1点である。このうち石器はナイフ形石器が1点で残りは剥片および碎片類である。

ナイフ形石器 (98)

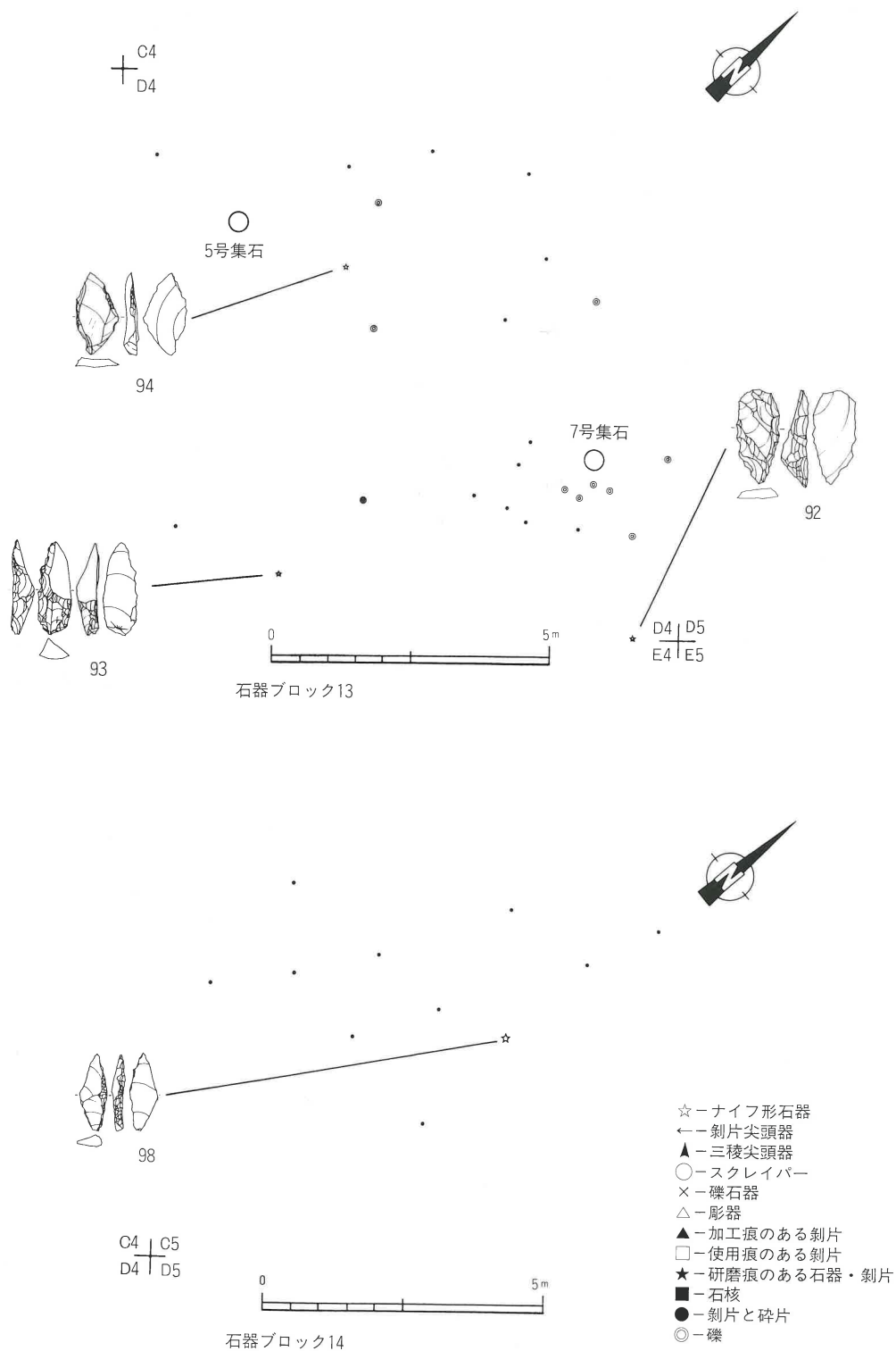
流紋岩の縦長剥片を素材として、2側縁加工を施す。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石 材	個数	類 別	個数
98	C5-8	k n i	4.5	1.6	0.8	3.7	流紋岩	10	f	4
99	C5-1	f	6.2	3.0	1.0	15.4	サヌカイト	1	c h	6
						t o t a l	11	k n i	1	
									t o t a l	21

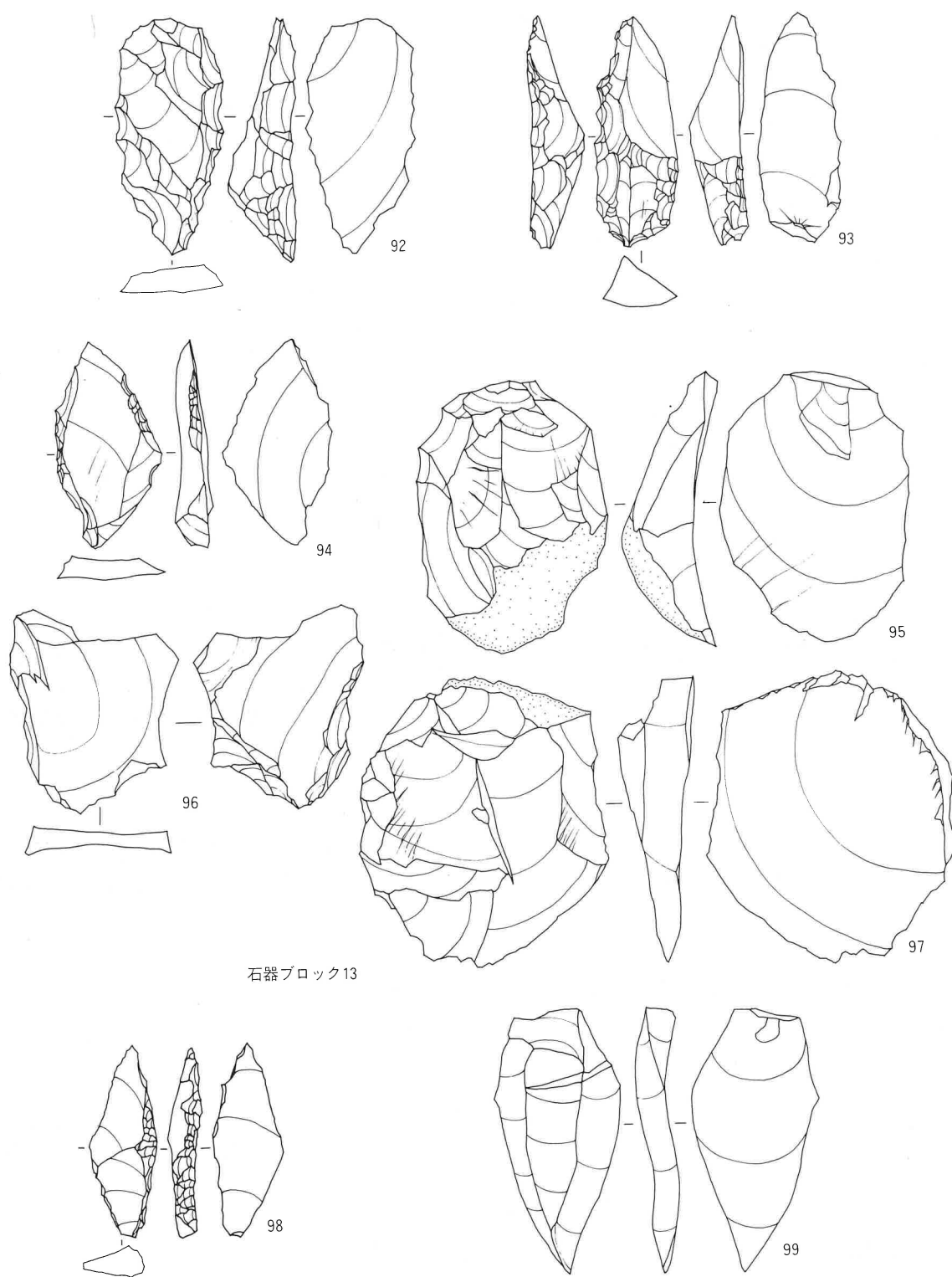
第48表 ブロック14の主要石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器
f 剥片

第49表 石材組成表

第50表 石器組成表



第80図 石器ブロック13・14の遺物分布



第81図 旧石器実測図(14)

15, 石器ブロック15

ブロック15はE-5・F-5グリッドにかけて広がり、範囲は狭いがかなりの遺物集中が確認された。ブロック中央部に特に碎片の集中が見られた。またこの碎片集中部と北端部に集石遺構が検出されている。遺物は83点でその内訳は流紋岩が78点、安山岩が5点である。流紋岩の占める割合は93%となる。このうち石器はナイフ形石器が5点、石核が1点で残りは剥片および碎片類である。特に剥片が11点に対して碎片が61点と突出している。

ナイフ形石器（100～104）

このブロックで出土したナイフ形石器はすべて横長剥片を素材としたものである。このブロックの特徴とも思われる。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石 材	個数	類 別	個数
100	E5-11	k n i	4.8	2.2	0.8	8.8	流紋岩	78	f	11
101	E5-3	k n i	6.5	2.4	1.0	10.1	サヌカイト	0	u f	(1)
102	E5-2	k n i	4.9	2.0	1.3	9.0	チャート	0	c h	61
103	E5-8	k n i	3.8	1.9	1.0	7.1	黒曜石	0	s c	0
104	E5-10	k n i	2.8	1.8	0.8	3.2	頁岩	0	k n i	5
105	E5-3	f	6.8	2.8	1.8	28.0	石英	0	p	0
106	F5-91	f	7.8	2.0	2.7	17.3	安山岩	5	c	1
107	F5-106	f	6.8	6.3	1.5	60.7				
108	F5-100	f	8.6	4.2	2.5	79.1				
109	E5-17	f	8.1	4.2	3.8	82.2				
							t o t a l	83	t o t a l	77(2)

第51表 ブロック15の主要石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器
u f 使用痕のある剥片

第52表 石材組成表

第53表 石器組成表
() 内は接合資料

16, 石器ブロック16

ブロック16はG-5グリッドに位置し、最大の石器ブロック17に東側で接する。遺物は希薄で19点を数えるのみである。石材の内訳は流紋岩が15点、安山岩が4点である。石器はナイフ形石器が1点、使用痕のある剥片が1点で残りは剥片および碎片である。

ナイフ形石器（110）

流紋岩の縦長剥片を素材として、半周にブランディングを施す。

使用痕のある剥片（111）

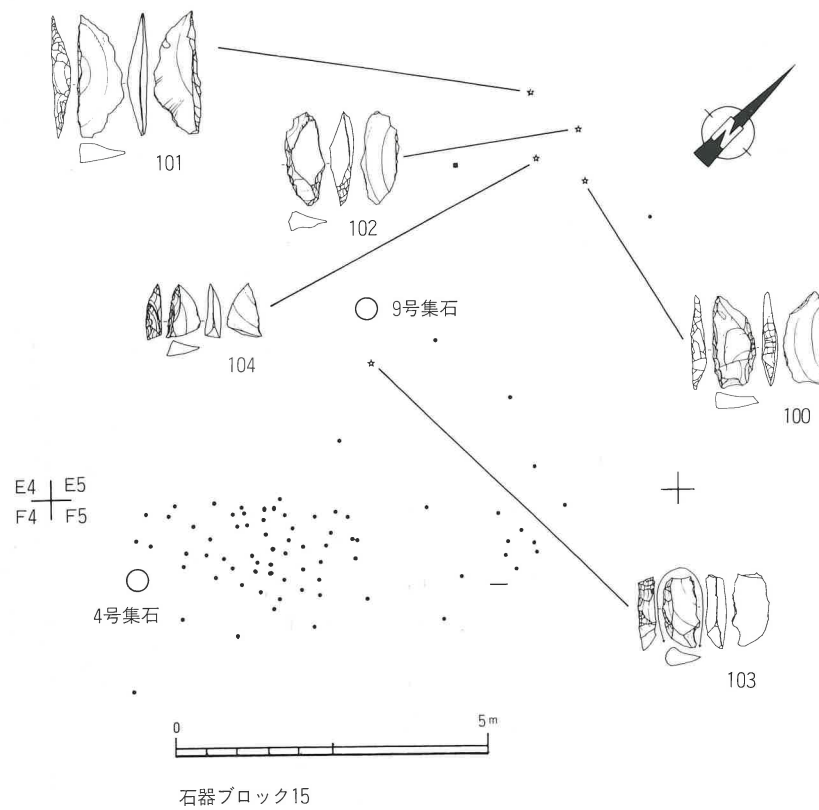
不定形な剥片の一部に使用痕が観察される。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石 材	個数	類 別	個数
110	G5-12	k n i	4.4	1.7	1.0	5.2	流紋岩	15	f	6
111	G5-6	u f	3.4	4.0	1.3	11.5	安山岩	4	u f	1(1)
							t o t a l	19	c h	7
									k n i	1
									t o t a l	15(1)

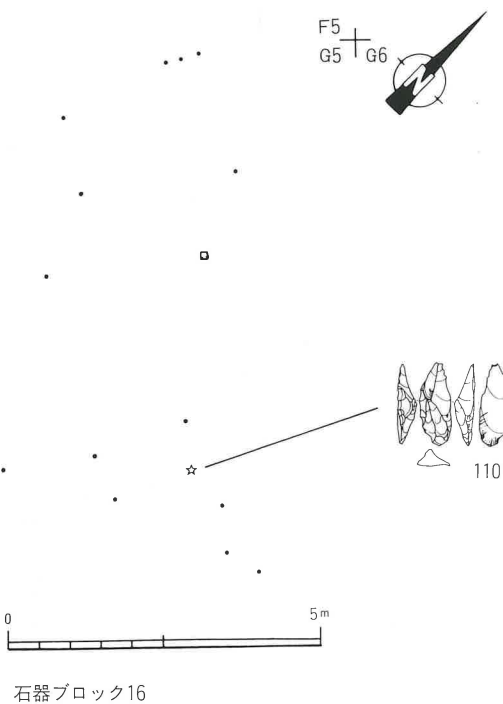
第54表 ブロック16の主要石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器
u f 使用痕のある剥片

第55表 石材組成表

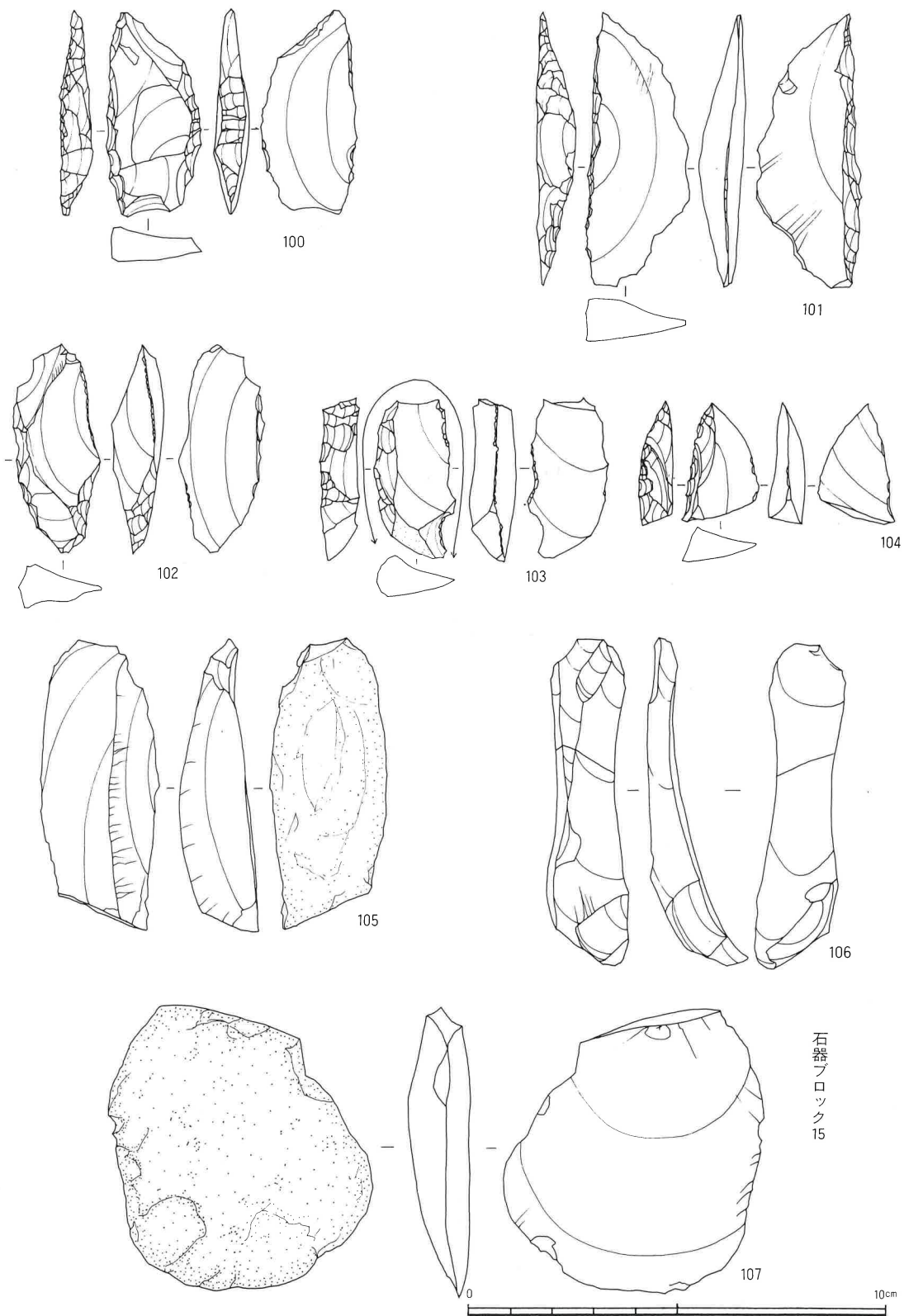
第56表 石器組成表
() 内は接合資料



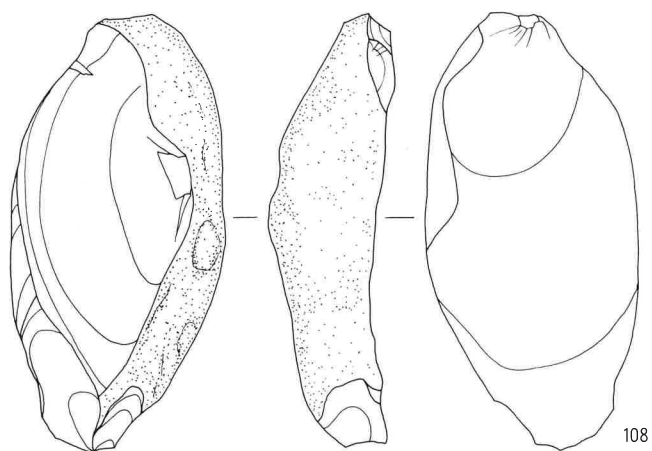
- ☆-ナイフ形石器
- ←-剥片尖頭器
- ▲-三稜尖頭器
- スクレイパー
- ×-礫石器
- △-彫器
- ▲-加工痕のある剥片
- 使用痕のある剥片
- ★-研磨痕のある石器・剥片
- 石核
- 剥片と碎片
- ◎-礫



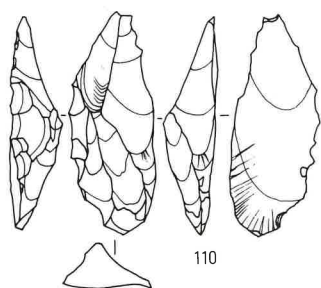
第82図 石器ブロック15・16の遺物分布



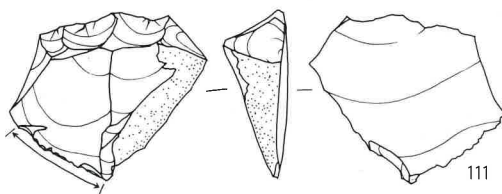
第83図 旧石器実測図(15)



石器ブロック15



石器ブロック16



第84図 旧石器実測図(16)

17、石器ブロック17

このブロック17は今回調査された包含層で、もっとも大きなブロックである。主にG－6グリッド全体に広がり、3ヵ所の遺物集中部がまとまって一つのブロックを形成する。このブロックからは146点の遺物が確認された。石材の内訳は流紋岩が129点で88％を占める。あとはサヌカイトが3点、安山岩が14点である。このうち石器は、ナイフ形石器が6点、彫器が3点、スクレイパーが1点、使用痕のある剥片が2点、二次加工痕剥片が2点、石核が2点で、剥片が36点、碎片が80点であった。ここでも碎片の数量がやや多い状況が見られる。

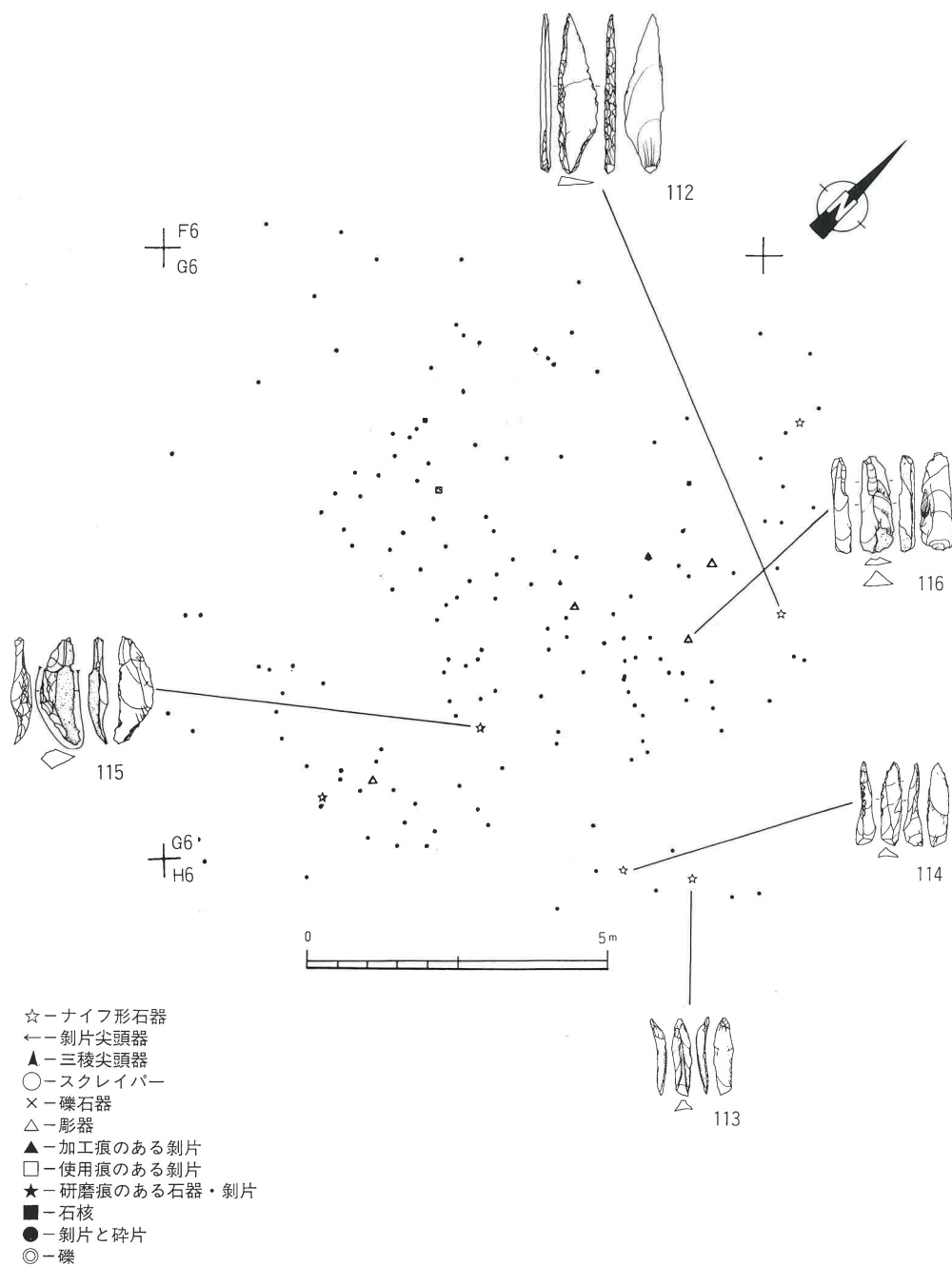
- ナイフ形石器（112～118）
112はサヌカイト製のナイフ形石器で2側辺加工。113～114は幅のあまりない縦長剥片を使用し1側縁加工。
115は不定形な剥片を使用しほぼ全周にブランディングを施す。
- 彫器（116～117）
縦長剥片を素材として、先端部分に槌状剥離を施し刃部を形成している。
- スクレイパー（118）
やや厚みのある縦長剥片を素材として、全周に加工を施した楕円形状の形状を呈する。
- 使用痕のある剥片（119）
縦長剥片を素材としてその一部に使用痕が観察される。
- 石核（129）
それぞれ一部に自然面を残す。打面形成時の調整が広がりそこから縦長剥片や不定形な剥片を剥離している。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
112	G6-6	k n i	8.9	2.2	0.7	11.6
113	H6-4	k n i	4.3	1.1	0.7	2.4
114	H6-1	k n i	4.7	1.2	1.1	3.6
115	G6-17	k n i	5.9	2.2	1.1	7.9
116	G6-146	b	5.3	1.9	0.9	8.7
117	G6-8	b	5.6	1.9	1.4	10.3
118	G6-137	s c	5.2	3.1	1.4	20.4
119	G6-40	u f	7.7	3.5	1.6	31.1
120	G6-60	u f	6.9	3.1	1.9	22.0
121	G6-117	r f	4.9	3.5	1.9	15.8
122	G6-120	f	8.8	3.2	2.1	35.7
123	G6-101	f	5.4	3.3	1.4	11.0
124	G6-61	f	5.2	4.6	2.4	5.5
125	G6-108	f	4.7	2.4	0.9	7.0
126	G6-86	f	5.4	5.0	1.5	31.1
127	G6-87	r f	9.4	2.5	2.5	51.7
128	G6-32	f	6.1	4.3	2.7	33.8
129	G6-100	c	6.0	6.7	4.8	191

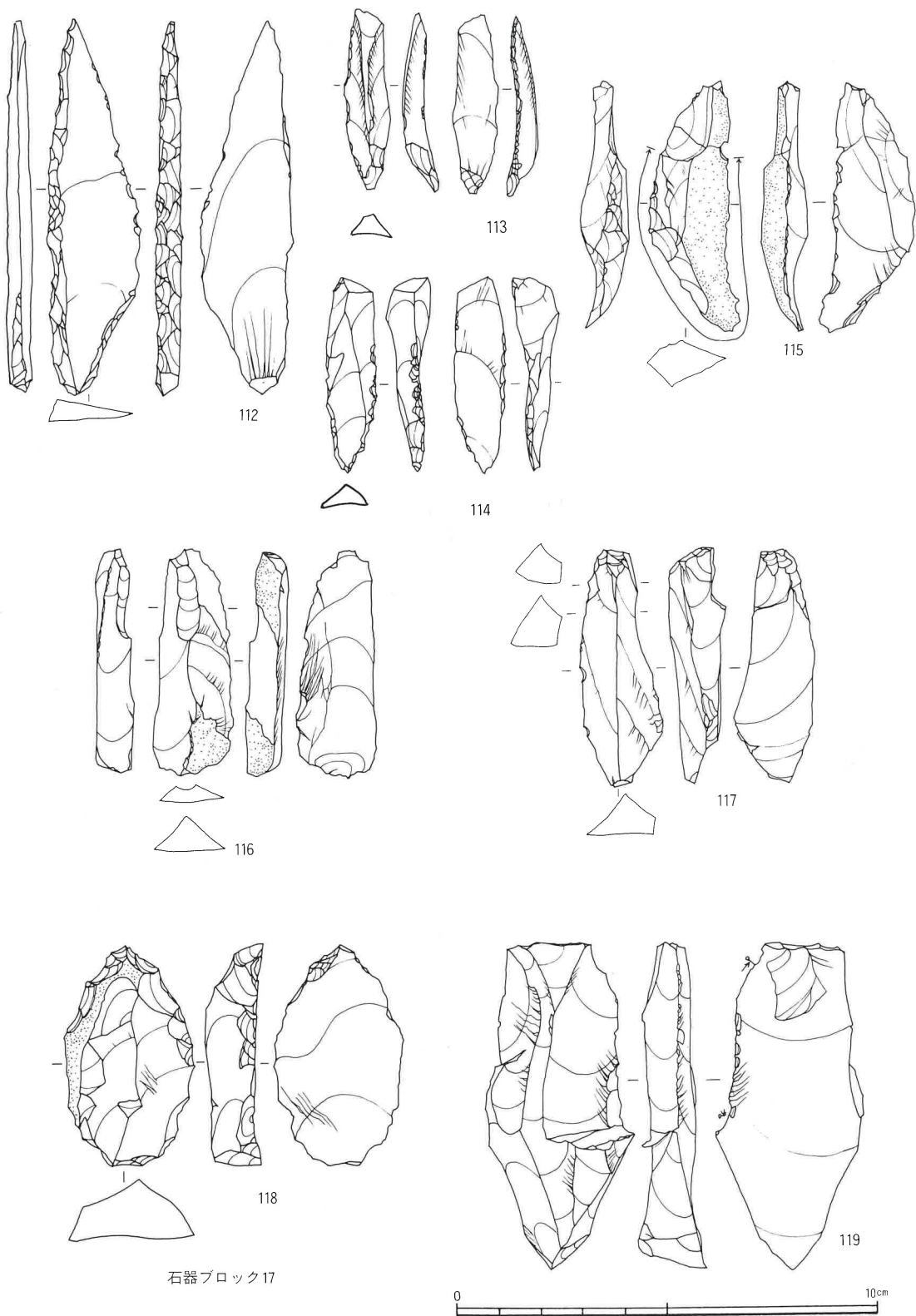
第57表 ブロック17の主要石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器
b 彫器

石 材	個数	類 別	個数
流紋岩	126	f	24(12)
サヌカイト	3	u f	3(2)
チャート	0	c h	80
黒曜石	0	s c	1
頁岩	0	k n i	4
石英	0	p	0
安山岩	14	c	1(1)
		r f	2
		h s	0
		b	2
t o t a l	143	t o t a l	117(15)

第58表 石材組成表 第59表 石器組成表
() 内は接合資料



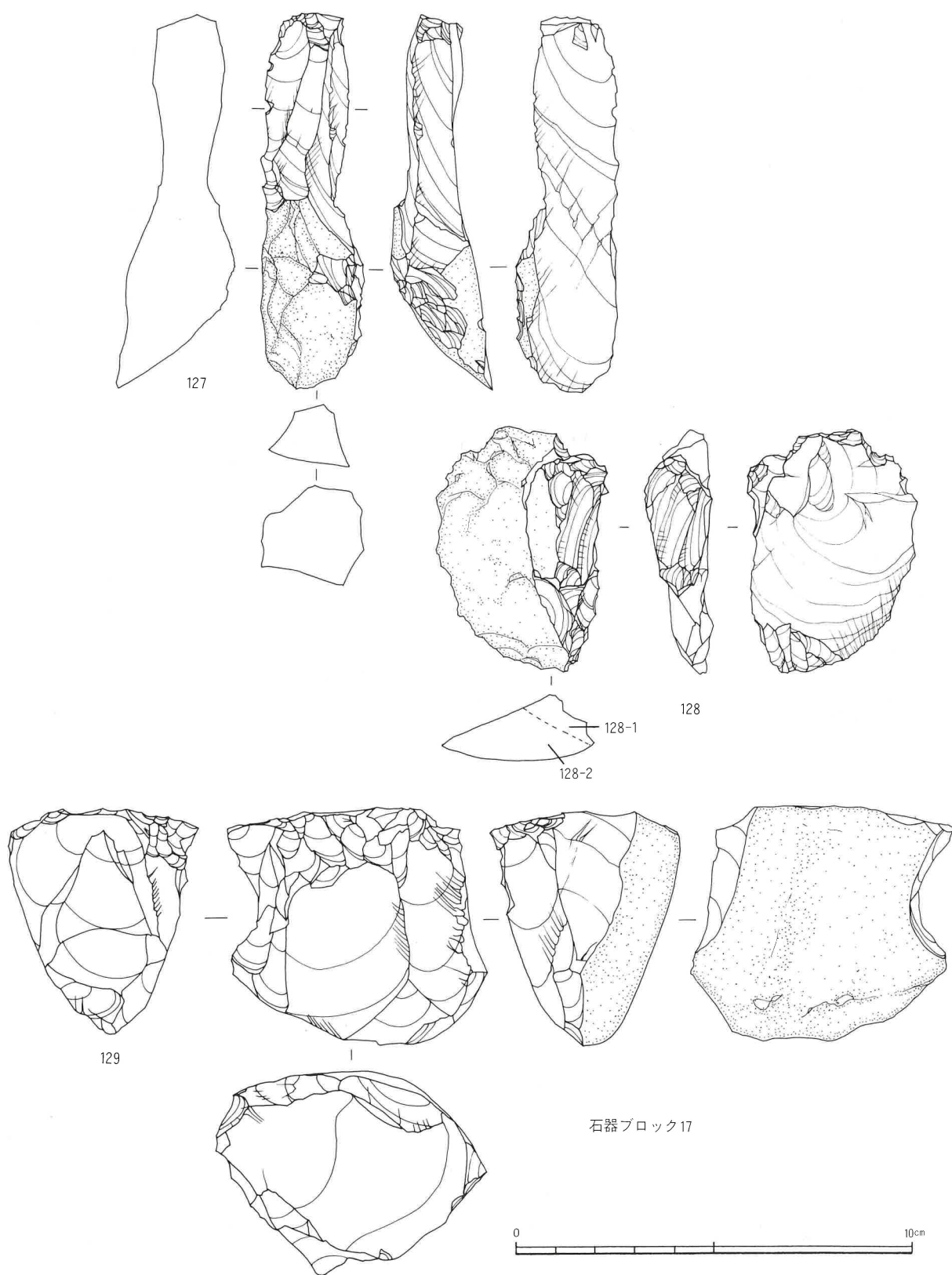
第85図 石器ブロック17の遺物分布



第86図 旧石器実測図(17)



第87図 旧石器実測図(18)



第88図 旧石器実測図(19)

18, 石器ブロック18

このブロックも大きなブロックで、F-6グリッドのほぼ全域およびE-6・F-7グリッドまで範囲が及ぶ。小さな遺物集中部が4ヵ所あり、集石遺構がもっとも北端部の集中部で検出された。遺物の総点数は103点で石材の内訳は流紋岩が91点と全体の88%を占める。その他サヌカイト2点、チャート2点、安山岩8点である。石器はナイフ形石器が2点、三稜尖頭器が1点、使用痕のある剥片が2点、加工痕のある剥片が1点、磨製剥片が1点、石核が3点を数える。

三稜尖頭器 (130)

縦長剥片を素材として、主要剥離面以外の面に加工を施す。

ナイフ形石器 (131~132)

131は縦長剥片を素材として2側縁に加工を施す。132は不定形な剥片の使用し1側縁に非常に荒い加工を施している。

使用痕のある剥片 (133~135)

いずれも縦長剥片を使用してその一側縁に使用痕が認められる。

加工痕のある剥片 (136)

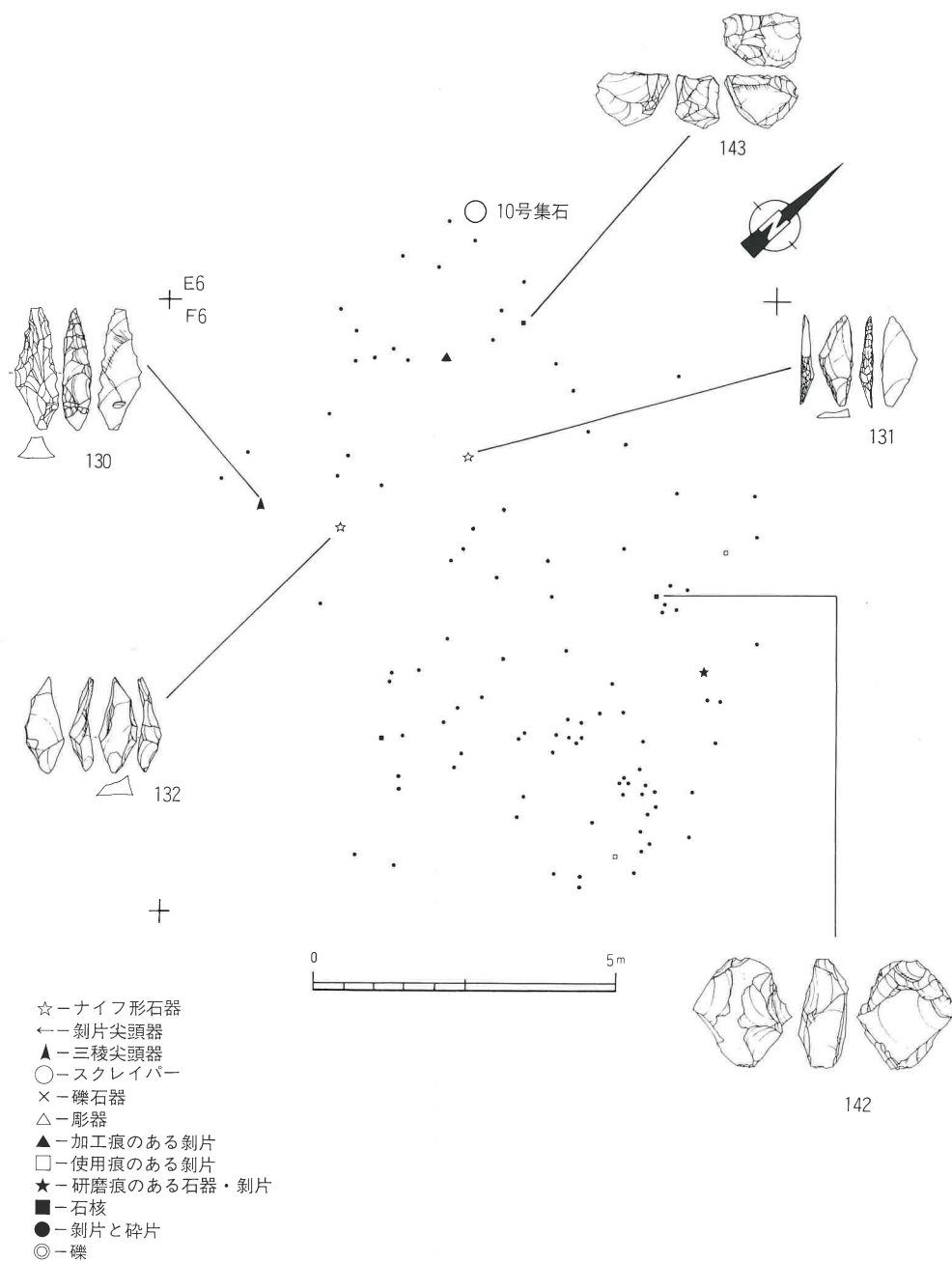
不定形な剥片の打面側を両側辺から加工を施している。

石核 (142~144)

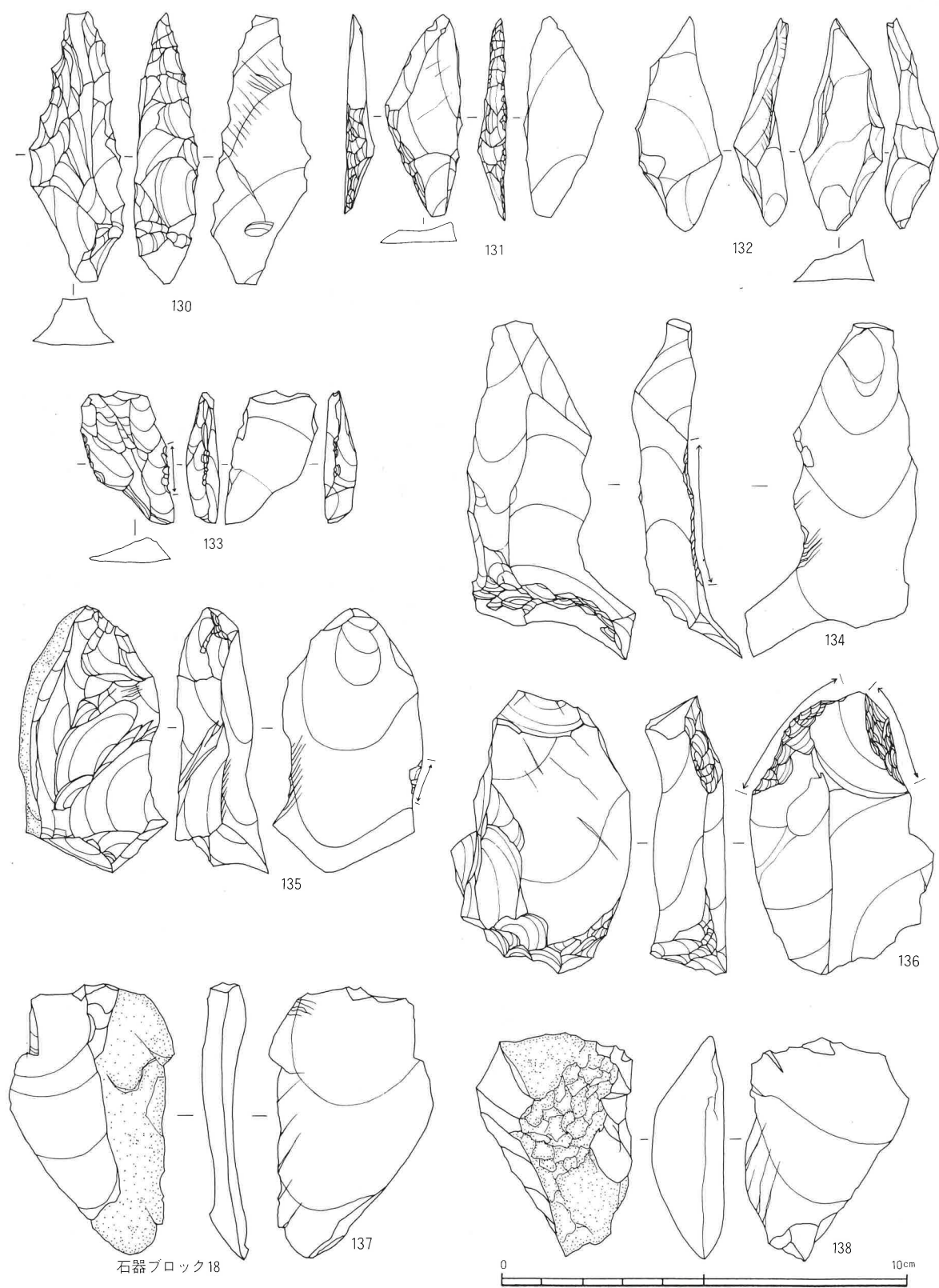
142は打面を次々に移動させながら縦長剥片や不定形な剥片を剥離している。143は器体中央に向かって円錐状に剥離を行っている。144は不定形な剥片を剥離している。

挿図番号	遺物番号	類別	長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)	重(g)	石 材	個数	類 別	個数
130	F6-85	三稜 p	6.7	2.3	1.7	20.2	流紋岩	90	f	12(11)
131	F6-107	k n i	5.0	1.9	0.8	5.2	サヌカイト	2	u f	3(2)
132	F6-88	k n i	5.3	2.2	1.3	7.8	チャート	2	c h	62
133	F6-28	u f	3.3	2.2	0.8	4.7	黒曜石	1	s c	0
134	F6-66	u f	8.4	4.0	2.7	29.0	頁岩	0	k n i	2
135	F6-48	u f	6.6	3.8	2.4	38.4	石英	0	p	1
136	F6-93	r f	6.9	4.5	1.9	59.9	安山岩	8	c	3(1)
137	F6-3	f	6.5	4.1	1.1	25.2			r f	1(1)
138	F6-44	f	5.5	4.0	1.8	34.2			h s	0
139	F6-32	f	9.7	5.2	2.6	83.5			b	0
140	F6-40	f	6.2	4.7	1.1	19.4			磨製剥片	1
141	E6-5	f	7.2	5.0	1.8	55.1	t o t a l	103	t o t a l	84(15)
142	F6-54	c	6.0	5.5	2.7	82.3	第61表 石材組成表		第62表 石器組成表	
143	F6-100	c	3.0	4.1	2.5	32.2			() 内は接合資料	
144	F6-33	c	7.9	5.2	3.2	115				

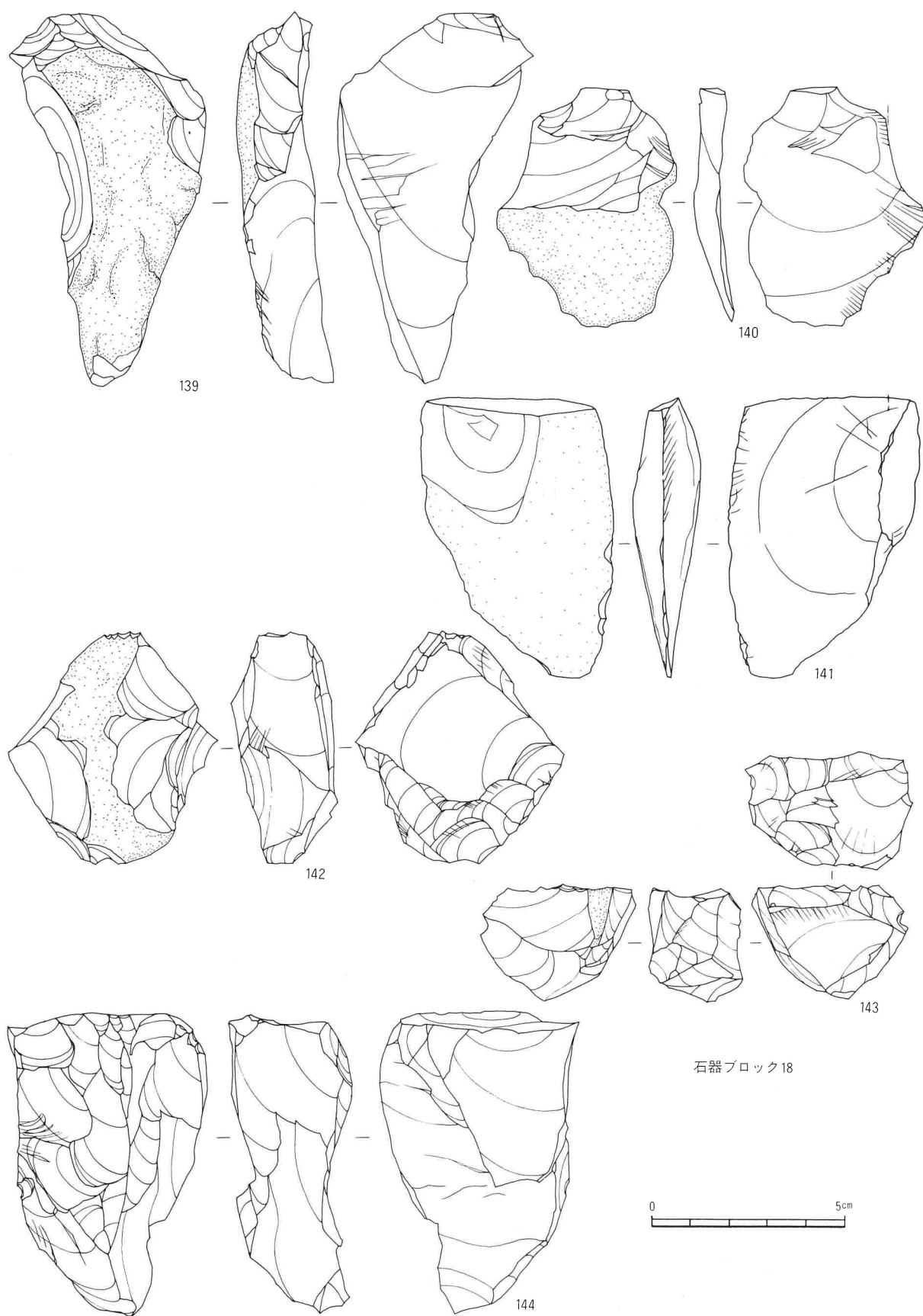
第60表 ブロック18の主要石器計測表 *三稜 p 三稜尖頭器 f 剥片
k n i ナイフ形石器 c 石核
u f 使用痕のある剥片



第89図 石器ブロック18の遺物分布



第90図 旧石器実測図(20)



第91図 旧石器実測図(21)

19, 石器ブロック19

このブロックはF-7グリッド・G-7グリッドにある小規模なブロックである。遺物は希薄で南東部に集石遺構が検出された。遺物は12点で石材は流紋岩が10点、安山岩が2点であった。石器はナイフ形石器が2点、磨石が1点で残りは剥片および碎片である。

ナイフ形石器 (145~146)

145は流紋岩の横長剥片を素材として打面部を中心にブランディングを施す。146は背面に自然面の残る縦長剥片のほぼ周に荒いブランディングを施す。

磨石 (147)

安山岩の円礫の両面を使用している。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
145	G7-22	k n i	3.7	1.5	1.1	3.8
146	F7-1	k m i	8.8	3.2	2.5	30.8
147	F7-12	磨石	9.5	7.0	5.2	287

第63表 ブロック19の主要石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器

石 材	個数
流紋岩	10
安山岩	2
t o t a l	12

第64表 石材組成表

類 別	個数
f	2(3)
c h	3
k n i	1
r f	1
h s	1
t o t a l	8(3)

第65表 石器組成表

() 内は接合資料

20, 石器ブロック20

このブロックは西側でブロック17と接する。遺物の分布範囲は広いが分布は希薄で西側に集石遺構がありその周辺にベルト状に分布する。遺物の総点数は、25点で石材は流紋岩が19点、サヌカイトが2点、頁岩が1点、安山岩が3点である。このうち石器はナイフ形石器が2点、彫器が1点、磨石1点、磨製石器1点、石核1点で残りは剥片および碎片であった。

ナイフ形石器 (148~149)

148は流紋岩の横長剥片を素材として打面側から基部にかけてブランディングを施す。150は珪質岩の縦長剥片を素材として、2側辺に加工を施すものである。

彫器 (150)

流紋岩の縦長剥片を素材として、打面部に向かって1側辺に樋状剥離を施す。

石核 (151)

器体中心部に向けて剥片を剥離し、円錐状の形状を呈する。一部に自然面が残る。

磨石 (152)

安山岩の風化を受けた角礫を素材とし、一面を除いてすべての面を磨面として用いている。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
148	G7-6	k n i	3.9	1.6	1.1	4.8
149	H7-3	k n i	5.0	1.7	1.2	5.5
150	H7-2	b	4.9	2.4	1.8	15.8
151	G7-15	c	3.2	4.4	3.6	48.3
152	G7-18	磨石	21.4	11.3	8.7	323

第66表 ブロック20の主要石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器
b 彫器
c 石核

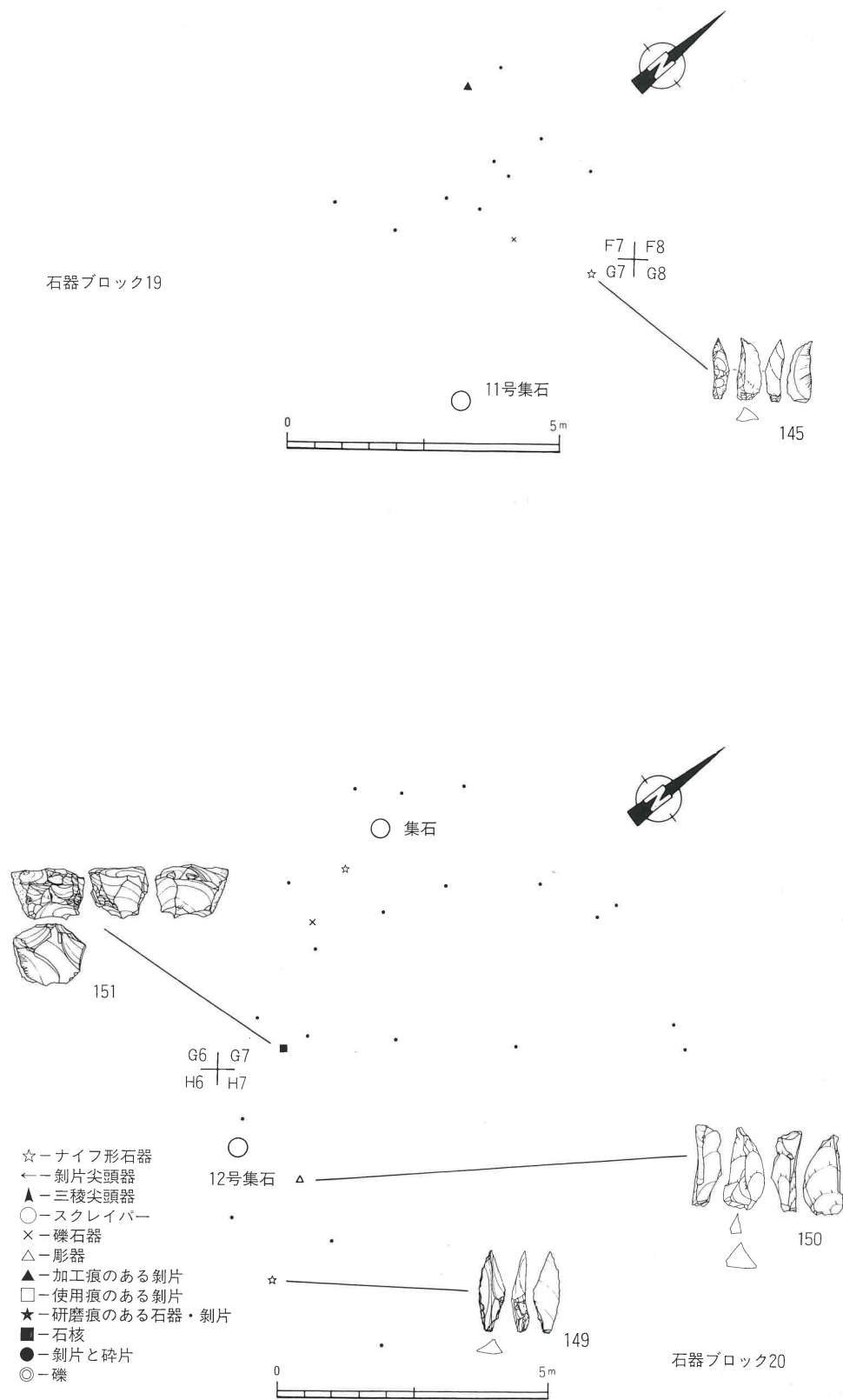
石 材	個数
流紋岩	19
サヌカイト	2
珪質岩	1
安山岩	3
t o t a l	25

第67表 石材組成表

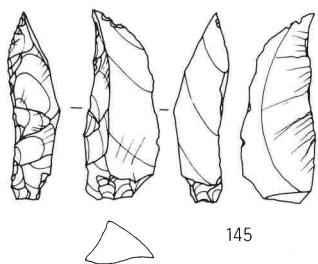
類 別	個数
f	7
c h	9
k n i	2
c	1(1)
h s	1
b	1
t o t a l	21(1)

第68表 石器組成表

() 内は接合資料



第92図 石器ブロック19・20の遺物分布

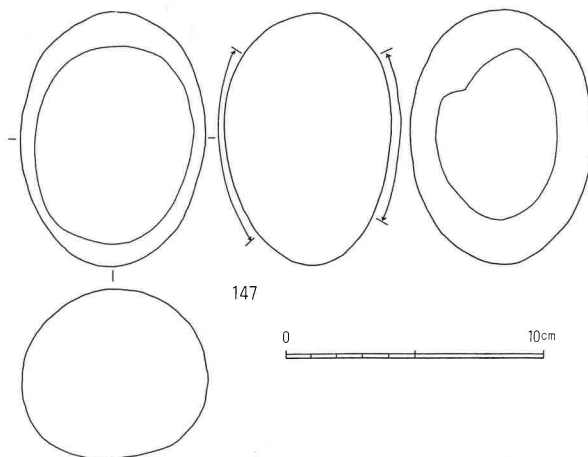


145

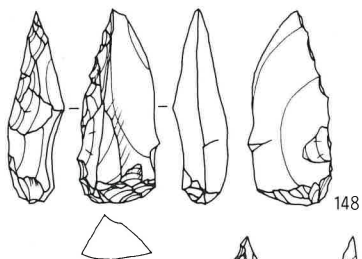
石器ブロック19



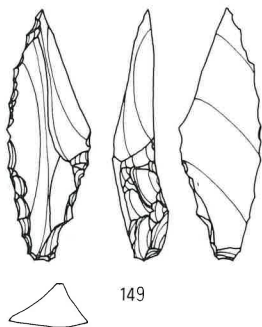
146



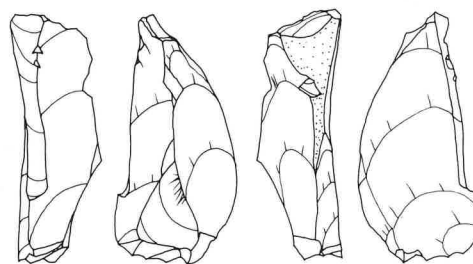
147



148



149

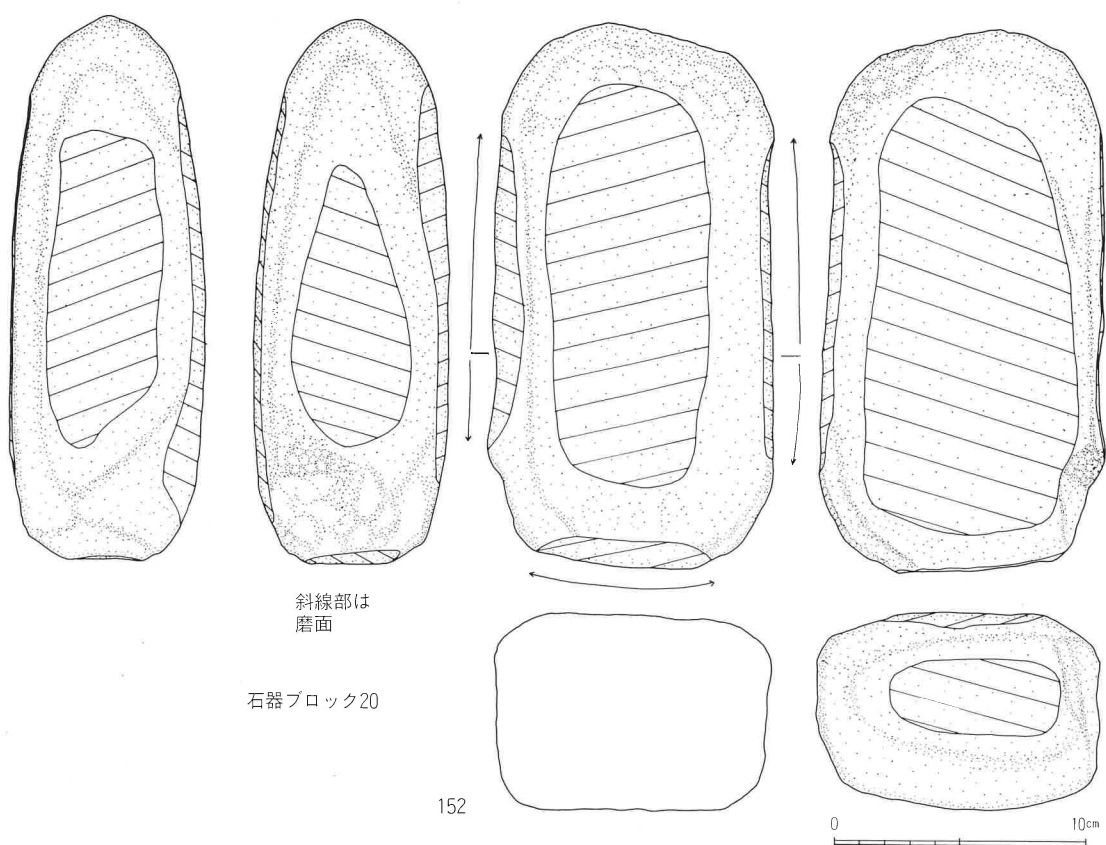
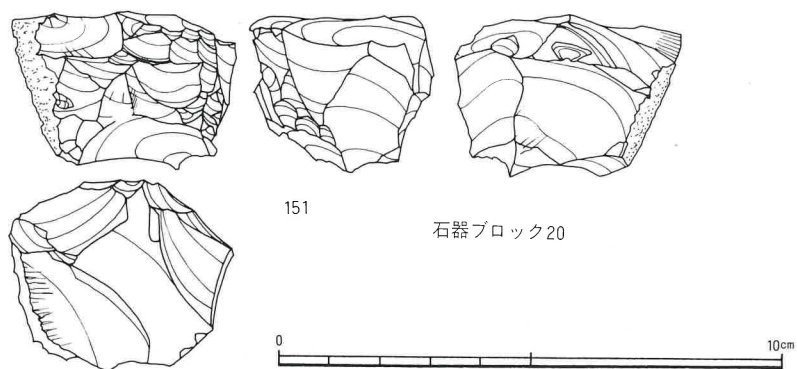


150

石器ブロック20



第93図 旧石器実測図(22)



第94図 旧石器実測図(23)

21, 石器ブロック21

ブロック21は、G-9およびH-9グリッドにあり、調査区の最も東部に位置する。遺物の分布は希薄で南西部で集石遺構が検出されている。遺物は、15点で流紋岩が12点、安山岩が3点である。このうち石器はナイフ形石器が1点で残りは剥片および碎片である。

ナイフ形石器 (153)

小型の切り出し型のナイフ形石器である。流紋岩の横長剥片を素材として、両側縁に細かい加工を施す。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
153	G9-2	k n i	2.4	1.7	0.9	2.7
154	H9-2	f	6.6	4.0	1.5	39.2
155	H9-13	f	6.6	4.6	1.4	32.1
156	H9-9	f	7.1	3.1	2.6	35.2

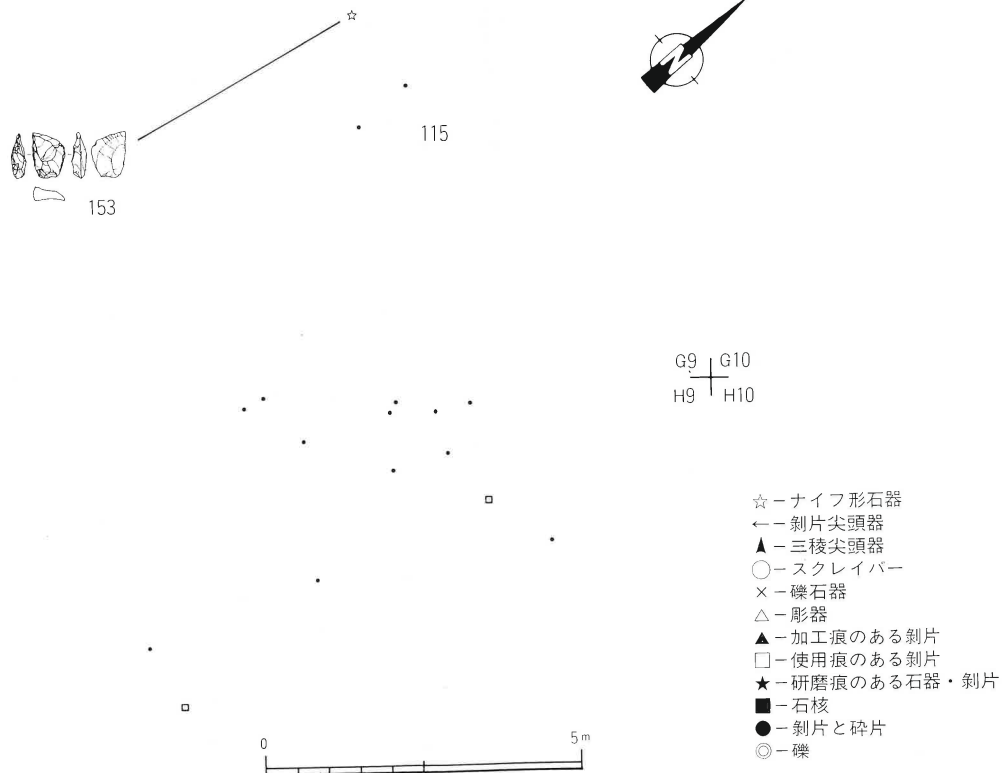
第69表 ブロック21の主要石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器
f 剥片

石 材	個数
流紋岩	11
安山岩	3
頁岩	1
t o t a l	15

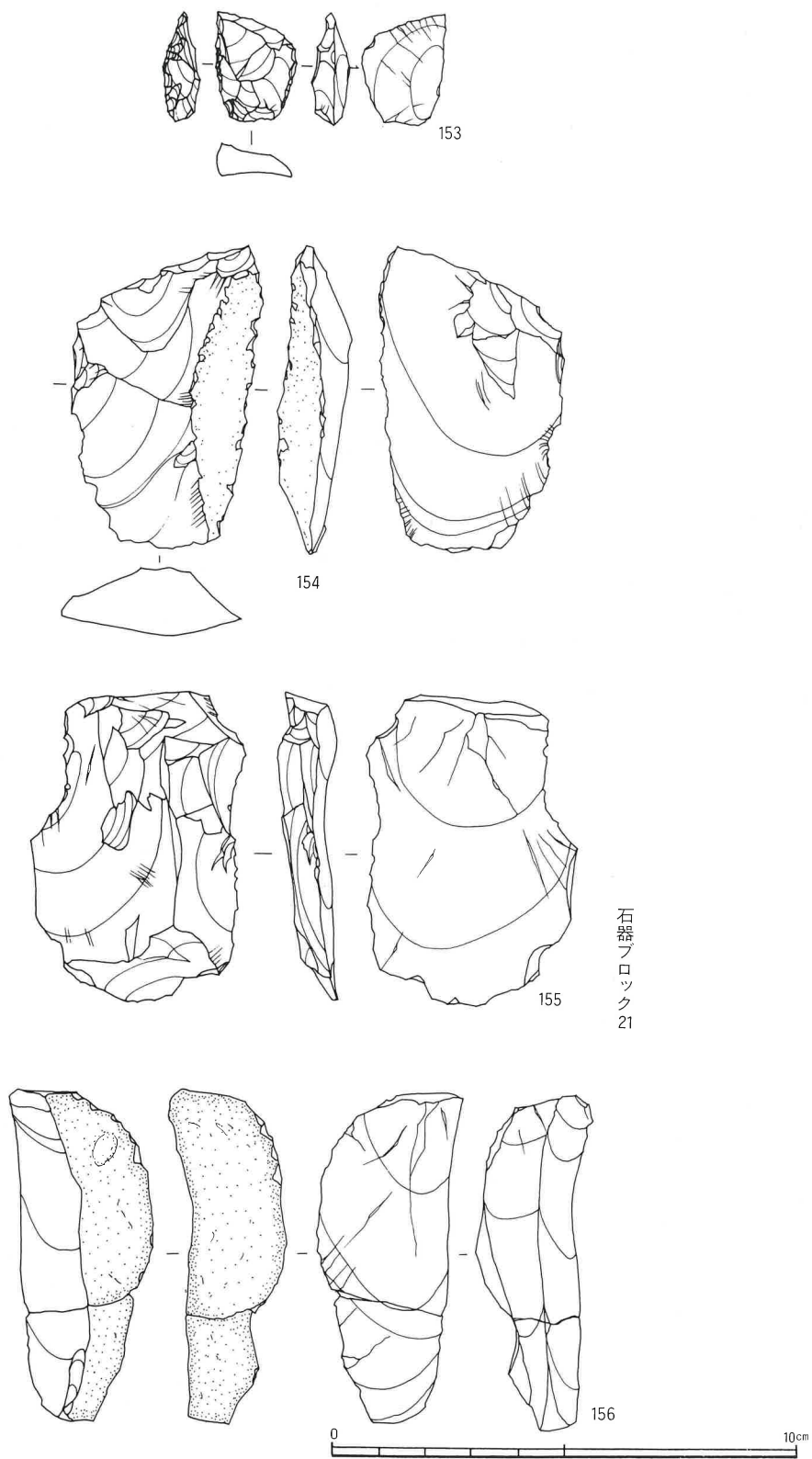
第70表 石材組成表

類 別	個数
f	4
c h	6
k n i	1
t o t a l	12

第71表 石器組成表



第95図 石器ブロック21の遺物分布



第96図 旧石器実測図(24)

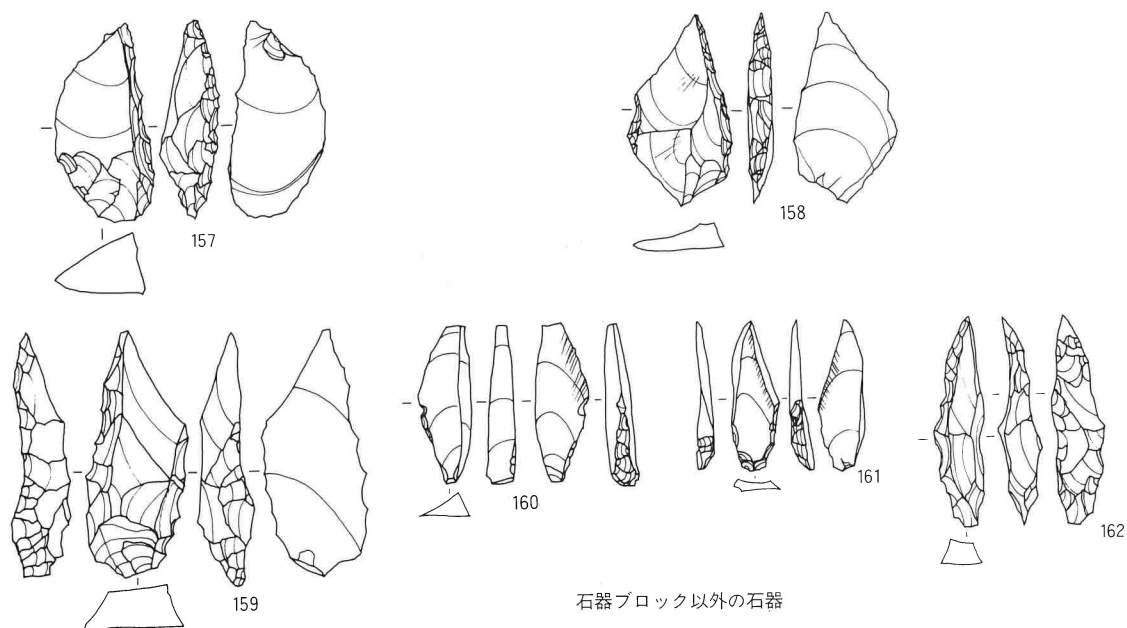
5) 石器ブロック以外の石器

石器ブロックに含まれず、単発的に出土したうちツールに限って図示した。

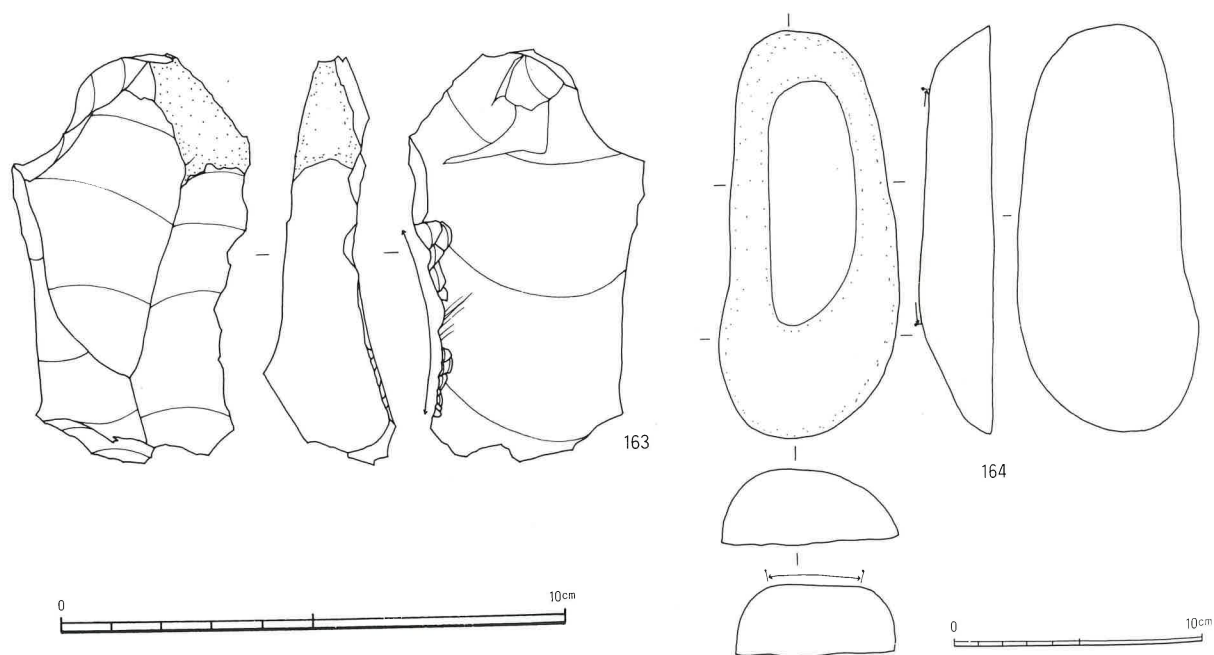
ナイフ形石器 (157~161)

157~159は横長剥片、160~161は縦長剥片を素材としている。160~161は細身の剥片の打面部分を中心に加工を施す。三稜尖頭器 (162) は断面が台形状で、3面とも加工を施す。使用痕のある剥片 (163) は、縦長剥片の一側縁を使用している。磨石 (164) 安山岩の円礫をカマボコ状に割りその一部を使用する。

このうち159は、ブロック11の北側約2m、160~161は、ブロック21南側約5m、162はブロック13から東約10mでそれぞれ出土した。



石器ブロック以外の石器



第97図 旧石器実測図(25)

6) 研磨された石器

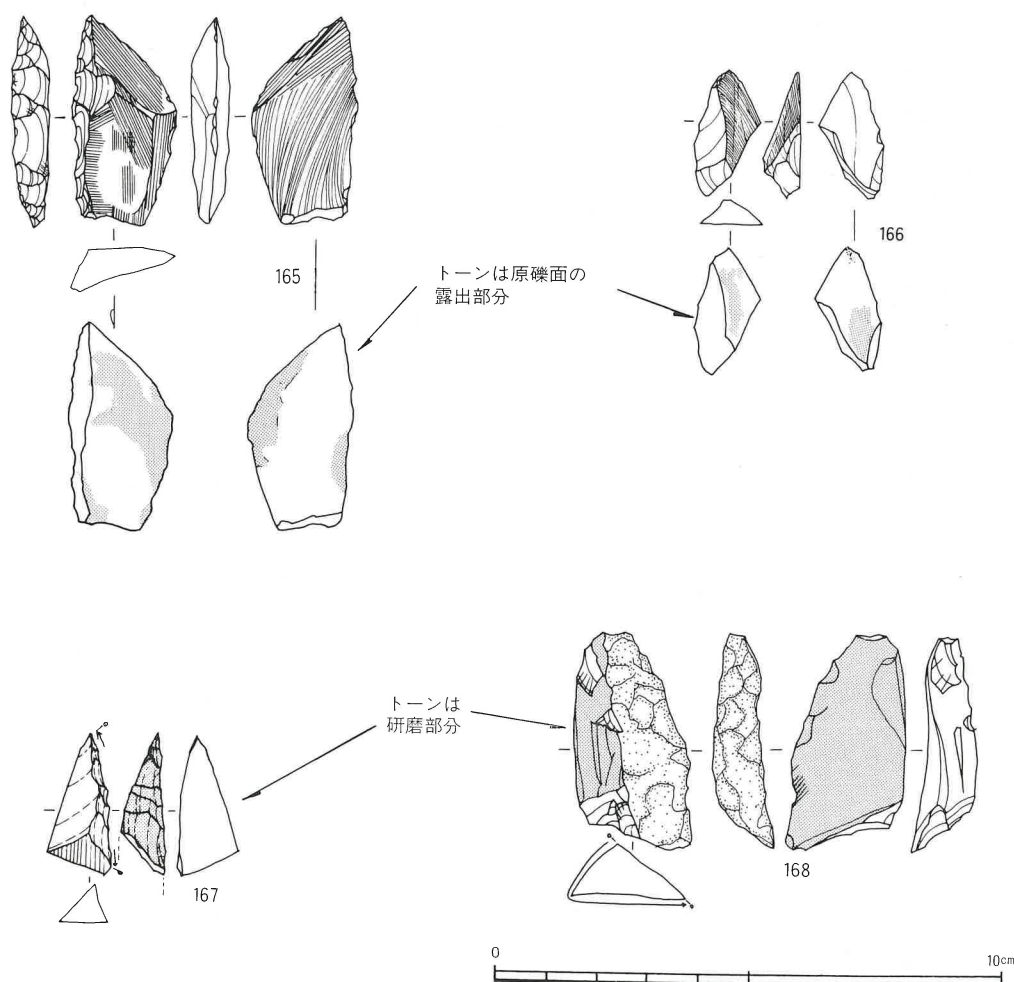
ここに図示した石器はいずれも流紋岩を使用したナイフ形石器、剥片である。これらの石器はいずれも研磨痕が観察されることから従来の旧石器時代の遺物とは一線を画するものである。

165—流紋岩の横長剥片を素材として、打面側にブランティングが施される。基部が若干欠損している。両剥離面ともに細かい研磨痕が施される。特に刃部については本来の石器製作時に形成された面を意識して両面とも研磨し稜線を作り出している。ただし研磨が及ぶ範囲は風化面が磨取られ黒色の原礫面が露出している。ブランティング部は全く研磨痕は観察されずあくまでも刃部形成を意識したものと思われる。

166—ナイフ形石器の最先端部であると思われる。先端にわずかにブランティングが観察される。主要剥離面側は完全にフラットに研磨されているためどのような剥片を素材としたかは判断できない。この石器も刃部をかなり意識して研磨され、刃部に平行するように稜線が形成されている。この石器も一部に原礫面が露出しているがその一部に新たに風化の影響を受けつつあることも確認されている。

167—背面のブランティング部で横方向に研磨痕がわずかに観察される。

168—縦長剥片の主要剥離面とそこに連続する面の2カ所に研磨痕が観察される。主要剥離面側の研磨は1～3の研磨に比べ甘く、剥離状況が観察される。しかし連続する剥離面との稜線は刃部を意識した念入りの研磨である。一部に原礫面が露出している部分も確認されたが全体的には風化面がよく残っている。



第98図 旧石器実測図(26)

7) 表採遺物

表採遺物は、ツールおよび剥片類が10数点あった。このうちツールを図示した。

ナイフ形石器 (169)

チャート製の小型のナイフ形石器である。縦長剥片の先端部を斜め方向に切断し刃部を形成している。ブラントニングは両側辺に施す。

石核 (170)

握り拳大の流紋岩を使用している。打面部をフラットに整形し、縦長剥片をほぼ4分の3周にわたって剥離している。

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
157	A5-2	k n i	3.9	2.0	1.2	6.1	流紋岩
158	A6-9	k n i	3.7	2.1	0.5	3.5	流紋岩
159	D3一括	k n i	4.8	2.1	1.1	8.8	サヌカイト
160	H8一括	k n i	3.1	1.1	0.6	1.5	流紋岩
161	H8-3	k n i	3.0	1.0	0.5	0.9	安山岩
162	D5-3	三稜 p	4.1	1.0	0.9	2.6	流紋岩
163	D6-2	u f	8.1	4.7	2.7	57.1	流紋岩
164	Y4-1	磨石	21.0	7.3	3.1	351	安山岩

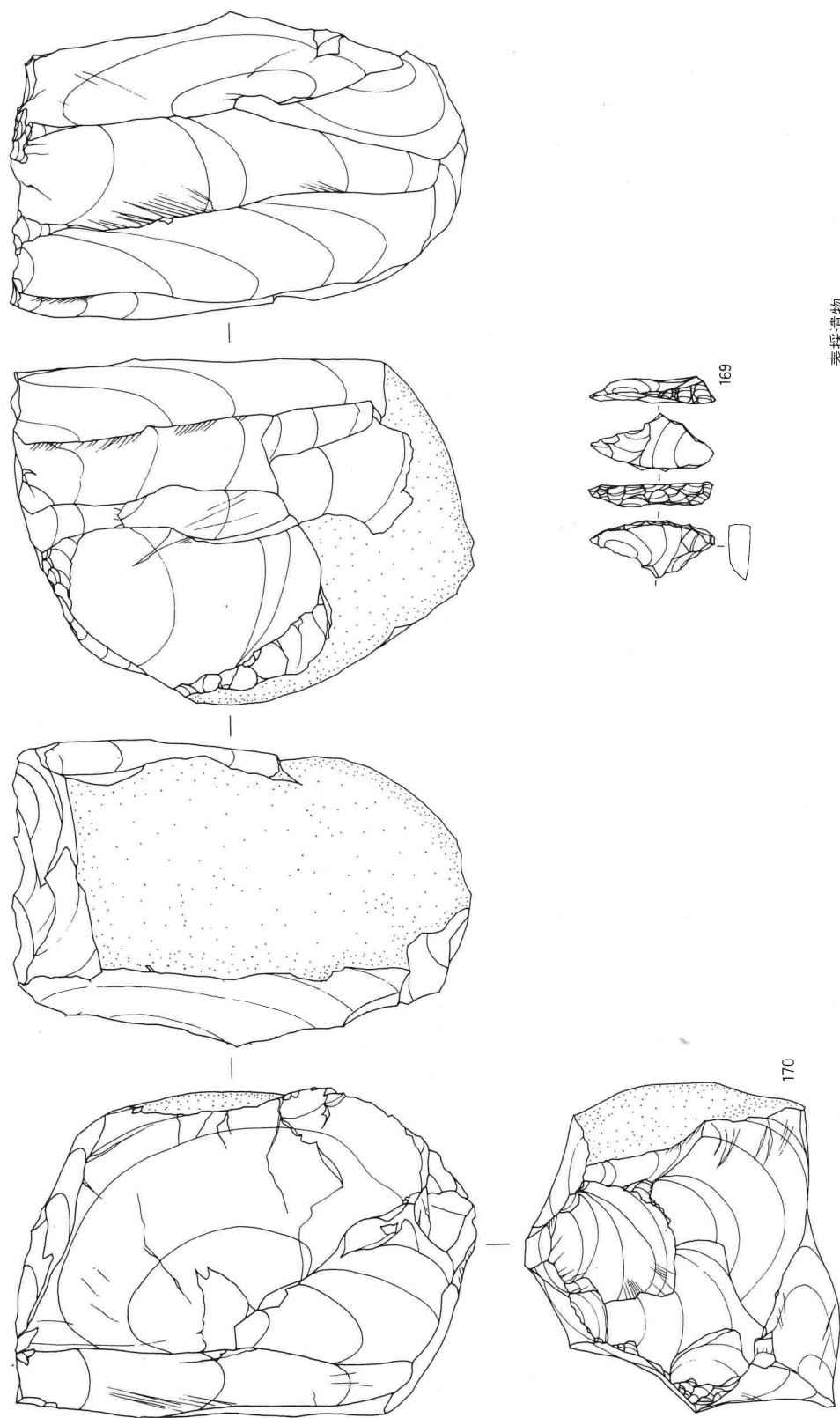
第72表 石器ブロック以外の石器計測表 ※ k n i ナイフ形石器 三稜 p 三稜尖頭器
u f 使用痕のある剥片

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
165	H8-1	k n i	4.1	2.1	0.7	6.4	流紋岩
166	D2-16	k n i (?)	2.4	1.3	0.7	1.4	流紋岩
167	E4-2	k n i	2.8	1.3	0.8	1.8	安山岩
168	F6-58	f	4.3	2.3	1.3	8.9	流紋岩

第73表 研磨石器計測表

挿図番号	遺物番号	類別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
169	—	c	10.4	7.3	6.8	690	流紋岩
170	—	k n i	2.8	1.3	0.7	1.8	サヌカイト

第74表 表採遺物計測表



第99図 旧石器実測図(27)

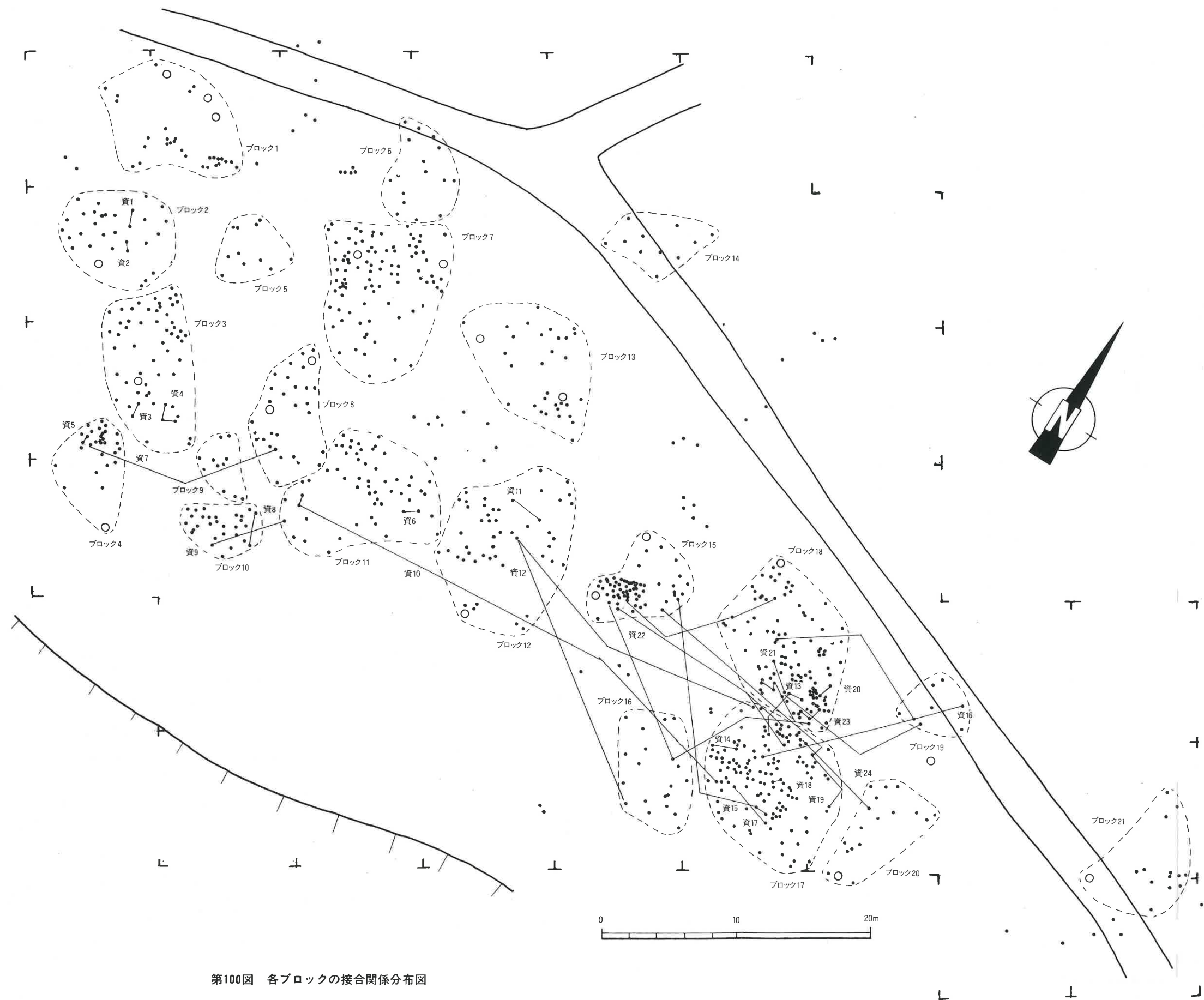
8), 接合資料

今回の調査で得られた接合資料は23個体あった。これらは小規模な接合で、同じブロック内か隣接するブロックで接合関係を結ぶものが大半である。また、ブロックを隔てた接合関係は資料6、資料8、資料9、資料11、資料12、資料14、資料15、資料18、資料20、資料21、資料23と11資料あるが、最も離れた接合資料で約40m、残りは10m以内の接合関係である。石核との接合関係を示すものが6点で、それ以外は剥片同士の接合を示す。大部分は縦長剥片ないしは不定形な剥片同士の接合関係を示すものだが、資料6は瀬戸内技法による翼状剥片の接合関係を示す好例と言える。

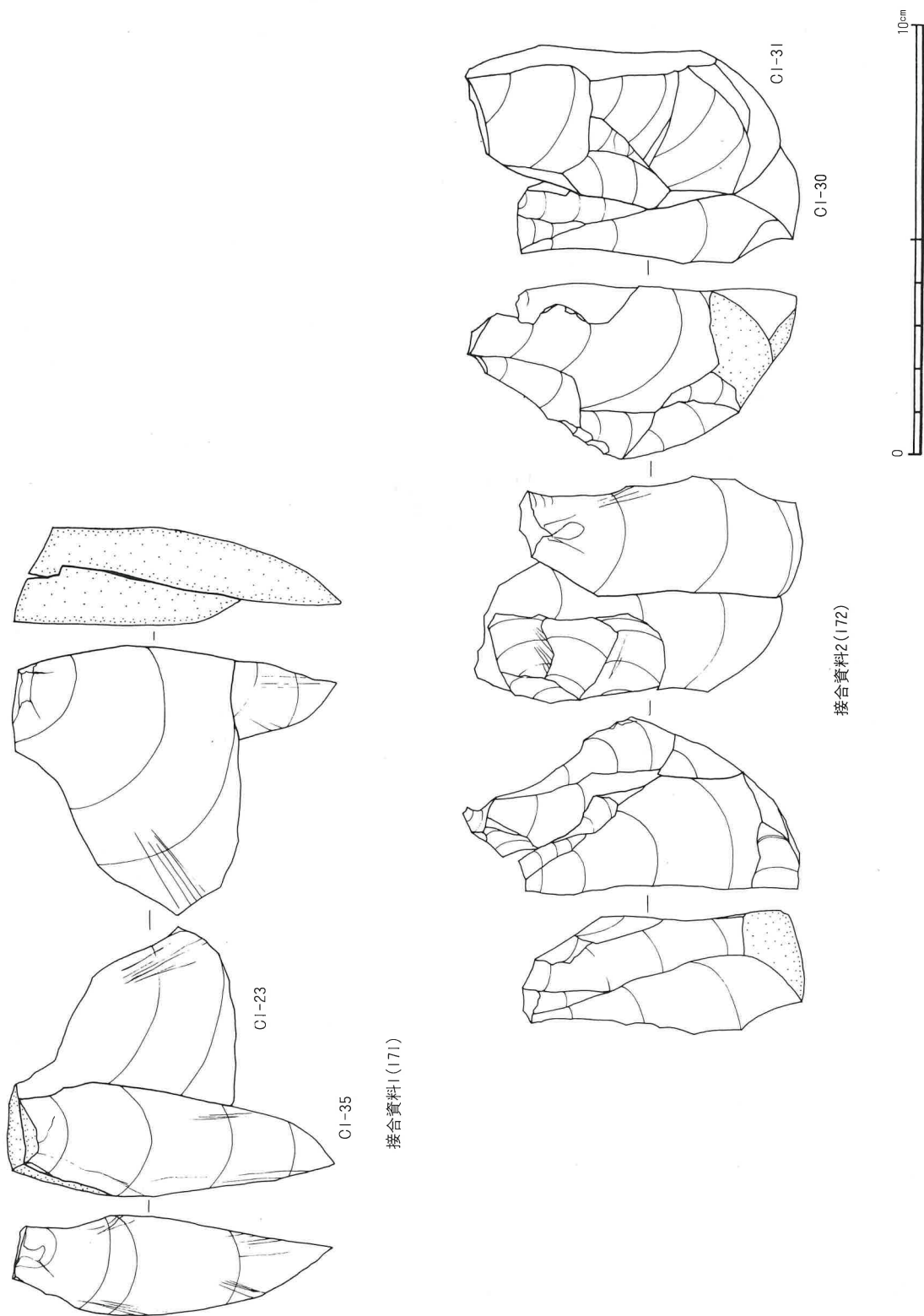
挿図番号	遺物番号	遺物番号	ブロック番号	類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	石材
171	1-1	C1-23	2	f	5.3	6.3	1.4	流紋岩
	1-2	C1-35	2	f	7.5	2.7	1.7	"
172	2-1	C1-30	2	f	6.7	2.9	2.7	"
	2-2	C1-31	2	f	7.3	3.9	0.8	"
173	3-1	E1-46	3	f	5.8	2.7	1.2	"
	3-2	D1-13	3	f	4.7	2.3	1.1	"
174	4-1	D1-14	3	c	8.1	8.2	5.5	"
	4-2	D1-12	3	u f	4.5	2.9	1.1	"
	4-3	D1-9	3	f	5.0	4.0	1.3	"
175	5-1	E1-16	4	f	8.7	6.2	1.6	"
	5-2	E1-15	4	f	4.1	2.8	1.1	"
176	6-1	E3-27	11	f	6.7	3.6	0.6	"
	6-2	E3-23	11	f	5.6	2.4	0.6	"
177	7-1	E1-14	4	f	9.3	3.7	2.5	"
	7-2	E2-30	8	f	6.6	3.8	1.9	"
178	8-1	E2-18	10	f	5.9	5.3	2.5	"
	8-2	E2-5	10	f	5.0	4.2	1.0	"
179	9-1	E2-23	10	f	6.2	3.8	1.6	"
	9-2	E2-20	10	f	7.4	5.3	1.5	"
180	10-1	E2-24	11	f	6.4	6.8	2.9	"
	10-2	E2-3	11	f	3.8	4.0	1.0	"
	10-3	G6-71	17	f	4.7	4.3	0.5	"
181	11-1	E4-6	12	f	9.3	6.7	1.5	"
	11-2	E4-7	12	f	4.1	3.0	1.0	"
182	12-1	E4-38	12	c	7.2	7.0	6.2	"
	12-2	G5-11	16	u f	4.2	6.5	2.7	"
	12-3	G6-82	17	f	1.4	3.1	0.7	"
183	13-1	F6-38	18	f	4.4	3.2	1.2	"
	13-2	F6-34	18	f	5.5	3.5	2.5	"
	13-3	G6-51	17	f	3.9	2.2	0.9	"
184	14-1	G6-133	17	f	6.1	4.5	1.0	"
	14-2	G6-88	17	f	2.8	2.0	1.1	"
185	15-1	F5-97	15	c	7.5	5.8	4.6	"
	15-2	G6-138	17	f	6.8	3.9	1.3	"
	15-3	G6-142	17	u f	3.3	2.1	1.0	"
186	16-1	F7-11	19	f	9.8	5.5	2.8	流紋岩
	16-2	F6-106	18	f	5.1	3.7	1.3	"
	16-3	G6-62	17	f	6.3	5.3	2.2	"
	16-4	F6-67	18	f	7.3	2.6	2.5	"
	16-5	F7-2	19	f	2.5	4.2	1.1	"
187	17-1	G6-108	17	c	4.8	4.9	5.1	"
	17-2	G6-80	17	f	4.6	2.1	0.9	"
188	18-1	G6-152	17	f	6.6	6.6	2.7	"
	18-2	G6-68	17	f	2.6	2.8	0.7	"
189	19-1	G6-90	17	f	7.0	5.0	2.8	"
	19-2	G7-17	17	f	5.3	5.6	2.0	"
	19-3	F5-92	15	f	2.2	2.5	1.0	"
190	20-1	F6-5	18	f	4.2	5.7	1.7	"
	20-2	F6-51	18	f	6.2	5.1	1.7	"
191	21-1	F6-41	18	c	5.0	5.0	6.3	"
	21-2	G6-62	17	u f	4.7	3.6	1.6	"
	21-3	F6-2	18	f	5.2	3.2	1.6	"
	21-4	F7-4	19	f	5.1	2.4	1.9	"
192	22-1	F6-1	18	u f	7.0	5.1	1.7	"
	22-2	F6-105	18	f	7.2	4.6	1.4	"
	22-3	F6-94	18	f	4.8	4.4	1.7	"
	22-4	F6-83	18	s c	5.2	3.6	1.2	"
	22-5	F6-19	18	f	2.5	3.0	1.5	"
	22-6	G5-8	16	f	2.3	2.3	1.1	"
	22-7	F5-128	15	f	0.9	2.7	0.9	"
193	23-1	F6-70	18	f	5.5	5.3	2.1	"
	23-2	F6-64	18	f	4.6	4.3	1.1	"
	23-3	F6-49	18	u f	5.0	4.4	0.9	"
194	24-1	G7-9	20	c	5.2	6.5	5.1	"
	24-2	F6-52	18	f	3.4	1.6	0.7	"

第75表 接合資料一覧表

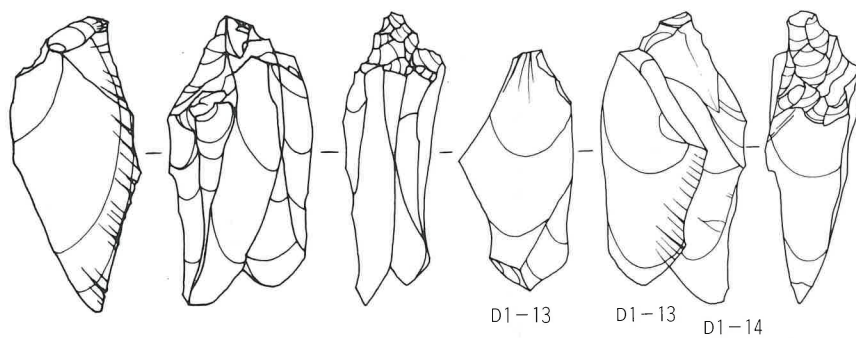
※ s c スクレイパー f 剥片
u f 使用痕のある剥片 c 石核



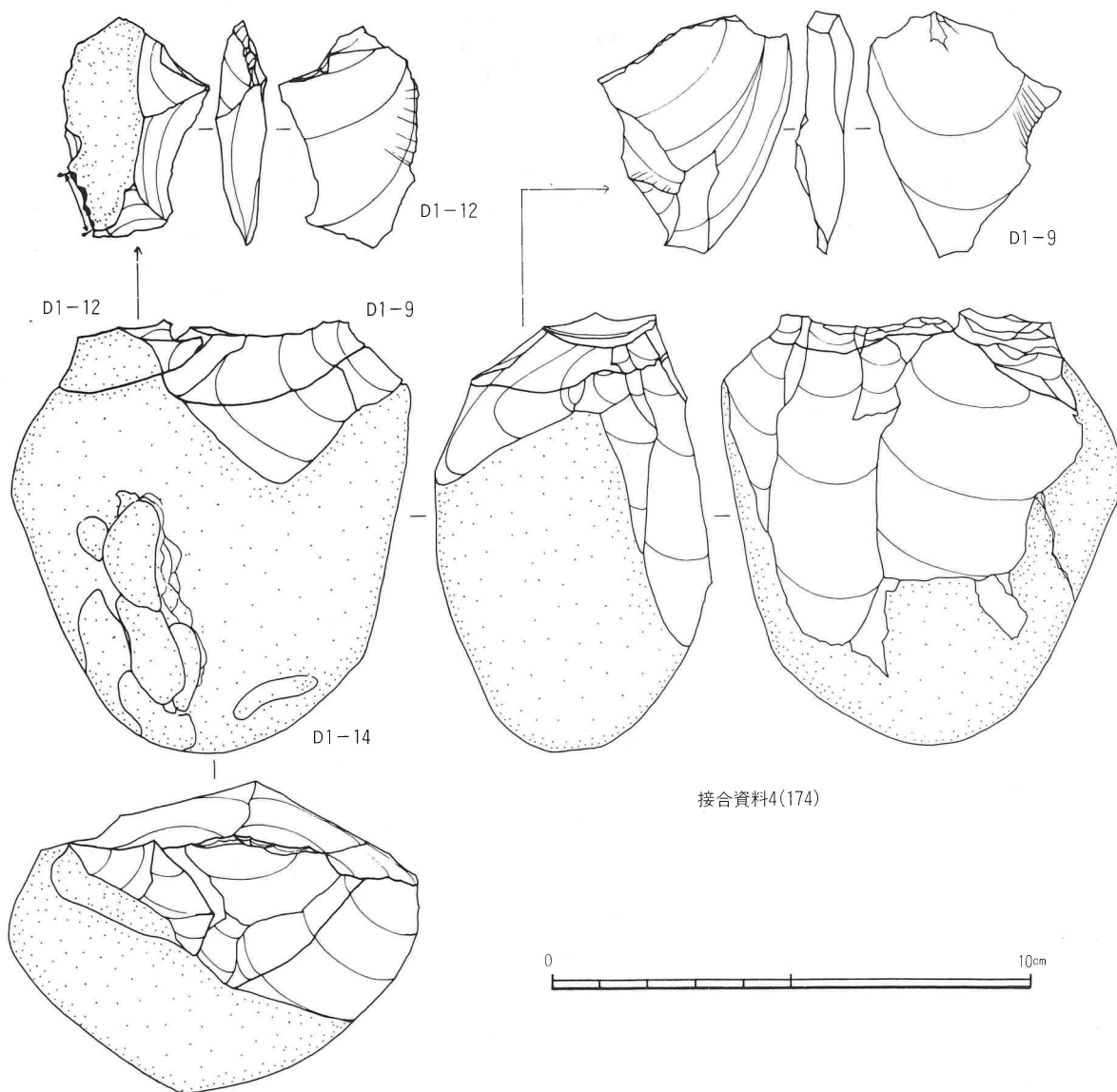
第100図 各ブロックの接合関係分布図



第101図 接合資料実測図(1)

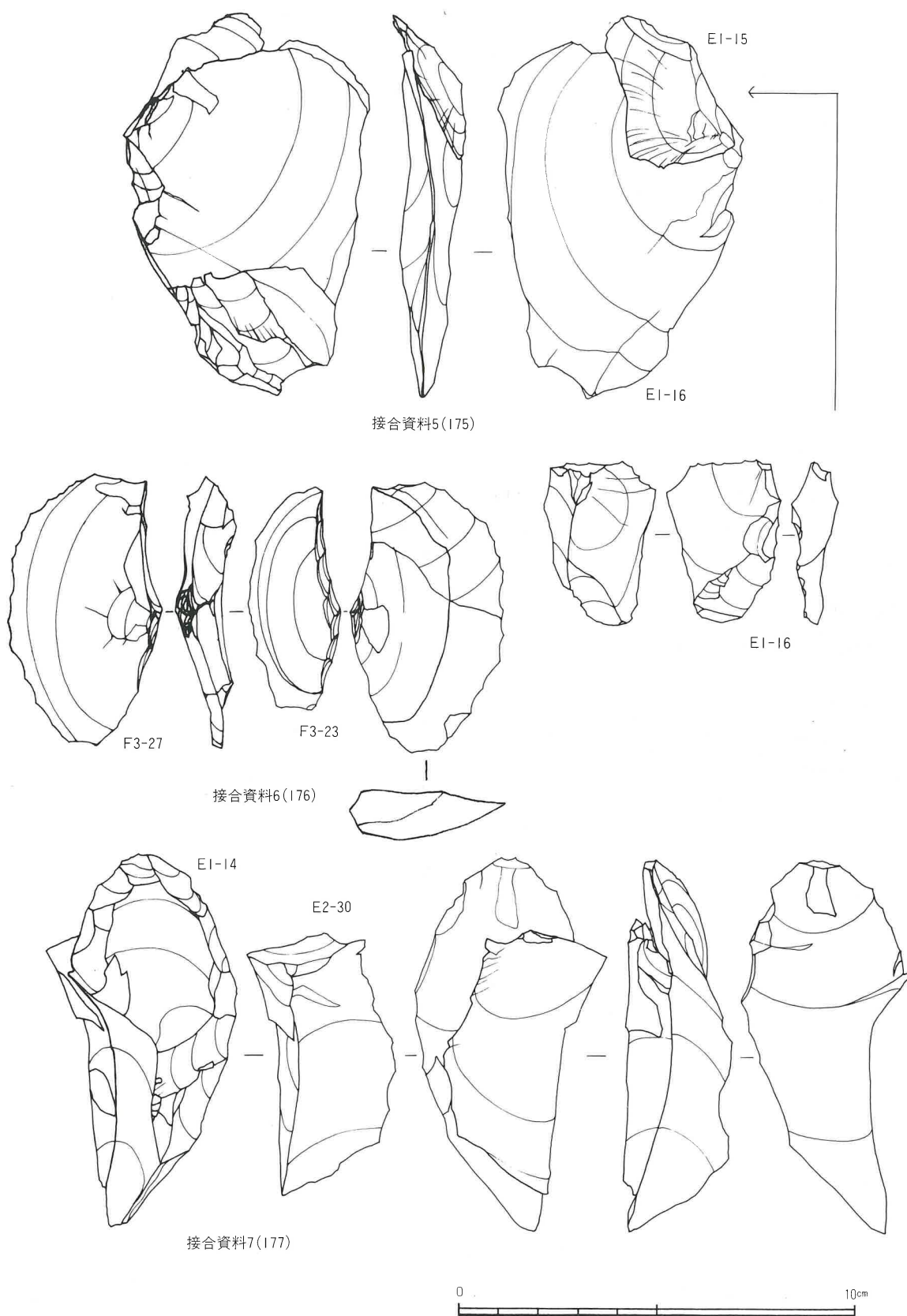


接合資料3(173)

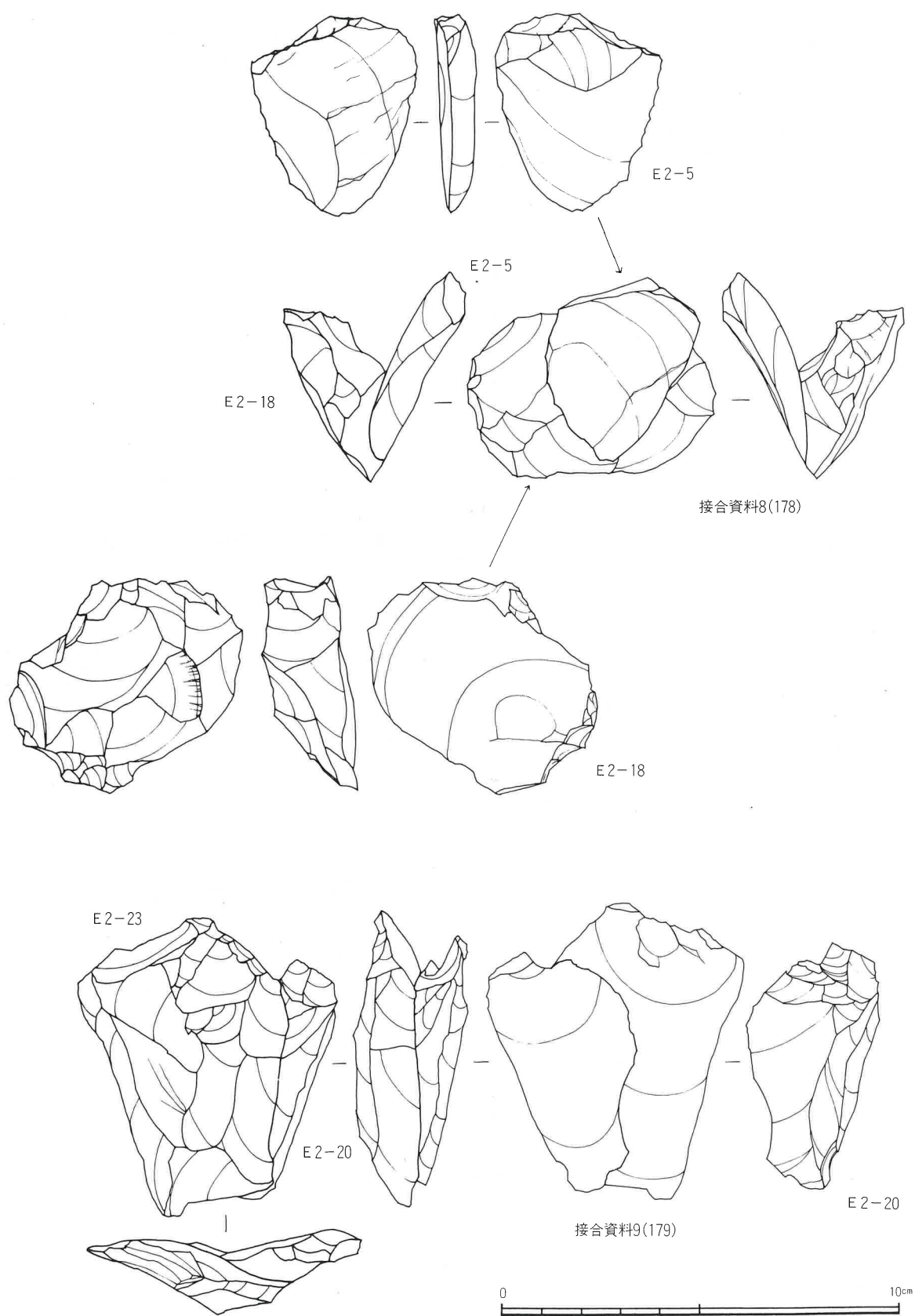


接合資料4(174)

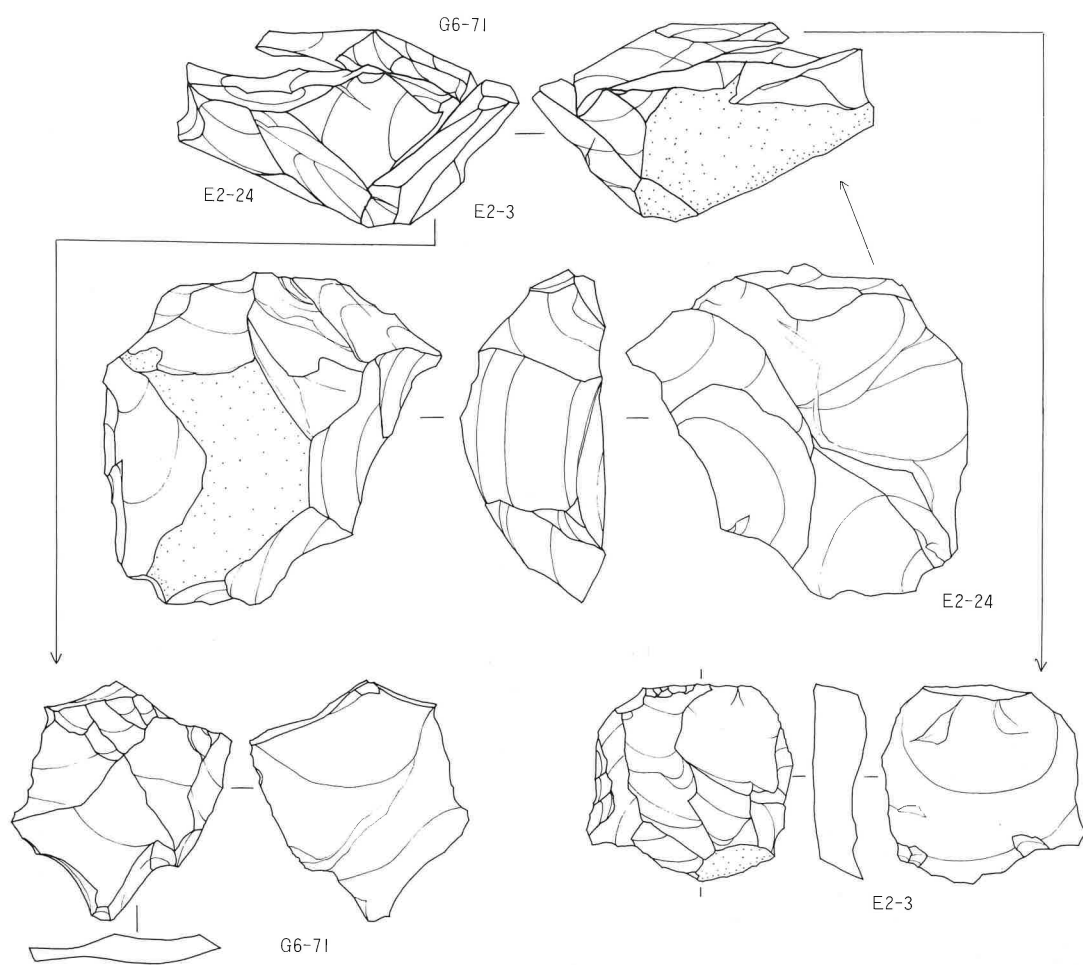
第102図 接合資料実測図(2)



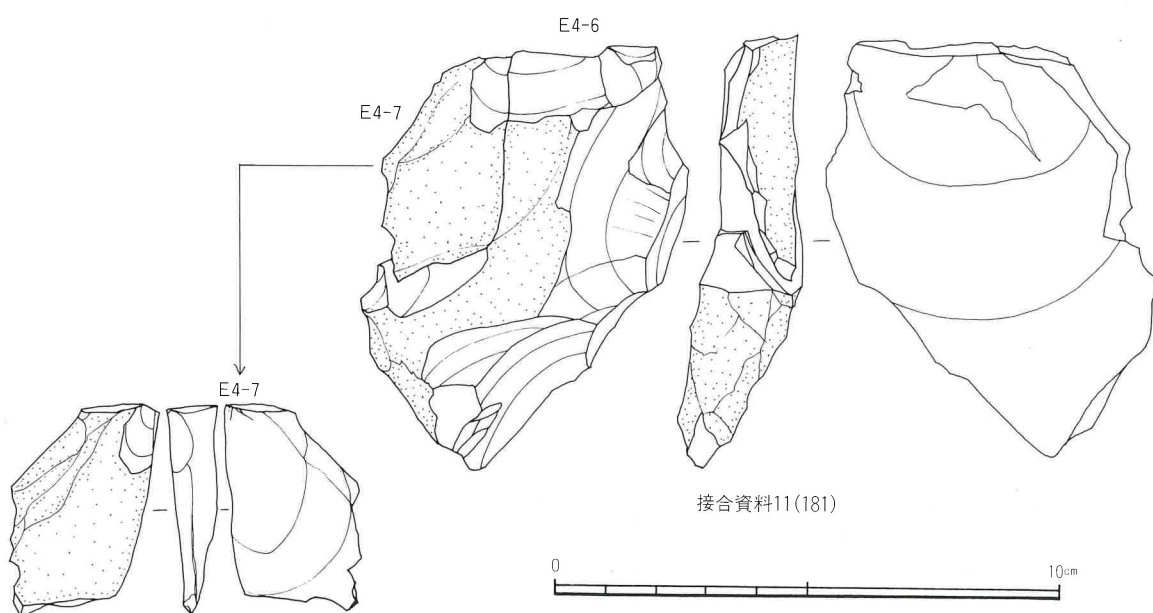
第103図 接合資料実測図(3)



第104図 接合資料実測図(4)



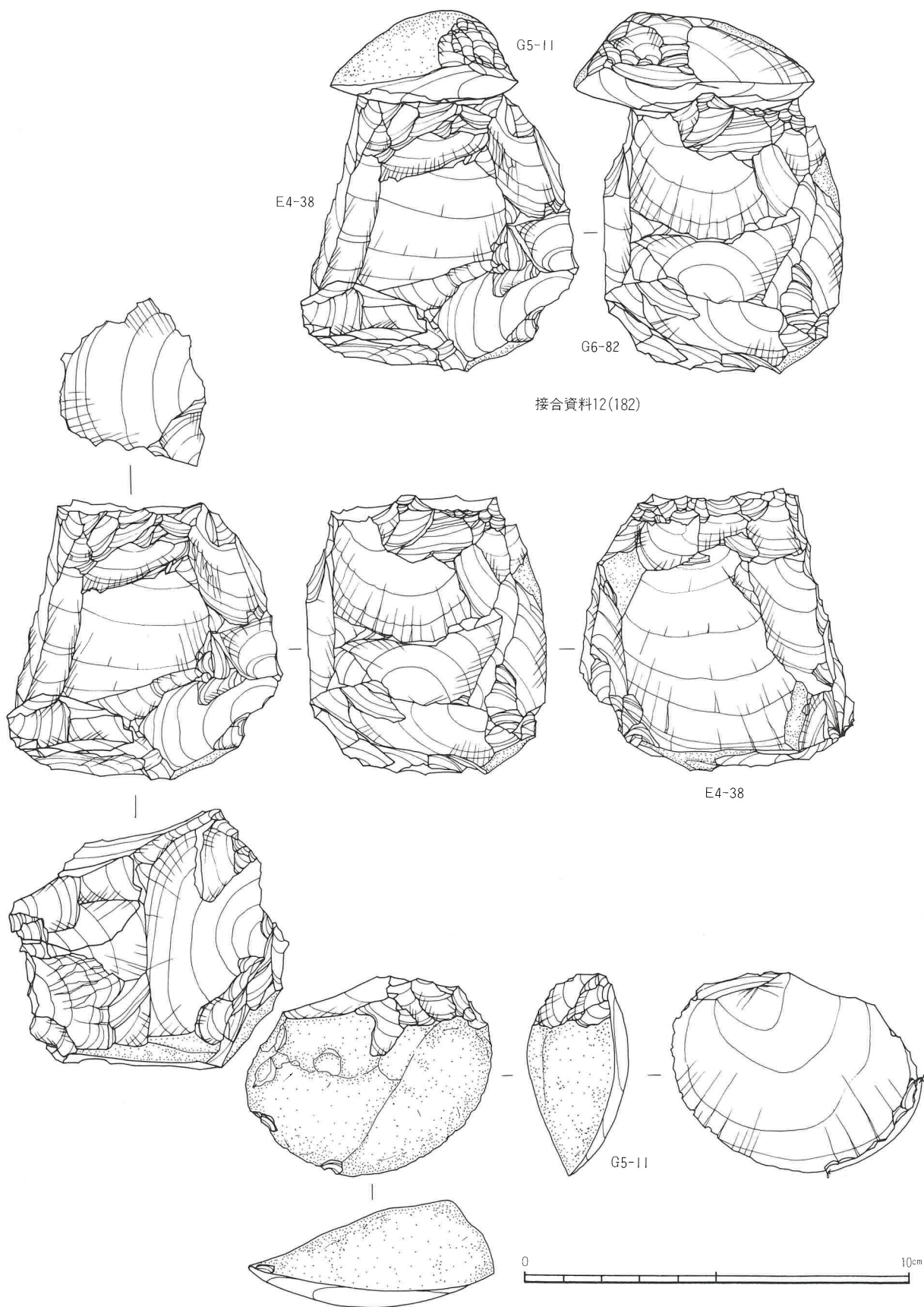
接合資料10(180)



接合資料11(181)



第105図 接合資料実測図(5)

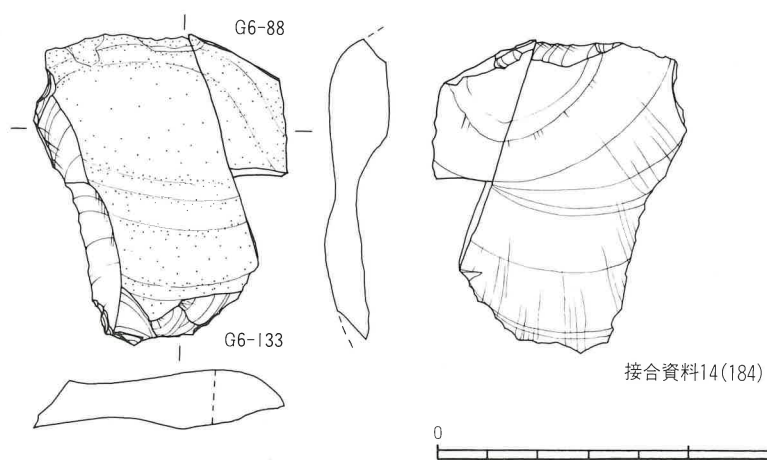
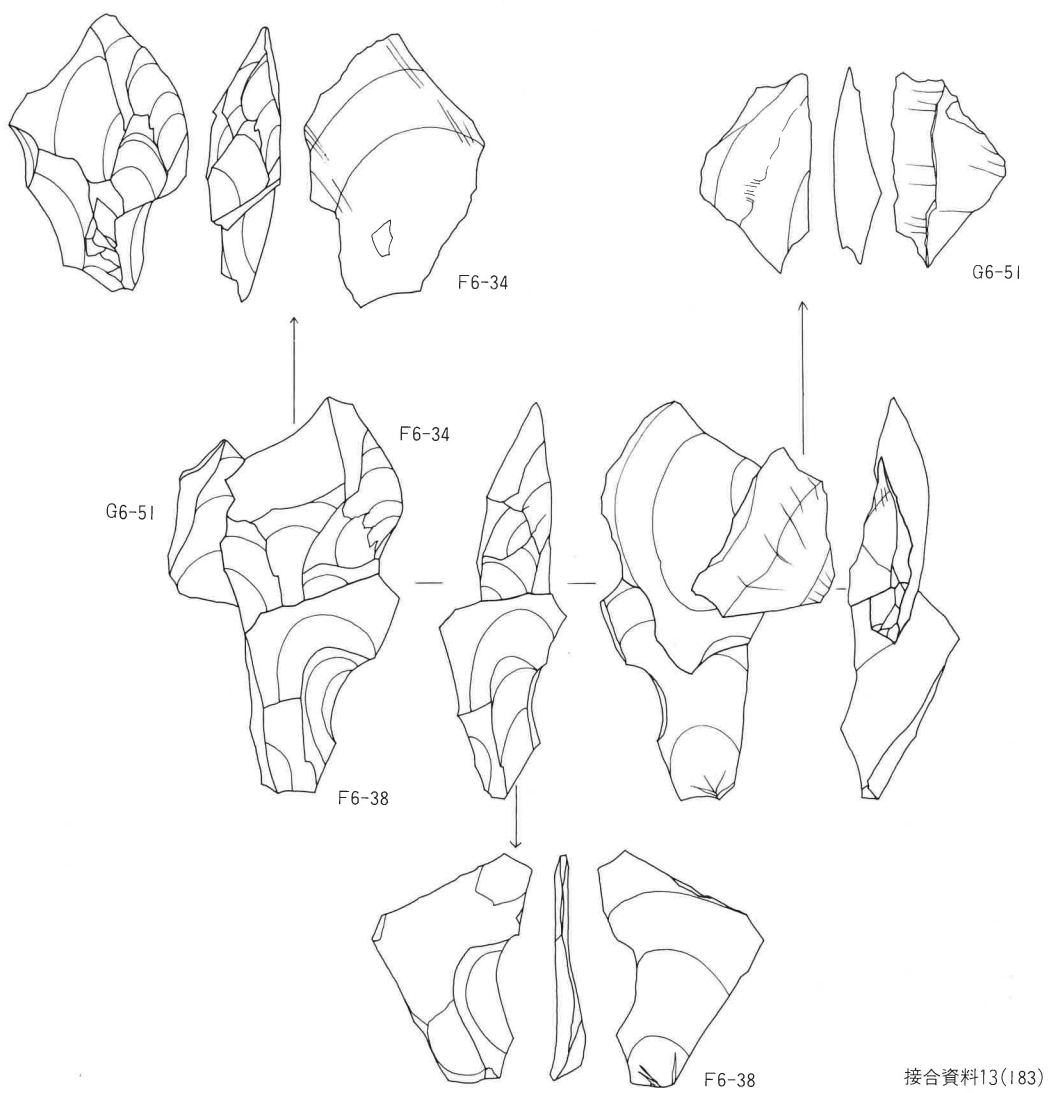


接合資料12(182)

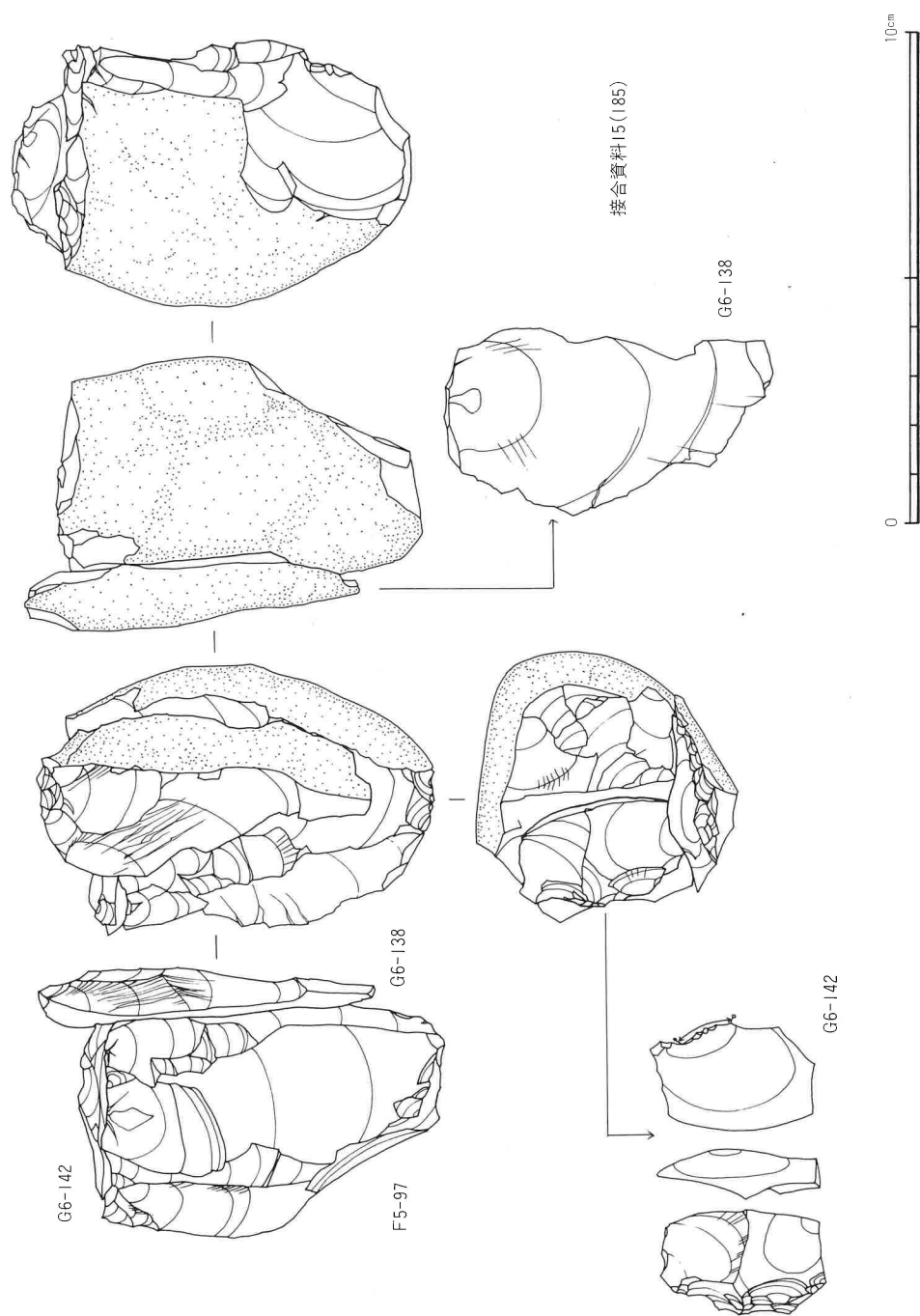
E4-38

G5-11

第106図 接合資料実測図(6)

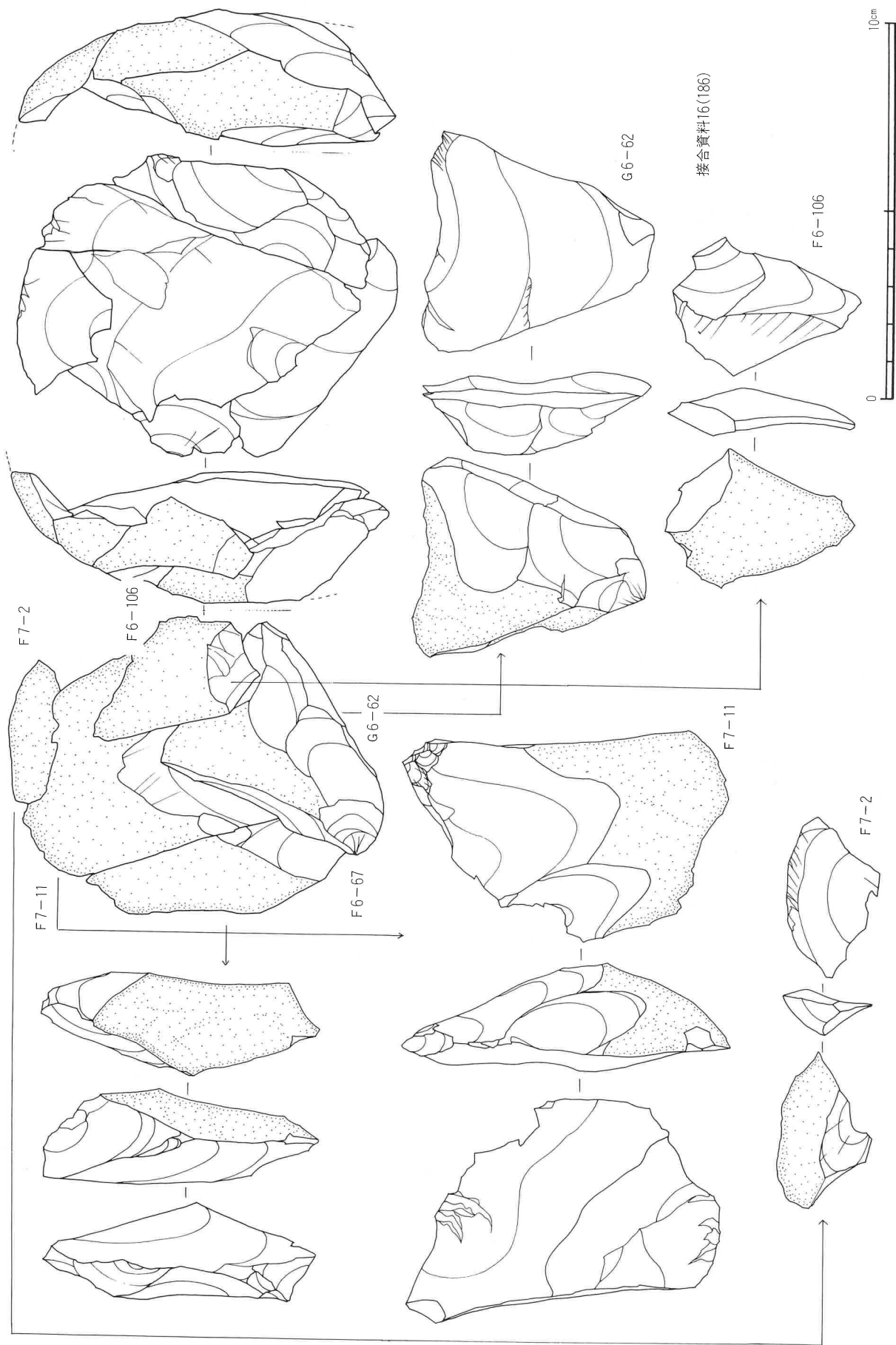


第107図 接合資料実測図(7)

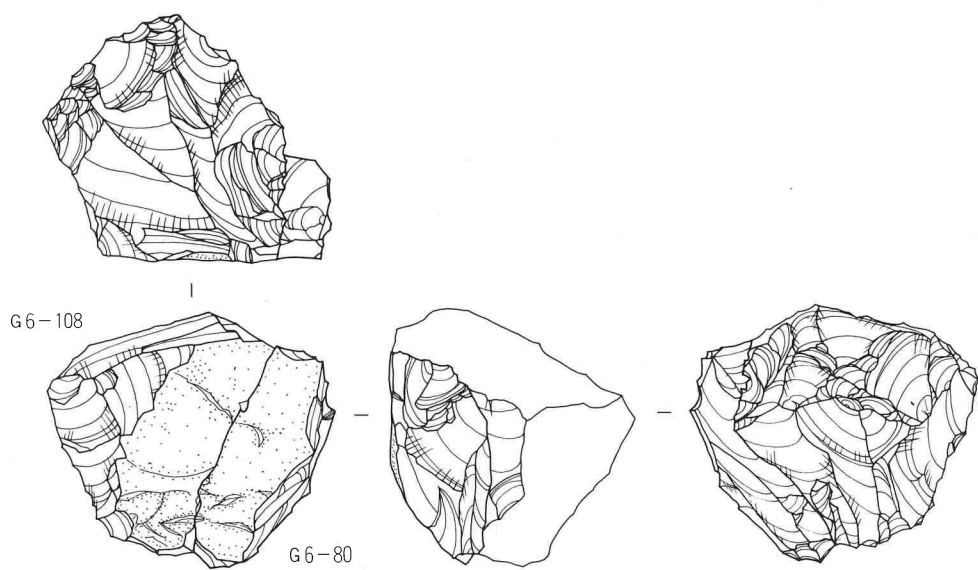


接合資料15(185)

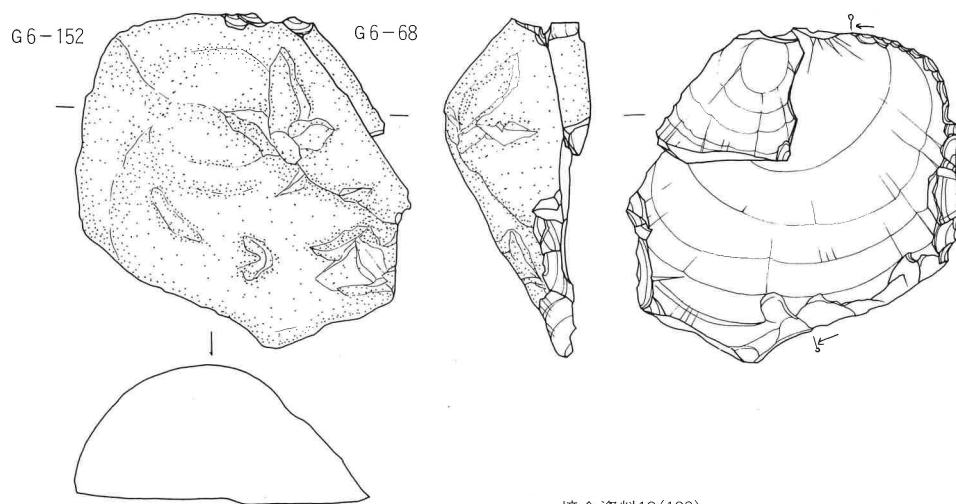
第108図 接合資料実測図(8)



第109図 接合資料実測図(9)



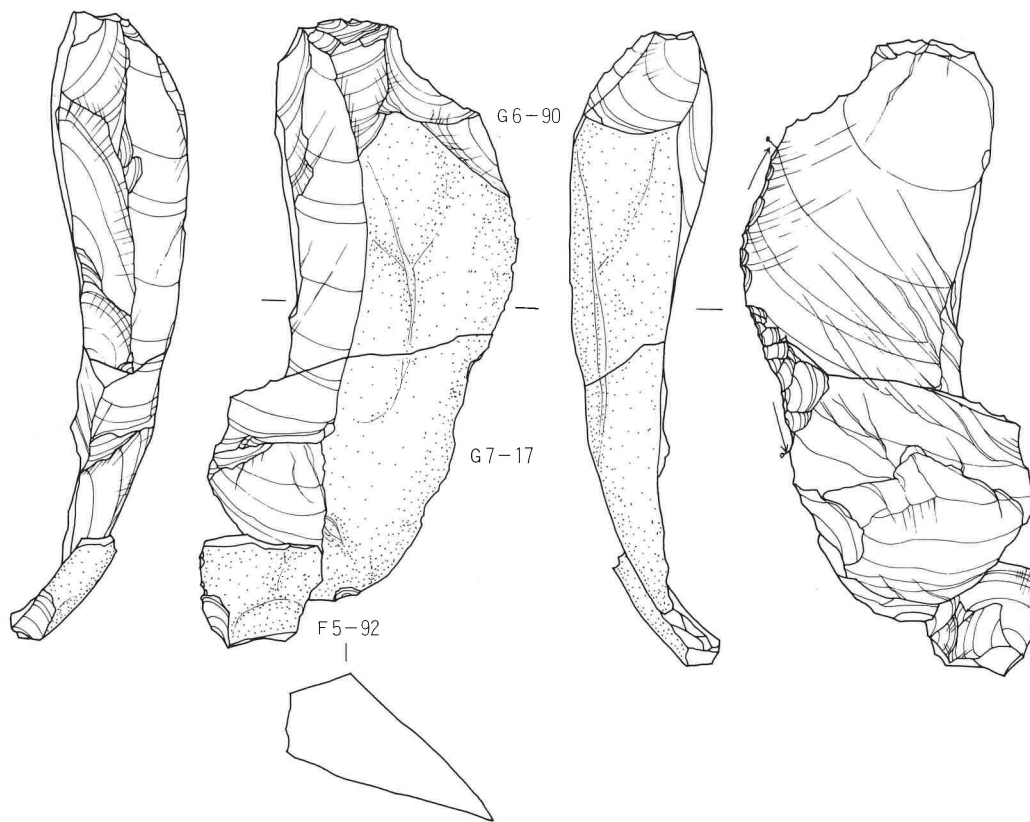
接合資料17(187)



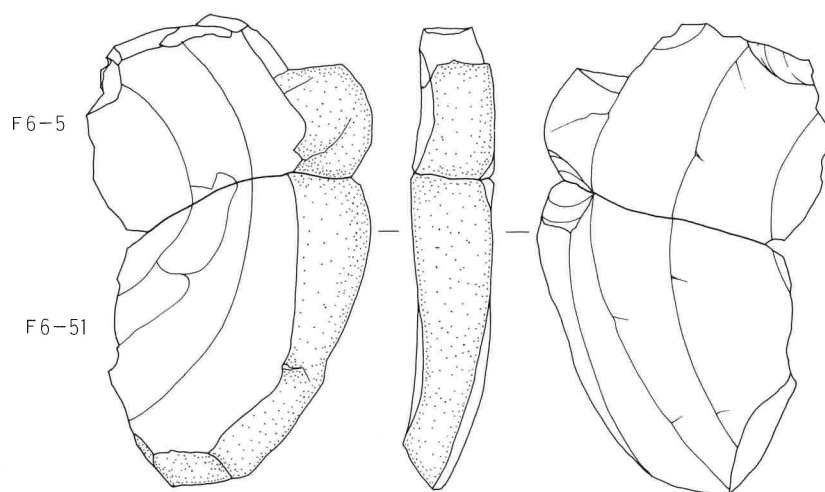
接合資料18(188)



第110図 接合資料実測図(10)



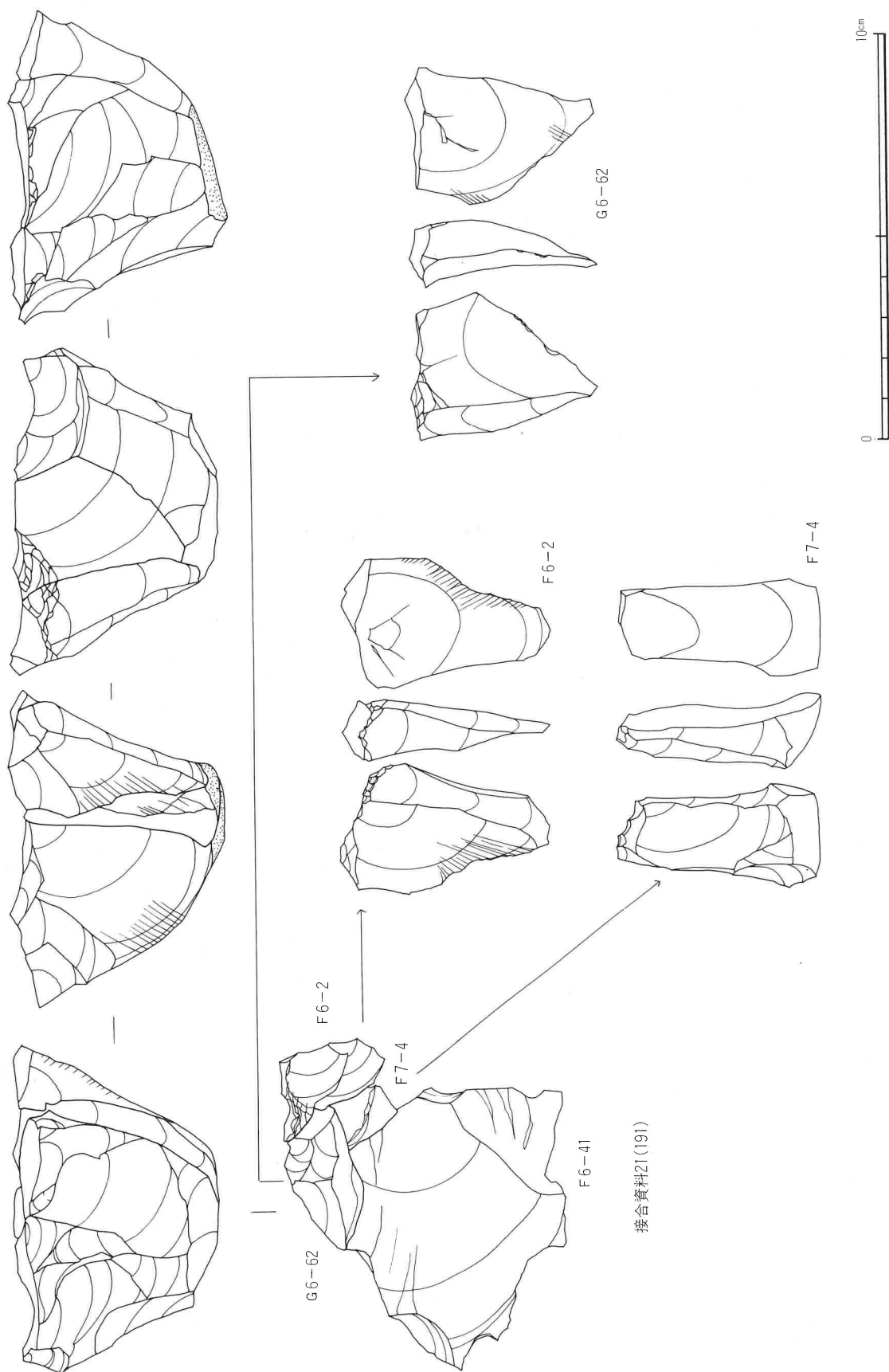
接合資料19(189)



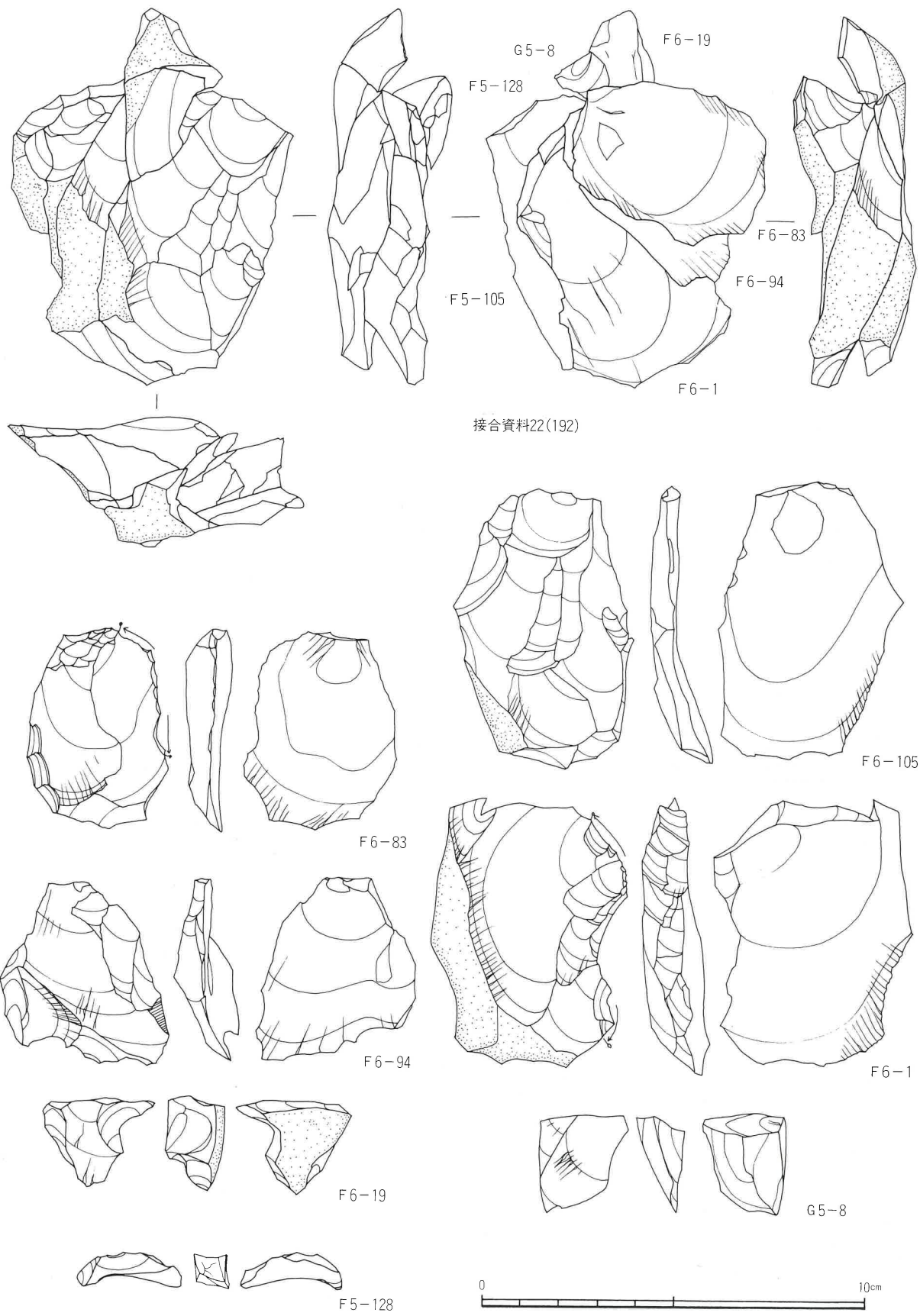
接合資料20(190)



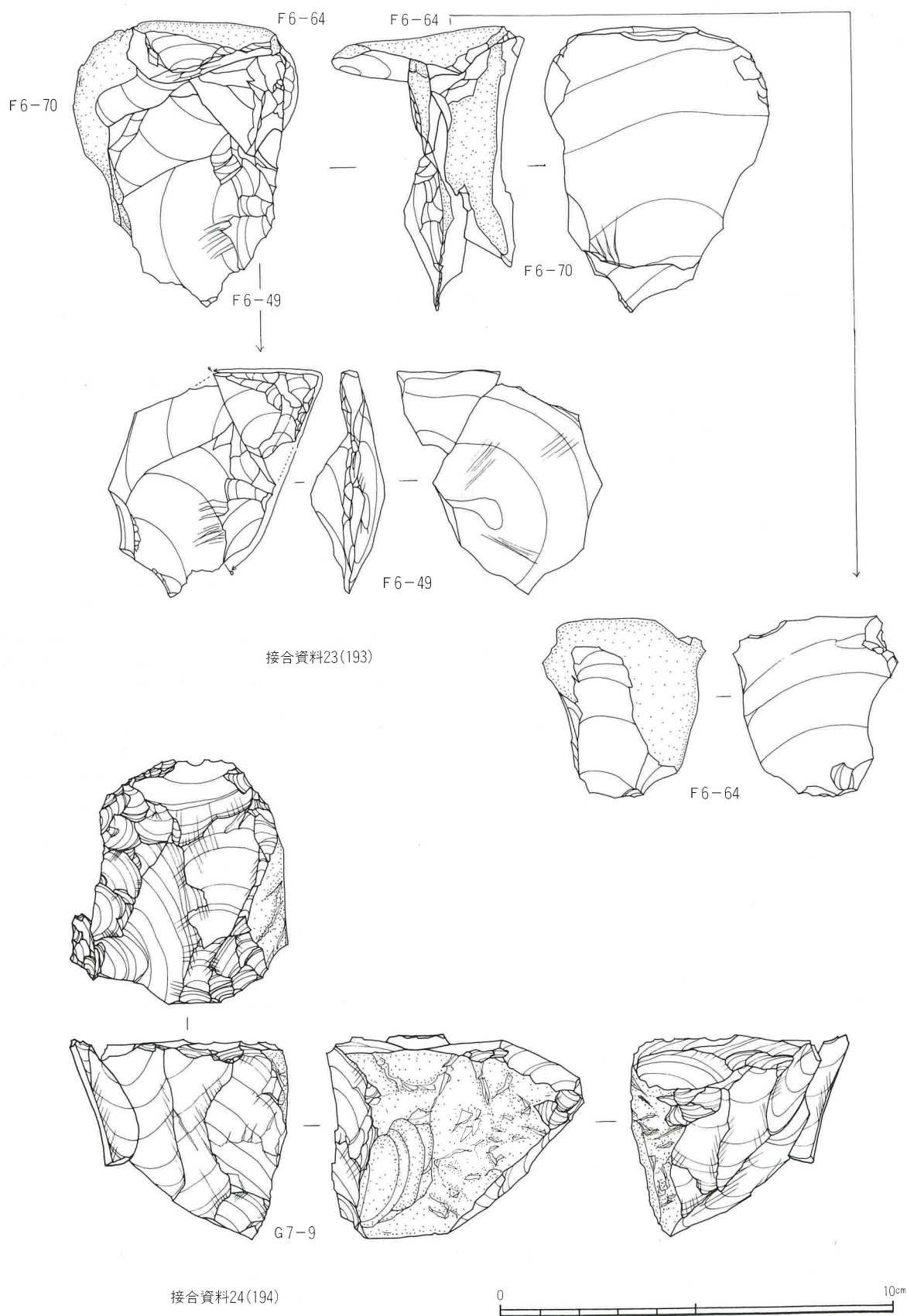
第111図 接合資料実測図(11)



第112図 接合資料実測図(12)



第113図 接合資料実測図(13)



第114図 接合資料実測図(14)

8 K区の調査

1) 調査の概要

毘沙門川の流れる深い谷部に南東方向から張り出す舌状台地の先端部分が調査対象区である。当地区は大分インターチェンジの中央部分に当たる

現況は、蜜柑畑が広がり一部に宅地がある。さらに第2次大戦中この付近が演習場として使用されていたことがあり、プライマリーな層が確認できる場所は限定された。

調査は台地の先端部分を中心に行い旧石器の包含層・弥生時代後期の土坑が1基・時期不明の焼土の入った土坑とそれに伴うものと思われるピット群が確認された。

2) 遺構と遺物

旧石器時代の遺物

旧石器はJ区と同じ層中からのみ出土している。G-7グリッド、F-6～F-7グリッドにおいて確認された石器群は一つの大きな石器ブロックと考えられる。

石器の分布を見ると、総点数110点のうちツールが5点、石核が3点ありブロックにまんべんなく広がる。

ナイフ形石器 (第117図 1・2)

2点出土した。1は縦長剥片を素材として用い、2側縁を打ち欠いて整形している。基部側には剥片剥離時のバルブが残っている。2は縦長剥片の1側縁にブランディングを施している。

使用痕のある剥片 (第117図 3)

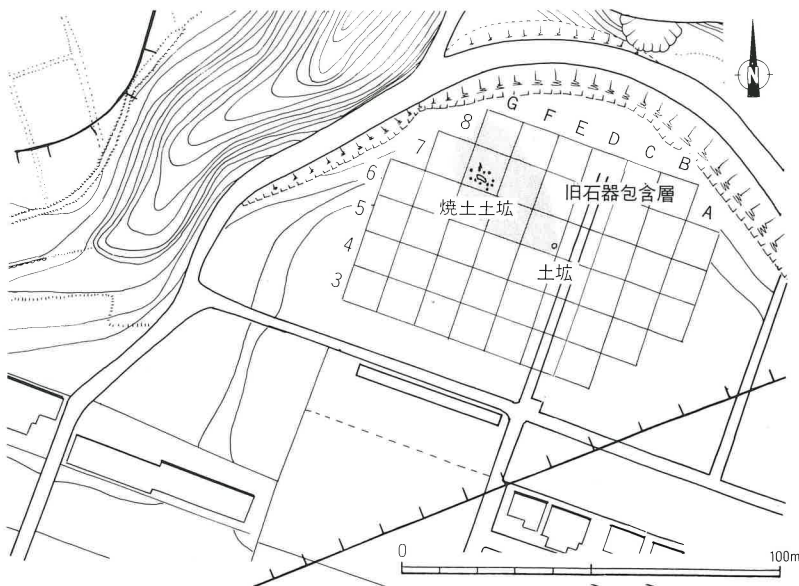
縦長剥片を素材としてほぼ全周にわたって縁片に使用痕が観察される。

スクレイパー (第117図 4)

4は幅があり、比較的重量のある縦長剥片を素材として、打面側を除いてほぼ全周に細かい刃部加工を施す。エンドスクレイパーに分類される。

石核 (第118図 14～16)

14は、打面を一部45度回転させて縦長剥片や不定形な剥片を剥離した例。



第115図 K区および周辺地形図

挿図番号	器種	出土グリッド	出土層	石材	全長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	k n i	F7-17	Ⅳ層	流紋岩	3.5	1.7	0.7	3.2
2	s c	G7-39	Ⅳ層	流紋岩	5.3	2.0	0.9	10.3
3	u f	K区一括	Ⅳ層	流紋岩	3.7	1.7	0.9	5.5
4	s c	F7-64	Ⅳ層	安山岩	7.1	5.1	1.9	74.0
5	f	F7-48	Ⅳ層	流紋岩	7.4	2.8	1.4	31.9
6	f	F7-39	Ⅳ層	流紋岩	10.9	4.3	1.6	78.2
7	f	G7-18	Ⅳ層	流紋岩	6.9	4.5	1.4	59.3
8	f	F7-62	Ⅳ層	流紋岩	6.5	2.4	1.4	12.4
9	f	G7-12	Ⅳ層	流紋岩	5.2	3.1	0.7	13.0
10	f	G7-16	Ⅳ層	流紋岩	6.3	3.9	1.9	38.6
11	f	G7-8	Ⅳ層	流紋岩	7.5	3.4	1.0	28.5
12	f	F6-19	Ⅳ層	流紋岩	5.3	1.7	0.6	10.5
13	f	F7-25	Ⅳ層	流紋岩	7.0	2.3	1.6	23.4
14	c	F6-5	Ⅳ層	流紋岩	2.7	3.7	3.0	43.3
15	c	F7-11	Ⅳ層	流紋岩	7.0	3.6	2.7	76.0
16	c	G7-72	Ⅳ層	流紋岩	5.9	7.2	4.3	219.8

第76表 K区出土石器計測表

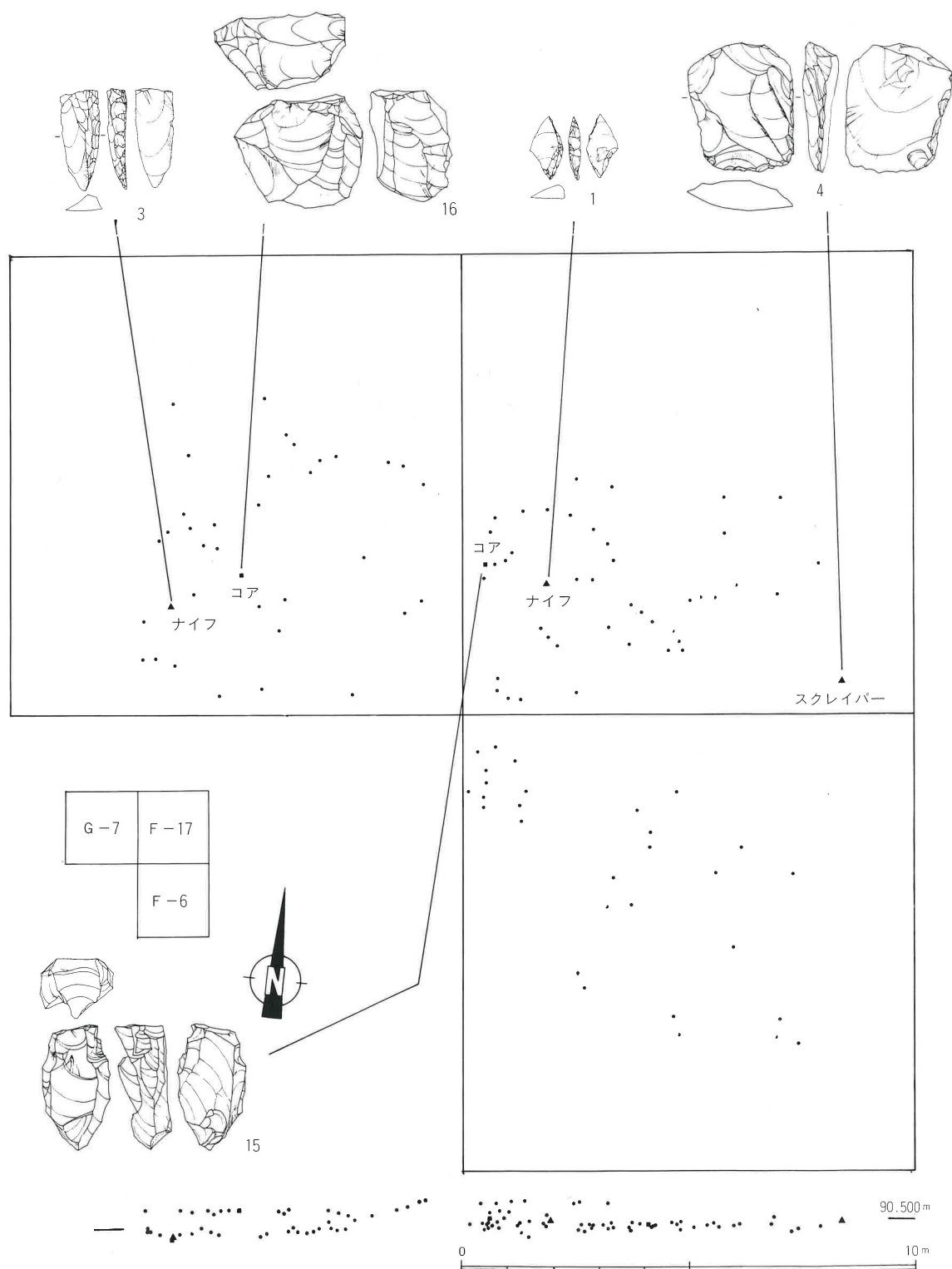
※ k n i ナイフ形石器 f 剥片
s c スクレイパー c 石核
u f 使用痕のある剥片

15は、不定形な剥片に打面を作り出し一方向から縦長剥片を剥離した残核。

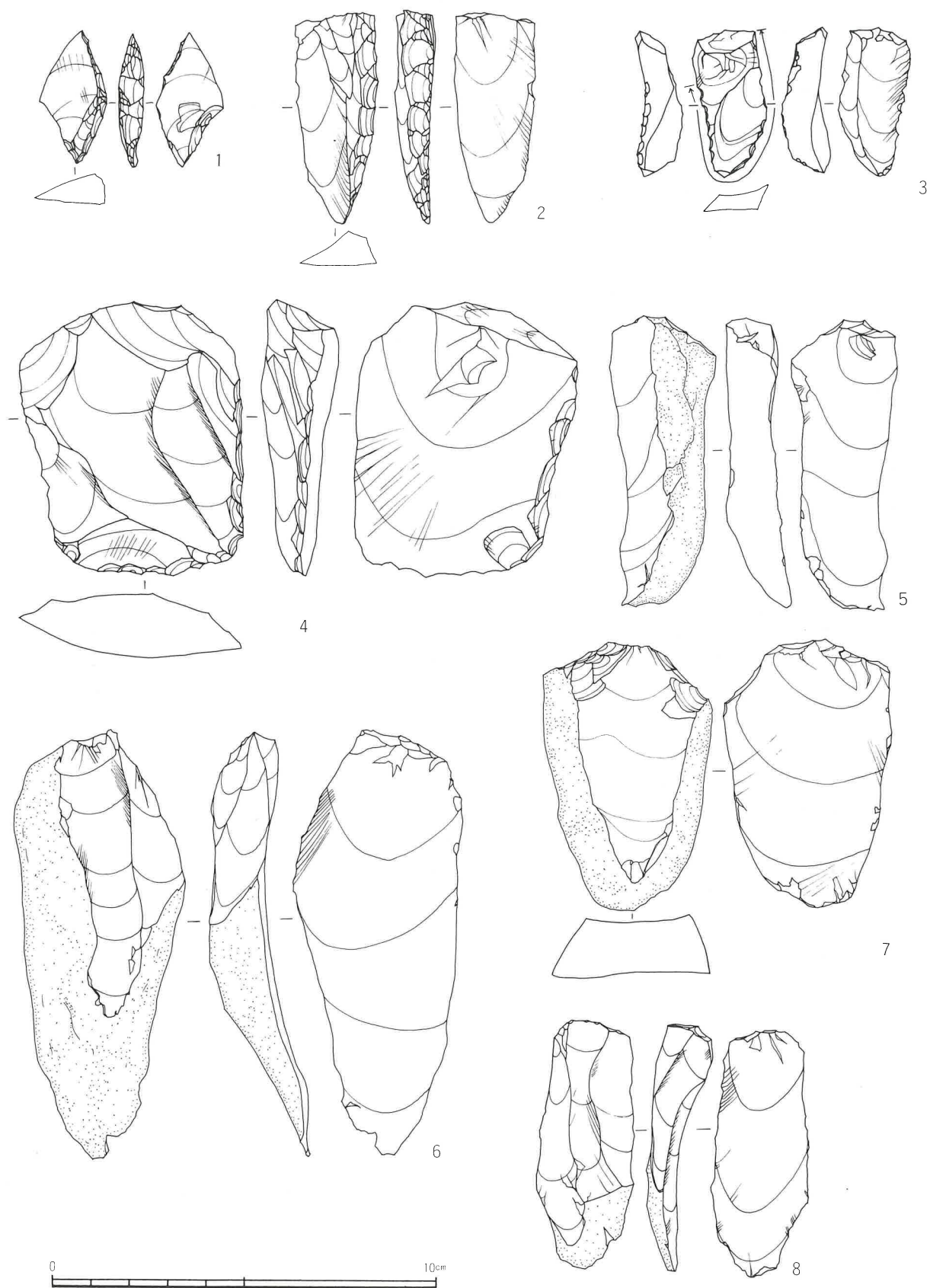
16は、台形状の石核で全面において縦長剥片を剥離している。

剥片（第117図5～8 第118図9～13）

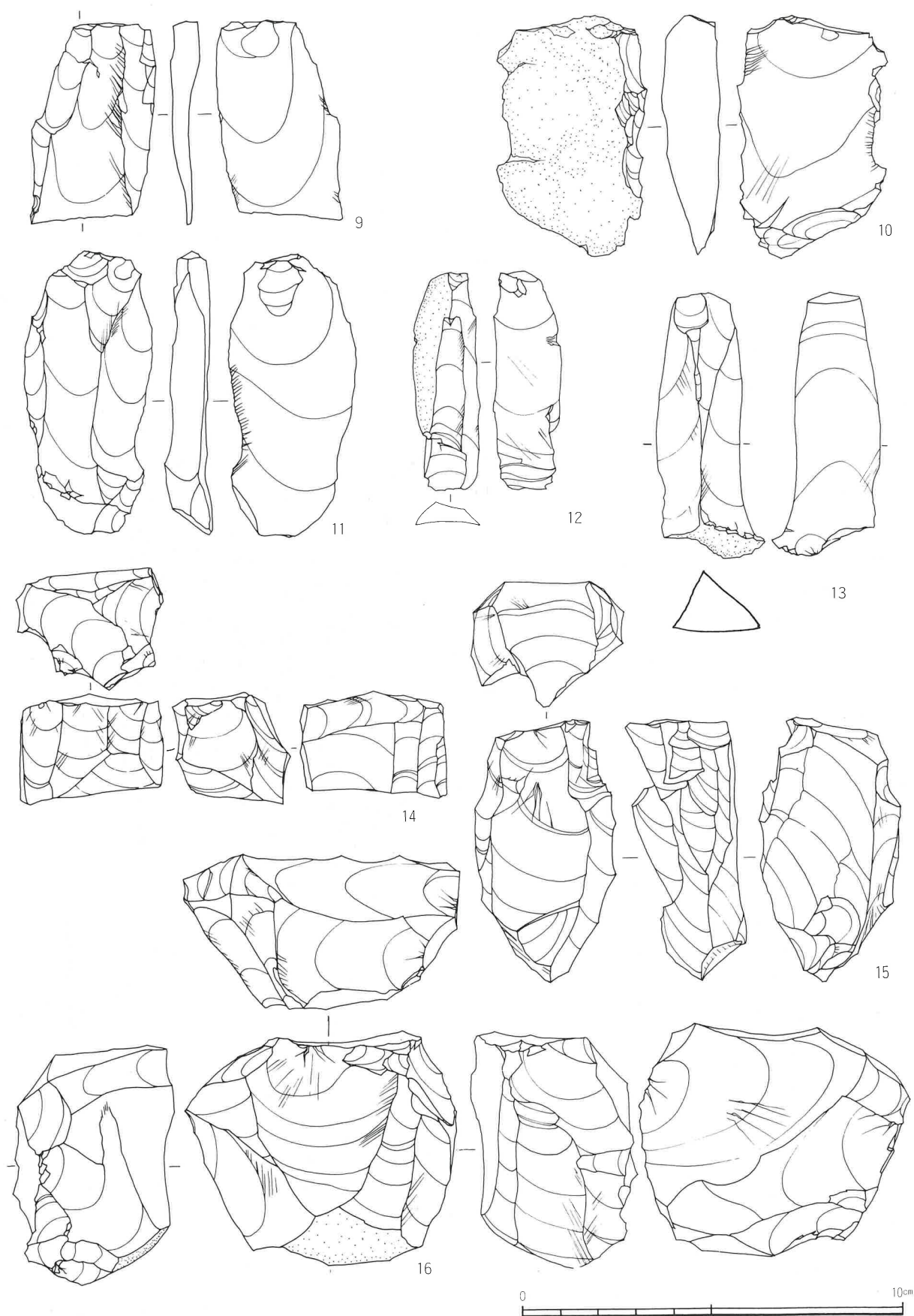
剥片に一部自然面が残るものが比較的多く出土している。第1次の調整剥片と思われる。剥片は大部分が縦長剥片である。



第116図 K区出土旧石器分布図



第117图 旧石器实测图(1)

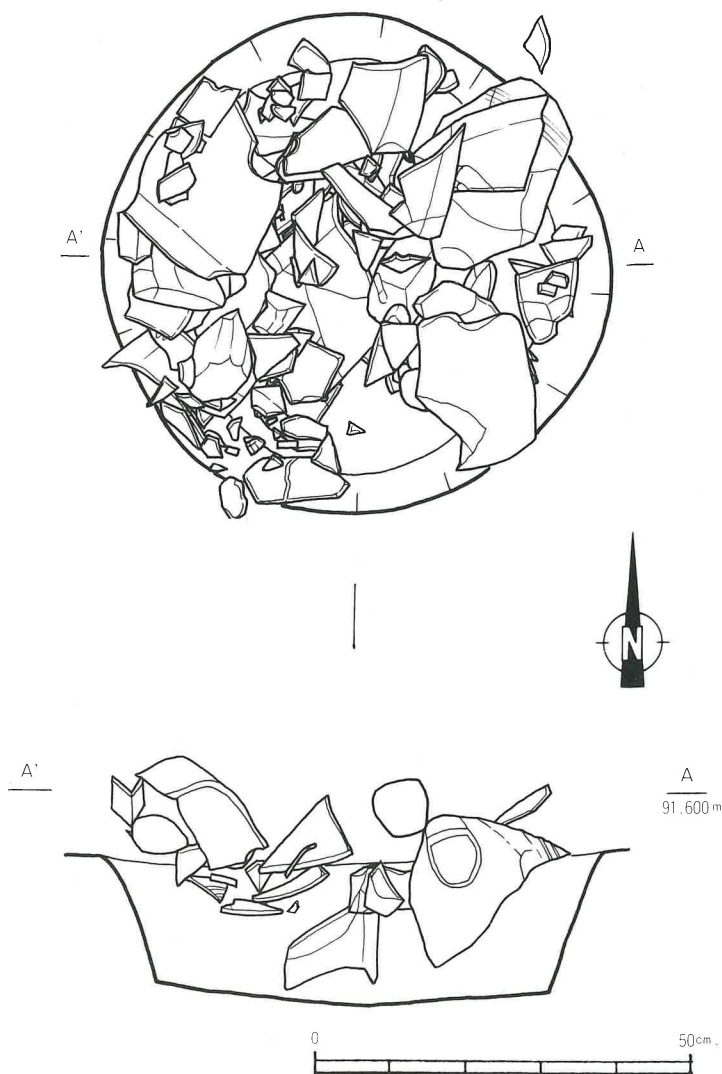


第117图 旧石器实测图(2)

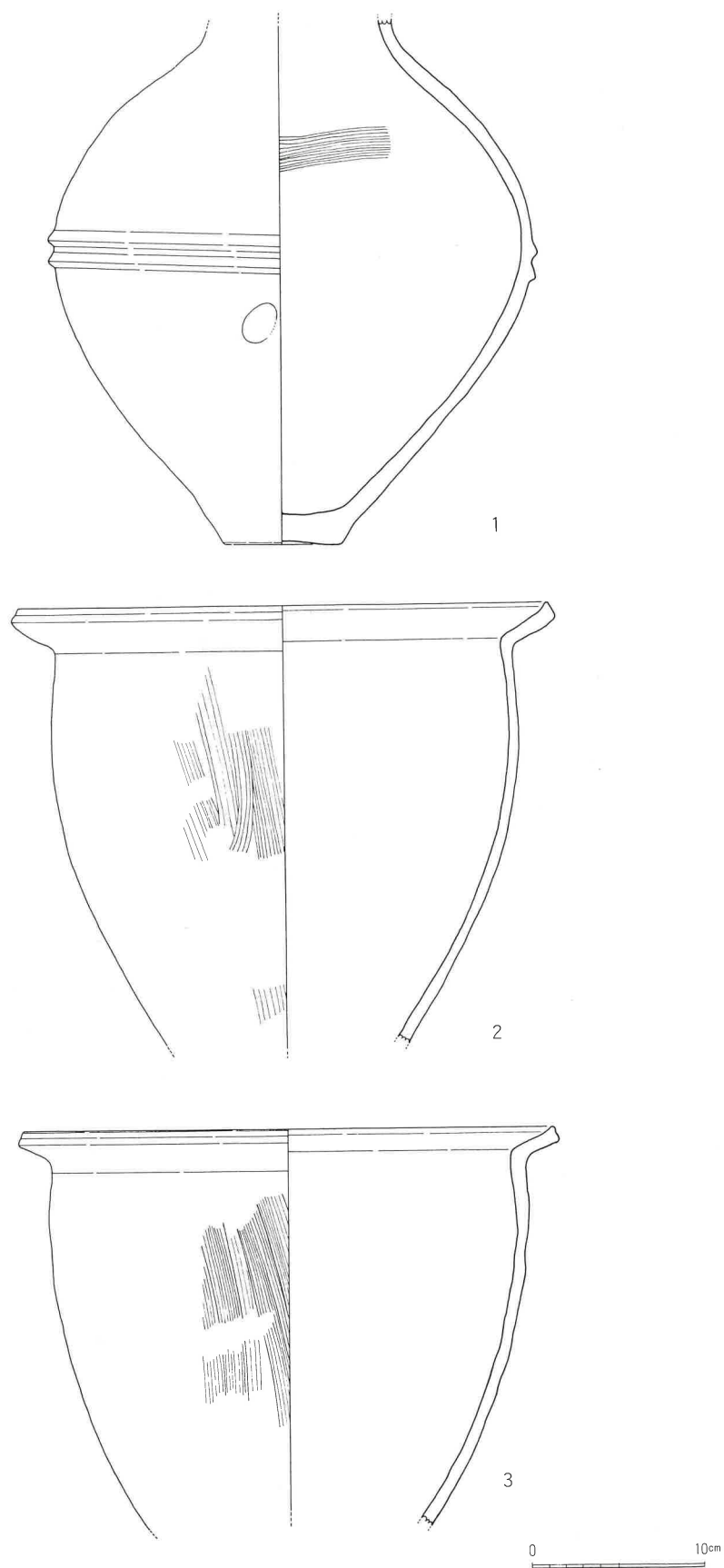
弥生時代の遺構と遺物

E-6 グリッド南東部で土坑が1基検出された。土坑は長軸が70cm、短軸が65cmとほぼ円形で、深さは20cmで底面はフラットに作られる。内部から壺、甕が出土した。遺物の出土状況から、住居跡等に伴う廃棄用の土坑と推定される。

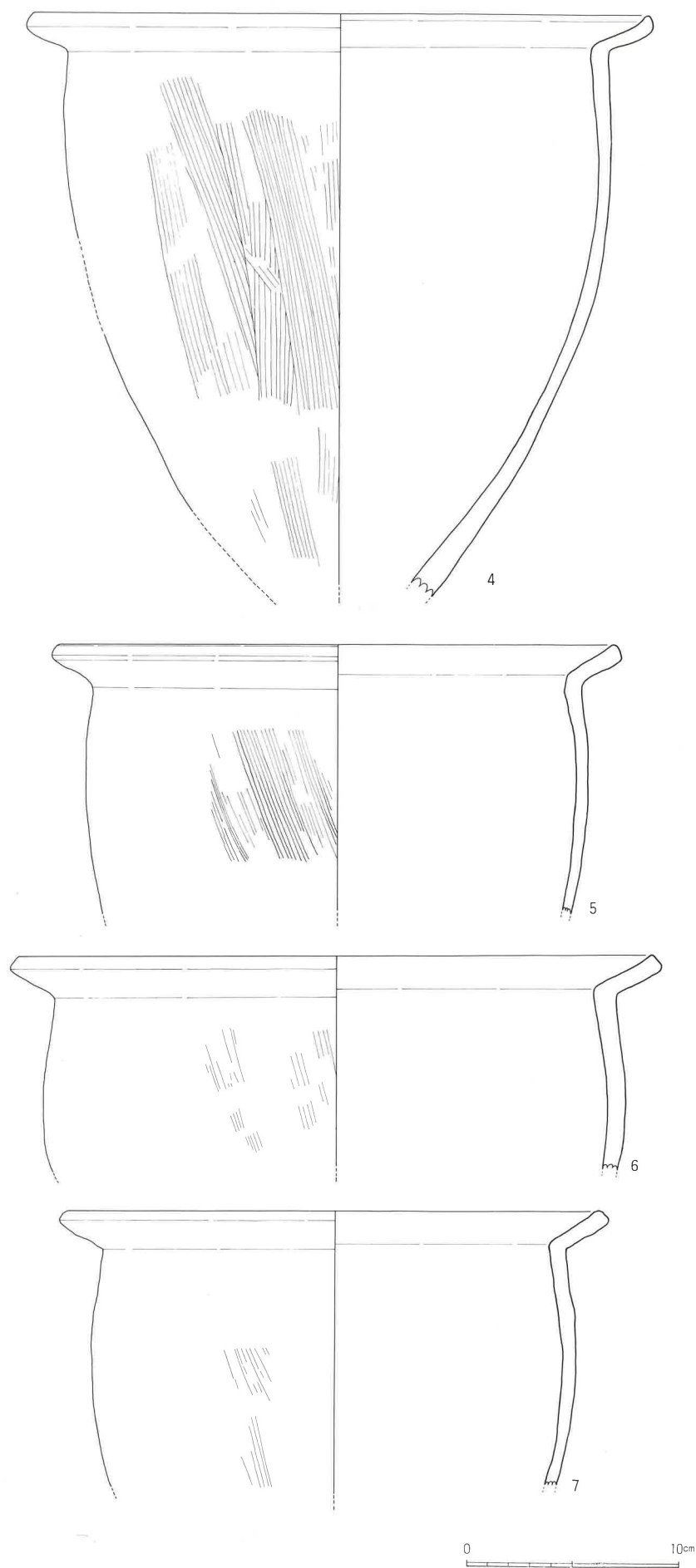
遺物は第120図～第122図に示した。1は壺で、頸部のくびれ部分から緩やかに張り出して最大径が胴部の中位に来る。そこに断面三角形の突帯を2条巡らしている。そこから緩やかなカーブを描きながら若干くびれつつ底部へと続く。底部は平底でわずかに上げ底気味である。現存高は30cm、最大径28cm、底径6.7cmを測る。なお胴部下半部に外面から2.5cm×2cmの小孔が穿たれている。調整は外面ヘラミガキ、内面は刷毛後ナデ、底部はナデ。さらに外面には赤色顔料を塗布している。2～11は甕である。口縁部はやや長めで「く」の字状に外反し、端部を跳ねあげている。胴部は最大径が口縁部直下にあり、あまり張らずに底部へと続く。口径は32cm、胴部最大径28cmを測る。外面には刷毛目後ナデ、内面はナデを施す。3は、「く」の字状に外反する口縁部が肥厚しながらやや長めに作られ、端部を跳ねあげている。胴部の最大径は1に比べてやや下位にある。ほとんど張らない胴部が直線的に底部へとつながっていく。口径は31cm、胴部最大径は27cmを測る。調整は外面は荒い刷毛を施した後ナデ、内面はナデである。また外面には一部に煤が付着している。4は、「く」の字状に伸びる口縁部がやや強めにつまみあげられている。胴部はほとんど直線的に伸び、中位からやや強いカーブで内湾しながら底部へと続く。口径は30cm、胴部最大径は25cmを測る。調整は外面は刷毛後にナデ、内面はナデ、また外面には一部に煤が付着している。5～7は、口縁部が「く」の字状に外反し端部を平坦に仕上げたものである。胴部は1のように若干張り気味で器壁も次第に薄くなる。5は口径27cm、胴部最大径24cm、調整は外面刷毛後ナデ、内面ナデ、6は口径30cm、胴部最大径28cm、調整は外面荒い刷毛後ナデ、内面ナデ、7は口径26cm、最大径23cm、調整は外面荒い刷毛後ナデ、内面ナデである。8は口縁部がL字状に大きく外反するものである。口縁端部はつまみあげられ直線的に伸びる胴部へと続く。復元口径32cm、調整はナデである。9は、「く」の字状に外反して端部をつまみあげられている。胴部は2～8にくらべやや強めに張る。最大径も胴部のほぼ中位にある。口径は32cm、胴部最大径30cmで、調整は外面刷毛後にナデ、内面はナデである。また外面の一部に煤が付着している。10は、甕の底部である。底部は2.5cmの厚さで胴部に直線的に広がる。11は鉢で、口縁部が端部付近でわずかに外反する。胴部は直線的に伸びる。口径は25cm、調整は内外ともナデである。



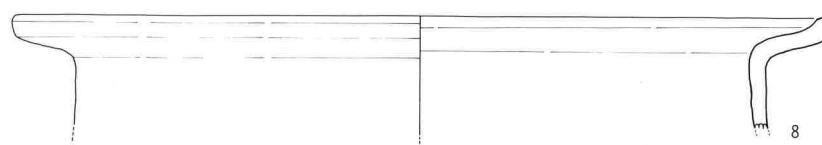
第119図 土坑実測図



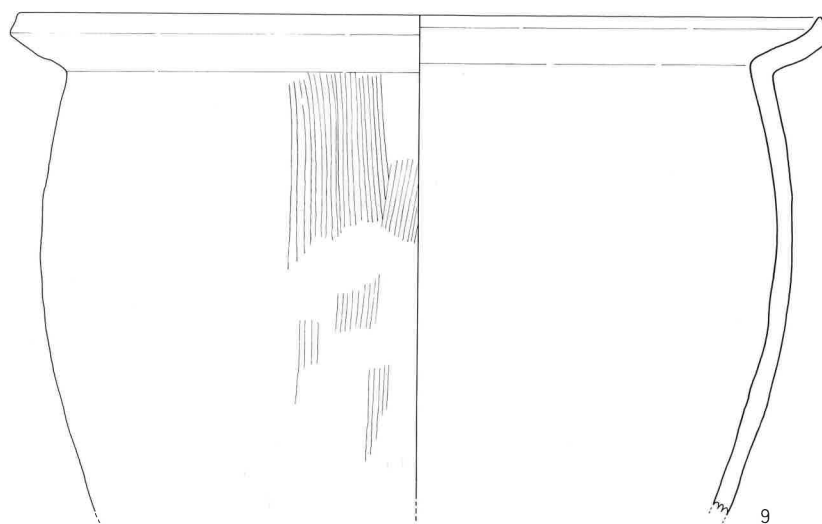
第120図 土坑内出土遺物実測図(1)



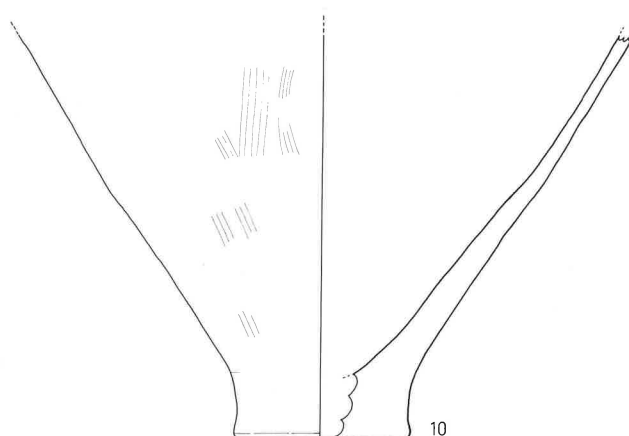
第121図 土坑内出土遺物実測図(2)



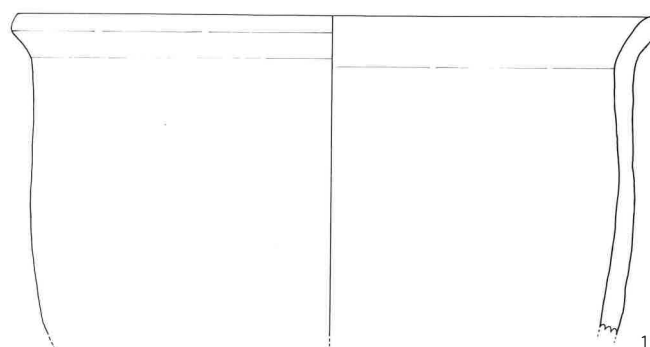
8



9



10



11



第122図 土坑内出土遺物実測図(3)

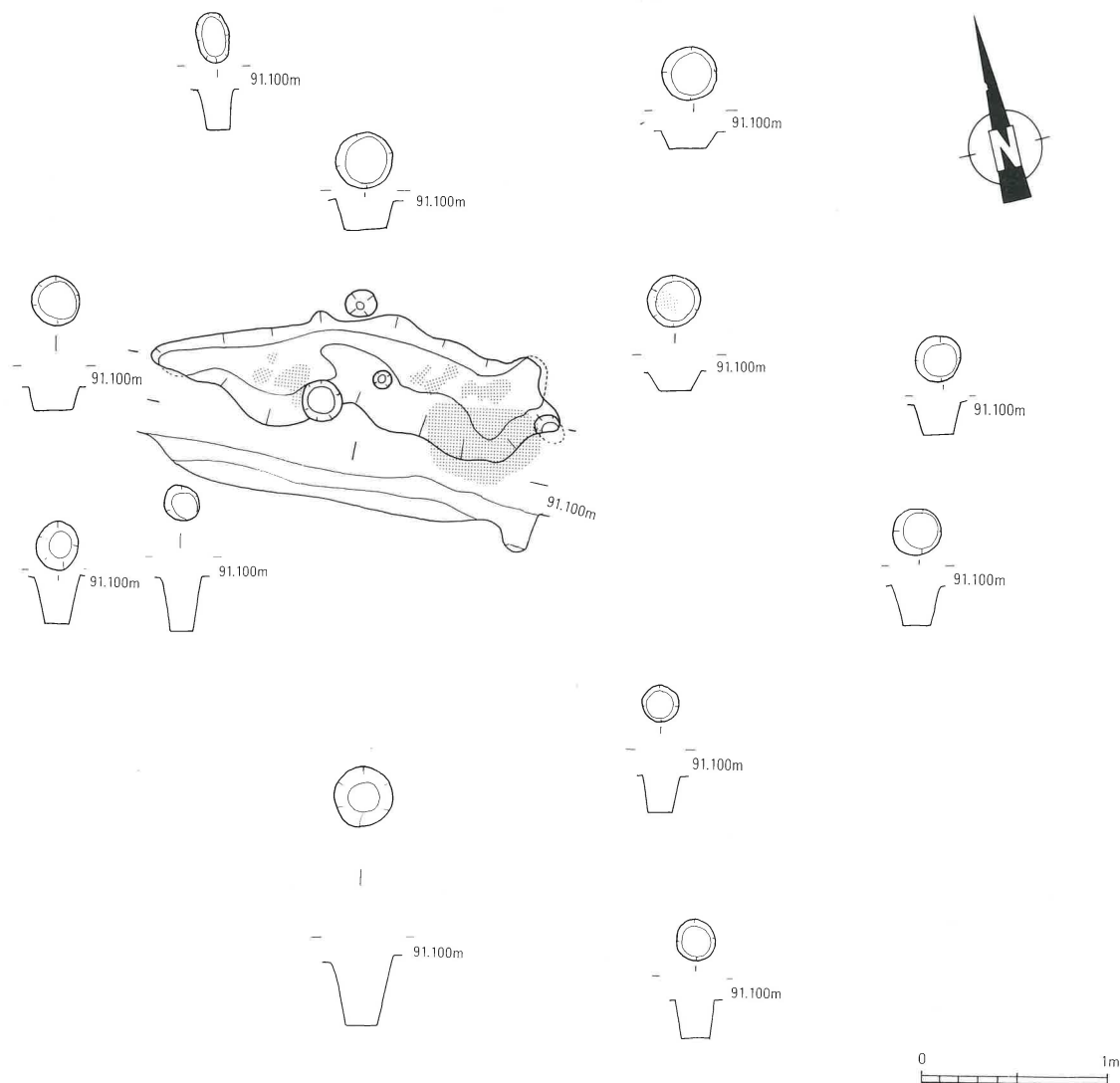
不定形焼土土坑

G-7 グリッドの南半部で検出された。東西約2.3m、南北0.6mの不定形な土坑である。深さは検出面より0.2～0.3mで焼土ブロックが3ヵ所でとまって確認された。特に東端部に広がる焼土はあたかもそこから掻き出されたかのように地山部分にも広がる。ただし土坑自体の床面は加熱によるしまりはなく、細かい焼土と共に炭化物が多く含まれる。

また、この土坑の周囲にはピットが12基掘られている。その分布状態は、この土坑を取り囲むように配置されている。この不定形土坑の上に円形の覆屋状の建物があった事も考えられる。ただし土坑内およびピット内から時期を明確にする遺物が全く出土していない。

小 結

旧石器の包含層は、隣接するJ区とほぼ同時期のものが広がることが確認された。石器製作の技法は縦長の剥片を使用する頻度が高く、庄ノ原J区と製作技法的にも同一である。弥生時代の遺構は土坑から出土した遺物から中期中葉～後半に比定される。調査ではわずかに1基の土坑が確認されたにとどまったが、このK区から東に約500mにある城南遺跡で、ほぼ同時期の住居跡群が確認されていることから、弥生時代中期～後期にかけての集落も点々と存在していたことが推察される。



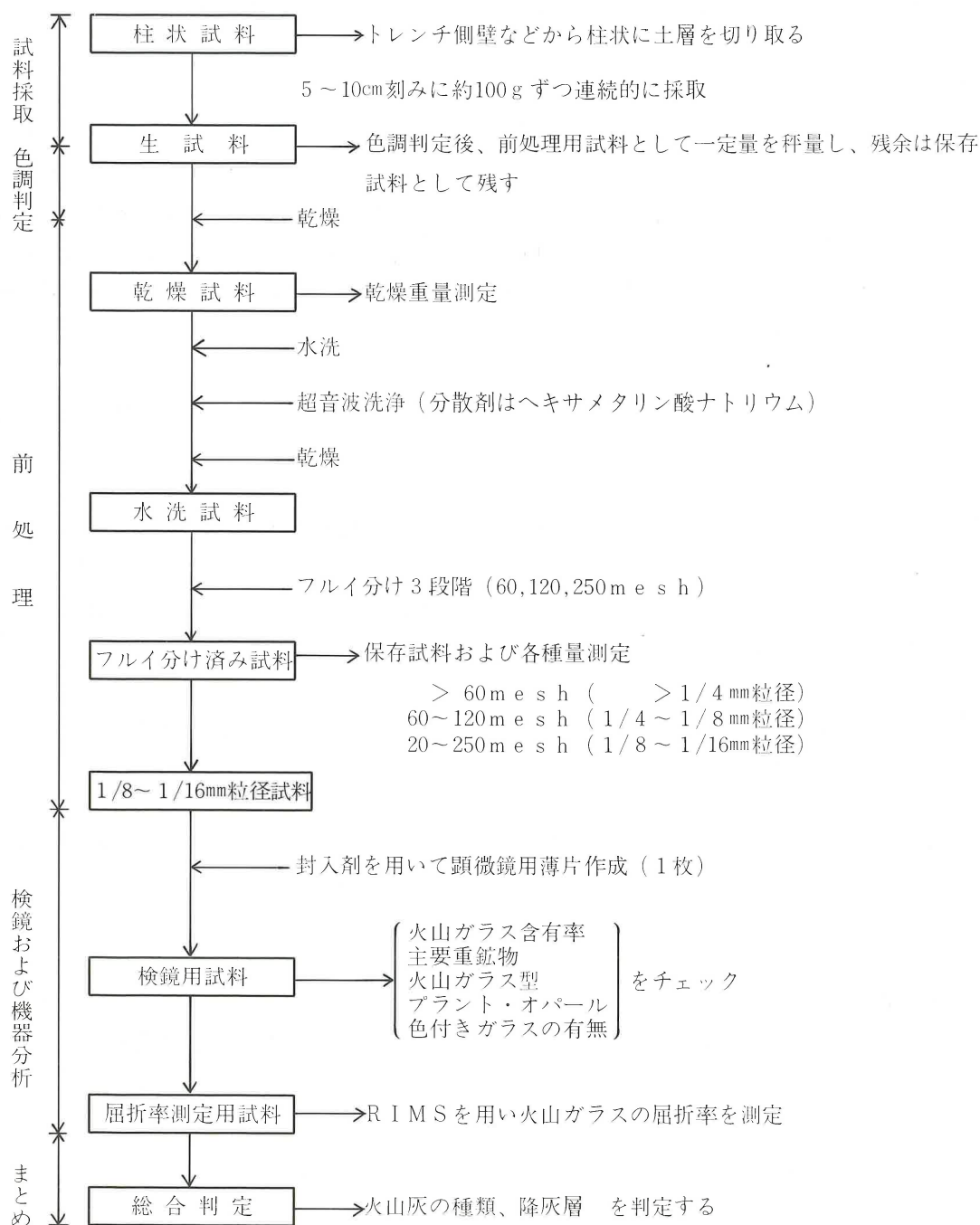
第123図 不定形焼土土坑実測図

1. 試料

今回の分析試料は、庄ノ原遺跡発掘調査地内2ヵ所において大分県教育委員会発掘担当者の手により採取された2本の土壌柱状試料である。これらの柱状試料から、さらに室内で10cmきざみに9試料と7試料の合計16試料がサンプリングされ分析に供された。なお試料の採取層準は、測定データを総合的にまとめた表1の柱状図中に示されている。

2. 分析方法

試料の分析は、以下のフローチャートに従い行った。



土壌中火山灰（火山ガラス）抽出分析処理順序表

次に処理工程について説明を加える。

(1)色調判定

未処理試料50～100 gを白紙上に取り、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修，1970）により判定表示する。

(2)前処理

まず半湿潤状態の生試料を30.0 g 秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2 ℓビーカー中で数回水替えしながら水洗し、超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度1～2％程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別（60,120,250 mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250 mesh（1/8～1/16mm）粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤（Nd=1.54）を用いて岩石用薄片を作成した。

(2)重鉱物分析

主要重鉱物（カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・アパタイト・ジルコン・イデイングサイト等）※(1)を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有が少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断わりしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理により重鉱物を凝集することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。なお重鉱物分析は横山・楠木（1969）※(2)および吉川（1976）※(3)に準拠した。

(4)火山ガラス含有率測定

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

①火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物（土粒子やアモルファス粒子を含む）を識別し、各含有率を測定した。

②火山ガラス型

吉川（1976）の分類に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求め表示した。なお吉川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

③プラント・オパール含有

鏡下でしばしばプラントオパールが識別されるため、その有無と、比較的多い場合には全粒子に対するプラント・オパール含有率を半定量的に示した。

④色付ガラスの有無

淡褐～淡紫色を呈する色付ガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付ガラスの有無を示した。なおここでいう色付きガラスには、スコリア（塩基性火山砕屑物）中にしばしば含まれる赤褐、褐、黄、緑色などのガラスは含まれない。

(5)火山ガラスの屈折率測定

前処理により調整・保存された120～250 mesh（1/8～1/16mm）粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）※(4)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

3. 分析結果および考察

今回得られた分析結果は集約され、表1に表示されている。これらの分析情報のなかで考古学的に価値をもつものは、編年上意味のあるテフラ（広域テフラ）の降灰層準を合理的に認定する根拠を与える情報である。具体的には、テフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や含有量比の情報が最も重要となる。

一般に土壌中に含まれる重鉱物の分析が広く行われているが、重鉱物分析結果をテフラ降灰層準との関係で議論する場合には十分な注意が必要である。その理由は、土壌中の重鉱物は母岩起源のものを含むのが普通であり、必ずしもテフラ起源とのみ特定することができないからである。しかも同一種類の鉱物でもその組成上かなりの多様性をもつことが普通であり、純粋にテフラ起源の重鉱物のみを識別することは困難が多い。このため、今回の分析結果の考察においては、重鉱物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざるを得ないことをお断わりしておきたい。

さて火山ガラスから得られる情報に注目すると、今回の試料中には少なくとも2種類の火山ガラスが識別される。それらは、各火山ガラスの特徴をもとに西日本地域でのテフラ・カタログ（表2）と対照すると、降灰年代の古いものから始良-T n 火山灰 A T (B B55)、そして鬼界-アカホヤ火山灰 K-A h (B5-3 (U)) ※(5)(6)に対比するのが自然である。今回の分析両地点において、Ⅳ層の火山ガラス含有率は20%前後と多いが、ⅤあるいはⅥ層で火山ガラスの含有量は激減する。またⅣ層最上部で鬼界-アカホヤ火山灰の相対含有量が多いのが注目される。最後に、今回の分析結果と解釈を一覧表で示す（表3）。

参考文献

- ※(1) 町田瑞男・村上雅博・斎藤幸治（1983）：南関東の火山灰層中の変質鉱物“イデイングサイト”について、第四紀研究，22(1)，69-76.
- ※(2) 横山卓雄・楠木幹浩（1969）：鍵層としての火山灰層，特に大阪層群の火山灰について，同志社大学理工研報告，9，58-93
- ※(3) 吉川周作（1976）：大阪層群の火山灰層について，地質学雑誌，82（8），479-515.
- ※(4) 横山卓雄・檀原 徹・山下 透（1986）：温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定，第四紀研究，25（1），21-30.
- ※(5) 竹村恵二・檀原 徹（1988）：土壌中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年-温度変化型屈折率測定装置を使用して-，考古学と自然科学 第20号 日本文化財学会誌，35-50
- ※(6) 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重雄（1984）：テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ-，古文化財の自然科学的研究，869-928.

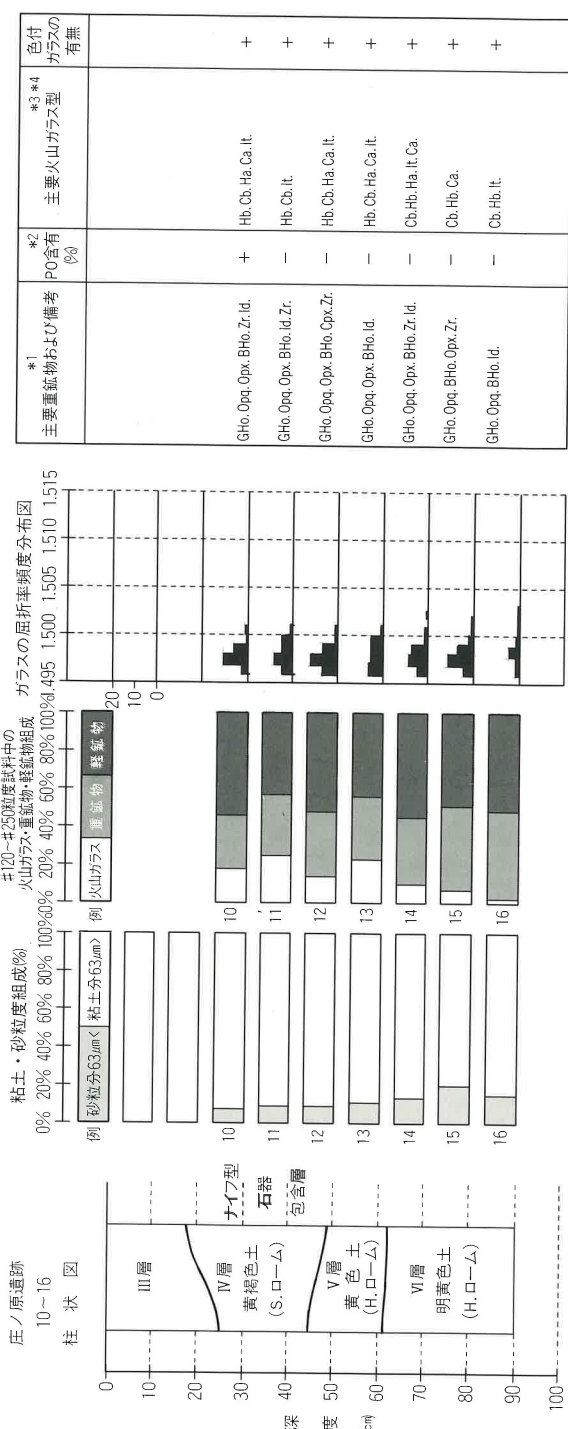
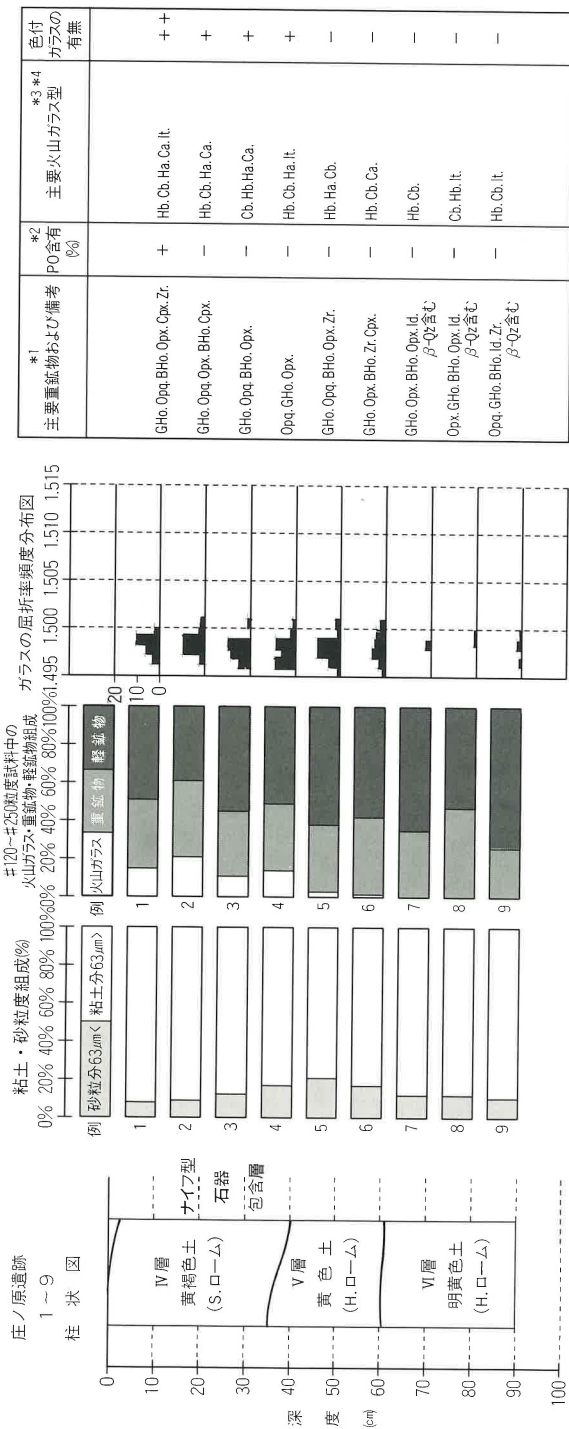


表1 庄ノ原遺跡試料1～16地点試料採取層準土層模式柱状図および分析結果

*1 主要重鉱物の略称と鉱物名
Ol:カンラン石 Opx:斜方輝石 GHo:緑色普通角閃石 BHo:褐色普通角閃石
Bl:黒雲母 Gar:ザクロ石 Zr:ジルコン Id:イデインクサイト Opx:不透明鉱物

*2 PO:プラント・オパール含有率 or 有無

*3 主要火山ガラス型の名称(吉川, 1976)
Ha, Hb:扁平型(バブルウォール型) Ca, Co:中間型(軽石型) Ta, To:多孔質型(軽石・繊維状型)

*4 (吉川, 1976)以外のガラス型の略称
SG:スコリア質ガラス It:不規則型

表2 各遺跡より検出した火山ガラスの特性と琵琶湖ボーリングの火山灰、広域テフラの特性との比較（竹村・檀原,1988）

Table 2 Comparison among characteristics of volcanic glasses included in columnar samples at archeological sites and those of volcanic ashes in Lake Biwa drilling samples and widespread tephtras.

項目 比較試料	テフラ名・試料名	岩石と鉱物組成	14C年代 (BP)	火山ガラスの色と形	火山ガラスの屈折率 レンジ (モード)	文献
鳥 浜	No.6	—	—	T.C	1.499-1.503 (1.501-1.503)	*1
	No.22	—	—	Ha,Hb (br)	1.510-1.512	*1
	No.49	軽石質・af, Ho, Bi	—	T.C	1.521-1.524 (1.521-1.523)	*1
	56-54, 51, 50, 48-27	—	—	Ha, Hb	1.497-1.501 (1.498-1.500)	*1
板 井	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—
	P11 No.18 P11 No.10	結晶質・Ho, Opx ガラス質	19,600-20,400 21,500-23,600	T Ha, Hb > C, T	1.501-1.504 (1.502-1.504) 1.499-1.502 (1.500-1.501)	*2 *2
京大構内	No.1	—	—	Ha, Hb (br)	1.508-1.512 (1.509-1.511)	*1
	—	—	—	—	—	—
	No.3, 4, 8, 9, total	—	—	Ha	1.498-1.501	*1
琵琶湖	BB7	—	—	C.T.	1.499-1.504	*3
	B5-3 (U)	ガラス質・Opx, Cpx	—	A (br)	1.509-1.513 (1.509-1.512)	*4, 5
	BB23	軽石質	—	B, C	1.520-1.524 (1.502-1.504)	*4, 5
	BB51	結晶質・Ho, Opx	—	C	1.501-1.505	*4, 5
	BB55	ガラス質・Opx, Cpx, Ho	—	A > B	1.499-1.502 (1.500-1.501)	*4, 5
広域テフラ	K-Ah	ガラス質・Opx, Cpx	6,300	bw > pm (br)	1.508-1.514 (1.501)	*6
	U-Ok	軽石質・af, Bi, Ho	9,300	pm	1.517-1.524	*7
	大山ホーキ	結晶質・Ho, Opx, Bi	20,000	—	—	*8
	AT	ガラス質・Opx, Cpx, Ho	21,000-22,000 (24,720)	bw > pm	1.498-1.501 (1.500)	*9
	—	—	—	—	—	*10

af: アルカリ長石, Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Bi: 黒雲母, bw: パブルウォール型, pm: 軽石型, br: 色付きガラス。

*1: 竹村・檀原 (1988), *2: 竹村・檀原 (1987), *3: YOSHIKAWA (1981), *4: 横山 (1973), *5: 横山 (1976), *6: 町田・新井 (1978), *7: 新井ほか (1981), *8: 町田・新井 (1979), *9: 町田・新井 (1976), *10: 松本ほか (1987)。

表3 庄ノ原遺跡 (1~16試料地点) における火山ガラス濃集層準とその特徴

火 山 ガ ラ ス 検 出 層 準					屈折率 (Nd)	主な火山 ガラス型	※(5) 対比される 広域テフラ	※(6) 降灰年代	備 考
分布層準		最大濃集層準							
サンプルNo.	標高	サンプルNo.	深度	地層名					
No.1 ～ No.2	0cm ～ 20cm	No.1	0～10cm	Ⅳ 層	1.508 ～ 1.514 最頻値 1.510	H型 (扁平型)	鬼界アカホヤ火 山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	全分布層準で下位層準の火山ガラス(AT)と混在するがⅣ層上部で相対的な含有量が多く降灰層準に近いと判定される。ガラス形態はH型を主とし濃い色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率の高いのが特徴。
No.1 ～ No.6 ?	0cm ～ 60?cm	No.4	30～40cm	Ⅳ層下位	1.498 ～ 1.501 最頻値 1.500	H型 (扁平型)	始良Tn火山灰 (AT)	21,000 ～ 22,000 B.P.	今回のほぼ全分析層準で検出されるが、No.試料層準で火山ガラスの絶対含有量が高く、降灰層準に近いと認定してよいと判断される。無色透明な扁平(バブル・ウォール)型ガラスを主とするが、亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。
No.7 以深	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	広域火山灰層が存在するとは考えられないが、何らかの火山灰層の存在は否定できない。
No.10 ～ No.11	20cm ～ 40cm	— —	— —	— —	1.508 ～ 1.514 最頻値 1.510	H型 (扁平型)	鬼界アカホヤ火 山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	全分布層準で下位層準の火山ガラス(AT)と混在し表層部で相対的な含有量は増すが絶対含有量は少なく降灰層準の認定は困難。ガラス形態はH型を主とし濃い色付ガラスを含む。ガラスの屈折率の高いのが特徴。
No.10 ～ No.16	20cm ～ 90cm	No.13	50～60cm	V層	1.498 ～ 1.501 最頻値 1.500	H型 (扁平型)	始良Tn火山灰 (AT)	21,000 ～ 22,000 B.P.	今回の全分析層準で検出されるが、No.13試料層準で火山ガラスの絶対含有量が高く、降灰層準に近いと認定してよいと判断される。無色透明な扁平(バブル・ウォール)型ガラスを主とするが、亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。
No.15 以深	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	広域火山灰層が存在するとは考えられないが、何らかの火山灰層の存在は否定できない。

※(5)竹村恵二・檀原徹 (1988) : 土壌中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年一度変化型折率測定装置を使用して。考古学と自然科学 第20号 日本文化財科学会誌. 35-50.

(6)町田 洋ほか (1984) : テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—. 古文化財の自然科学的研究. 865-928.

10 結語

旧石器時代

旧石器時代の遺物は、調査面積が広く、一ヶ所の土壌分析結果を調査区全体に適用することは若干問題があるものの、おおむねA T降下前後に形成された同一層から集石遺構を伴いながら出土した。遺物の分布状況からは重り合うようなブロックは検出されておらず、そのために複数の文化層は想定しにくい。しかし、個々の遺物を観察すると時期差が存在するようである。それは、ブロック4で出土した2側縁加工のナイフ形石器が特徴的であることから、A T降下直前の百枝遺跡C地区第3文化層かA T降下直後の松山遺跡下層とほぼ同時期と考えられる。つまり角錐状石器より古い段階で、狸谷型ナイフ形石器の直前段階に位置づけられる石器ブロックである。またブロック5やブロック11で出土した剥片尖頭器や国府型ナイフ形石器、あるいは瀬戸内技法で剥離された翼状剥片などの一群とブロック17の小型で基部調整のナイフ形石器は、前者が清川村岩戸遺跡6層下部の遺物群と後者は6層上部の遺物群と類似している^(注3)。

1. 石材

調査によって出土した遺物は、総点数875点でその内訳は無斑晶流紋岩が738点、サヌカイトが25点、チャートが2点、珪質岩が1点、安山岩が103点であった。無斑晶流紋岩の占める割合は84%で、大野川流域で普遍的に見られる石材を最も使用していたことになる。

2. 石器

各ブロックの石器は剥片および碎片類を合わせて823点出土し、そのうちナイフ形石器が49点、剥片尖頭器が1点、三稜尖頭器が7点、搔器が2点、削器が4点、使用痕のある剥片が9点、二次加工痕のある剥片が6点、石核20点、礫石器が8点であった。ツールが106点で、ナイフ形石器が46%と主体を占め以下8%、8%、2%、4%、8%、6%、19%となる。ナイフ形石器は縦長剥片が素材のものが29点、横長剥片を素材としたものが19点、不定形な剥片を素材としたものが1点とやや縦長剥片を素材としたものが多い。細部の調整については縦長剥片を素材としたものは大部分が1側縁は完全にブランディングを施し、さらに打面部を斜めに切断しその部分にブランディングを施すもの、ないしはその部分を刃部とし、その切断作業によって形成されたもう一辺にブランディングを施す。すべてが、また横長剥片が素材のものも約半数が2側縁にブランディングを施す。横長剥片を素材としたものは、打面部をブランディングで完全に潰し、もう一辺には加工は加えず刃部とするものが大半を占める。さらに縦長剥片素材のナイフ形石器には、小型の切り出し状のものが9点含まれている。

また、ブロック5出土の国府型ナイフ形石器およびブロック11出土の翼状剥片は、大分市丹生遺跡^(注4)、別府市羽室台遺跡^(注5)で確認された遺物と同様、瀬戸内系の石器製作技術が当遺跡にも伝播していたことを示すもので注目される事例と言える。

3. 石器ブロック

石器ブロックは21ヵ所に分けられた。調査区の南半分は東西方向に広く分布する。ここは大字荏隈のある平野部へ落ちてゆく深い谷際にあたる。

このブロックのなかで中心的なものはブロック15、ブロック17、ブロック18である。この3ヵ所のブロックで遺物の出土量は39%あり、その分布規模も広い。さらに接合資料の分布からも、異ブロック間の接合にこの17、18のブロックが関わっている例が多いことから推定される。また石器ブロック15では碎片類の集中部分が確認された。このブロック以外にも碎片の量が多いものがあり、こういったブロックが石器製作の場と想定される。

4. 研磨された石器（第98図）

J区から出土した4点はいずれもⅣ層中から出土したものでその出土状況は良好で、攪乱を受けたものではない。このⅣ層の上位の層にはわずかに縄文時代早期の遺物は見られるもののA～D区のような良好な包含層は確認されない。その他の時期の遺物は皆無である。こういった状況で研磨を施した遺物が出土することに大きな問題があると言える。もちろん研磨技術自体はA T降下以前の百枝遺跡B地区下層より存在する。A T降下以後では旧石器時代終末にも存在する。その代表的な遺物には局部磨製石斧があげられる、大分県内でいえば旧石器時

代終末の局部磨製石斧は大分市の丹生遺跡^(注4)、犬飼町の市ノ久保遺跡^(注7)などで出土している。しかし鋭く形成されたエッジをもつ剥片石器をあえて研磨し、刃部形成を行い使用するほどの必然性があったのか大きな疑問である。

またこの石器の抱える大きな問題点は風化面と研磨面との関係である。第98図165～166はいずれも風化面が研磨によって磨取られて、原礫面が露出している部分が観察される。これは、風化面が形成された後に研磨を施したことを如実に示すものである。そこで、研磨を施した時期を1、旧石器時代の再加工、2、縄文時代の再加工、3、弥生時代以降の再加工、4、現代の再加工という4つの可能性を想定してみた。3については弥生時代の遺構や遺物が確認されない以上可能性はない。また4についても出土状況からほとんど可能性はないものと思われる。1あるいは2の可能性が考えられるが1とした場合に風化面の形成のメカニズムまで考慮する必要がある。いずれにしても現段階において筆者としてはここまでしか想定することは不可能で今後の検討課題として、周辺資料の増加を待ちたい。

縄文時代

A～D区において縄文早期前半代に比定される稲荷山式土器及び早水台式土器と無文土器が出土したが、このうちほぼ50%以上が稲荷山式土器であった。別府湾沿岸地域では縄文期の古い段階には十文字原遺跡のように比較的標高の高い地域に遺跡の分布が知られているが、沖積平野に近い丘陵部まで生活のエリアが広がっていたことを示す例であろう。^(注8)

またE区では縄文晩期の上菅生B式に比定される遺物群が若干出土した。この地区は谷尻部分にわずかに広がる平坦部分で、この部分のみに包含層があったとは信じがたく、おそらくA～D区にも広がっていたものと思われる。

弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺構・遺物は広大な庄ノ原遺跡の調査区のなかでわずかにK区においてのみ検出された。しかしK区から東に約0.5kmにある城南遺跡では弥生時代中期～後期にかけての集落遺跡が調査されている。^(注9)またこの付近にある尼ヶ城遺跡でもV字溝に仕切られた丘陵の突出部に10基の住居跡が確認されていることからこの一帯に点々と集落が存在していたことがうかがえる。この状況は古墳時代に入ってから同様の状況を呈していて、H区、I区で、6世紀後半～7世紀前半代の小規模な集落が確認されている。もともと庄ノ原地区には蓬萊山古墳や田崎古墳群などが造営されている地区で、この時代の集落が存在する必然性をもった地区であるとも言えよう。但しH区で出土した口縁部、頸部を仮に壺型埴輪とした場合、なぜここで出土するのかという問題が起こってくる。前出の古墳がほとんど台地の南側縁辺部に確認されていることから、この地に古墳が存在していたと考えることは難しい。埴輪製作所に関連する遺構であった可能性も皆無ではない。今後の検討課題といえよう。

(注1)『百枝遺跡C地区(昭和59年度)』大分県三重町百枝遺跡発掘調査報告書 三重町教育委員会 1985

(注2)『松山遺跡』別府大学付属博物館 1990

(注3)『岩戸遺跡』清川村教育委員会1986

(注4)『大分県丹生遺跡群の研究』(『古代学研究所研究報告』第3輯)財団法人古代協会 平成4年

(注5)『羽室遺跡発掘調査概報』大分県教育委員会1983

(注6)大分県文化課綿貫俊一氏ご教示

(注7)『市ノ久保遺跡』大分県犬飼地区遺跡群発掘調査概報 犬飼町教育委員会1988

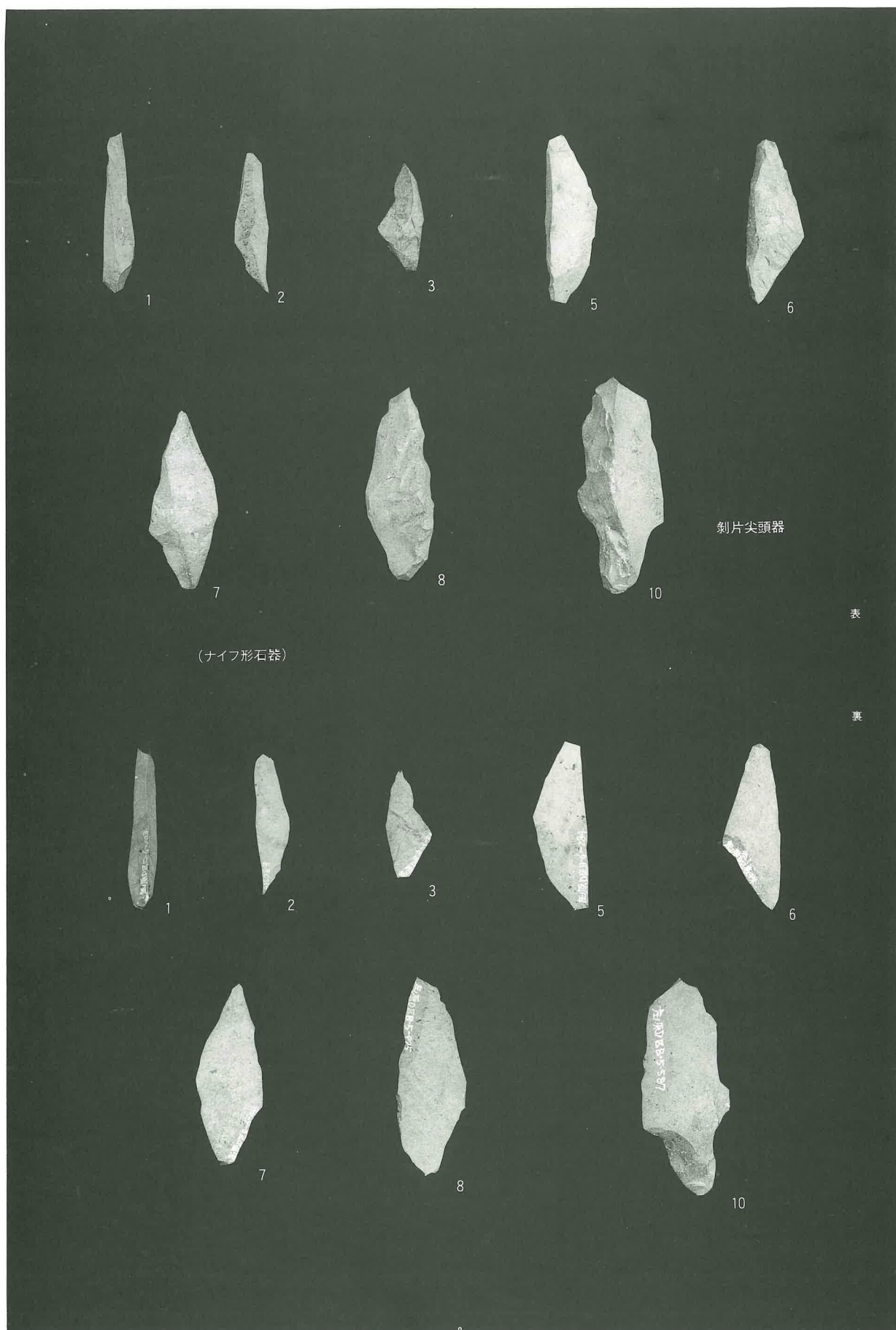
(注8)『若杉・十文字原・ふいが城遺跡』九州横断自動車道関係発掘調査報告書(2) 大分県教育委員会1990

(注9)『大分市埋蔵文化財調査年報』2 大分市教育委員会1991

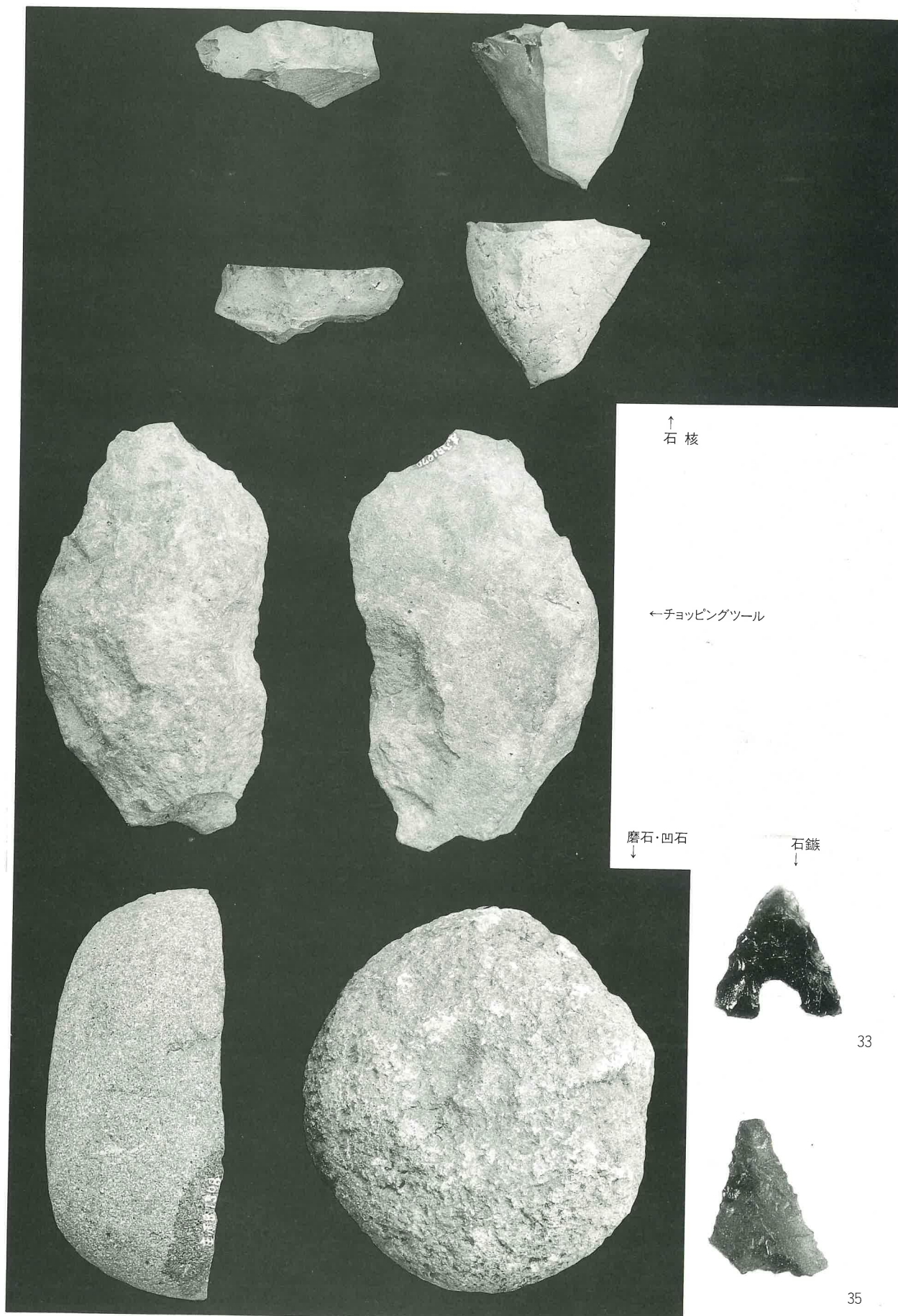
(注10)『大分市史』大分市1987



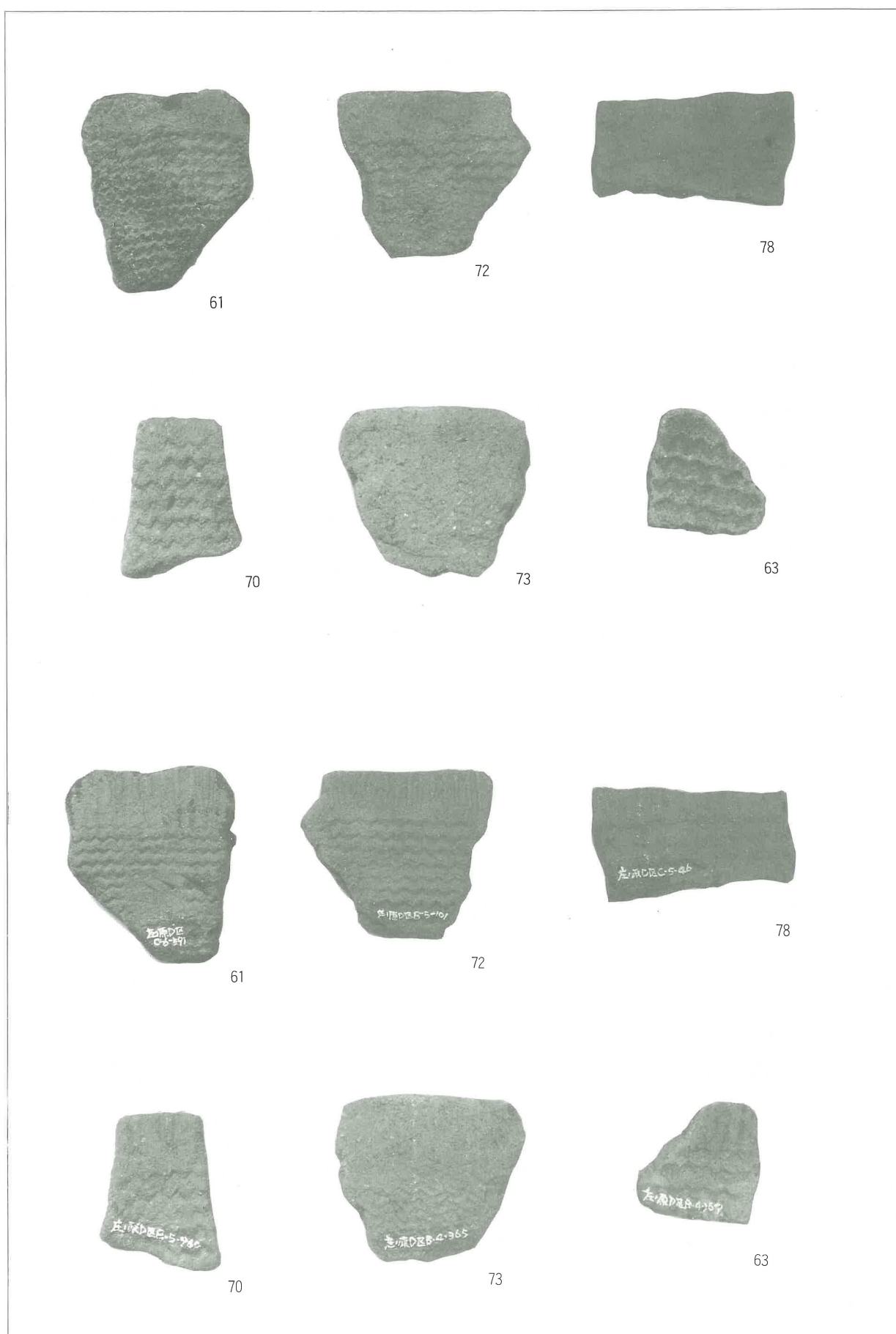
写真図版-1 A～D区遺物出土状況



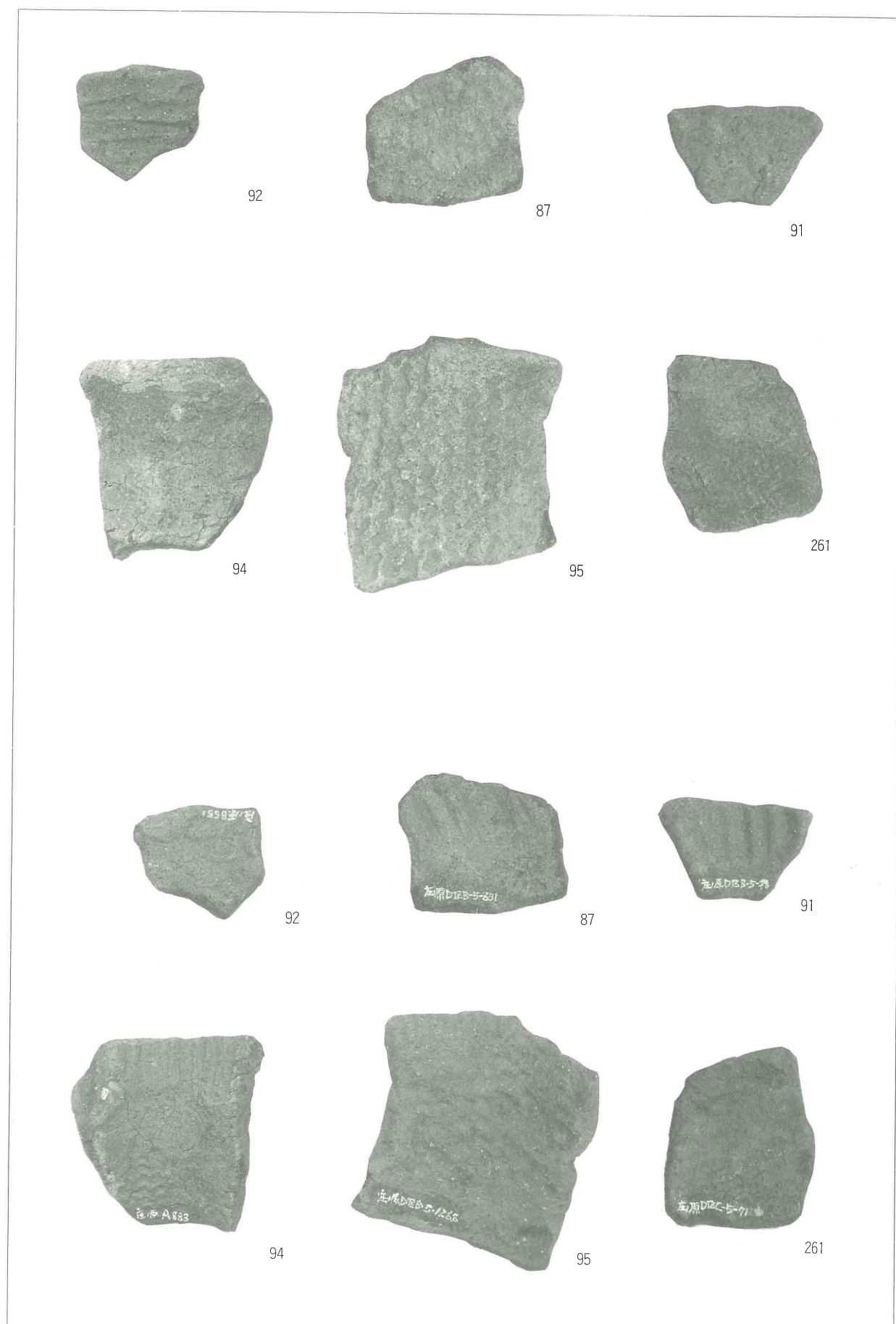
写真図版-2 A～D区出土石器



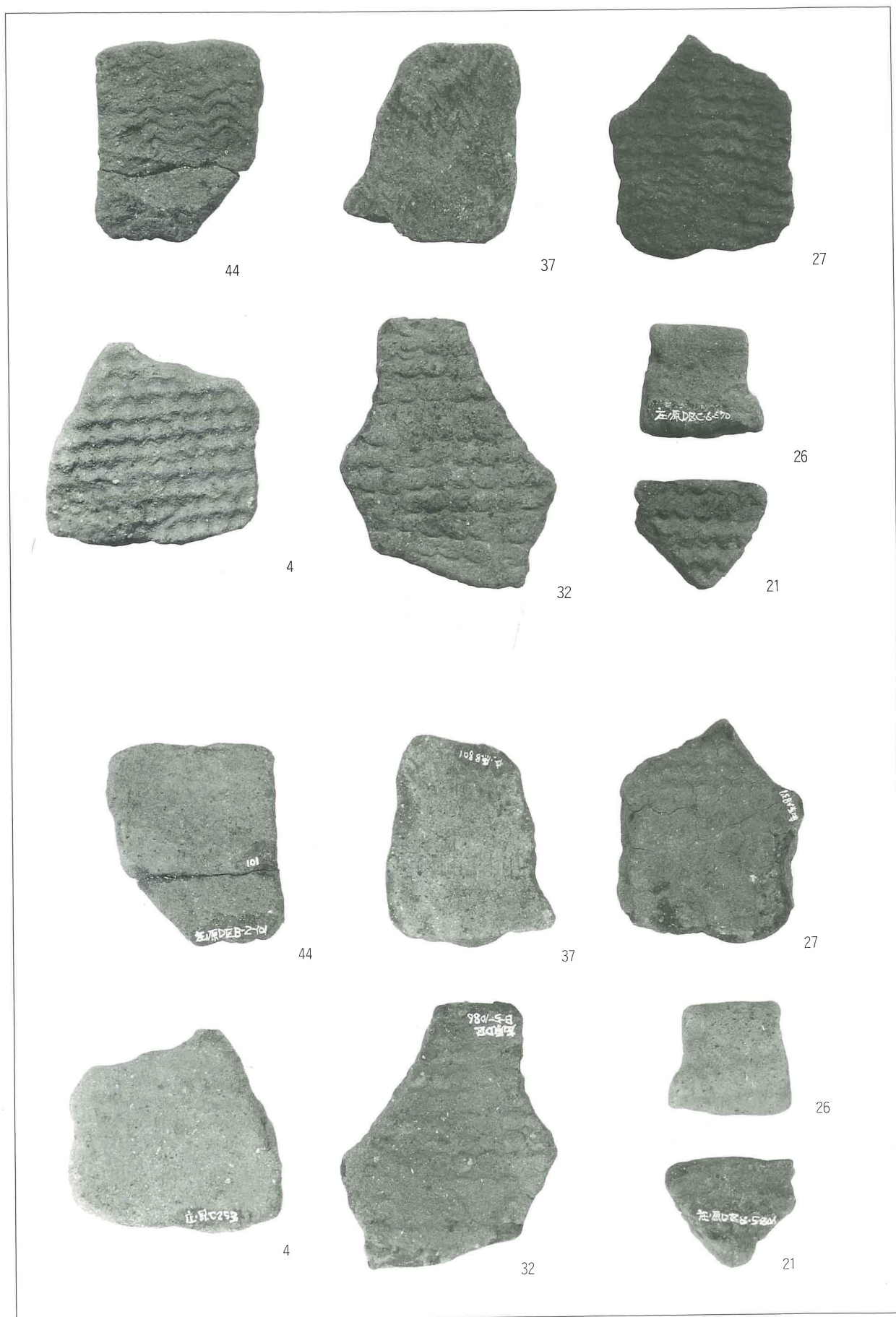
写真図版-3 A～D区出土石器



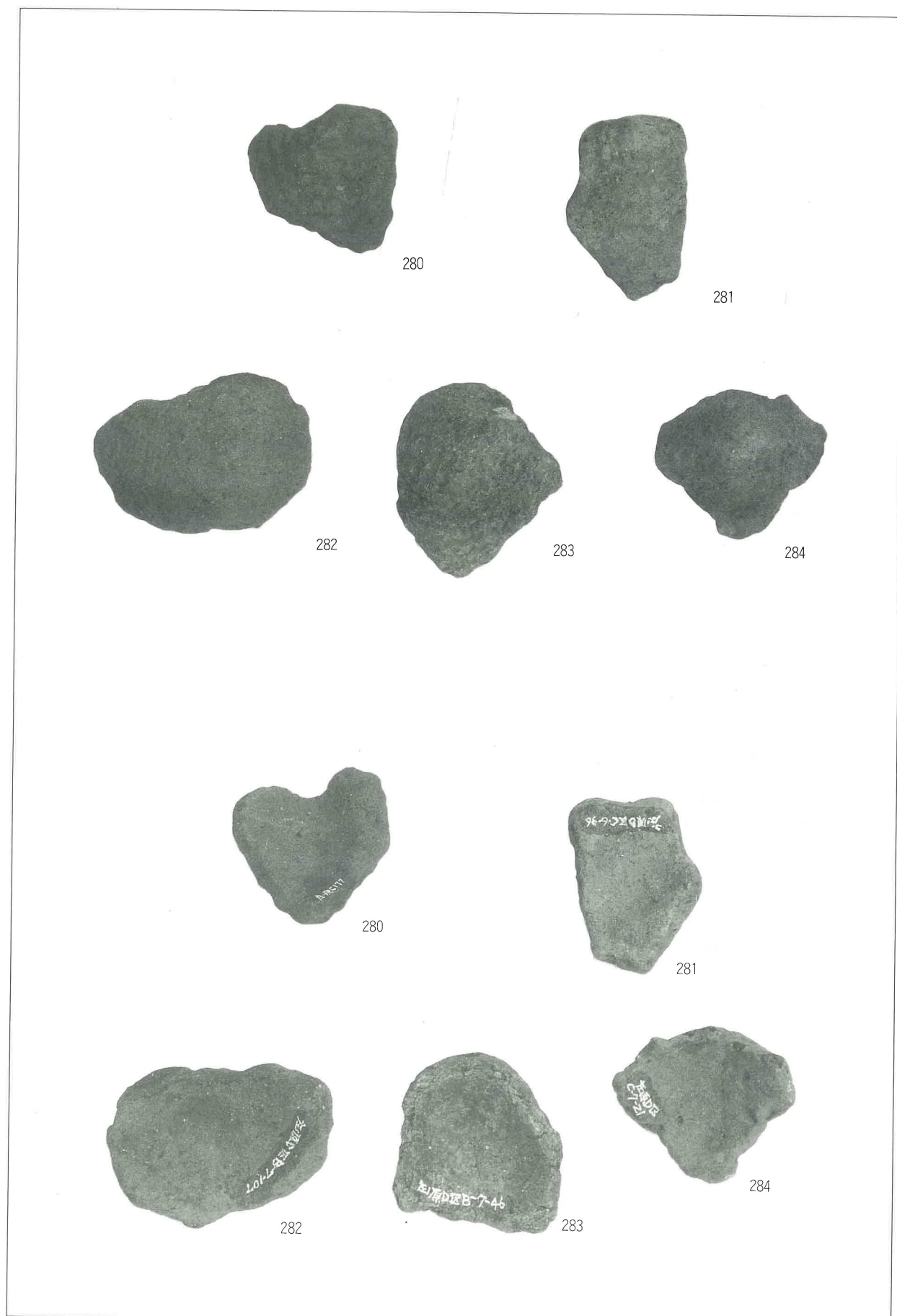
写真図版-4 A～D区出土押型文土器口縁部



写真図版-5 A～D区出土押型文土器口縁部



写真図版-6 A~D区出土押型文土器胴部



写真図版-7 A~D区押型文土器底部



285



286



288



289



294



297



298

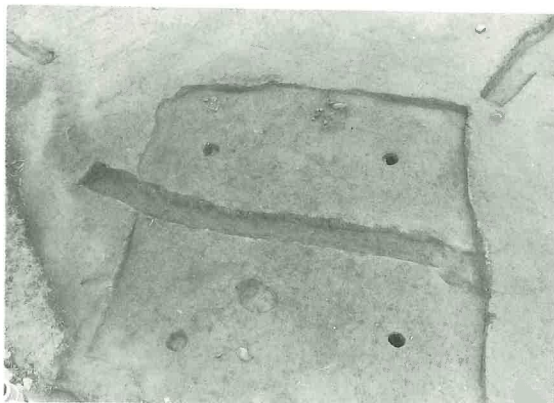


300

写真図版-8 A～D区出土無文土器口縁部



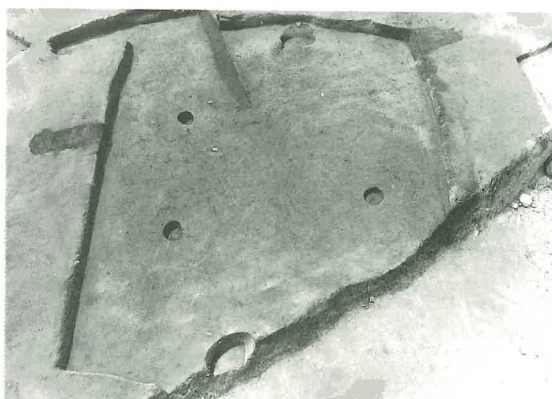
F区全 景



H区 3号竪穴住居跡



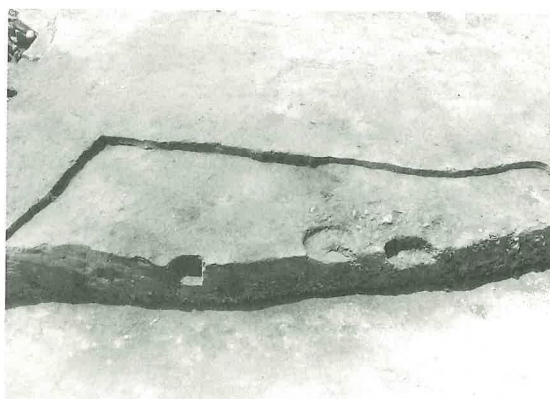
G区全 景



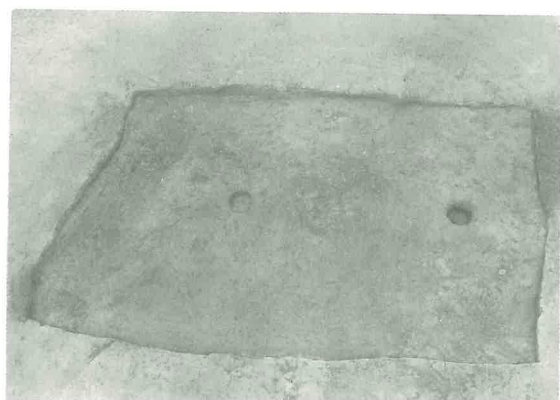
H区 4号竪穴住居跡



H区 1号竪穴住居跡



H区 5号竪穴住居跡

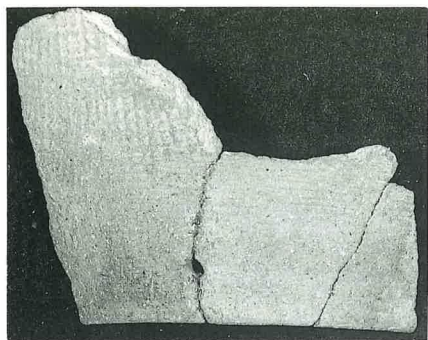


H区 2号竪穴住居跡

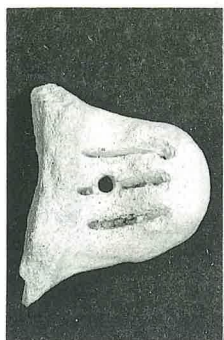


H区 1号土坑遺物出土状況

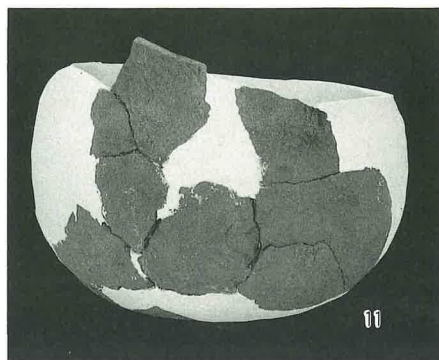
写真図版-9 F・G・H区全景及び遺構写真



7

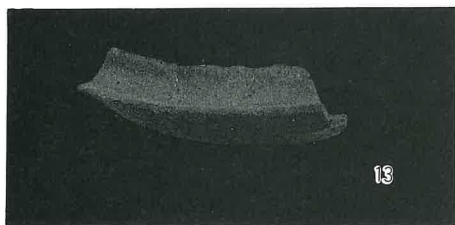


8



11

3号竖穴住居跡出土

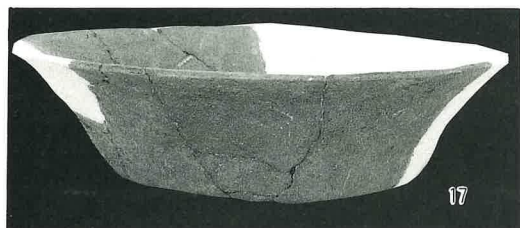


13



16

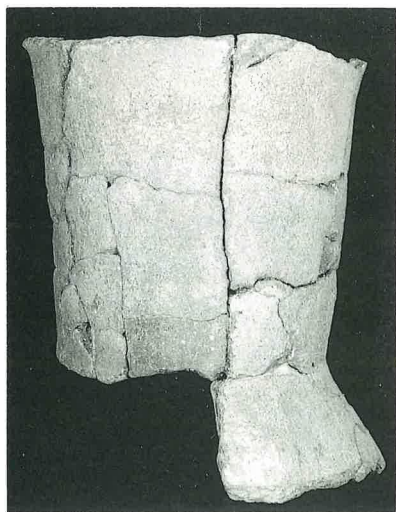
4号竖穴住居跡出土



17

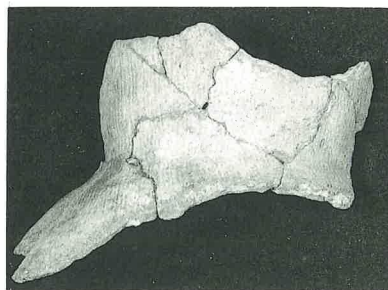


19



18

1号土坑内出土



20

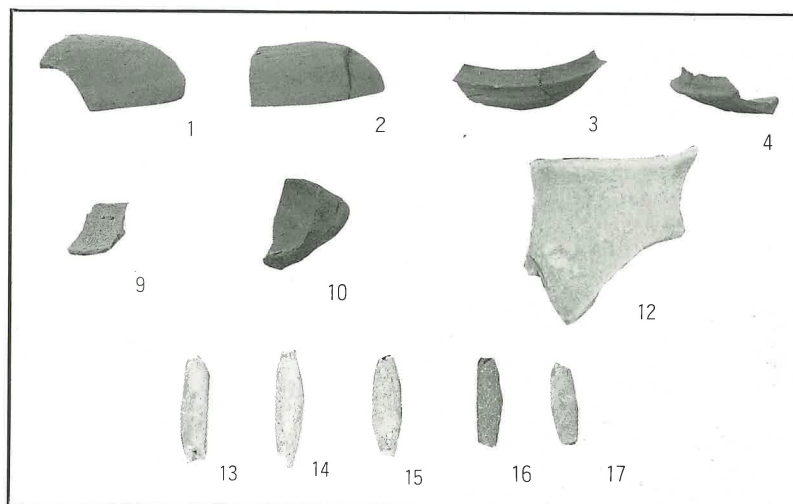
写真図版-10 H区出土遺物



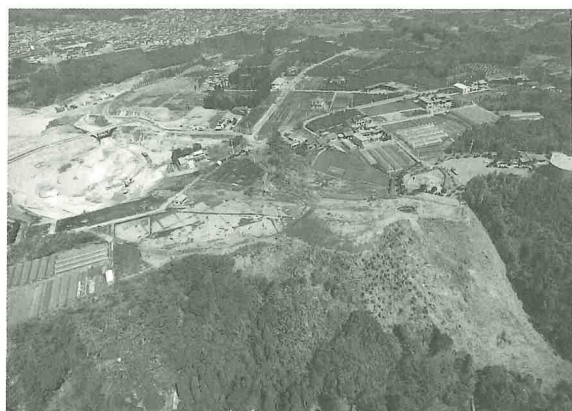
I区 溝検出状況



I区 掘立建物



I区 溝内出土遺物



J区 全 景



J区 土層写真

写真図版-11 I区全景及び出土遺物、J区全景及び土層



5号集石遺構



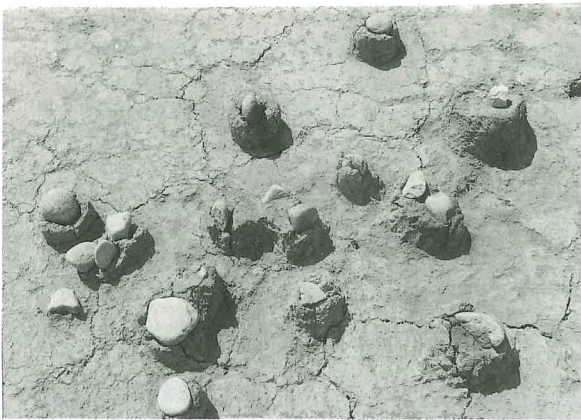
19号集石遺構



10号集石遺構



ブロック18の遺物出土状況



2号集石遺構



ブロック18の遺物出土状況

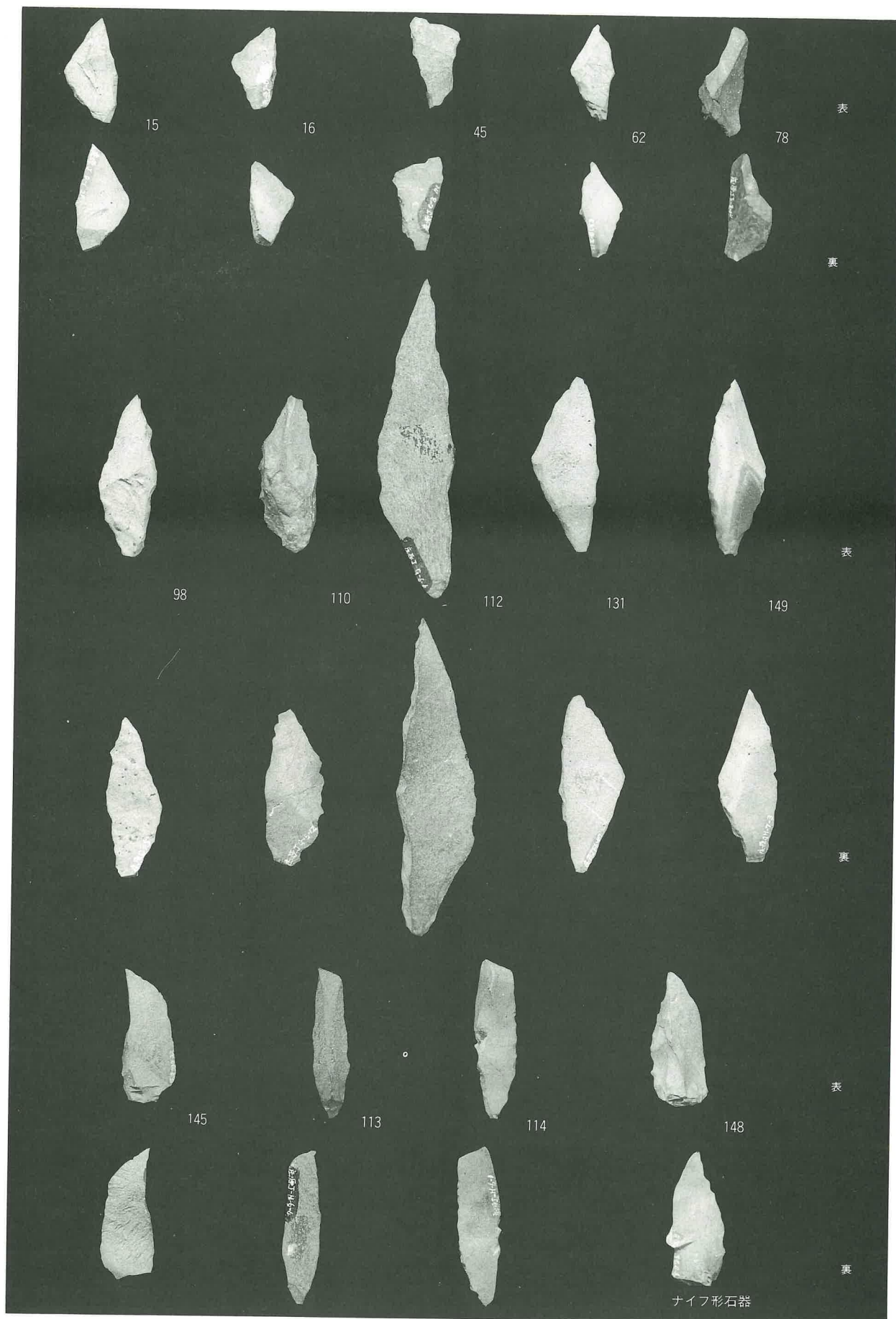


8号集石遺構

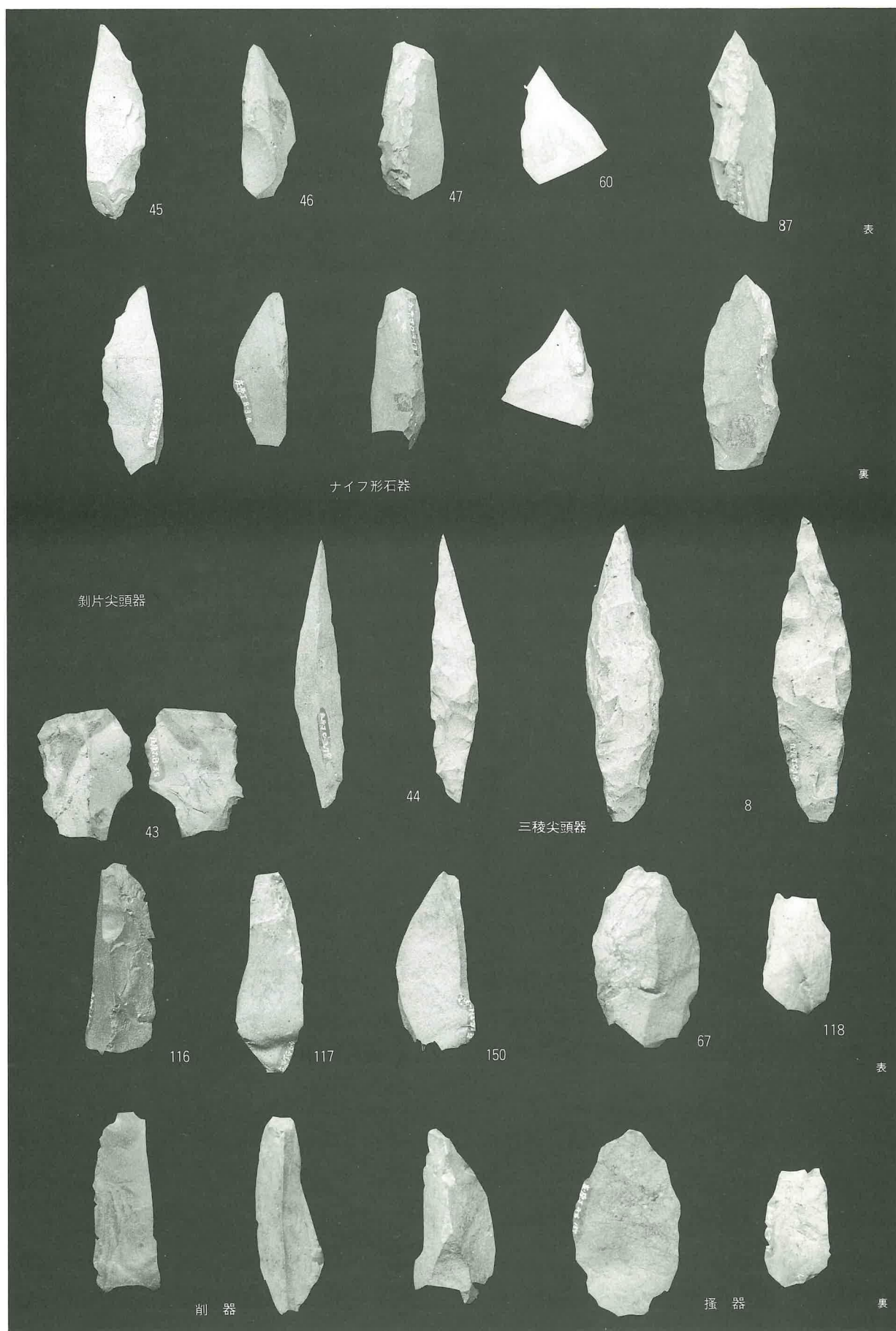


研磨石器出土状況

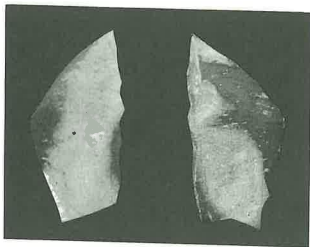
写真図版-12 J区集石遺構及び遺物出土状況



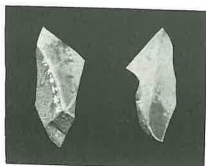
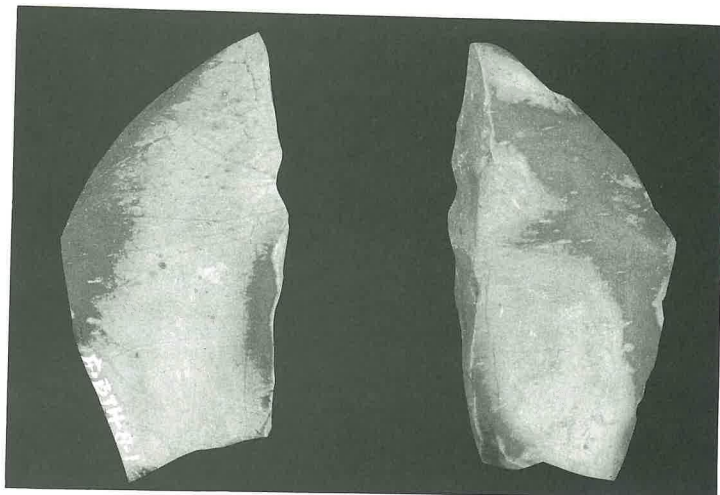
写真図版-13 J区出土旧石器



写真図版-14 J区出土旧石器

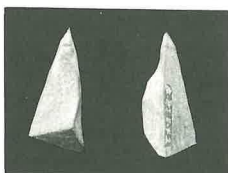
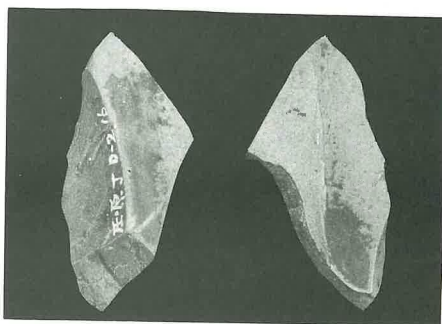


165

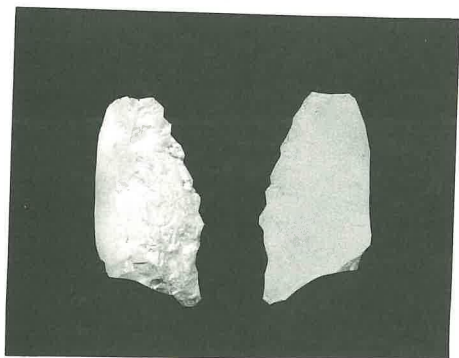
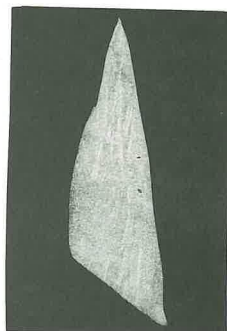


166

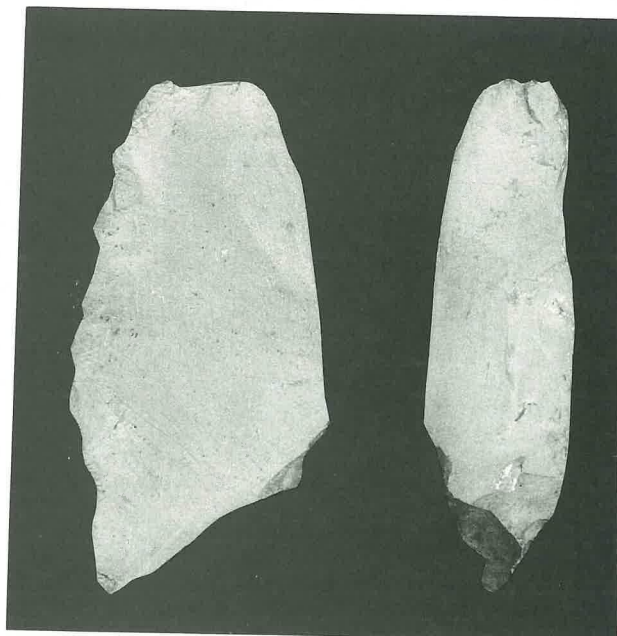
放大写真



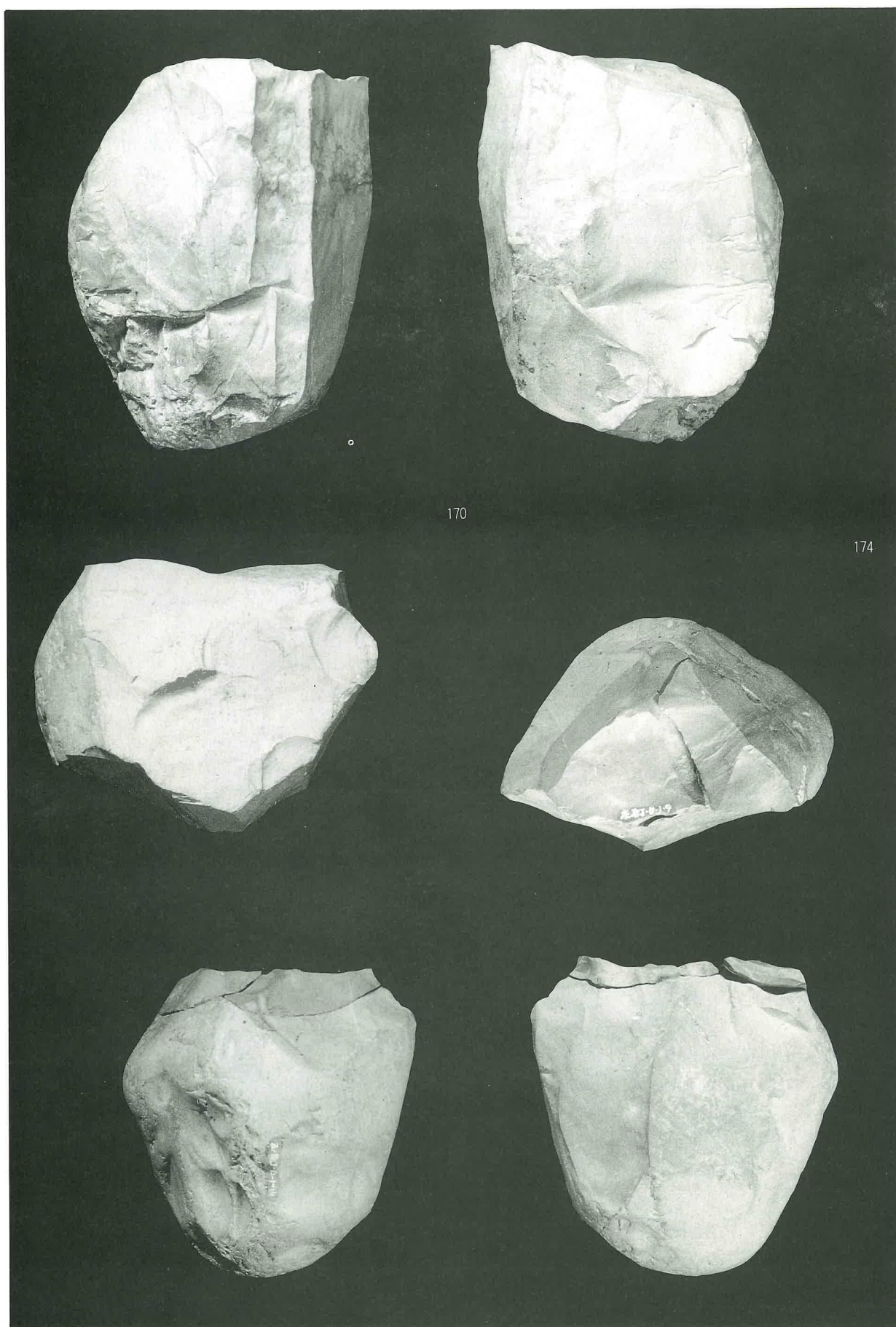
167



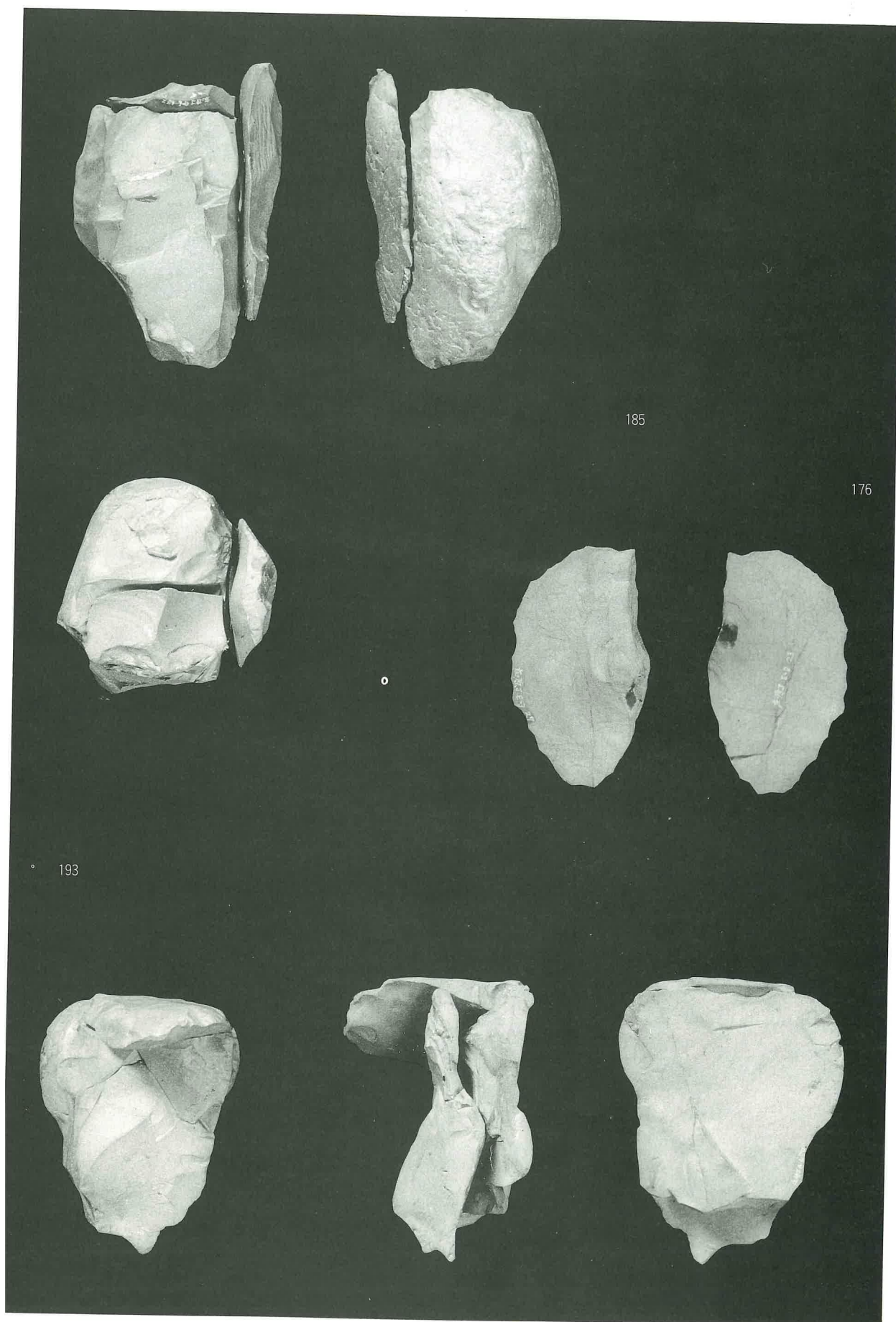
168



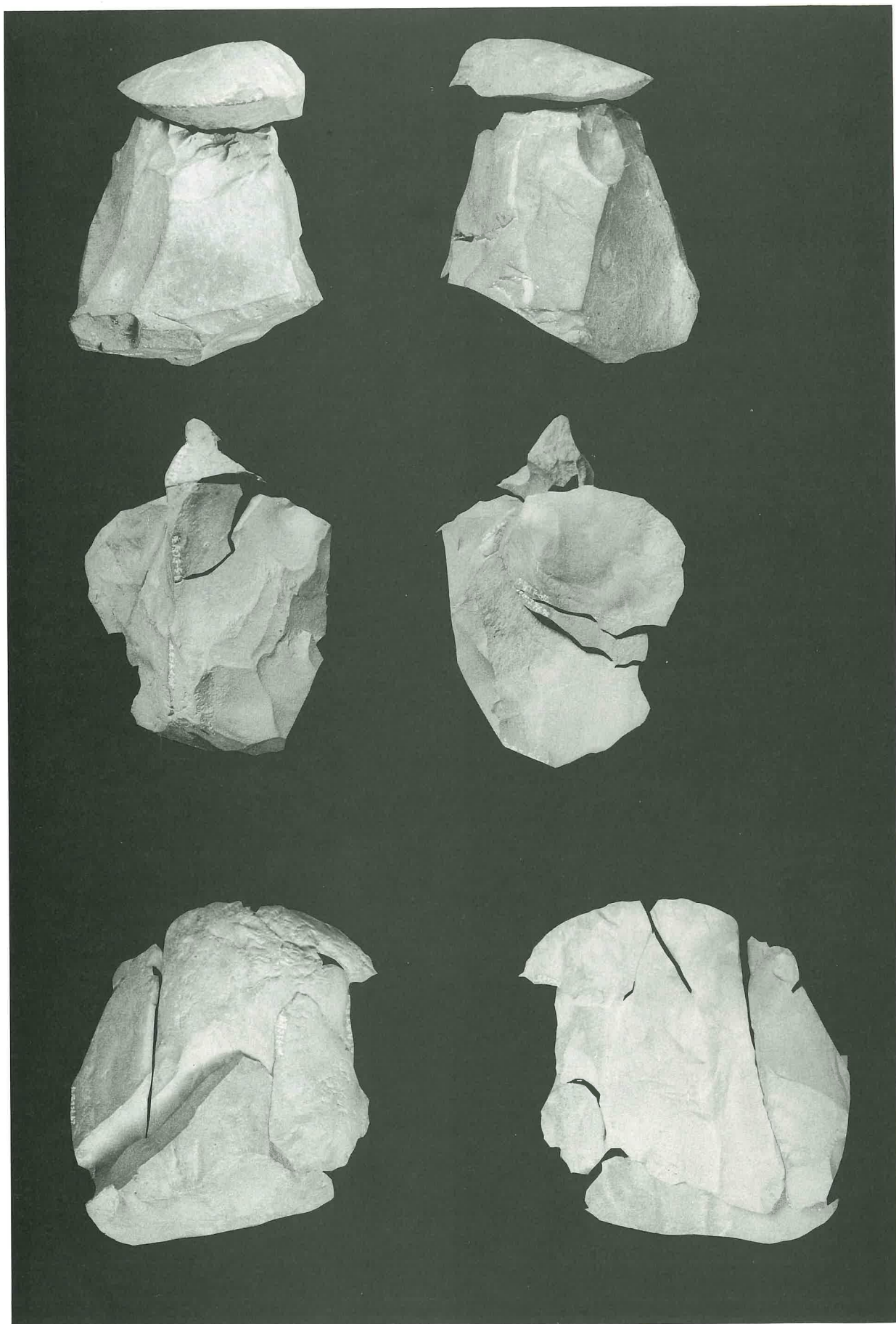
写真図版-15 J区出土研磨石器



写真図版-16 石核及び接合資料



写真図版-17 石核及び接合資料



写真図版-18 石核及び接合資料



K区
1号土坑遺物出土状況

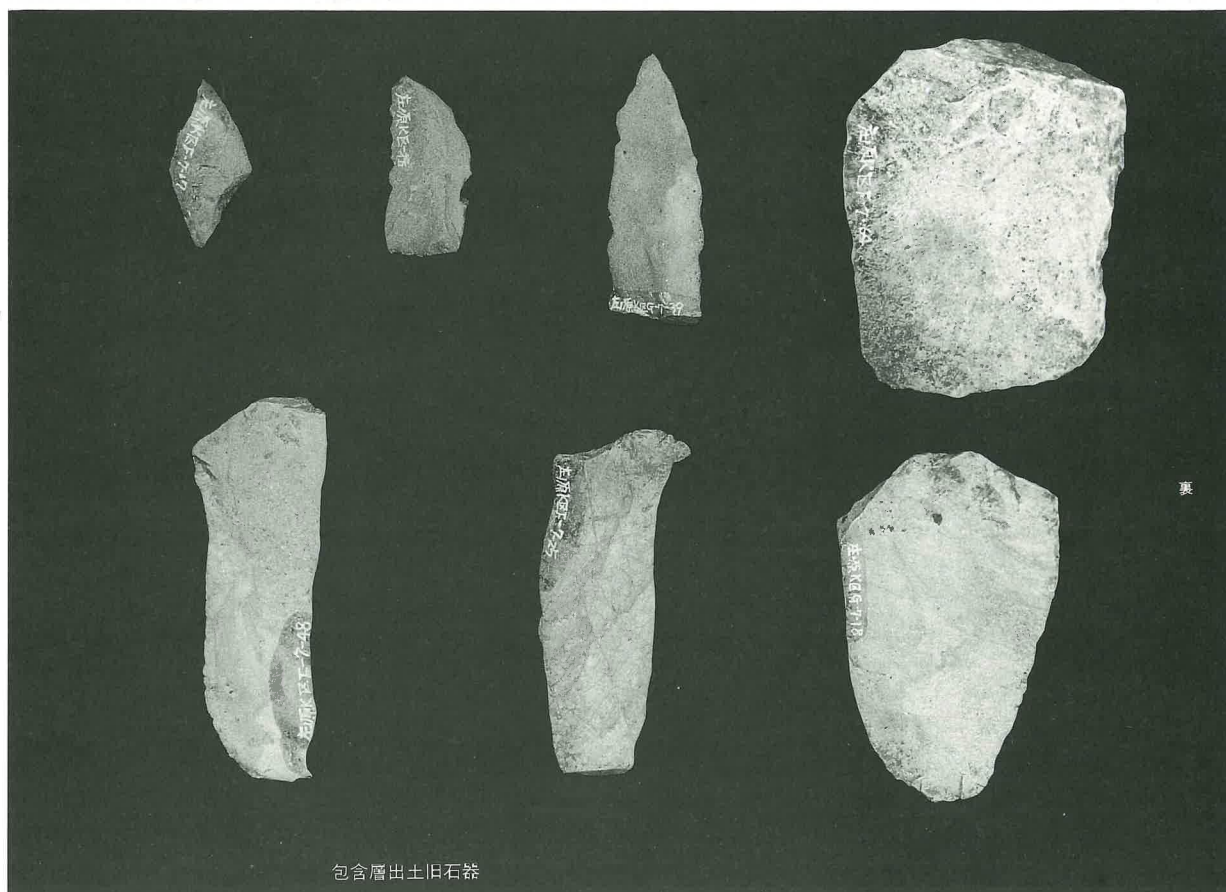
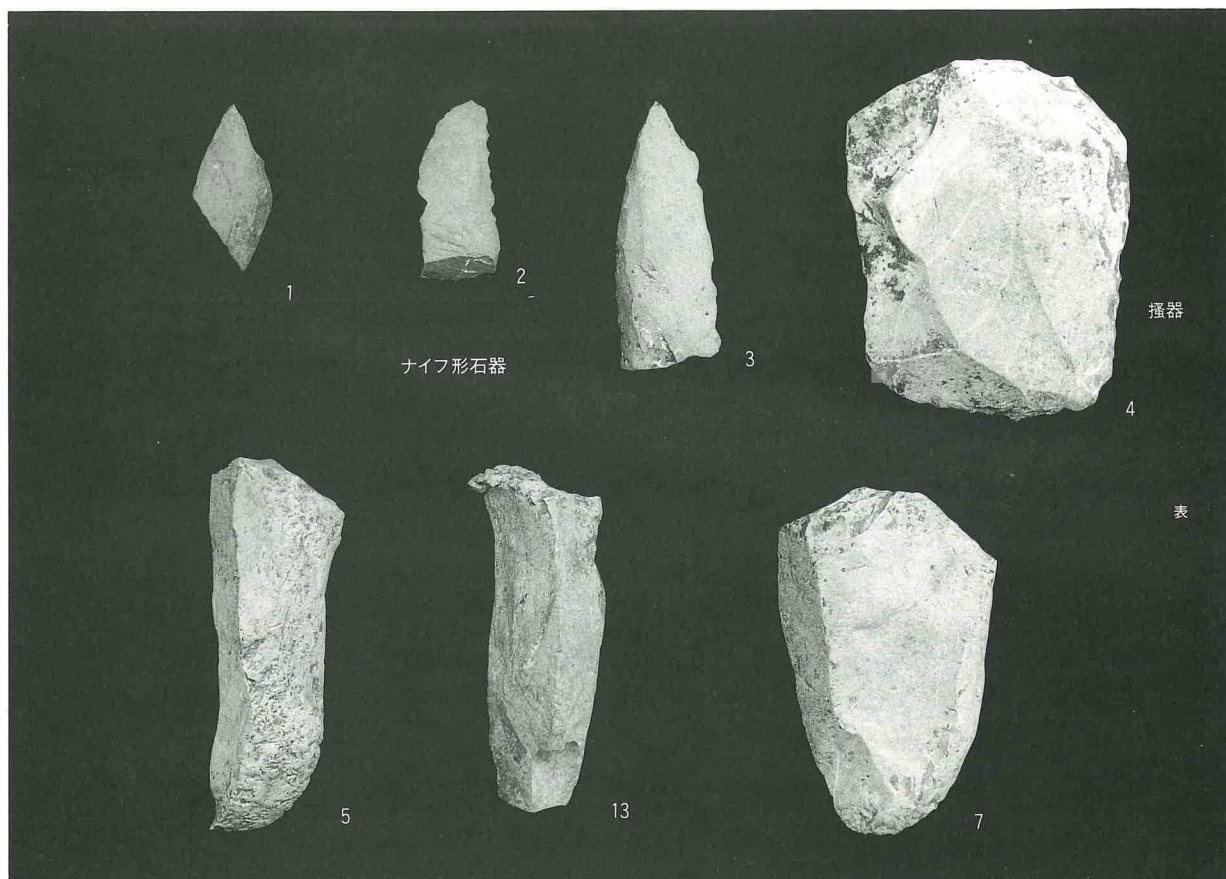


K区
1号土坑完掘状況

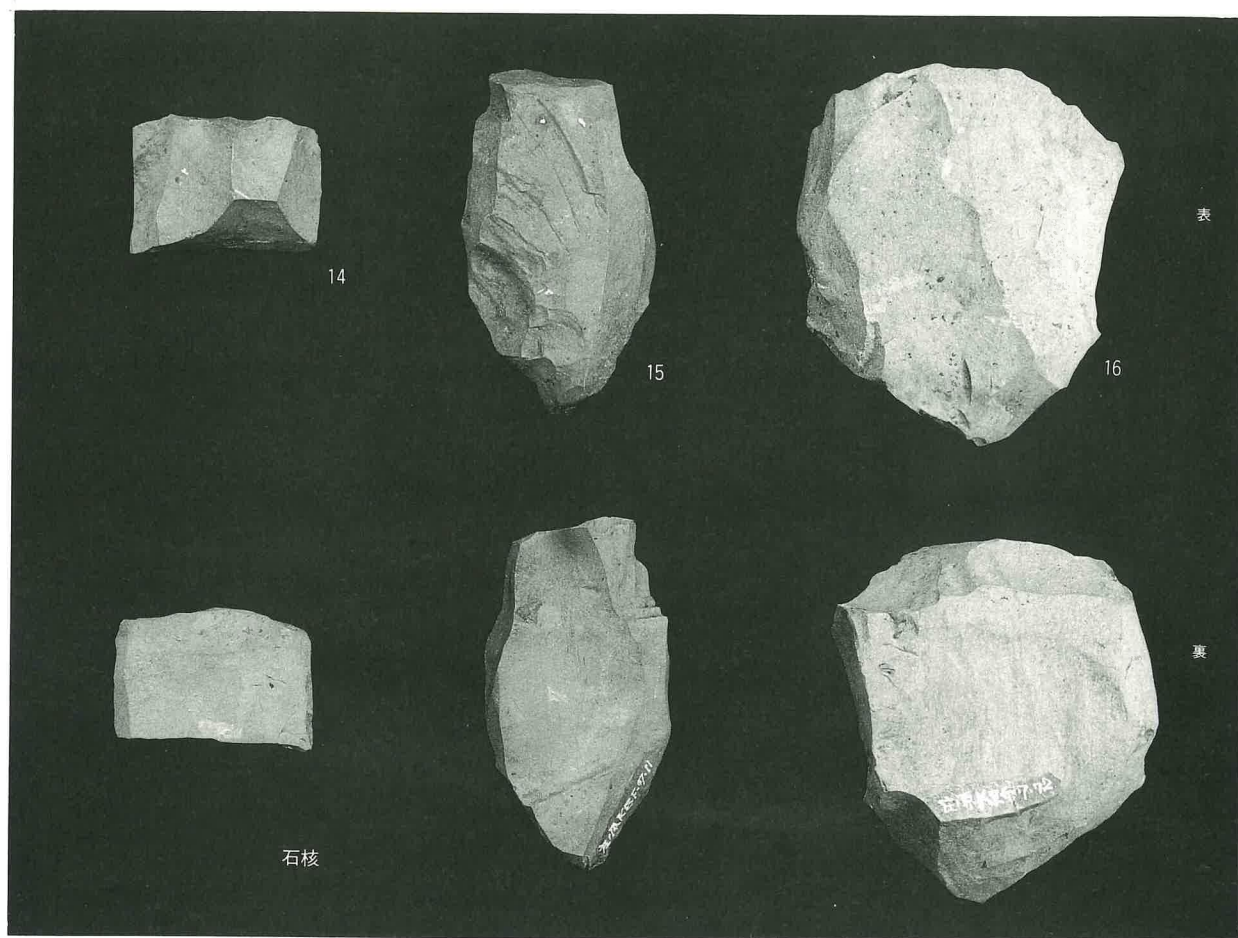


K区
不定形焼土土坑とピット

写真図版-19 K区遺構検出状況



写真図版-20 K区出土遺物



包含層内出土旧石器



土坑内出土土器

フリガナ	キチヨウバルイセキ	メハルキンセイボチ	ショウノハルイセキグン
書名	机張原遺跡	女狐近世墓地	庄ノ原遺跡群
副書名	九州横断自動車道（別府～大分間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
巻次	―――		
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ番号	(5)		
編著者	高橋 徹 田中裕介 江田 豊 友岡信彦 染矢和徳		
編集機関	大分県教育委員会		
所在地	〒870 大分県大分市府内町 3-10-1		
発行年月日	1996年 3 月31日		

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
キチヨウバルイセキ 机張原遺跡	オオイタケンオオイタシ 大分県大分市 オオアザタカサキアザメ 大字高崎字女 ハル狐	322	013	33°18'28"	131°33'00"	880711～ 881011	250m ²	九州横断自動車 道（別府～大分 間）建設
メハルキンセイボチ 女狐近世墓地	オオイタケンオオイタシ 大分県大分市 オオアザタカサキアザメ 大字高崎字ゲ バノキ バノ木	322	013	33°18'28"	131°33'00"	860302～ 860822	400m ²	
ショウノハルイセキグン 庄ノ原遺跡群	オオイタケンオオイタシ 大分県大分市 オオアザエノクマアザ 大字荏隈字 ショウノハル 庄ノ原	322	028	33°18'85"	131°18'85"	890410～ 920331	22000m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
机張原遺跡	包含層	旧石器		ナイフ形石器 台形石器 石核 剥片 石鏃 搔器	
女狐近世墓地	墓地	近世～近代	墓石, 98 墓壇, 120 石塔類, 6	近世陶磁器 土師質小皿 肥前大甕 数珠玉 銅金具	墓石と墓壇のセット がわかる近世墓地
庄ノ原遺跡群	包含層	旧石器	集石遺構, 19	ナイフ形石器 剥片尖頭器 三稜尖頭器 彫器 石核 早期押型文 晚期土器	研磨石器の出土 瀬戸内技法の存在
		縄文	遺物包含層		
		弥生	土坑, 1	土器	韓式土器
		古墳	竪穴住居跡, 5 溝, 2 掘立柱建物, 1 土坑, 1	須恵器 土師器	壺形埴輪 (?)

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

机 張 原 遺 跡
女 狐 近 世 墓 地
庄ノ原遺跡群

1996年 3 月31日

発 行 大分県教育委員会

〒870 大分市府内町3-10-1

印 刷 極東印刷紙工株式会社

